

# 石原東遺跡 D 区 諏訪ノ木 V 遺跡

渋川都市計画道路3.3.1号中村上郷線街路  
事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第1集

《本文編》

2005

群馬県渋川土木事務所  
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



# 石原東遺跡 D 区 諏訪ノ木 V 遺跡

渋川都市計画道路3.3.1号中村上郷線街路  
事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第1集

《本文編》

2005

群馬県渋川土木事務所  
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

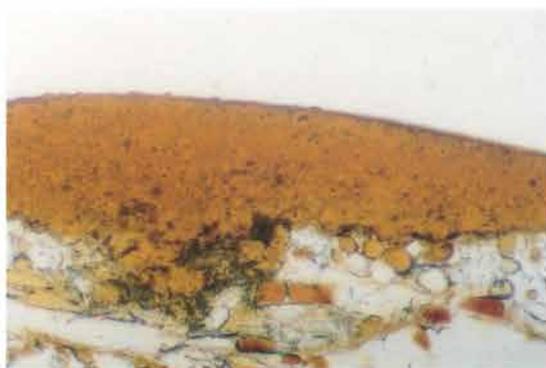




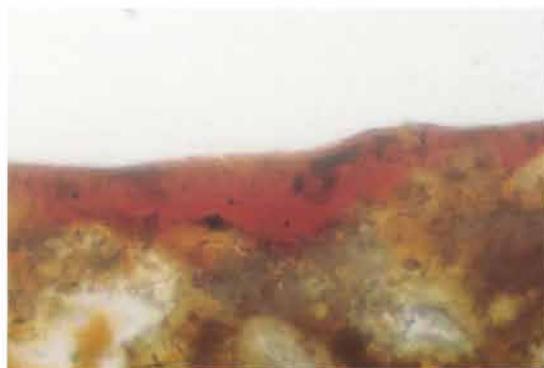
上空より中村上郷線関連遺跡を臨む  
右奥の山が榛名山東麓に聳える水沢山  
中央の林の中を唐沢川が走る



石原東遺跡D区 遺物包含層出土 墨書土器「茂」



漆器皿(木器 No.23) 塗膜断面(200倍)



付着土器(須恵器 No.81) 塗膜断面(200倍)



漆器皿(木器 No.23) 塗膜断面(500倍)



付着土器(須恵器 No.81) 塗膜断面(500倍)

石原東遺跡D区遺物包含層出土 漆関連遺物の断面写真

# 序

石原東遺跡D区・諏訪ノ木V遺跡は、群馬県渋川市中心部の石原に所在し、渋川都市計画道路3.3.1号中村上郷線街路事業に伴い、群馬県土木部（現 県土整備局）の委託を受け群馬県教育委員会の調整のもと、平成12年4月から平成14年11月に発掘調査がおこなわれました。

本路線は延長2,690m、基本幅員27mの都市計画道路であり、関越自動車道渋川伊香保インターチェンジから市街地を迂回して伊香保方面に連絡するとともに、市街地の環状道路の役割も有する重要路線であります。この工事工程にあわせ、県土木部・県教育委員会・渋川市・事業団による協議の結果、埋蔵文化財の発掘調査に着手することになりました。

調査の結果、縄文時代草創期から近世に至る多くの遺物・遺構が発見されました。特に平安時代の200点を超える墨書土器や木器などは貴重な資料の発見といえます。

調査に続き、平成15年度には整理作業を実施し、ここに報告書の刊行と成りました。

遺跡の発掘調査から本報告書の刊行に至るまでは、群馬県渋川土木事務所・群馬県教育委員会・渋川市教育委員会をはじめとする諸機関並びに地元関係者の皆様に大変なご尽力を賜りました。ここに心から感謝申し上げますとともに、本報告書や調査資料が広く歴史の究明に活用されますことを念願し、序といたします。

平成17年2月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団  
理事長 小野宇三郎



# 例 言

- 1 本報告書は、渋川都市計画道路3.3.1号中村上郷線街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査として実施した「石原東遺跡D区」と「諏訪ノ木V遺跡」の報告である。石原東遺跡A～C、E、F区、諏訪ノ木遺跡、諏訪ノ木Ⅱ～Ⅳ遺跡は、渋川市教育委員会で発掘調査を行っている。
- 2 本書に所収の遺跡名と発掘調査地の所在は、以下のとおりである。

石原東(いしはらひがし)遺跡D区

群馬県渋川市石原

諏訪ノ木V(すわのきご)遺跡

群馬県渋川市石原

- 3 事業主体 群馬県渋川土木事務所
- 4 調査主体 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 5 発掘調査の実施期間と調査面積は、以下の通りである。

石原東遺跡D区 平成12年4月3日～13年5月8日 面積 4,970㎡

諏訪ノ木V遺跡 平成12年9月1日～14年11月27日 面積 11,977㎡

- 6 調査組織は以下のとおりである。

平成12年度

理事長 小野宇三郎 常務理事 赤山容造 管理部長 住谷 進 調査研究部長 能登 健

総務課長 坂本敏夫 調査研究第3課長 中東耕志

事務担当 笠原秀樹、小山建夫、須田朋子、吉田有光、森下弘美、柳岡良宏、片岡徳雄

調査担当 間庭 稔、平方篤行、木暮育秀

平成13年度

理事長 小野宇三郎 常務理事 吉田 豊(総務担当) 赤山容造(事務担当)

管理部長 住谷 進 調査研究部長 能登 健 総務課長 大島信夫 調査研究第3課長 中東耕志

事務担当 笠原秀樹、小山建夫、須田朋子、吉田有光、森下弘美、片岡徳雄

調査担当 間庭 稔、平方篤行

嘱託員 川道 亨

平成14年度

理事長 小野宇三郎 常務理事 吉田 豊 事務局長 神保侑史

管理部長 萩原利通 調査研究部長 巾 隆之 総務課長 植原恒夫 調査研究第2課長 小山友孝

事務担当 小山建夫、高橋房雄、須田朋子、吉田有光、森下弘美、田中賢一

調査担当 間庭 稔、笹澤泰史

- 7 整理作業・報告書作成期間は以下のとおりである。

平成15年度4月1日～平成16年度9月30日

- 8 整理組織は以下のとおりである。

平成15年度

理事長 小野宇三郎 常務理事 住谷永市 事業局長 神保侑史

管理部長 萩原利通 調査研究部長 右島和夫 総務課長 植原恒夫 資料整理課長 相京建史  
事務担当 竹内宏、高橋房雄、須田朋子、吉田有光、阿久沢玄洋、田中賢一  
整理担当 笹澤泰史  
整理作業 長沼久美子(嘱託)、本多琴恵、狩野芳子、藤井文江、狩野なつ子、鈴木春美  
平成16年度

理事長 小野宇三郎 常務理事 住谷永市 事業局長 神保侑史  
管理部長 矢崎俊夫 調査研究部長 右島和夫 総務課長 丸岡道雄 資料整理課長 相京建史  
事務担当 竹内 宏、高橋房雄、須田朋子、吉田有光、栗原幸代、佐藤聖行、阿久沢玄洋  
整理担当 笹澤泰史  
整理作業 長沼久美子(嘱託)、狩野芳子、藤井文江、狩野なつ子、鈴木春美

9 本書作成の担当者は次のとおりである。

編集	笹澤泰史
文章執筆	1[1] 5[1] (1) 7[1] 中東耕志、4[1] 縄文土器、5[1] (2) 縄文土器、5[1] (3) 縄文土器、7[2] 橋本 淳、7[5] 高島英之が分担執筆し、その他は笹澤がおこなった。
遺物観察	石器類は中東耕志、麻生敏隆、縄文土器は石坂 茂、橋本 淳、弥生土器は大木 紳一郎、施釉陶器・土師器・須恵器は綿貫邦男、神谷佳明、桜岡正信、墨書土器は高島英之、陶磁器類は大西雅広、石塔類は新倉明彦、木器は小林 正の協力を得た。鉄関連遺物の分類については「たたら研究会委員」の穴澤義功氏の指導をいただいた。
遺物写真撮影	佐藤元彦
人骨・獣骨写真撮影	植崎修一郎
遺構写真撮影	現場担当者 航空写真は技研測量設計株式会社と株式会社測研がおこなった。
測量	株式会社測研(委託)、技研測量設計株式会社(委託)
保存処理	関 邦一、土橋まり子、小材浩一
遺物機械実測	富沢スミ江、伊東博子、岸 弘子、廣津真希子
木器実測	横倉知子、大野容子
石器実測	技研測量設計株式会社

10 当遺跡の内容をより詳細に浮き彫りにする意図で、次の各位に資料の分析や測定を依頼した。

石材同定	飯島静男(群馬地質研究会)
人骨・歯の鑑定	植崎修一郎
漆器の塗膜構造	小林 正
土層・テフラ分析	古環境研究所
樹種同定	株式会社 バレオラボ

11 発掘調査及び出土遺物整理にあたっては、次の諸氏、諸機関にご教示、ご協力を賜った。(敬称略)

国立歴史民俗博物館、渋川市教育委員会、穴澤義功、荒木勇次、大塚昌彦、小林良光、桜井和哉  
設楽博己、戸田哲也、永嶋正春

12 出土遺物・図面・写真・記録などの資料は、一括して財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団に保管してある。

# 凡 例

1 本書の遺構・遺物挿図の指示は次のとおりである。

(1) 挿図縮尺

竪穴住居	1/30、1/60		石器の磨面		灰釉
掘立柱建物	1/40、1/80				
土坑・井戸	1/40				
溝	1/50、1/100、1/200		油煙・油脂		緑釉
土器	1/3				
石器	1/1、1/2、1/3、1/4、1/6		漆		羽口滓化
鉄器	1/2				
銭貨	1/1				
付図(全体図)	1/400		黒色処理		羽口環元

(2) 遺構図の方位記号は国家座標の北を表している。座標系は国家座標第Ⅸ系である。ここで使用している国家座標は、2000年以前の旧座標である。

(3) 住居の方位は、炉の付設された住居では住居の長軸線、竈が付設された住居では竈が付設された壁、あるいは竈が付設されたと推定される壁に直行する軸線の、真北からの角度とした。

(4) 遺物番号は本文、挿図、表と一致する。

(5) 竪穴住居の面積は、1/20図上でプランメーターにより住居の壁の内側を3回測定し、計測平均値を採った。

(6) 色調については、農林省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修、新版標準土色帖(平成6年)によった。

(7) 本文中の遺構の位置は、国家座標Ⅸ系を用いたグリッドで表した。国家座標Ⅸ系を5m方眼に区切り、X、Y軸の交点下3桁をグリッド名とした。462-136は、X軸=+54.462、Y軸=-74.136を指す。

2 本文中で使用したテフラの記号と噴出年代は以下の通りである。

浅間B軽石(As-B) …… 1108(天仁元)年      榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP) …… 6世紀中葉  
 榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA) …… 6世紀初頭      浅間C軽石(As-C) …… 4世紀初頭

As-C軽石の噴出年代については、3世紀に遡る可能性が指摘されている(若狭 徹「群馬の弥生時代が終わるとき」『人が動く・土器が動く古墳が成立する頃の土器の交流』かみつけの里博物館 1998)。

3 土層注記の粒径区分はウェントワース法の基準によるが、テフラの分類はその分類基準による。

4 鉄関連遺物の分類については、穴澤義功氏の指導の下で、大型磁石(TAJIMA PUP-M)と標準磁石、並びに特殊金属探知器による分類と、肉眼観察による考古学的な分類を行った。鉄関連遺物の観察表の主な項目の見方は以下の通りである。詳しくは、穴澤義功『製鉄遺跡発掘調査の視点と方法』(2001 奈良国立文化財研究所・発掘技術者専門研修「生産遺跡調査過程」資料)を参照。

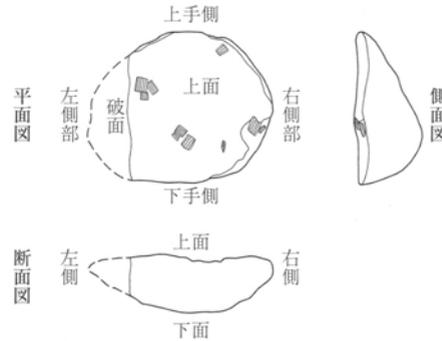
(1) 磁着度      鉄関連遺物分類用の特定の「標準磁石」を用いて、資料との反応の程度を数値化したもの。数値が大きいくほど、磁石との反応が強い。6mmを1単位とする。

(2) メタル度 文化財用に整準された特殊金属探知器2種類により残存する金属(鉄)の量を分類したもの。銹化(△)、H(○)、M(◎)、L(●)、特L(☆)の順で金属(鉄)の部分が多いことを示す。

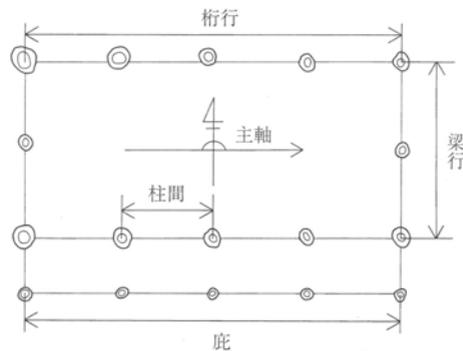
(3) 破面数 資料の破面(欠損した面)の数。

(4) 遺物名称 磁着度、メタル度、重量、考古学的な肉眼観察などから判定した名称。

5 椀形鍛冶滓の観察で用いた部位の呼称は、以下の通りである。



6 掘立柱建物の整理については、当事業団の飯森康広氏の協力を得た。掘立柱建物跡の各部の名称及び各計測は以下に図示したとおりである。全体規模については、梁行×桁行の順で、庇を伴う場合は+を付すこととし、下図の例は(2+1)×4間と表した。また、全体規模の計測値はメートルと尺表記を併記したが、尺は30.3cmを基準として使用した。掘立柱建物跡の認定は平面測量図(1:50)を方眼図(尺基準)に載せて抽出し、現地での柱状の形状及び埋土と総合判断して認定した。このため、計画寸法は総長寸法が優先するが、柱間寸法は現地で各柱穴の芯から芯をスチールテープで計測した数値を使用した。ただし、石原東遺跡D区については整理段階で認定したため、柱間寸法も図上計測値である。柱痕跡も、現地で平面又は断面確認できたものについて認定し、現地で計測した数値のみを採用した。庇は、柱穴の規模・形状及び柱間が、身舎部分と異なることを基準として認知したため、廊下である可能性も含んだ名称である。



7 出土土器の実測図は左右で内外面を表すことを基本にしたが、限られた部位の出土のため上下で内外面を表したものもある。諏訪ノ木V遺跡2区21号住居出土の横瓶は、この表現をしている。

8 木器の保存処理は(株)京都科学に委託した。実測・観察は保存処理後に行った。

# 目 次

序

例言・凡例

目次

挿図目次

## 第1章 調査の経過

- [1] 調査に至る経緯 ..... 1
- [2] 発掘調査の経過 ..... 2
- [3] 調査の方法 ..... 2

## 第2章 遺跡の立地と環境

- [1] 位置と地理的環境 ..... 6
- [2] 歴史的環境 ..... 8

## 第3章 基本層序 ..... 12

## 第4章 石原東遺跡 D 区の遺構と遺物 ..... 13

- [1] 弥生時代以前の遺構と遺物 ..... 15
- [2] 古墳時代の遺構と遺物

概要 ..... 16

- (1) 水田 ..... 16
- (2) 溝 ..... 16

- [3] 奈良・平安時代の遺構と遺物

概要 ..... 18

- (1) D1区遺物包含層 ..... 18
- (2) 竪穴住居 ..... 75
- (3) 土坑 ..... 92

- [4] 中世以降の遺構と遺物

概要 ..... 93

- (1) 掘立柱建物 ..... 95
- (2) 土坑 ..... 104
- (3) 土坑墓 ..... 107
- (4) 井戸 ..... 115
- (5) 溝 ..... 115
- (6) 遺構外出土遺物 ..... 117

## 第5章 諏訪ノ木V遺跡の遺構と遺物 ..... 123

- [1] 弥生時代以前の遺構と遺物

概要 ..... 125

- (1) 2区遺物包含層(縄文時代草創期) ..... 127
- (2) 3区遺物包含層(縄文時代早期から弥生時代) ..... 138

(3) 遺構外出土遺物 .....	161
[2] 古墳時代の遺構と遺物	
概要 .....	163
(1) Hr-FA 下面 .....	164
(2) 周堀・小石塚 .....	168
[3] 奈良・平安時代の遺構と遺物	
概要 .....	171
(1) 竪穴住居 .....	174
(2) 竪穴状遺構 .....	264
(3) 土坑 .....	266
(4) 遺構外出土遺物 .....	267
[4] 中世以降の遺構と遺物	
概要 .....	269
(1) 掘立柱建物 .....	272
(2) 土坑 .....	286
(3) 土坑墓 .....	303
(4) 井戸 .....	304
(5) 溝 .....	309
(6) 遺構外出土遺物 .....	316
第6章 自然科学分析	
[1] 石原東遺跡出土人骨	榑崎修一郎 ..... 318
[2] 石原東遺跡出土獣骨	榑崎修一郎 ..... 333
[3] 石原東遺跡出土漆関係遺物の断面観察	小林 正 ..... 335
[4] 石原東遺跡の土層	古環境研究所 ..... 337
第7章 調査の成果	
[1] 縄文時代草創期の出土石器	中東耕志 ..... 339
[2] 諏訪ノ木V遺跡の早期縄紋土器について	橋本 淳 ..... 340
[3] 出土土器の変遷(奈良・平安時代)	笹澤泰史 ..... 341
[4] 奈良・平安時代の遺構	笹澤泰史 ..... 355
[5] 石原東遺跡・諏訪ノ木V遺跡出土の墨書・刻書土器について	高島英之 ..... 373



第131図	諏訪ノ木V遺跡 奈良・平安時代の遺構(1)	172	第206図	3区6号住居・掘り方・竈 平面・断面図	250
第132図	諏訪ノ木V遺跡 奈良・平安時代の遺構(2)	173	第207図	3区6号住居出土遺物図	251
第133図	1区1号住居・竈 平面・断面図、出土遺物図	174	第208図	3区8号住居・竈 平面・断面図	252
第134図	1区2号住居・掘り方 平面・断面図	175	第209図	3区8号住居出土遺物図	253
第135図	1区2号住居竈平面・断面図、出土遺物図(1)	176	第210図	3区9号住居平面・断面図	254
第136図	1区2号住居出土遺物図(2)	177	第211図	3区9号住居掘り方・竈 平面・断面図、出土遺物図(1)	255
第137図	1区3号住居平面・断面図	178	第212図	3区9号住居出土遺物図(2)	256
第138図	1区3号住居掘り方・竈 平面・断面図	179	第213図	3区10号住居平面・断面図	257
第139図	1区3号住居出土遺物図(1)	180	第214図	3区10号住居掘り方・竈 平面・断面図	258
第140図	1区3号住居出土遺物図(2)	181	第215図	3区10号住居出土遺物図	259
第141図	2区1号住居・竈 平面・断面図、出土遺物図	184	第216図	3区11号住居平面・断面図、出土遺物図	260
第142図	2区2号住居平面・断面図	185	第217図	3区12号住居平面・断面図	261
第143図	2区2号住居竈平面・断面図、出土遺物図	186	第218図	3区12号住居掘り方・竈 平面・断面図	262
第144図	2区3号住居・掘り方 平面・断面図	187	第219図	3区12号住居出土遺物図	263
第145図	2区3号住居竈平面・断面図、出土遺物図(1)	188	第220図	3区1号竪穴状遺構平面・断面図	264
第146図	2区3号住居出土遺物図(2)	189	第221図	3区2号竪穴状遺構平面・断面図	265
第147図	2区3号住居出土遺物図(3)	190	第222図	2区1号土坑平面・断面図、出土遺物図	266
第148図	2区4号住居平面・断面図	191	第223図	諏訪ノ木V遺跡 奈良・平安時代遺構外出土遺物図(1)	267
第149図	2区4号住居出土遺物図	192	第224図	諏訪ノ木V遺跡 奈良・平安時代遺構外出土遺物図(2)	268
第150図	2区5号住居平面・断面図、出土遺物図	193	第225図	諏訪ノ木V遺跡と諏訪ノ木II遺跡の中世遺構	269
第151図	2区6号住居平面・断面図、出土遺物図	194	第226図	諏訪ノ木V遺跡 中世以降の遺構(1)	270
第152図	2区7号住居・掘り方 平面・断面図	195	第227図	諏訪ノ木V遺跡 中世以降の遺構(2)	271
第153図	2区7号住居竈平面・断面図、出土遺物図(1)	196	第228図	1区1号掘立柱建物平面・断面図	272
第154図	2区7号住居出土遺物図(2)	197	第229図	2区1号掘立柱建物平面・断面図	274
第155図	2区8号住居・掘り方・竈平面・断面図	198	第230図	2区2号掘立柱建物平面・断面図	275
第156図	2区8号住居出土遺物図	199	第231図	2区3号掘立柱建物平面・断面図	276
第157図	2区9号住居平面・断面・出土遺物図	199	第232図	2区4号掘立柱建物平面・断面図	277
第158図	2区10号住居平面・断面・出土遺物図	200	第233図	2区5号掘立柱建物平面・断面図	278
第159図	2区11号住居平面・断面図	201	第234図	2区6号掘立柱建物平面・断面図	279
第160図	2区11号住居掘り方・竈 平面・断面図、出土遺物図(1)	202	第235図	2区1号柱穴列平面・断面図	280
第161図	2区11号住居出土遺物図(2)	203	第236図	2区2号柱穴列平面・断面図	281
第162図	2区12号住居・掘り方 平面・断面図、出土遺物図	204	第237図	3区1号掘立柱建物平面・断面図	281
第163図	2区13号住居・掘り方 平面・断面図	205	第238図	3区2号掘立柱建物平面・断面図	282
第164図	2区13号住居出土遺物図	206	第239図	3区3号掘立柱建物平面・断面図	283
第165図	2区14号住居平面・断面図	207	第240図	3区4号掘立柱建物平面・断面図	284
第166図	2区14号住居掘り方平面・断面図、出土遺物図	208	第241図	3区5号掘立柱建物、1号柱穴列平面・断面図	285
第167図	2区15号住居・掘り方 平面・断面図	209	第242図	1区1～4、2区2～4号土坑平面・断面図	288
第168図	2区15号住居竈平面・断面図、出土遺物図	210	第243図	2区5～8、3区1号土坑 平面・断面図、出土遺物図	289
第169図	2区16号住居・掘り方 平面・断面図、出土遺物図	211	第244図	3区2～7号土坑平面・断面図	290
第170図	2区17号住居平面・断面図	212	第245図	3区8～13号土坑平面・断面図	291
第171図	2区18号住居・竈 平面・断面図、出土遺物図(1)	213	第246図	3区14～21号土坑平面・断面図	292
第172図	2区18号住居出土遺物図(2)	214	第247図	3区22～28号土坑平面・断面図	293
第173図	2区20号住居・竈 平面・断面図、出土遺物図	215	第248図	1区5、6、2区9、10、3区29号土坑 平面・断面図	294
第174図	2区21号住居平面・断面図	216	第249図	2区11、12号土坑平面・断面図、出土遺物図	295
第175図	2区21号住居掘り方・竈 平面・断面図	217	第250図	1区7～10号土坑平面・断面図	296
第176図	2区21号住居出土遺物図	218	第251図	1区11号、3区30～32号土坑 平面・断面図、出土遺物図	297
第177図	2区23号住居・掘り方・竈 平面・断面図、出土遺物図	220	第252図	3区33～37号土坑平面・断面図	298
第178図	2区24号住居平面・断面図	221	第253図	1区12～17号土坑平面・断面図	299
第179図	2区24号住居掘り方・竈 平面・断面図、出土遺物図	222	第254図	1区18、19号、2区13～15号土坑 平面・断面図、出土遺物図	300
第180図	2区25号住居平面・断面図	223	第255図	2区16～21号、3区38号土坑平面・断面図	301
第181図	2区25号住居掘り方・竈 平面・断面図、出土遺物図(1)	224	第256図	3区39～42号土坑平面・断面図	302
第182図	2区25号住居出土遺物図(2)	225	第257図	2区22、23号土坑(墓) 平面・断面図、出土遺物図	303
第183図	2区26号住居・掘り方 平面・断面図、出土遺物図	226	第258図	1区1号井戸平面・断面図	304
第184図	2区27号住居平面・断面図、出土遺物図	227	第259図	2区1～3号井戸平面・断面図	305
第185図	3区1号住居・竈 平面・断面図	228	第260図	2区4号、3区1号井戸 平面・断面図、出土遺物図	306
第186図	3区1号住居出土遺物図	229	第261図	3区2、3号井戸平面・断面図、出土遺物図	307
第187図	3区2号住居平面・断面図	230	第262図	3区4、5号井戸平面・断面図	308
第188図	3区2号住居出土遺物図	231	第263図	1区1号溝平面・断面図、出土遺物図	309
第189図	3区3号住居・掘り方 平面・断面図	231	第264図	1区2、3号溝平面・断面図	310
第190図	3区3号住居竈平面・断面図、出土遺物図(1)	232	第265図	1区4号溝平面・断面図	311
第191図	3区3号住居出土遺物図(2)	233	第266図	2区1号溝平面・断面図	312
第192図	3区4号住居・掘り方・竈 平面・断面図	234	第267図	2区2、3号溝平面・断面図、出土遺物図	313
第193図	3区4号住居出土遺物図(1)	235	第268図	2区4号溝平面・断面図	314
第194図	3区4号住居出土遺物図(2)	236	第269図	諏訪ノ木V遺跡 中世以降 遺構外出土遺物図(1)	316
第195図	3区4・7号住居出土遺物図	237	第270図	諏訪ノ木V遺跡 中世以降 遺構外出土遺物図(2)	317
第196図	3区4・7号住居竈・遺物出土状況	238			
第197図	3区7号住居・掘り方 平面・断面図	240			
第198図	3区7号住居竈平面・断面図、出土遺物図(1)	241			
第199図	3区7号住居出土遺物図(2)	242			
第200図	3区7号住居出土遺物図(3)	243			
第201図	3区7号住居出土遺物図(4)	244			
第202図	3区5号住居平面・断面図	246			
第203図	3区5号住居掘り方・竈 平面・断面図	247			
第204図	3区5号住居出土遺物図(1)	248			
第205図	3区5号住居出土遺物図(2)	249			

# 第1章 調査の経緯

## [1] 調査に至る経緯

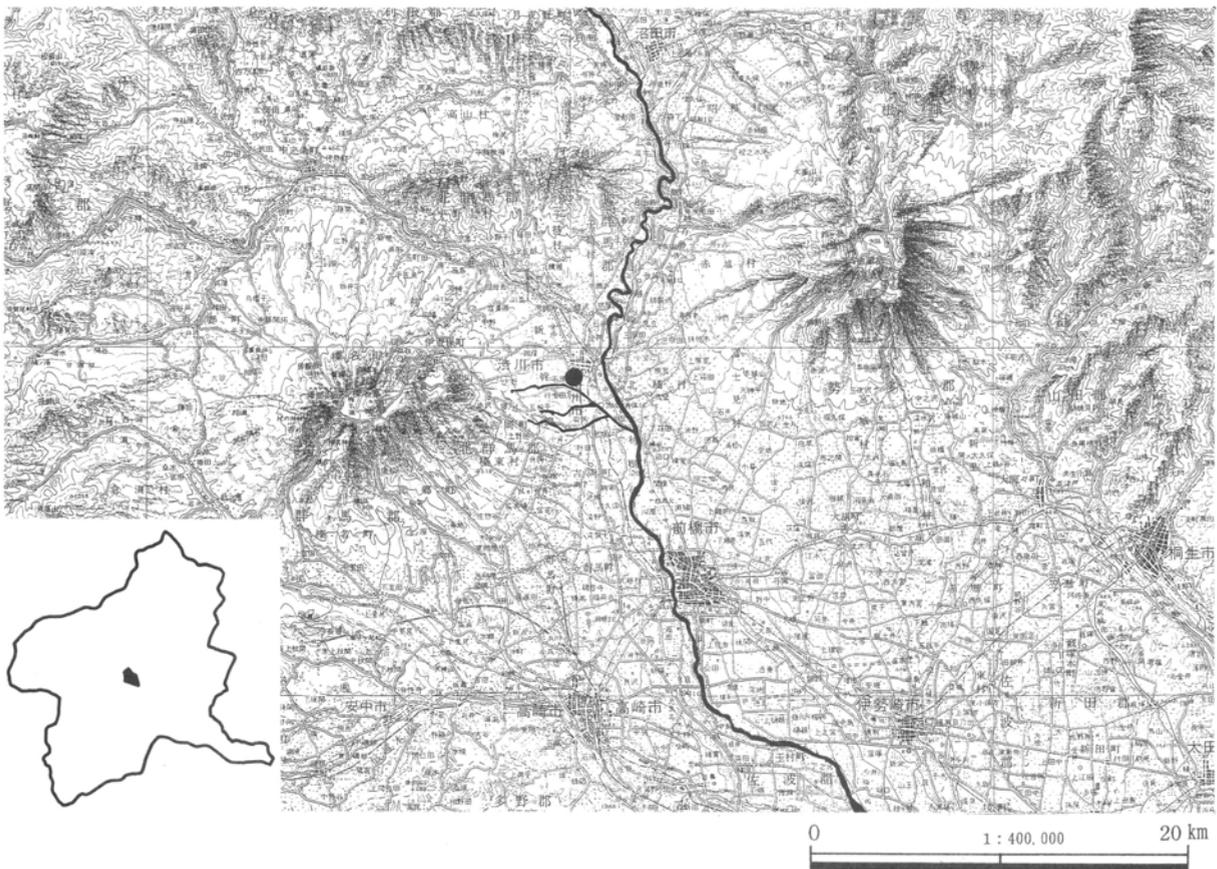
本路線は昭和39年12月28日に都市計画決定(最終の都市計画変更は平成7年1月13日)された。延長2,690m、基本幅員27mの都市計画道路であり、関越自動車道の渋川伊香保インターチェンジ(国道17号)付近を起点とし主要地方道渋川吾妻線のバイパスも担っている。渋川伊香保インターチェンジから市街地を迂回して伊香保方面に連絡するとともに、市街地の環状道路の役割も有する重要路線である。

国道17号から主要地方道高崎渋川線までの区間(L=990m)については道路局事業により整備が進められ、平成5年度には暫定2車線で供用開始された。また、都市計画道路渋川駅前通り線から主要地

方道渋川吾妻線の現況道路までの区間は街路事業で整備済みである。そこで、未整備区間である主要地方道高崎渋川線から都市計画道路渋川駅前通り線の間(L=1,240m)について平成4年度に新規事業採択を受けた。

平成11年5月、路線が渋川市の市道と交差する区域の試掘調査依頼が県教育委員会文化財保護課(現文化課)にあり、付近に土器片が散布すること及び周知の遺跡(諏訪ノ木遺跡)の範囲にあること等から、本調査が必要であると判断された。

平成11年6月16日に、県教育委員会と渋川市当局と協議し、渋川市都市計画課では市道との交差点区域のみ市教育委員会が対応することで合意した。平成11年6月28日に渋川土木事務所企画管理課と協議を行ない、平成12年度から本調査を実施することに決定された。



第1図 遺跡の位置(国土地理院1/200,000「宇都宮・長野」使用)

## [2] 発掘調査の経過

### (1) 石原東遺跡D区

平成12年度

本遺跡の調査範囲は、主要地方道高崎渋川線の石原交差点南の唐沢川際から平形眼科までの県道西側と、県道東側に接する一部分、交差点から西側に向かう本線部分である。調査区は、県道西側の南端を1区とし、概ね現道を境にして設定した。調査区は宅地や畑地として階段状に造成され切土・盛土が著しかったが、多くの遺構が確認された。D1区～D5区、D7区を平成12年9月までに終了した。

平成13年度

2年次にあたる平成13年度は、昨年度上物撤去の関係で調査できなかった主要地方道高崎渋川線の石原交差点北側部分のD6区をトレンチ調査した。数度の建物建設に伴う造成による土砂の移動が激しく、明瞭な遺構は検出できなかった。

### (2) 諏訪ノ木V遺跡

平成12年度

本遺跡の調査範囲は豊秋小学校体育館の南側から忠霊塔に抜ける市道から、200mほど北にある沢の縁辺までである。調査区域を東西に横切る現道により、南から1区、2区、3区と設定した。調査は、石原東遺跡D1区～D5区、D7区終了後、平成12年9月から開始した。試掘調査によりHr-FAの一次堆積が良好な状態で確認されたので、Hr-FAを第一指標層として南端の1区から調査を開始した。

平成12年度は道路予定地買収済みの1区南と、2区南を調査した。

平成13年度

2年次にあたる平成13年度は、平成12年度調査の延長で、渋川市教育委員会が平成12年度に調査した諏訪ノ木Ⅲ遺跡の北側である2区北側と、3区南側を調査した。

平成14年度

3年次にあたる平成14年度は、前年度までに新たに買収が終わったところを南側から着手していくということで、1区北側、3区北側の順で調査をおこなった。調査は平成14年度4月に開始し、平成14年度11月に終了した。

## [3] 調査の方法

本報告分の調査対象地区は、石原東遺跡D区4,970㎡と、諏訪ノ木V遺跡11,977㎡をあわせた16,947㎡である。

- (1) 表土掘削には、調査の効率化を図るために、掘削機械を使用した。
- (2) 調査対象区は、調査区域を横切る現道により、設定した。
- (3) 国家座標第Ⅸ系を基準に5mグリッドを設定した。東南角の交点下3桁をグリッド名称として呼称した。
- (4) 遺構名称は種別ごと、区ごとに、通し番号を付した。遺物の取り上げに際しては、遺構単位を基本とし、原位置をとどめる物については、その都度番号を付し、図面上に記録した。
- (5) 遺構等の測量には平板測量を用い、1/20縮尺図を原則とした。
- (6) 写真撮影には35mm版の白黒フィルムとカラーライドフィルム及び6×7版白黒フィルムを使用した。また撮影対象によって高所作業車を使用した。
- (7) 出土遺物の取り上げに際しては完形・大破片については図化等を行ったが、小破片については埋没土層ごと一括して取り上げた。また、出土した遺物は、発掘調査期間内に水洗い・注記までおこなった。
- (8) 本遺跡の調査では自然科学分析をおこない、第6章に掲載した。



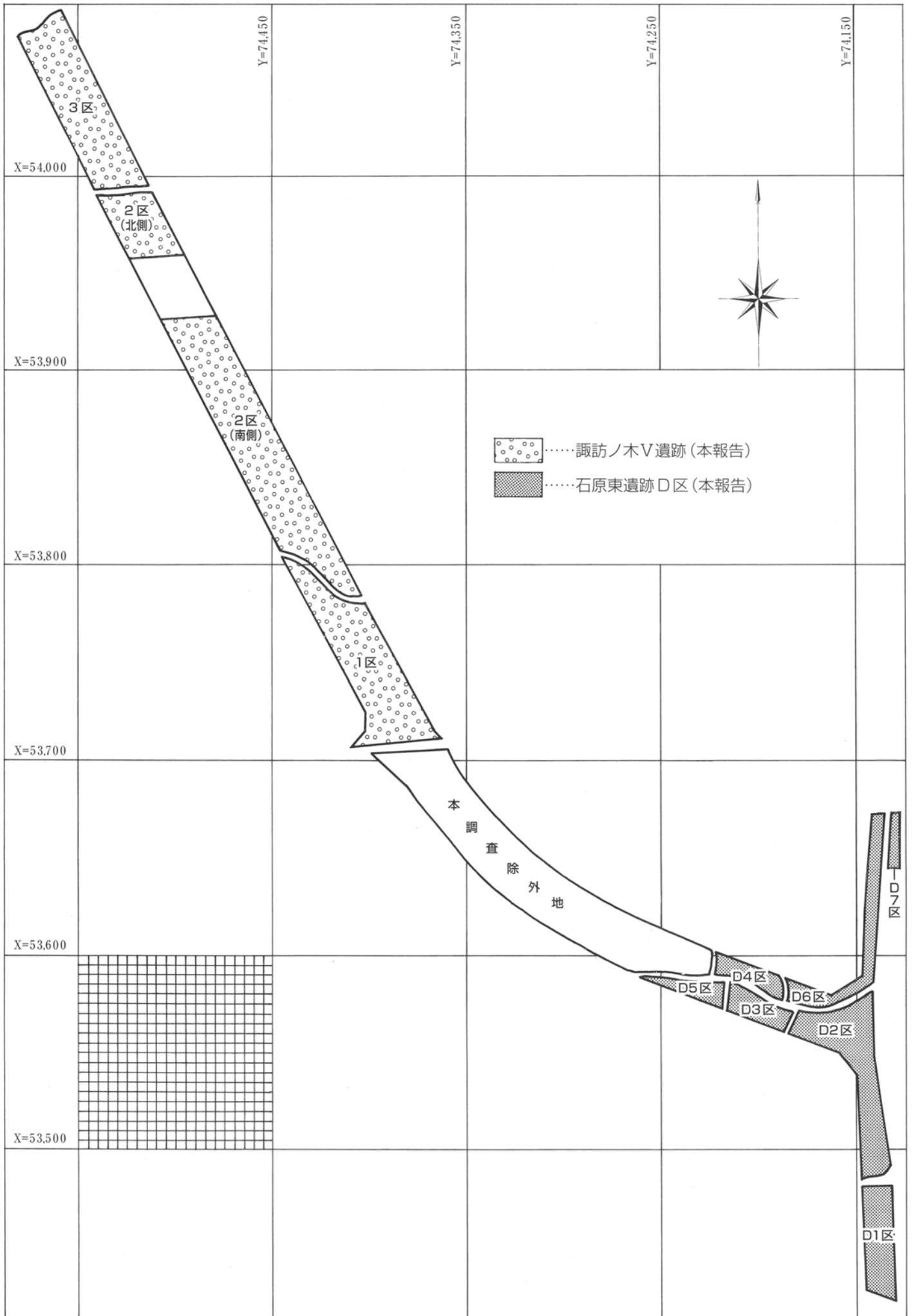
本報告遺跡

- 石原東遺跡 D区 (4,970㎡)
- 諏訪ノ木Ⅴ遺跡 (11,977㎡)

第2図 石原東遺跡 D区と諏訪ノ木Ⅴ遺跡 S=1/2500

第1章 調査の経緯





第4図 調査区割図 S=1/2500

## 第2章 遺跡の立地と環境

### [1] 位置と地理的環境

#### (1) 位置

本遺跡は、渋川市の中心部である JR 上越線渋川駅の南西約1kmに所在する。遺跡地は榛名山東麓に位置し、東約1.5kmに利根川を臨む。

本遺跡からは、東に赤城山、北に子持山・小野子山、西に榛名山などの山々を見渡せる。

本遺跡は、利根川の支流である茂沢川に注ぎ込む小河川、唐沢川と南西で接する。榛名山東麓を水源とする唐沢川は、茂沢川に注ぎ込み、さらに午王川、利根川へと合流する。唐沢川の水源は、渋川市石原字唐沢と行幸田字大平の境にある。

#### (2) 地理的環境

本遺跡は、榛名山東麓に聳える水沢山から連なる山麓の先端部に位置する。この山麓地形は利根川に向かって流れる中小の河川により開析され、放射状に伸びる尾根列を形成している。この尾根列は標高280～300mで終焉し、50～100mの標高差をもって下り、なだらかな緩斜面へと移行する。

本遺跡は、この緩斜面の一つである唐沢川周辺に形成された扇状地状の地形上に立地し、石原東遺跡D区は唐沢川によって開析された低地に、諏訪ノ木V遺跡は扇状地状地形の上に位置する。石原東遺跡D区の標高は約190m、諏訪ノ木V遺跡の標高は約220mである。扇状地状の地形は、豊秋団地付近を要に半円形に広がり、中筋・西の町・番場・手川・西浦・諏訪ノ木が、この扇状地状緩斜面の地域にあたる。『渋川市誌 第一巻 自然編』によると、本遺跡地周辺の扇状地状の地形は、現在の水沢山周辺の山体が崩壊し、土砂が堆積したことによって形成されたもので、その土砂を唐沢泥流堆積物と呼称している。唐沢泥流堆積物の上層には、浅間板鼻褐色軽石群(As-YP、約1.3～1.4万年前)が確認されていないことから、水沢山の山体崩落は、As-YP以降に起こったとされている。今回の調査では、唐沢

泥流堆積物の可能性が高い土層(基本土層第Ⅶ層<sup>(1)</sup>)の直上から縄文時代草創期の石器群が発見された(第5章[1](1))。本遺跡のこの土層については、今後、より広範囲で詳細な分析が必要であるが、唐沢泥流堆積物であるとすれば、本遺跡は、As-YP(約1.3～1.4万年前)以降、草創期(約1.2万年前)以前に形成された水沢山の山体崩落土層の上に位置していると考えられる。

また、本遺跡周辺では、榛名山二ツ岳の二度にわたる大噴火(Hr-FA 6世紀初頭、Hr-FP 6世紀中葉)により形成された厚い火山性堆積物が見られる。

本遺跡から500m離れた中筋遺跡ではHr-FAで完全に覆われた集落、5km離れた黒井峯遺跡ではHr-FPで完全に覆われた集落が発見され、古墳時代の集落研究に多大な資料を提供している。

本遺跡で確認されたHr-FAは、30～120cmと厚く、中筋遺跡同様に遺跡全面を覆っていた。諏訪ノ木V遺跡では10,000㎡を超えるHr-FA下の旧地表面を検出したが、堅穴住居などの遺構が検出されなかった。検出された旧地表面の当時の土地利用に関しては、今後の検討を要する<sup>(2)</sup>。

また、本遺跡で確認されたHr-FPは堆積が薄く、谷地のみが残存で、旧地表面はほとんど検出されなかった。黒井峯遺跡での降下軽石の厚さは約1.8mを越えているが、本遺跡は、Hr-FP降下の軸をわずかに外れるため、その堆積は二ツ岳に近いにもかかわらず、驚くほど少ない。

#### 註

(1) 本報告書 第2章基本土層参照

(2) 本報告書 第5章[2]参照

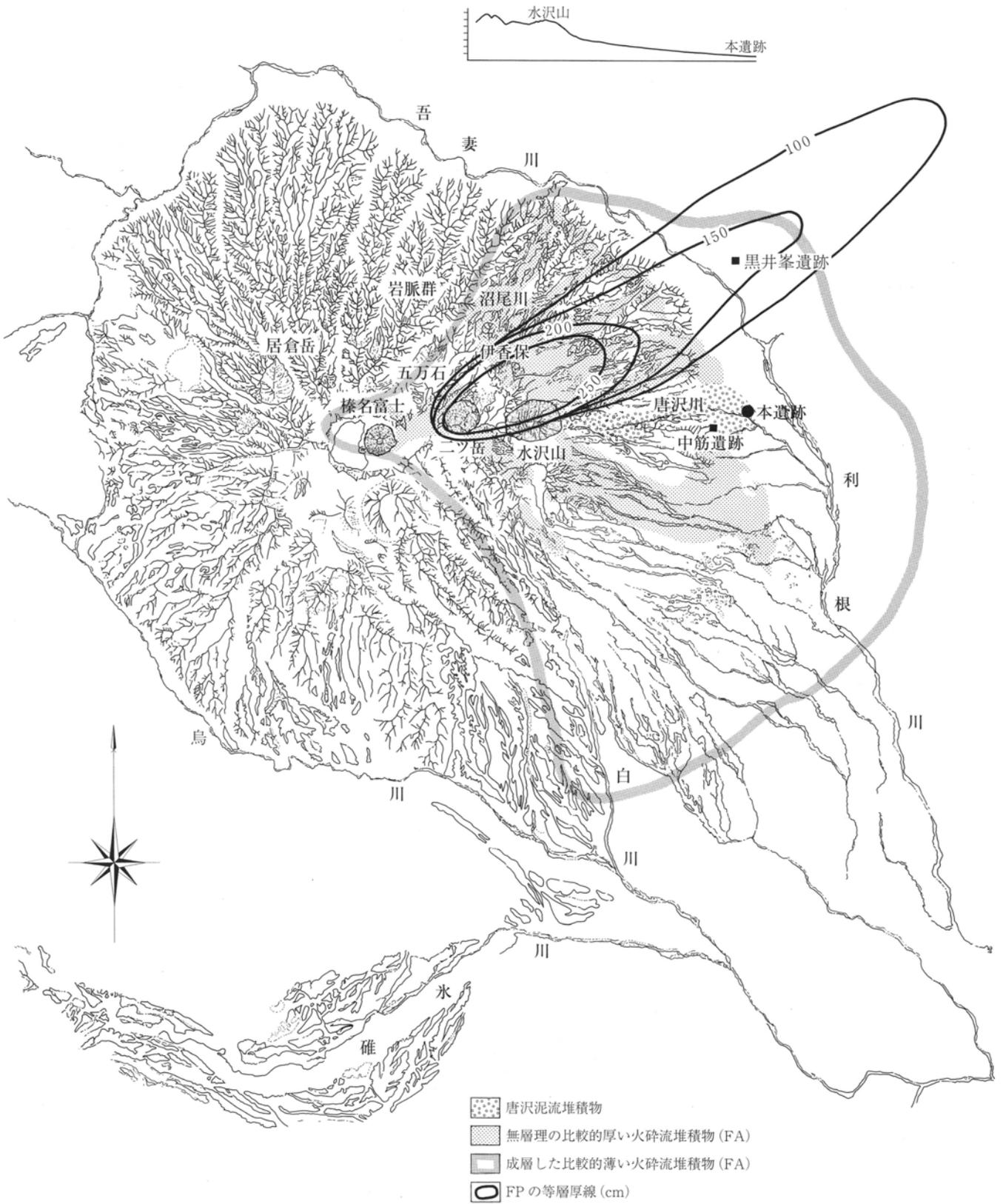
#### 引用・参考文献

1990『群馬県史 通史編1』

1987『渋川市誌 第一巻 自然編』

1993『渋川市誌 第二巻 通史編上』

竹本弘幸 1999『北関東北部地域における第四紀古環境変遷と火山活動』



※「群馬県史」通史編1図19・21、「渋川市誌」自然編第3章図3、「北関東北西部地域における第四紀古環境変遷と火山活動」図5-7より作成

第5図 遺跡周辺の地形図

## [2] 歴史的環境

**旧石器時代** 現在までのところ、渋川市内の旧石器時代の遺跡は、行幸田山遺跡だけである。行幸田山遺跡は、本遺跡から南約1.5kmの丘陵状の地形に位置する。①浅間-板鼻褐色軽石層群(1.6~2万年前位)中、②浅間-白糸軽石層(1.5万年以前)下、③ローム最上層中の3層それぞれから石器が数点出土した。

**縄文時代** 本報告以前、渋川市域において草創期にあたる遺跡は、発見されていなかった。本書で報告される縄文時代草創期の石器群は、この地域で初めての発見である。

本遺跡周辺の早期遺跡に、空沢遺跡・行幸田山遺跡があるが、明確な遺構はない。それぞれの遺跡で、数点の押型文土器・尖底土器が出土している。

本遺跡周辺の前期遺跡に、神宮寺西・後田東・中筋・空沢・堀込・半田南原遺跡などがある。前期になると遺跡数は増加し遺構も見られる。半田南原遺跡は最も広く調査されており、自然堤防の台地上に小規模の集落が営まれていたことが判明している。本遺跡にほど近い空沢遺跡からは、黒浜式期の住居が1軒検出された。

本遺跡周辺の中期遺跡に行幸田山遺跡・空沢遺跡などがあげられる。空沢遺跡では、中期勝坂式期が1軒、加曾利E2式期から後期称名寺式期にかけての集落が54軒検出された。さらに空沢遺跡では、加曾利E4式期から称名寺式期といった後期にかかる過渡期の敷石住居とそれに伴う弧状列石が検出された。本報告、諏訪ノ木V遺跡3区では、遺構が確認されなかったものの、包含層から早期から後期の1,250点を超える土器・石器群が検出された。本遺跡周辺で、確実に晩期とされる遺跡はない。

**弥生時代** 縄文時代から弥生時代の過渡期のものとして南大塚遺跡があげられる。南大塚遺跡は、本遺跡から北西約5.5kmに位置する。前期の遺跡は東日本を見ても非常に少なく、南大塚遺跡の発見は貴重である。3基の土坑から、壺や甕などが約10点出土

し、集団墓地遺跡であると考えられている。諏訪ノ木V遺跡3区包含層からは、弥生時代前期に比定されると思われる土器が出土した。

中期前半の土器は、群馬県の土器編年で岩櫃式と呼ばれている。縄文の影響が土器に残るものの縄文土器が共伴することはなくなり、弥生土器として確立するのがこの時期である。本遺跡周辺では行幸田山遺跡においてこの型式の土器が確認できる。

後期になると、有馬廃寺遺跡・中筋遺跡・有馬遺跡・有馬条里遺跡・後田東遺跡・神宮寺西遺跡など、現在の行幸田・有馬田圃を中心に遺跡が展開する。この地域の一部は条里以前、沼地であったことが発掘調査によって明らかになっている。後期の集落はこの沼地を取り巻く小高い丘陵状の地形から発見されている。本遺跡に隣接する空沢遺跡では円形周溝墓2基・土器棺墓1基が検出されている。

**古墳時代** 本遺跡地周辺の前期の遺跡に中筋遺跡・有馬条里遺跡がある。中筋遺跡では、S字状口縁台付甕を主体とした古式土師器が大量に投棄された遺構や、古墳1基、土坑墓1基が確認された。中筋遺跡は墓域としての性格が強い。また、有馬条里遺跡では大規模な集落や畠が検出されている。

中期の遺跡に中筋遺跡がある。中筋遺跡は、5世紀末から6世紀初頭の二ツ岳の噴火(Hr-FA)に伴う火砕流で被災した集落遺跡で、火山灰で覆われていたために良好な状態で遺構が残存していた。遺構は、堅穴住居4軒・平地式建物6棟・畠・祭祀遺構・垣根・溝区画・古墳等が検出された。一般の集落内に堅穴住居と平地式住居が同時に存在することや、複数の堅穴住居が一つの周堤帯を共有することなど当時の集落形態や暮らしぶりを究明する豊富な資料が提供された<sup>(1)</sup>。本遺跡の発掘調査では、Hr-FA直下から遺構は検出されなかった。当時の土地利用については今後の詳細な検討を要する。

後期の遺跡に黒井峯遺跡がある。黒井峯遺跡は6世紀中頃の二ツ岳の噴火で噴出した大量の軽石(Hr-FP)によって埋没した集落遺跡である。軽石層の中に建物の壁・崩れかけた屋根・柴垣などが立った

まま確認され、軽石下の旧地表面からは、道・屋外作業場・畠・小区画水田など様々な遺構が発見され、古墳時代後期の集落の様子が明らかになった<sup>(2)</sup>。本遺跡ではHr-FPは、窪地には堆積するものの多く残存せず、旧地表面を明瞭にするに到らなかった。Hr-FP降下以降は、諏訪ノ木遺跡、石原東古墳群などで見られるように、遺跡地周辺は墓域になる。昭和55年渋川市教育委員会によって調査された諏訪ノ木遺跡では横穴式石室を持つ古墳が検出された。遺物は調査以前に採集されており、鉄製の直刀1振と玉類が大量に出土したとのことである。本遺跡の発掘調査ではこの古墳の周堀の東部分と、これに付随すると思われる小石塚を検出した。

**奈良・平安時代** 本遺跡地が所在する地域は、奈良・平安時代には上野国群馬郡に属しており、群馬郡には、『和名類聚抄』によると長野・井出・小野・八木・上郊・畦切・島名・群馬・桃井・有馬・利刈・駅家・白衣の13郷が設置されており、遺跡地は有馬郷に属すると推定される。

本遺跡南1.5kmに有馬廃寺跡と呼ばれる遺跡がある。遺跡地周辺は、以前から古瓦である布目瓦の出土地として知られていた。昭和61年の調査では寺院跡として認められる遺構は確認できなかったが、出土する瓦が上野国分寺の瓦と同形態であることがわかった。国分寺系瓦の出土から、県内では高崎市の綿貫遺跡・境町の十三宝塚遺跡などが、同時期の寺院跡であったのではないかと考えられている。これらの遺跡は官衙かその影響が強い寺院跡であった可能性が指摘されている。

有馬廃寺の北には有馬条里遺跡がある。昭和57年～59年にかけて行われた発掘調査では条里制に関わる遺構は検出されなかったが、この地域に残っていた水田区画が条里制の区画を踏襲するものであると推定されている。

本遺跡の北2kmに金井製鉄遺跡がある。金井製鉄遺跡は、昭和48年の発掘調査により製鉄炉と炭窯8基が検出された県指定遺跡である。鉄生産を専門的に行った職業集団が想定される遺跡で、当初9

世紀末の遺構とされていたが、現在では8世紀中頃までさかのぼると考えられている。

現在までのところ、本遺跡周辺で検出される竪穴住居は、8世紀代においては点在するものの大規模なものではなく、本格的に展開するのは9世紀代になってからとされている。しかしながら、本遺跡地北の渋川市中心域ではほとんど発掘調査が行われていないことと、金井製鉄遺跡が8世紀代まで遡ることから、単純に8世紀代の遺跡が少ないと考えることは出来ない。本遺跡地の周辺では多数の鉄滓が出土することが知られており、鉄生産関連の遺跡が想定されている。本遺跡南に隣接する空沢遺跡では鍛錬鍛冶遺構が3基検出され、遺構周辺からは鉄製紡錘車・刀子・砥石・鉄滓などが出土した。本遺跡でも鉄生産に関連する遺構が多く検出されている。空沢遺跡では墨書土器も出土しており、「本」・「若」などの文字が見られる。本遺跡では「茂」を中心とした209点の墨書・刻書土器が出土している。

**鎌倉時代以降** 本遺跡東に隣接する渋川市教育委員会によって調査された諏訪ノ木Ⅱ遺跡では、中世の掘立柱建物群が検出された。出土した土師質土器皿の年代などから、14世紀後半～15世紀の遺構であると考えられている。本遺跡周辺では、それ以外に遺跡として調査されたものはほとんどない。遺跡地周辺では古くから五輪塔などの石塔類が多く出土することが知られているが、明確な遺構は検出されていない。隣接する空沢遺跡では中世とされる瓦の出土や永楽通宝が伴う土坑墓等が検出されている。

## 註

(1) 大塚昌彦1999「中筋遺跡」『群馬県遺跡大辞典』群馬文より引用

(2) 石井克己1999「黒井峯遺跡」『群馬県遺跡大辞典』群馬文より引用

## 引用・参考文献

1981『諏訪ノ木遺跡』渋川市教育委員会

1990『群馬県史 通史編1』

1993『渋川市誌 第二巻 通史編上』

1994『石原東遺跡(Ⅱ)』渋川市教育委員会

1995『石原東遺跡(Ⅲ)』渋川市教育委員会

1997『石原東古墳群』渋川市教育委員会

2000『諏訪ノ木遺跡Ⅱ』渋川市教育委員会

2001『石原東遺跡F区』渋川市教育委員会

2001『石原東遺跡E区』渋川市教育委員会



第6図 周辺の遺跡

S=1/25,000

第1表 周辺遺跡

No	遺跡名	主な文献など
1	石原東遺跡D区	本報告
2	諏訪ノ木V遺跡	本報告
3	諏訪ノ木VI遺跡	2006『諏訪ノ木VI遺跡』群埋文刊行予定
4	高源地東I遺跡	2006『高源地東I遺跡』群埋文刊行予定
5	石原東遺跡A～F区	2001『石原東遺跡F区』渋川市教委 他
6	諏訪ノ木遺跡	1981『諏訪ノ木遺跡』渋川市教委
7	諏訪ノ木II遺跡	2000『諏訪ノ木II遺跡』渋川市教委
8	諏訪ノ木III遺跡	2001『諏訪ノ木III遺跡』渋川市教委
9	諏訪ノ木IV遺跡	2001『諏訪ノ木IV遺跡』渋川市教委
10	諏訪ノ木VII遺跡	2003『諏訪ノ木VII遺跡』渋川市教委
11	諏訪ノ木VIII遺跡	2004『諏訪ノ木VIII遺跡』渋川市教委
12	諏訪ノ木IX遺跡	2004『諏訪ノ木IX遺跡』渋川市教委
13	見立溜井・見立大久保遺跡	1985『見立溜井・見立大久保遺跡』赤城村教委
14	弁天塚古墳	1995『赤城村内遺跡I』赤城村教委
15	戸波坂遺跡	
16	諏訪西遺跡	1986『諏訪西遺跡』群埋文
17	中畦遺跡	1986『中畦遺跡』群埋文
18	三原田城遺跡	1987『三原田城遺跡』群埋文
19	房谷戸遺跡I、II	1987『房谷戸遺跡I』他群埋文
20	房谷戸遺跡III	1995『房谷戸遺跡III』北橋村教委
21	樽遺跡	杉原莊介1939『樽遺跡調査概報』『考古学』
22	三原田遺跡	1980『三原田遺跡I』群馬県企業局 他
23	白井北中道遺跡(道の駅)	2000『白井北中道遺跡(道の駅地点)』群埋文
24	白井遺跡群	1994『白井遺跡群』群埋文 他
25	白井大宮遺跡	1993『白井大宮遺跡』群埋文
26	白井大宮II遺跡	2002『白井大宮II遺跡』群埋文
27	白井丸岩遺跡	1994『白井遺跡群』群埋文 他
28	吹屋瓜田遺跡	1997『吹屋瓜田遺跡』群埋文
29	鯉沢瓜田遺跡	2000『鯉沢瓜田遺跡』子持村教委
30	白井城跡	1987『子持村誌(上巻)』
31	金比羅山	白井城域内。円墳?
32	不動塚古墳	1971『群馬県遺跡台帳』県教委
33	白井宿	1987『子持村誌(上巻)』
34	金比羅塚	長尾村16号。円墳。
35	加藤塚古墳	1987『子持村誌 上巻』
36	白井城南郭遺跡	1987『子持村誌 上巻』
37	白井南中道遺跡	1993『白井遺跡群』群埋文 他
38	白井古墳群	1993『白井大宮遺跡』群埋文
39	二位屋城跡	山崎一1972『群馬の古城址の研究』
40	白井二位屋遺跡 (ターミナル地点)	1994『白井遺跡群』群埋文 他
41	白井二位屋遺跡	1994『白井遺跡群』群埋文 他
42	白井尖野遺跡	1994『白井遺跡群』群埋文 他
43	落合I号墳	
44	西ノ平遺跡	1996『西ノ平遺跡』北橋村教委
45	田尻遺跡	1990『八崎の寄居・田尻遺跡』北橋村教委
46	東浦遺跡	
47	金井古墳	1956『渋川金井古墳調査概報』『コイノス』
48	金井下新田遺跡	
49	金井前原古墳群	1993『渋川市誌第2巻(通史編)』

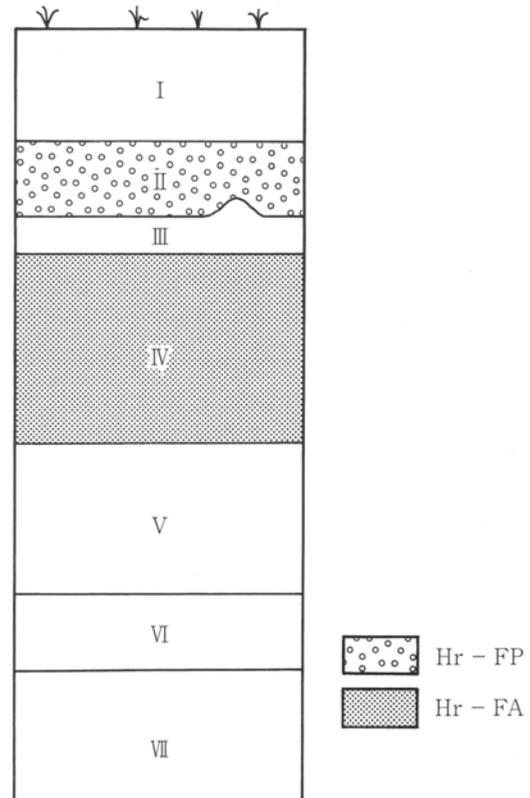
No	遺跡名	主な文献など
50	金井前原遺跡	1989『市内遺跡II』渋川市教委
51	金井製鉄遺跡	1975『金井製鉄遺跡』渋川市教委
52	金井原遺跡	1993『市内遺跡VI』渋川市教委
53	虚空蔵塚古墳	1993『渋川市誌第2巻(通史編)』
54	坂之下遺跡	1988『坂之下遺跡』渋川市教委
55	坂下町古墳群	1971『北群馬・渋川の歴史』他
56	東町関下遺跡	1998『東町関下遺跡』群埋文
57	東町古墳	1971『北群馬・渋川の歴史』他
58	延暦塚古墳	1972『群馬県遺跡台帳両毛編』群馬県教委
59	大崎古墳群	1993『渋川市誌第2巻(通史編)』
60	北町遺跡	1996『北町遺跡・田ノ保遺跡』北橋村教委
61	分郷八崎遺跡	1996『分郷八崎遺跡』北橋村教委
62	田ノ保遺跡	1996『北町遺跡・田ノ保遺跡』北橋村教委
63	石原清水田遺跡	1997『石原清水田遺跡』渋川市教委
64	石原久保貝道A	1993『市内遺跡VI』渋川市教委
65	石原久保貝道B	1993『市内遺跡VI』渋川市教委
66	田中遺跡	1997『田中遺跡』渋川市教委
67	石原東古墳群	1997『石原東古墳群』渋川市教委
68	中村日焼田遺跡	1993『中村日焼田・中村久保田遺跡』渋川市教委
69	中村久保田遺跡	1993『中村日焼田・中村久保田遺跡』渋川市教委
70	中村遺跡	1986『中村遺跡』渋川市教委
71	石原手川遺跡	1988『市内遺跡I』渋川市教委 他
72	西浦遺跡	1986『西浦遺跡』渋川市教委
73	伊勢森南遺跡	1989『市内遺跡II』渋川市教委
74	空沢遺跡	1978『空沢遺跡』渋川市教委
75	行幸田寺後遺跡	1993『市内遺跡VI』渋川市教委
76	中筋遺跡	1987『中筋遺跡』渋川市教委 他
77	行幸田宮ノ前遺跡	1993『渋川市誌第2巻(通史編)』
78	行幸田畑中遺跡	1992『市内遺跡V』渋川市教委 他
79	有馬後田東遺跡	1993『市内遺跡VI』渋川市教委
80	有馬条里遺跡	1983『有馬条里遺跡』渋川市教委 1989『有馬条里遺跡I、II』群埋文他
81	八木原沖田遺跡III	1993『八木原沖田遺跡III』渋川市教委
82	神宮寺西遺跡	1988『神宮寺西遺跡』渋川市教委
83	行幸田南原遺跡	1994『行幸田南原遺跡』渋川市教委
84	行幸田山遺跡	1987『行幸田山遺跡』渋川市教委
85	若宮遺跡	1998『若宮遺跡』渋川市教委
86	有馬遺跡II	1990『有馬遺跡II』群埋文
87	有馬久宮間戸遺跡	1997『有馬久宮間戸遺跡』渋川市教委
88	有馬小貝戸遺跡	1997『有馬小貝戸遺跡』渋川市教委
89	有馬庵寺跡	1988『有馬庵寺跡』渋川市教委
90	有馬城ノ上遺跡	1993『渋川市誌第2巻(通史編)』
91	有馬堂山古墳群	1993『渋川市誌第2巻(通史編)』
92	小倉庚甲塚遺跡	1992『小倉庚甲塚遺跡』吉岡町教委
93	平石遺跡	1988『平石遺跡』吉岡町教委
94	半田剣城遺跡	1989『市内遺跡II』渋川市教委
95	半田薬師遺跡	1995『半田薬師遺跡』渋川市教委
96	半田中原・南原遺跡	1994『半田中原・南原遺跡』渋川市教委
	有馬条里	1983『有馬条里遺跡』渋川市教委 1993『渋川市誌 第2巻(通史編)』

## 第3章 基本層序

発掘調査で確認された遺構の時期を検討する上で、それがどのような面で確認されたかが重要な手がかりとなる。その点で本遺跡の周辺には榛名山・浅間山の火山活動による噴出物の堆積が見られ、地学と考古学の両者の研究によって、それらの形成された時期がほぼ明らかにされている。ここでは本文中の多数の断面図相互間の関連を理解しやすくするために、以下の7層に土層を分ける。

- 第Ⅰ層：現表土。20～80cmほどの堆積が見られる。
- 第Ⅱ層：榛名二ッ岳伊香保テフラ (Hr-FP)。石原東遺跡 D1区で15～20cmの2次堆積が見られる。諏訪ノ木V遺跡では、溝や谷地など窪んでいる部分にのみ残存。6世紀中頃。
- 第Ⅲ層：黒色～黒褐色土層。諏訪ノ木V遺跡では谷地のみ残存。石原東遺跡 D1区では水田面を確認。
- 第Ⅳ層：榛名二ッ岳渋川テフラ (Hr-FA)。石原東遺跡 D1区では火山泥流堆積物を挟み約120cm。従来のテフラ区分に従うとS-1～S-5、S-7～S-10が確認できる。諏訪ノ木V遺跡では30～120cm堆積。平坦部で数層、谷地で10層程度に細分できる。6世紀初頭。
- 第Ⅴ層：黒色土層。白色軽石粒、橙色粒混入。平坦部で20cm程度。谷部で20～100cm。今回の調査で縄文時代早期押型文、三戸式、田戸下層式、早期前半と考えられる縄文施文、捺糸文施文、無文土器、前期花積下層式、関山式、黒浜式、諸磯式、中期焼町類型、加曽利E式、後期称名寺式、堀之内式、加曽利B式、弥生時代前期、中期前半の可能性のある土器の出土を確認した。
- Ⅵ層：暗褐色土層。Ⅴ層とⅦ層との漸移層。谷地に堆積する。小礫を含む。Ⅴ層と同様な遺物の出土が認められたが、層位により分類することはできなかった。
- Ⅶ層：黄褐色土層。大小の礫が混入する。礫は拳大～径2mを超えるものまで多量に混入。水沢山山体崩落に由来する「唐沢泥流堆積物<sup>(1)</sup>」の可能性が高

い。諏訪ノ木V遺跡2区Ⅶ層上からは、縄文時代草創期の石器が出土。



第7図 基本土層模式図

- 第Ⅰ層 表土。耕作土。層厚は、地点により異なるが、概ね20～80cmである。
- 第Ⅱ層 榛名二ッ岳伊香保テフラ (Hr-FP)。層厚は、地点により異なるが、概ね15～30cmである。
- 第Ⅲ層 黒色～黒褐色土層。層厚は、地点により異なるが、概ね5～35cmである。
- 第Ⅳ層 榛名二ッ岳渋川テフラ (Hr-FA)。層厚は、地点により異なるが、概ね30～120cmである。
- 第Ⅴ層 黒色土層。層厚は、地点により異なるが、概ね平坦部で20cm。凹部で20～100cmである。
- 第Ⅵ層 暗褐色土層。唐沢泥流堆積物(地山)との漸移層。層厚は、地点により異なるが、概ね20～30cmである。
- 第Ⅶ層 黄褐色土層(地山)。唐沢泥流堆積物の可能性が高い。

### 註

(1) 1987『渋川市誌 第一巻 自然編』、本報告1章[1]参照。

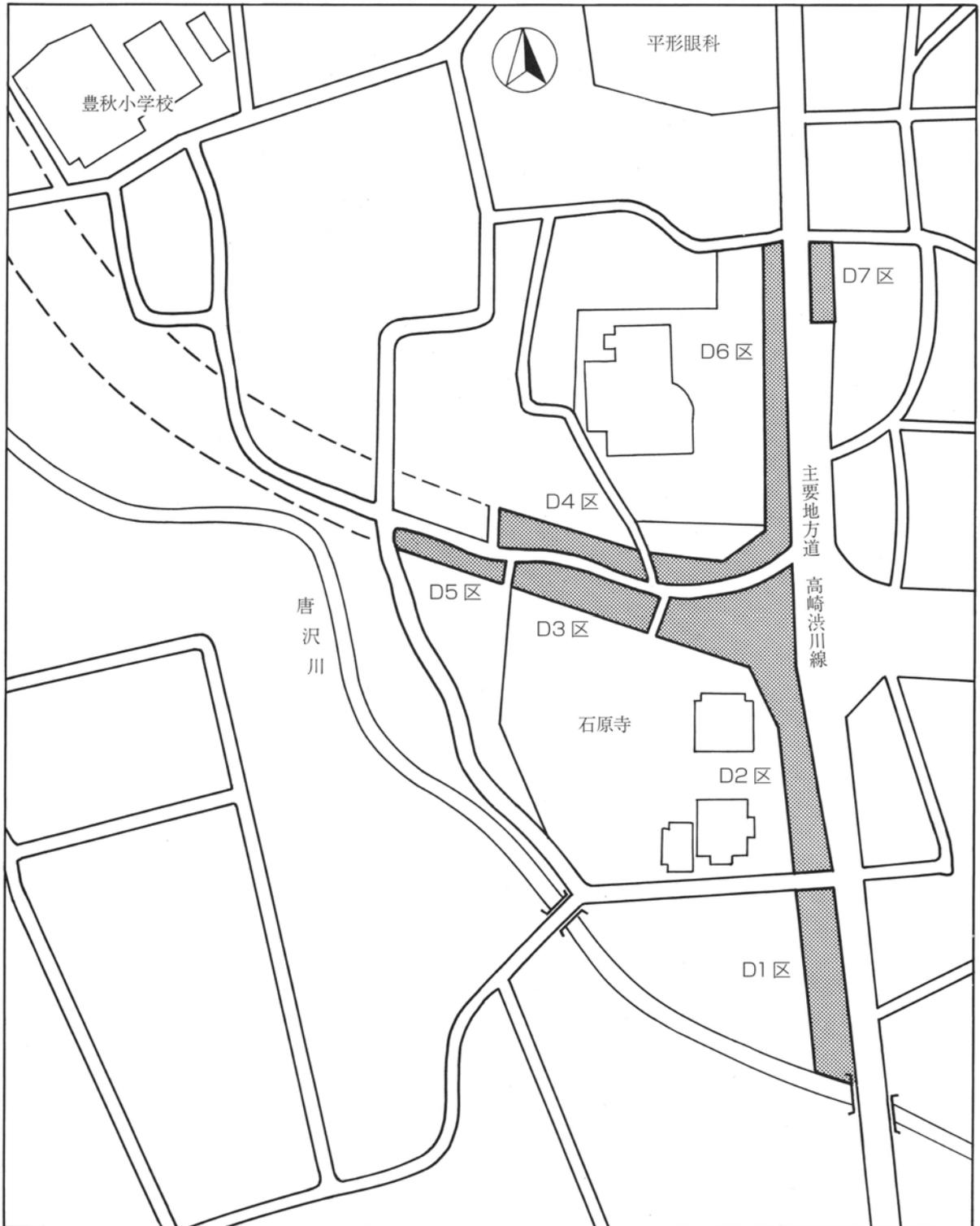
### 引用・参考文献

- 1981『諏訪ノ木遺跡』渋川市教育委員会
- 1987『渋川市誌 第一巻 自然編』

## 第4章 石原東遺跡 D 区の遺構と遺物

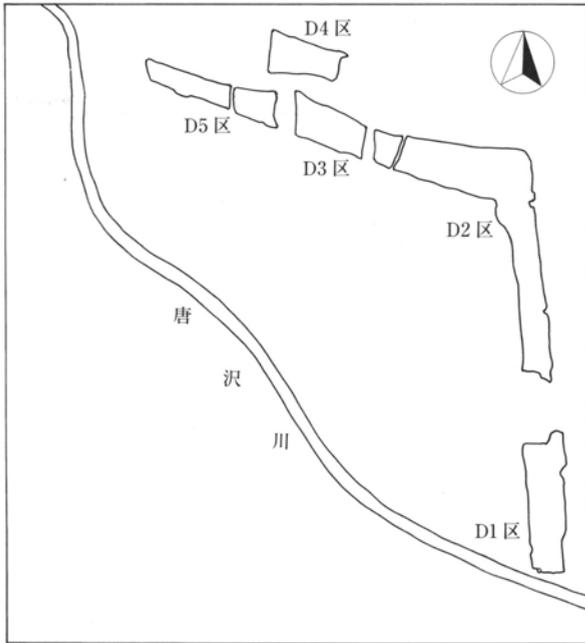


上空より撮影した石原東遺跡D区



前項写真の概略図

## [1] 弥生時代以前の遺構と遺物



石原東遺跡 D区 弥生時代以前の遺構

### 概要

石原東遺跡 D区では、遺構に伴って出土したもので図化が可能な遺物については、それぞれの遺構ごとに掲載したが、これ以外にも多量の土器をはじめとする遺物の出土があった。石原東遺跡 D区では弥生時代以前の遺構は確認されなかったため、この項であげる遺物は、どの遺構にも属さない遺構外出土遺物である。遺構外出土遺物の掲載は、遺構で出土した遺物より残存率のよいものを選択することを基本としたが、石原東遺跡 D区全体を通して弥生時代以前の遺物が希少であったために小破片であっても可能な限り掲載することにした。

小破片のため、帰属時期を明確にできない遺物もある。

### 縄紋土器 (第8図、PL16)

1は押型紋土器である。口縁部破片で、口縁部に沿って横位に山形紋を施紋する。焼成は良好で堅致である。D1区からの出土である。2は三戸式に比定できようか。矢羽根状短沈線を横位に巡らす。D2区からの出土である。3は加曾利E3式である。隆線を横位に2条貼付する。口縁部紋様の部位であろう。D1区からの出土である。4は加曾利E4式である。沈線を垂下させ、LR縄紋を縦位施紋する。D1区からの出土である。5はRL縄紋を斜位に施紋する。小破片のため帰属時期は特定しかねるが、中期に属するものであろう。D1区からの出土である。

(橋本)

### 弥生土器 (第8図、PL16)

6は弥生土器の壺か甕の頸部片である。頸部に簾条文、肩に波条文を施文する。焼成は良好。後期前半の樽式に属するものであろう。7は弥生土器の壺の頸部片である。外面ハケメ、頸部に時計回りの櫛描簾条文を施文する。内面ナデ。胎土には輝石等の細砂を含む。焼成は良好。弥生土器はすべてD1区からの出土である。

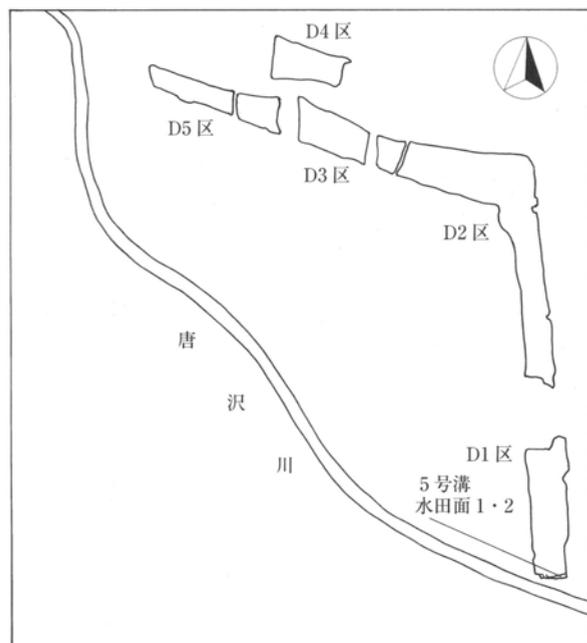
### 石器 (第8図、PL16)

8は、一部破損した打斧。石材は変質安山岩。長さ10.5cm、最大幅7.8cm、最大厚3.0cmを測る。D1区からの出土である。



第8図 弥生時代以前の出土遺物図

## [2] 古墳時代の遺構と遺物



石原東遺跡D区 古墳時代の遺構

### 概要

D1区の南端で、古墳時代後期以降の水田2面と溝1条(5号溝)を検出した。遺構はHr-FPに覆われているが、古環境研究所の早田氏によると、Hr-FPは直接降下して堆積したものではなく、洪水などによって運ばれて堆積した二次堆積層であるとのことである。

検出された水田面は全体の一部で、5号溝を境に、調査区外の南へひろがっていると思われる。

また、Hr-FP堆積以降は、唐沢川の洪水が頻繁に起こっていたことが、土層断面により確認された。Hr-FP 2次堆積以降、水田耕作が行われていたことを示す遺構は確認されなかった。

### (1) 水田

水田面1・水田面2(第9図、PL4)

被覆土はHr-FP(二次堆積)で20~30cmほど覆われている。Hr-FP(二次堆積)は、角の取れた径1~5cm大の軽石を少量含む黄褐色の灰層で、土層中に気泡が観察できることや、角の取れた軽石がみられることから、Hr-FP軽石降下後の熱泥流の

堆積物であると考えられる。(古環境研究所 早田氏の教示)。水田面の残存状態は比較的良好で、畦の残存高は10~20cmである。畦は、ほぼ東西方向に設けられている。畦は、長さ約6mで検出された。確認できた調査区内の範囲では、唐沢川とはほぼ平行している。水口は1カ所検出された。水口の幅は、30~40cmで、深さは、15cm程である。5号溝から水口1を通して水田面2に取水していた様子が伺える。

水田面1は溝の底に対して2~3cm高い。溝と水田面を区画する畦状の高まりもないので、溝から水田面に水がオーバーフローして水田面1に水が供給されていた可能性が考えられる。水田面2では畦状の高まりで5号溝と区画されており、水口1から水田面2に水が供給されていたと考えられる。

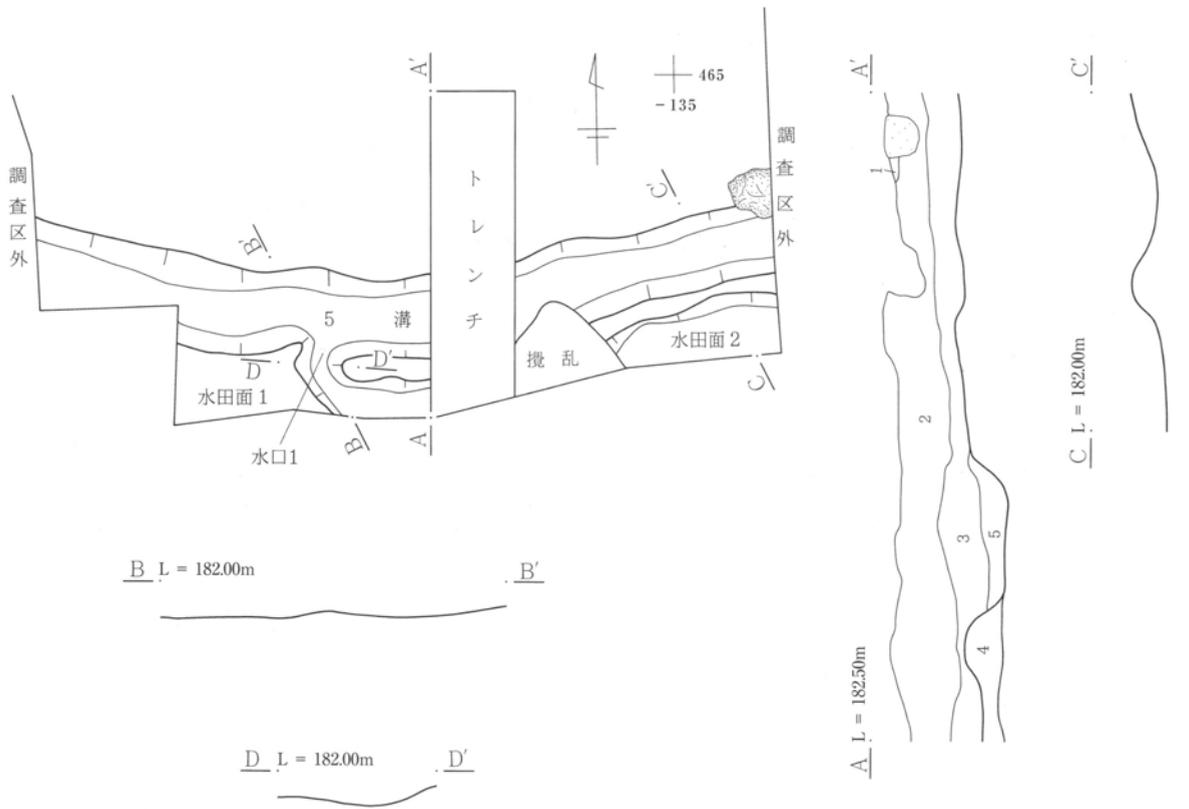
耕作土は、5号溝4層の黒褐色土である。約20~30cmの層厚で確認できる。耕作土は軽石などは含まず、極細砂~シルトの粒径区分に属する一様な粒径の土層である。

### (2) 溝

5号溝(第9図、PL4)

本溝はD1区南端405-140付近に位置する。他遺構との重複関係はない。走行は東西方向で、平面形態は、若干蛇行するもののほぼ直線である。断面形態は角の丸い逆台形状を呈す。底面は丸みを持つ。規模は幅90~120cm、深度は5~15cmである。検出された長さは約10mである。黄褐色の砂質土による埋没状態は、自然埋没であると考えられる。

水田面が検出されたD1区の南端は唐沢川に接する地点で、水田耕作に必要な水利を得ることは比較的容易である。検出された調査区内では、5号溝は唐沢川とはほぼ平行に走行しており、調査区の上流で唐沢川から取水して、水田耕作の取配水用の溝として機能していた可能性が高い。

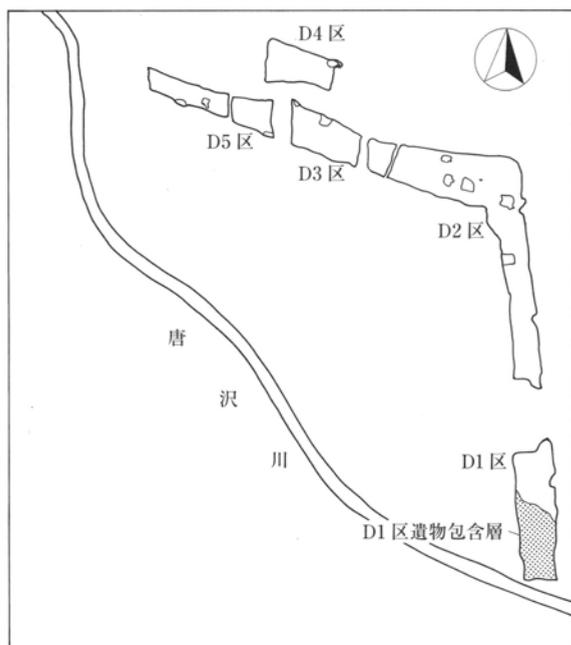


5号溝

- 1 黒褐色土 Hr-FPを含み、径0.5~1cmの礫を含む。
- 2 暗褐色土 Hr-FPを多量に含み、色調がやや異なる。
- 3 Hr-FP 二次堆積層(早田氏の教示 古環境研究所)。黄褐色灰層に角の取れた径1~5cm大の軽石を少量含む。
- 4 黒褐色土 軽石等を含まない様な黒褐色土。4層上面が水田面。
- 5 黄褐色土 砂質。

第9図 5号溝、水田面1、2 平面・断面図

### [3] 奈良・平安時代の遺構と遺物



石原東遺跡D区 奈良・平安時代の遺構

#### 概要

石原東遺跡D区の奈良・平安時代の遺構は、遺物包含層(D1区遺物包含層)1地点、住居12軒、土坑1基である。

D1区遺物包含層からは、奈良・平安時代の土器類、木器類、鉄関連遺物、約22,300点が出土した。土器類の中には、196点の墨書土器が含まれている。

住居12軒は、すべて10世紀後半に帰属する。住居は礫層上に構築されており、床面に大きな礫が突出したものもある。

注目すべき竪穴住居にD2区5号住居とD5区1号住居がある。前者は、鉄生産関連の遺物が多く出土した住居で、鍛冶炉の可能性が考えられる遺構も検出された。後者は、「苳」と書かれた灰釉陶器の椀が出土した住居で、墨書土器が多量に発見されたD1区遺物包含層と関連する可能性も考えられる。

土坑は、D2区1号土坑1基だけである。D2区1号土坑は、杯5点、椀3点が重ねて埋納されていた。この内の1点は、「益」と判読できる墨書土器である。

#### (1) D1区遺物包含層(奈良・平安時代)

##### 概要

D1区遺物包含層からは、土器類、木器類、鉄関連遺物といった22,300点を超える遺物が出土した。最も多い遺物は土器類で約22,000点である。続いて木器類が57点、鉄関連遺物が数点である。土器類の中には、墨書土器が196点含まれる。

出土土器は、21,845点(124.69kg)である。それらは、土師器10,681点(277.3kg)、須恵器10,617点(91.91kg)、灰釉陶器542点(4.99kg)に分類できる。出土土器類は、分類して、数量・重量をはかり、一覧表に示した(第2表・第3表)。煮炊具が少量で、杯や椀を中心とした供膳具が大部分を占めるといった特徴を持つ。

出土土器の196点は、墨書土器である。墨書の中で、ある程度判読可能な文字が、89点ある。その内60点は「苳」と判読、あるいは類推できるものである。判読可能な墨書土器の内「苳」(類推含む)は約67%、「𠄎」は13%、あわせて80%を占める。墨書土器の器種は、土師器杯、須恵器蓋・杯・椀・皿、灰釉陶器椀・皿である。出土した墨書土器については、第7章「石原東遺跡・諏訪ノ木V遺跡出土の墨書・刻書土器について」(高島英之)を参照していただきたい。

鉄関連遺物は、6点出土した。羽口3点、椀形鍛冶滓2点、流動滓1点である。遺物に直接関わる遺構が不明である。流動滓は非鉄(銅)系の滓の可能性はある。

木質遺物として取り上げた約300点は、加工痕のあるものが57点で、ここでは加工痕のある57点を木器類として掲載する。57点の中には、曲物、挽物、漆器、火鑽臼、播粉木、杭、加工材等が確認できる。出土の木器類は、農具や工具、建築部材などではなく、容器や食事具を中心とした遺物構成であるという特徴を持つ。漆器の塗膜構造については、第6章「石原東遺跡出土漆関係遺物の断面観察」(小林正)を参照していただきたい。



第10図 石原東遺跡 D区 奈良・平安時代の遺構

第4章 石原東遺跡D区の遺構と遺物

第2表 D1区遺物包含層出土土器 数量一覧表

土器種	器種	備考	出土土器 数量(個)	報告書掲載遺物数量(個)	報告書掲載外遺物数量(個)	
土師器	杯	口縁部	1,543	47	1,225	
		底部			271	
	甕類		65	5	60	
	台付甕	台部	40	3	37	
	鉢		2	2	0	
10,681個	土師器	小片	9,031	0	9,031	
須恵器	杯・椀	口縁	7,083	32	1,613	
		体部			5,438	
	杯		1,118	86	1,032	
	椀		536	54	482	
	皿		14	14	0	
	壺		2	2	0	
	蓋		325	12	313	
	甕	口縁	1,509	9	63	
		肩～胴			1,437	
	壺			6	5	1
		長頸壺		3	3	0
		短頸壺		1	1	0
		ミニチュア短頸壺		1	1	0
		突帯付四耳壺		1	1	0
	12個					
鉢	有孔鏝付鉢		1	1	0	
	口縁		1	1	0	
10,617個	羽釜		16	5	11	
灰釉陶器	椀・皿	黒笹14号窯式期	2	0	2	
		黒笹90号窯式期	0	0	0	
		光ヶ丘1号窯式期(古)	2	0	2	
		光ヶ丘1号窯式期	4	0	4	
		大原2号窯式期	7	0	7	
		大原(新)～虎溪山	0	0	0	
	18個	小片	3	0	3	
	皿	黒笹14号窯式期	4	1	3	
		黒笹90号窯式期	0	0	0	
		光ヶ丘1号窯式期(古)	2	0	2	
		光ヶ丘1号窯式期	40	4	36	
		大原2号窯式期	37	1	36	
		大原(新)～虎溪山	0	0	0	
	93個	小片	10	0	10	
	椀	黒笹14号窯式期	4	4	0	
		黒笹90号窯式期	1	0	1	
		光ヶ丘1号窯式期(古)	3	1	2	
		光ヶ丘1号窯式期	64	4	60	
		大原2号窯式期	45	5	40	
		大原(新)～虎溪山	2	0	2	
	134個	小片	15	0	15	
	段皿	黒笹14号窯式期	6	1	5	
		黒笹90号窯式期	0	0	0	
		光ヶ丘1号窯式期(古)	0	0	0	
		光ヶ丘1号窯式期	5	1	4	
		大原2号窯式期	4	1	3	
		大原(新)～虎溪山	0	0	0	
	15個	小片	0	0	0	
	瓶類	口縁部		15	1	14
		頸部		17	0	17
		肩部		21	2	19
		胴部		55	1	54
		底部		4	3	1
		把手		1	1	0
	113個					
	542個	蓋		1	1	0
		耳皿		2	2	0
		小片		166	1	165
	緑釉陶器			5	4	1
	計			21,845	323	21,522

※大原(新)～虎溪山は、大原2号窯式期(新)～虎溪山1号窯式期を示す。

位置と層位

D1区遺物包含層は、唐沢川左岸に接するD1区  
の南に位置する。ここでは、基本土層第I層(表土)  
と第II層(Hr-FP)に挟まれた黒褐色の洪水層が確  
認された。この洪水層は、唐沢川の洪水に関わる土  
層と理解することができる。洪水層は平均して、層  
厚1m程の堆積が確認できるが、唐沢川左岸から約  
45m離れた位置で立ち上がる。

洪水層は大きく3層に分層される。第1層は、径

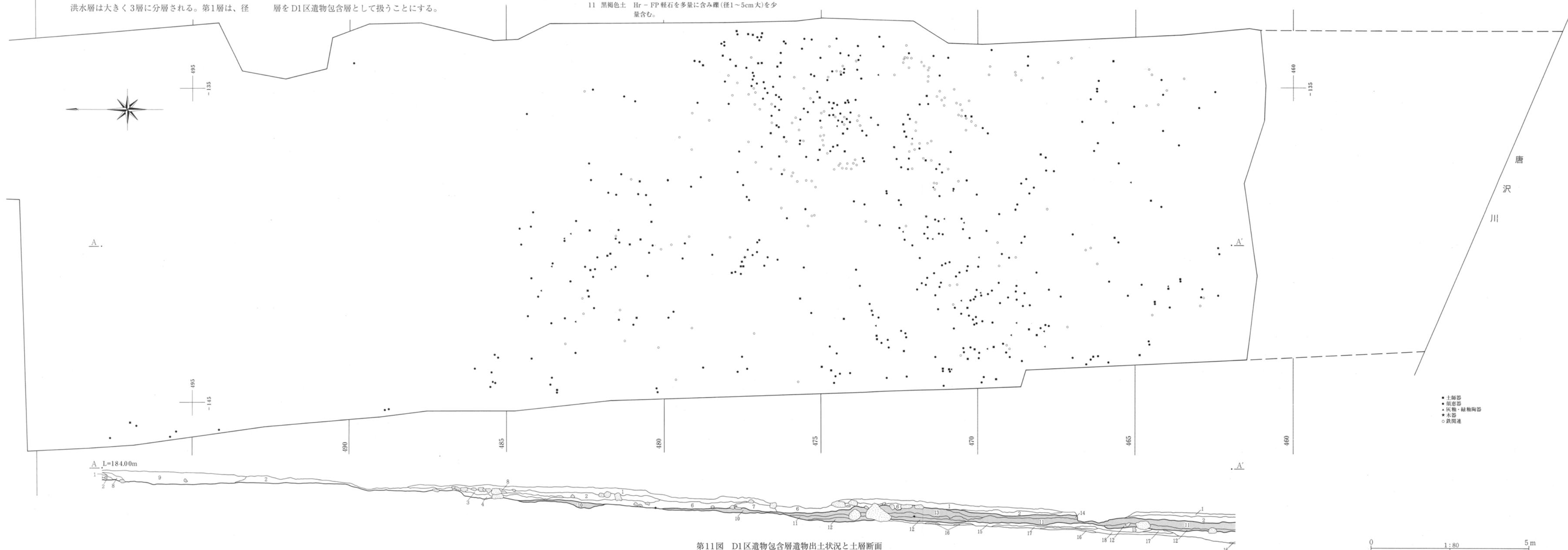
5~30cm大の礫やHr-FP軽石を多量に含む褐色~  
暗褐色~黒褐色土層で、近現代から中世の遺物を含  
む。第2層は、Hr-FP軽石を少量、砂礫を多量に含  
む褐色~黒褐色~黒色土層で、奈良・平安時代の  
遺物を含む。第3層は径5~40cm大の礫、Hr-FP、  
シルト状の二ツ岳起源の火山灰を多量に含む砂礫層  
で、遺物はない。

本報告書では、奈良・平安時代の遺物を含む第2  
層をD1区遺物包含層として扱うことにする。

D1区 遺物包含層

- 1 黒褐色土 Hr-FP軽石、二ツ岳起源の火山灰を多量に含み、  
礫(径0.5~1cm大)を含む。
- 2 黒褐色土 Hr-FP軽石、二ツ岳起源の火山灰を多量に含み、  
礫(径5~30cm大)を含む。
- 3 黒褐色土 Hr-FP軽石、炭化物を少量含む。
- 4 黒褐色土 二ツ岳起源の火山灰をブロック状に含む。
- 5 黒褐色土 二ツ岳起源の火山灰を多量に混入する。
- 6 黒褐色土 二ツ岳起源の火山灰を少量含む。
- 7 黒褐色土 腐植した木片を多量に含む。やや粘性のある土。
- 8 褐色土 二ツ岳起源の火山灰を多量に混入する砂状の土層。
- 9 暗褐色土 小礫を多量に含む。
- 10 黒褐色土 Hr-FP軽石を少量含む。粘性あり。
- 11 黒褐色土 Hr-FP軽石を多量に含み礫(径1~5cm大)を少  
量含む。

- 12 黒褐色土 Hr-FP軽石を少量含む。
  - 13 褐色土 砂礫を多量に含む。
  - 14 黒色土 Hr-FP軽石を少量含む。
  - 15 Hr-FP軽石・礫層 Hr-FP軽石に礫(5~40cm大)を多  
量に含む。
  - 16 Hr-FP軽石層 Hr-FP軽石、小礫が混在する。  
火山灰を含む。
  - 17 Hr-FP層 シルト状の二ツ岳起源の火山灰。
  - 18 Hr-FP軽石・砂礫層 二ツ岳起源の火山灰、Hr-FP軽石、  
礫の混在する層。脆い堆積。
- ※1~9が第1層(中世以降)10~14が第2層(D1区遺物包含層奈  
良・平安)、15~18が第3層。



第11図 D1区遺物包含層遺物出土状況と土層断面

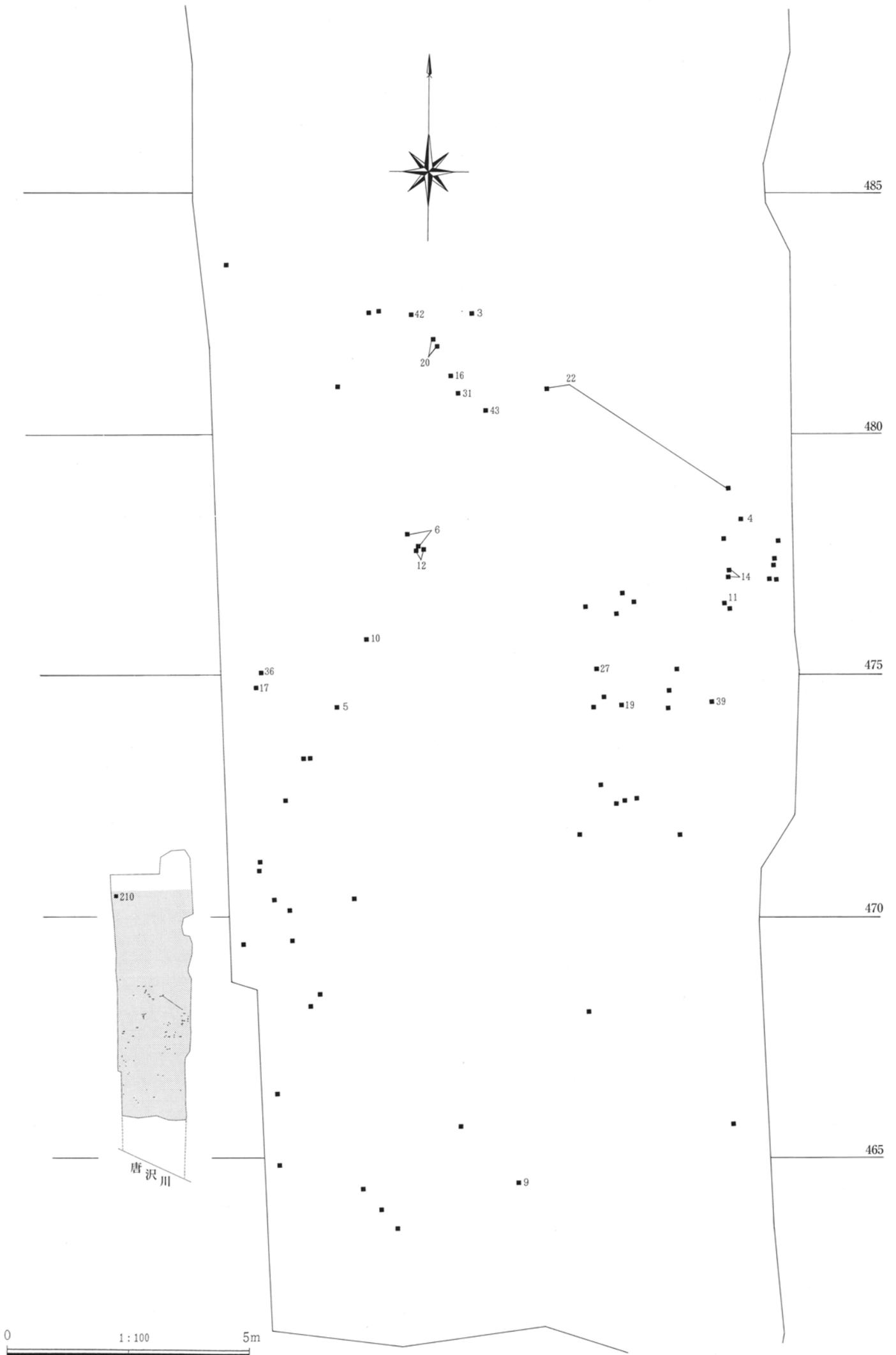
0 1:80 5m



第3表 D1区遺物包含層出土土器 重量一覧表

土器種	器種	備考	出土土器 重量(kg)	報告書掲載遺物重量(kg)	報告書掲載外遺物重量(kg)	
土師器	杯	口縁部	6.48	1.09	4.11	
		底部			1.28	
	甕類		0.71	0.23	0.48	
	台付甕	台部	0.57	0.12	0.45	
	鉢		0.2	0.2	0	
27.73kg	土師器	小片	19.77	0	19.77	
須恵器	杯・椀	口縁	14.63	0.19	5.41	
		体部			9.03	
	杯		13.72	3.74	9.98	
	椀		12.83	3.89	8.94	
	皿		1.19	1.19	0	
	壺		0.06	0.06	0	
	蓋		3.34	0.79	2.55	
	甕	口縁	43.73	2.19	1.61	
		肩～胴			39.93	
	壺			1.18	1.04	0.14
		長頸壺		0.35	0.35	0
		短頸壺		0.26	0.26	0
		ミニチュア短頸壺		0.01	0.01	0
		突帯付四耳壺		0.07	0.07	0
	1.87kg	鉢	有孔罽付鉢	0.12	0.12	0
	口縁		0.03	0.03	0	
91.91kg	羽釜		0.39	0.22	0.17	
灰釉陶器	椀・皿	黒笹14号窯式期	0.03	0	0.03	
		黒笹90号窯式期	0	0	0	
		光ヶ丘1号窯式期(古)	0.06	0	0.06	
		光ヶ丘1号窯式期	0.02	0	0.02	
		大原2号窯式期	0.05	0	0.05	
		大原(新)～虎溪山	0.01	0	0	
	0.18kg	小片	0.01	0	0.01	
	皿	黒笹14号窯式期	0.28	0.23	0.05	
		黒笹90号窯式期	0	0	0	
		光ヶ丘1号窯式期(古)	0.01	0	0.01	
		光ヶ丘1号窯式期	0.45	0.21	0.24	
		大原2号窯式期	0.34	0.12	0.22	
		大原(新)～虎溪山	0	0	0	
	1.15kg	小片	0.07	0	0.07	
	椀	黒笹14号窯式期	0.3	0.3	0	
		黒笹90号窯式期	0.01	0	0.01	
		光ヶ丘1号窯式期(古)	0.05	0.04	0.01	
		光ヶ丘1号窯式期	0.42	0.09	0.33	
		大原2号窯式期	0.75	0.31	0.44	
		大原(新)～虎溪山	0.02	0	0.02	
	1.63kg	小片	0.08	0	0.08	
	段皿	黒笹14号窯式期	0.07	0.03	0.04	
		黒笹90号窯式期	0	0	0	
		光ヶ丘1号窯式期(古)	0	0	0	
		光ヶ丘1号窯式期	0.07	0.04	0.03	
		大原2号窯式期	0.07	0.05	0.02	
		大原(新)～虎溪山	0	0	0	
	0.21kg	小片	0	0	0	
	瓶類	口縁部	0.09	0.02	0.07	
		頸部	0.15	0	0.15	
肩部		0.32	0.15	0.17		
胴部		0.53	0.22	0.31		
底部		0.18	0.17	0.01		
把手		0.02	0.02	0		
1.29kg	蓋	0.03	0.03	0		
4.99kg	耳皿		0.06	0.06	0	
	小片		0.44	0.02	0.42	
緑釉陶器			0.07	0.06	0.01	
計			124.69	17.96	106.73	

※大原(新)～虎溪山は、大原2号窯式期(新)～虎溪山1号窯式期を示す。



1. D1区遺物包含層出土の土師器(第15図、PL5・6・16・17)

D1区遺物包含層では、10,681点(27.73kg)の土師器が出土した。10,681点(27.73kg)の内、9,031点(19.77kg)が小片のため、器種不明である。器種が判明した1,650点(7.96kg)は、杯1,543点(6.48kg)、甕65点(0.71kg)、台付甕40点(0.57kg)、鉢2点(0.20kg)に分類でき、土師器の大部分が杯であると思われる。

出土した土師器の内、器形が復元できるものと墨痕のある小破片をこの項に掲載した。掲載外の土師器は分類して、数量・重量をはかり、一覧表(第2表・第3表)に示した。掲載遺物は、杯類34点、鉢2点、甕2点、小型甕5点、台付甕1点である。杯の多くは口縁部上半が横ナデ、下半がナデ、底部は不定方向のヘラ削りの成形であるが、内面に暗文を施し、

成・整形や胎土の異なるものも数点ある。時期の判明するもので、8世紀後半から9世紀後半のものがあり、概ね9世紀代が中心となる構成である。

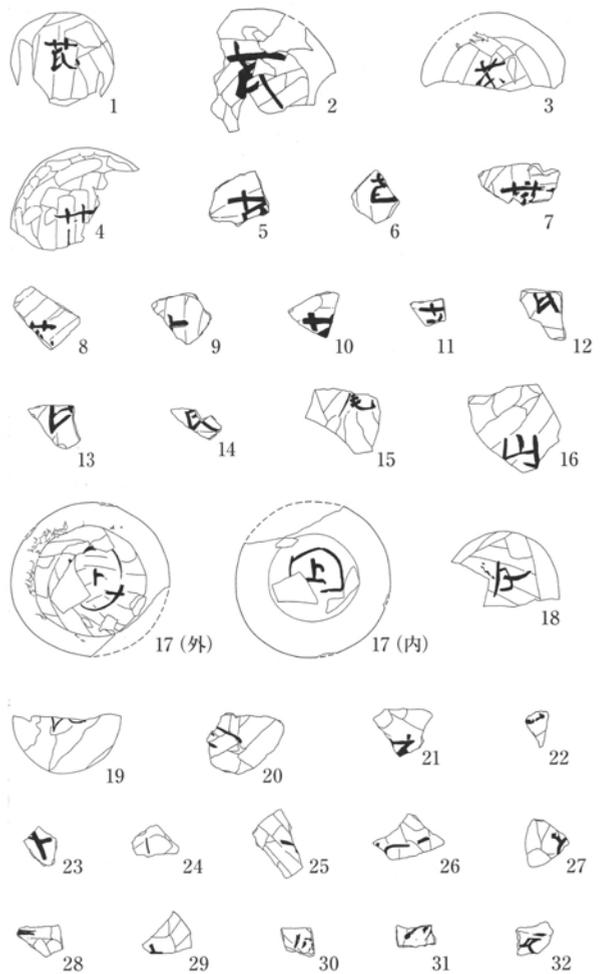
甕は、体部ヘラ削りの整形で、「く」の字口縁で長胴型の7世紀代の器形が1点(24)みられるものの、9世紀代を中心に構成されている。

墨書のある土器は杯の器形のみに見られ、ほとんどが底部外面に書かれている。「茂」(20など)や「茂」の一部の可能性が高い「𠄎」が大部分で、その他に「山」(42)の1点、「尾」(43)の1点、「㊦」(16)の1点などがある。

墨書のある土師器は、一覧表(第4表、第13図)を参照。

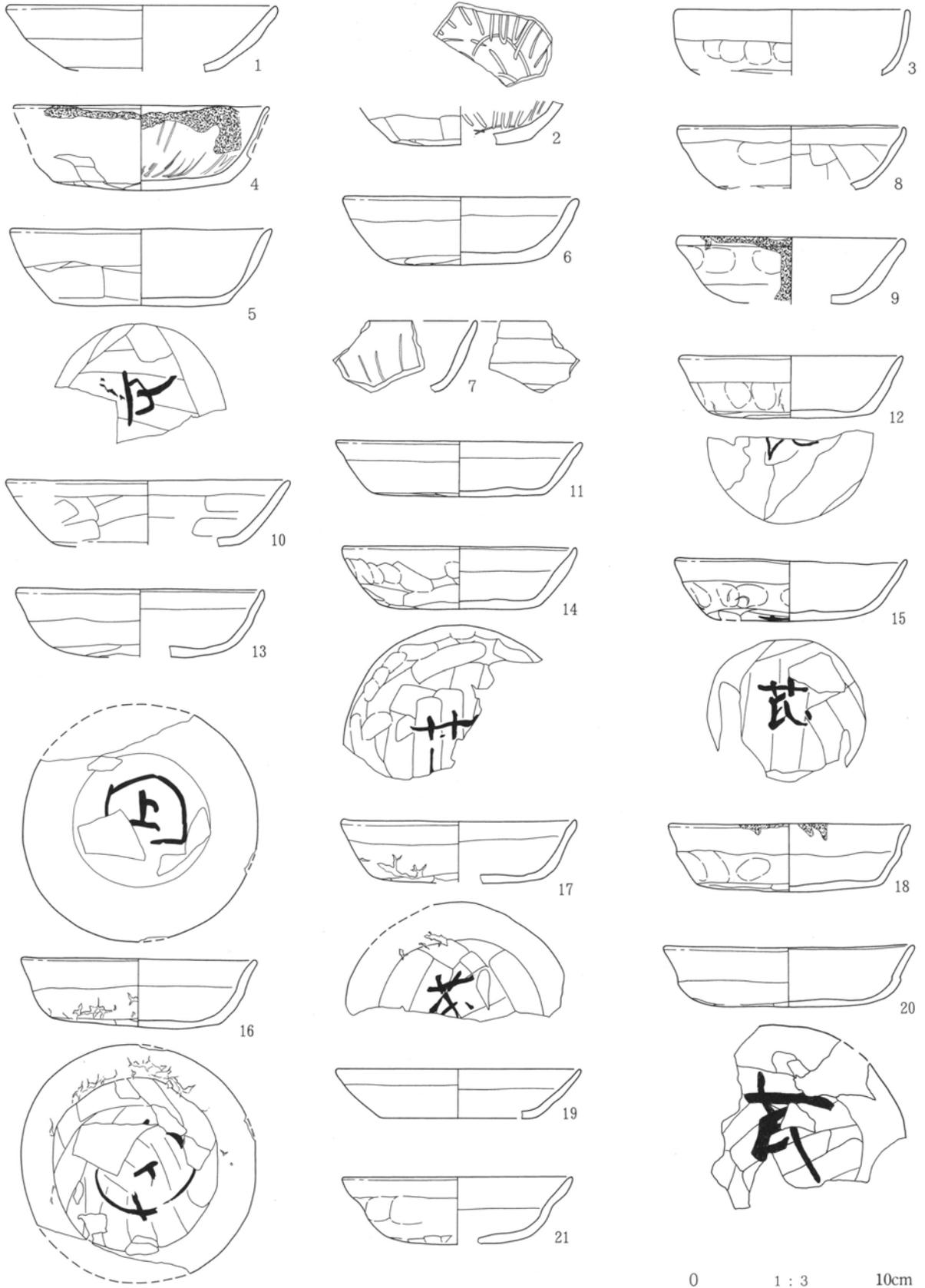
第4表 石原東遺跡D1区包含層出土土師器 墨書土器一覧表

No.	土器No.	器形	墨書の位置・方向	積文・文字情報
1	15	杯	底部外面	茂
2	20	杯	底部外面	茂
3	17	杯	底部外面	茂
4	14	杯	底部外面	𠄎[茂カ]
5	32	杯	底部外面	□[茂カ]
6	38	杯	底部外面	□[茂カ]
7	33	杯	底部外面	𠄎[茂カ]
8	36	杯	底部外面	□[𠄎カ]
9	37	杯	底部外面	□[𠄎カ]
10	34	杯	底部外面	□[茂カ]
11	35	杯	底部外面	□[茂カ]
12	40	杯	底部外面	□[茂カ]
13	39	杯	底部外面	□[茂カ]
14	41	杯	底部外面	□[茂カ]
15	43	杯	底部外面	□[尾カ]
16	42	杯	底部外面	山
17	16	杯	底部内外面	□[㊦カ](外)/㊦(内)
18	5	杯	底部外面	□
19	12	杯	底部外面	□[茂カ]
20	45	杯	底部外面	□
21	46	杯	底部外面	□
22	55	杯	底部外面	墨痕
23	53	杯	底部外面	□
24	47	杯	底部外面	墨痕
25	44	杯	底部外面	墨痕
26	51	杯	底部外面	墨痕
27	52	杯	底部外面	□
28	56	杯	底部外面	墨痕
29	48	杯	底部外面	墨痕
30	54	杯	底部外面	墨痕
31	49	杯	底部外面	墨痕
32	50	杯	底部外面	墨痕



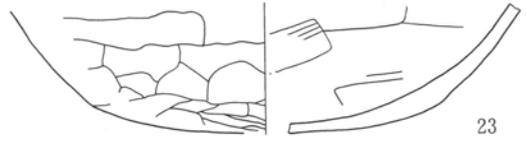
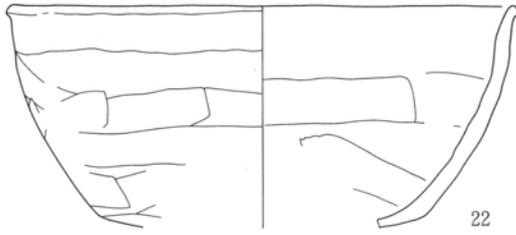
第13図 D1区遺物包含層出土墨書土器(土師器)

杯

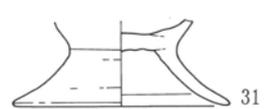
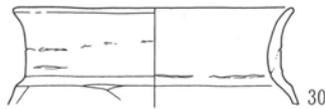
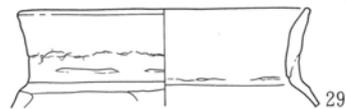
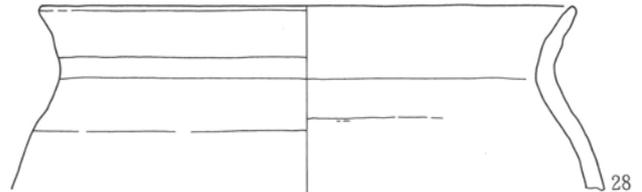
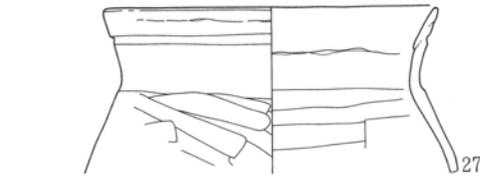
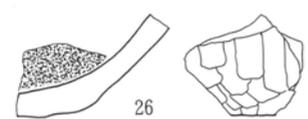
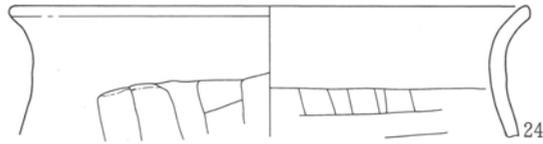


第14図 D1区遺物包含層出土土師器(1)

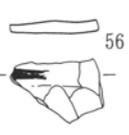
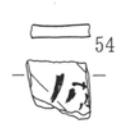
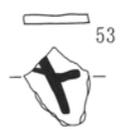
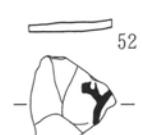
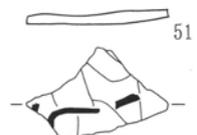
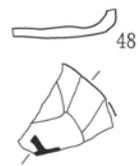
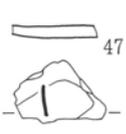
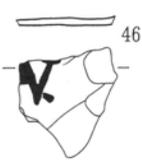
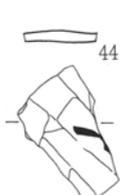
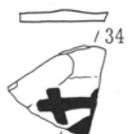
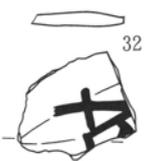
鉢



甕



墨痕のある土師器片



0 1 : 3 10cm

第15図 D1区遺物包含層出土土師器(2)

第4章 石原東遺跡D区の遺構と遺物

D1区遺物包含層出土土師器 観察表

No.	挿図 No. 図版 No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
1	第14図 PL-16	土師器 杯	1/6	口(14.0) 高3.4 底-	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	口縁部上半が横ナデ。下半がナデ。底部はヘラ削り。
2	第14図 PL-16	土師器 杯	体~底部片	口- 高2.1 底-	①細砂 ②良好 ③にぶい橙色	暗文土器。内面口縁部に斜放射状の暗文、底部に螺旋状の暗文。体部外面ヘラ削り。
3	第14図 PL-16	土師器 杯	1/4	口(12.2) 高3.4 底-	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	口縁部上半が横ナデ。下半がナデ。底部はヘラ削り。
4	第14図 PL-16	土師器 杯	1/3	口(13.0) 高4.4 底9.2	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	口縁部上半が横ナデ。下半がナデ。底部は不定方向のヘラ削りか。内面に斜放射状の暗文。内面の黒色の付着物は油脂類が炭化したものか。
5	第14図 PL-16	土師器 杯	1/4	口(13.5) 高4.0 底-	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	口縁部横ナデ。下半ヘラ削り。底部は不定方向のヘラ削り。底部外面に墨書、「□」。
6	第14図 PL-16	土師器 杯	2/3	口12.2 高3.5 底-	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	口縁部上半が横ナデ。下半がナデ。底部は不定方向のヘラ削り。内面黒色、有機物の付着か。
7	第14図 PL-16	土師器 杯	口~底部片	口- 高3.7 底-	①砂粒 ②良好 ③褐色	暗文土器。口縁部上半が横ナデ。下半から底部はヘラ削り。
8	第14図 PL-16	土師器 杯	1/6	口(11.8) 高3.2 底-	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	口縁部上半が横ナデ。下半がナデ。底部はヘラ削り。
9	第14図 PL-16	土師器 杯	1/5	口(11.5) 高3.4 底-	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	口縁部上半が横ナデ。下半がナデ。内面の黒色の付着物は油脂類が炭化したものか。
10	第14図 PL-16	土師器 杯	1/6	口(14.8) 高3.4 底-	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	口縁部上半が横ナデ。下半がナデ。底部はヘラ削り。
11	第14図 PL-16	土師器 杯	1/3	口(12.6) 高2.8 底(9.2)	①砂粒 ②良好 ③灰黄褐色	口縁部上半が横ナデ。下半がナデ。底部は不定方向のヘラ削り。
12	第14図 PL-16	土師器 杯	1/2	口(11.6) 高3.2 底-	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	口縁部横ナデ。下半ヘラ削り。指押さえ痕あり。底部は不定方向のヘラ削り。底部外面に墨書、「□」[茂カ]。
13	第14図 PL-16	土師器 杯	1/3	口(12.7) 高(3.5) 底-	①砂粒 ②良好 ③褐色	口縁部上半が横ナデ。下半がナデ。底部は不定方向のヘラ削り。
14	第14図 PL-16	土師器 杯	1/3	口(12.1) 高3.2 底-	①砂粒 ②良好 ③褐色	口縁部上半が横ナデ。下半がナデ。底部は不定方向のヘラ削りか。底部外面に墨書、「□」[茂カ]。
15	第14図 PL-16	土師器 杯	1/2	口(12.0) 高3.3 底-	①砂粒 ②良好 ③褐色	口縁部上半が横ナデ。下半がナデ。底部は不定方向のヘラ削りか。底部外面に墨書、「茂」。
16	第14図 PL-16	土師器 杯	4/5	口12.3 高3.6 底8.7	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	口縁部上半が横ナデ。下半がナデ。底部は不定方向のヘラ削りか。底部内外面に墨書、内面に「㊦」、外面に「□」[茂カ]。
17	第14図 PL-16	土師器 杯	1/2	口(12.2) 高3.4 底-	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	口縁部上半が横ナデ。下半がナデ。底部は不定方向のヘラ削り。底部外面に墨書、「茂」。
18	第14図 PL-16	土師器 杯	1/3	口(12.6) 高3.5 底-	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	口縁部上半が横ナデ。下半がナデ。指押さえ痕あり。口縁部油煙の付着あり。底部は不定方向のヘラ削り。
19	第14図 PL-16	土師器 杯	1/4	口(12.6) 高2.5 底(8.0)	①砂粒 ②良好 ③褐色	口縁部上半が横ナデ。下半がナデ。底部は不定方向のヘラ削りか。
20	第14図 PL-17	土師器 杯	1/4	口(13.0) 高3.2 底-	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	口縁部上半が横ナデ。下半がナデ。底部は不定方向のヘラ削りか。底部外面に墨書、「茂」。
21	第14図 PL-17	土師器 杯	1/3	口(11.9) 高3.9 底-	①砂粒 ②良好 ③褐色	口縁部上半が横ナデ。下半がナデ、指押さえ痕あり。底部は不定方向のヘラ削り。
22	第15図 PL-17	土師器 鉢	口~体部 1/5	口(20.1) 高8.8 底-	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	口縁部上半が横ナデ。体部横方向のヘラ削り。底部不定方向のヘラ削りか。内面ヘラナデ。
23	第15図 PL-17	土師器 鉢	体下~底部片	口- 高- 底(13.8)	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	外面は不定方向のヘラ削り。内面はヘラナデ。
24	第15図 PL-17	土師器 甕	口~胴部片	口(10.6) 高5.2 底-	①砂粒 ②良好 ③明褐灰色	口縁部横ナデ。胴部縦斜め方向の下位から上位へのヘラ削り。内面ヘラナデ。
25	第15図 PL-17	土師器 甕	口~頸部片	口- 高5.2 底-	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	口縁部から頸部は横ナデ。胴部上位は横方向のヘラ削り。胴部内面はヘラナデ。
26	第15図 PL-17	土師器 甕	底部片	口- 高4.0 底-	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	外面ヘラ削り。内面の黒色の付着物は加熱を受けた油脂類か。
27	第15図 PL-17	土師器 甕	口~肩部1/6	口(13.2) 高6.6 底-	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	口縁部から頸部は横ナデ。胴部上位は横方向のヘラ削り。胴部内面はヘラナデ。
28	第15図 PL-17	土師器 甕	口~肩部1/6	口(21.2) 高7.2 底-	①砂粒 ②良好 ③浅黄褐色	ロクロ成形。回転方向不明。北陸系。
29	第15図 PL-17	土師器 小型甕	口~頸部1/4	口(11.6) 高3.9 底-	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	口縁部から頸部は横ナデ。胴部上位は横方向のヘラ削り。胴部内面はヘラナデ。
30	第15図 PL-17	土師器 小型甕	口~頸部1/4	口(11.2) 高3.9 底-	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	口縁部から頸部は横ナデ。胴部上位は横方向のヘラ削り。胴部内面はヘラナデ。

[3] 奈良・平安時代の遺構と遺物

No.	挿図No. 図版No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
31	第15図 PL-17	土師器 台付甕	脚部3/4	口 - 高 3.5残 底 4.2 高台 8.6	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	内外面横ナデ。
32	第15図 PL-17	土師器 杯	底部片	-	①砂粒 ②良好 ③褐色	底部は不定方向のヘラ削りか。底部外面に墨書、「□」 [茂カ]。
33	第15図 PL-17	土師器 杯	底部片	-	①砂粒 ②良好 ③褐色	底部は不定方向のヘラ削りか。底部外面に墨書、「□」 [茂カ]。
34	第15図 PL-17	土師器 杯	底部片	-	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	底部は不定方向のヘラ削りか。底部外面に墨書、「□」 [茂カ]。
35	第15図 PL-17	土師器 杯	底部片	-	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	底部は不定方向のヘラ削りか。底部外面に墨書、「□」 [茂カ]。
36	第15図 PL-17	土師器 杯	底部片	-	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	底部は不定方向のヘラ削りか。底部外面に墨書、「□」 [茂カ]。
37	第15図 PL-17	土師器 杯	底部片	-	①砂粒 ②良好 ③褐色	底部は不定方向のヘラ削りか。底部外面に墨書、「□」 [茂カ]。
38	第15図 PL-17	土師器 杯	底部片	-	①砂粒 ②良好 ③褐色	底部は不定方向のヘラ削りか。底部外面に墨書、「□」 [茂カ]。
39	第15図 PL-17	土師器 杯	底部片	-	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	底部は不定方向のヘラ削りか。底部外面に墨書、「□」 [茂カ]。
40	第15図 PL-17	土師器 杯	底部片	-	①砂粒 ②良好 ③褐色	底部は不定方向のヘラ削りか。底部外面に墨書、「□」 [茂カ]。
41	第15図 PL-17	土師器 杯	底部片	-	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	底部は不定方向のヘラ削りか。底部外面に墨書、「□」 [茂カ]。
42	第15図 PL-17	土師器 杯	底部片	-	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	底部は不定方向のヘラ削りか。内面の黒色の付着物は炭化 物か。底部外面に墨書、「山」。
43	第15図 PL-17	土師器 杯	底部片	-	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	底部は不定方向のヘラ削りか。底部外面に墨書、「□」 [尾カ]。
44	第15図 PL-17	土師器 杯	底部片	-	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	底部破片。外面に墨痕あり。
45	第15図 PL-17	土師器 杯	底部片	-	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	底部破片。外面に墨書、「□」。外面還元焙ぎみ。
46	第15図 PL-17	土師器 杯	底部片	-	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	底部破片。外面に墨書、「□」。
47	第15図 PL-17	土師器 杯	底部片	-	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	底部破片。外面に墨痕あり。
48	第15図 PL-17	土師器 杯	底部片	-	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	底部破片。外面に墨痕あり。
49	第15図 PL-17	土師器 杯	底部片	-	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	底部破片。外面に墨痕あり。
50	第15図 PL-17	土師器 杯	底部片	-	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	底部破片。外面に墨痕あり。
51	第15図 PL-17	土師器 杯	底部片	-	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	底部破片。外面に墨痕あり。
52	第15図 PL-17	土師器 杯	底部片	-	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	底部破片。外面に墨書、「□」。
53	第15図 PL-17	土師器 杯	底部片	-	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	底部破片。外面に墨書、「□」。
54	第15図 PL-17	土師器 杯	底部片	-	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	底部破片。外面に墨痕あり。
55	第15図 PL-17	土師器 杯	底部片	-	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	底部破片。外面に墨痕あり。
56	第15図 PL-17	土師器 杯	底部片	-	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	底部破片。外面に墨痕あり。



## 2. D1区遺物包含層出土の須恵器(第20～31図、PL5・6・18～26)

D1区遺物包含層では、10,617点(91.91kg)の須恵器が出土した。出土した須恵器は、蓋325点(3.34kg)、杯1,118点(13.72kg)、碗536点(12.83kg)、杯または碗の破片7,083点(14.63kg)、皿14点(1.19kg)、甕2点(0.06kg)、壺12点(1.87kg)、鉢2点(0.15kg)、羽釜16点(0.39kg)、大甕1,509(43.73kg)に分類できる。出土した須恵器10,617点(91.91kg)の内、8,737点(41.18kg)が、杯や碗である。

出土した須恵器の内、器形が復元できるものと墨痕のある小破片をこの項に掲載した。掲載外の須恵器は分類して、数量・重量をはかり、一覧表(第2・第3表)に示した。掲載遺物は、蓋14点、杯86点、碗54点、杯・碗32点、皿14点、甕2点、壺12点、鉢2点(有孔鍔付鉢1点)、羽釜5点、甕9点である。

蓋は、8世紀後半代から9世紀後半代までのものが見られる。天井部には回転を伴ったヘラ削り成形が見られ、摘みのつくものと、つかないものがある。

杯は、8世紀後半から10世紀前のものが見られ、9世紀後半のものが最も多い。ほとんどの杯は回転糸切りによる底部切り離し技法であるが、15の杯だけが回転ヘラ起こし技法である。墨書土器が多くあるが、底部外面、体部外面に書かれており、内面に墨書されたものは61の1点のみである。34は、内面に墨痕があるが、パレットとして使用されていたと思われる。

81は、内面に漆の付着した杯である。本報告、第6章の自然科学分析「石原東遺跡出土漆関係遺物の断面観察」(小林正)によると、付着した漆は、成分の精製された、くろめ漆である。使用後の漆工の用具が流通することは考えにくいことから、遺跡地周辺で何らかの漆の使用があったことを伺わせる資料である。

碗は、8世紀後半から、10世紀後半のものが見られ、9世紀後半のものが最も多い。墨書土器が多くあるが、底部外面、体部外面に書かれており、内面に墨書されたものはない。106は、内面に墨痕があ

るが、パレットとして使用されていたと思われる。121、149、150は、内面に黒色の有機物が付着した碗である。付着した有機物は、油脂類が被熱し、黒色化したものであると考えられる。

皿は概ね9世紀後半のものが見られる。墨書土器があるが、底部外面に書かれており、内面に墨書されたものはない。215の底部外面に墨痕があるが、パレットとして使用されていたと思われる。

甕は2点の掲載である。比較的小型の204と205が出土した。

壺は9点の掲載である。短頸壺4点(200～203)、長頸壺7点(206～212)、突帯付四耳壺1点(213)がある。長頸壺(245)は内面に油脂起源の黒色や褐色の付着物がある。

鉢は2点の掲載である。215は有孔鍔付鉢と呼ばれるもので、2002『福島曲戸遺跡』群埋文に類例が報告されている。有孔鍔付鉢の用途は明らかではない。

羽釜は、5点の掲載である。羽釜は10世紀代の上野地域を代表する煮炊具である。

甕は9点の掲載である。227と228はパレットとして使用されていたと思われる。228は、墨痕のある破片とない破片が接合した大甕の体部片であるが、甕が破損した後にパレットとして転用されていたことを示す資料である。

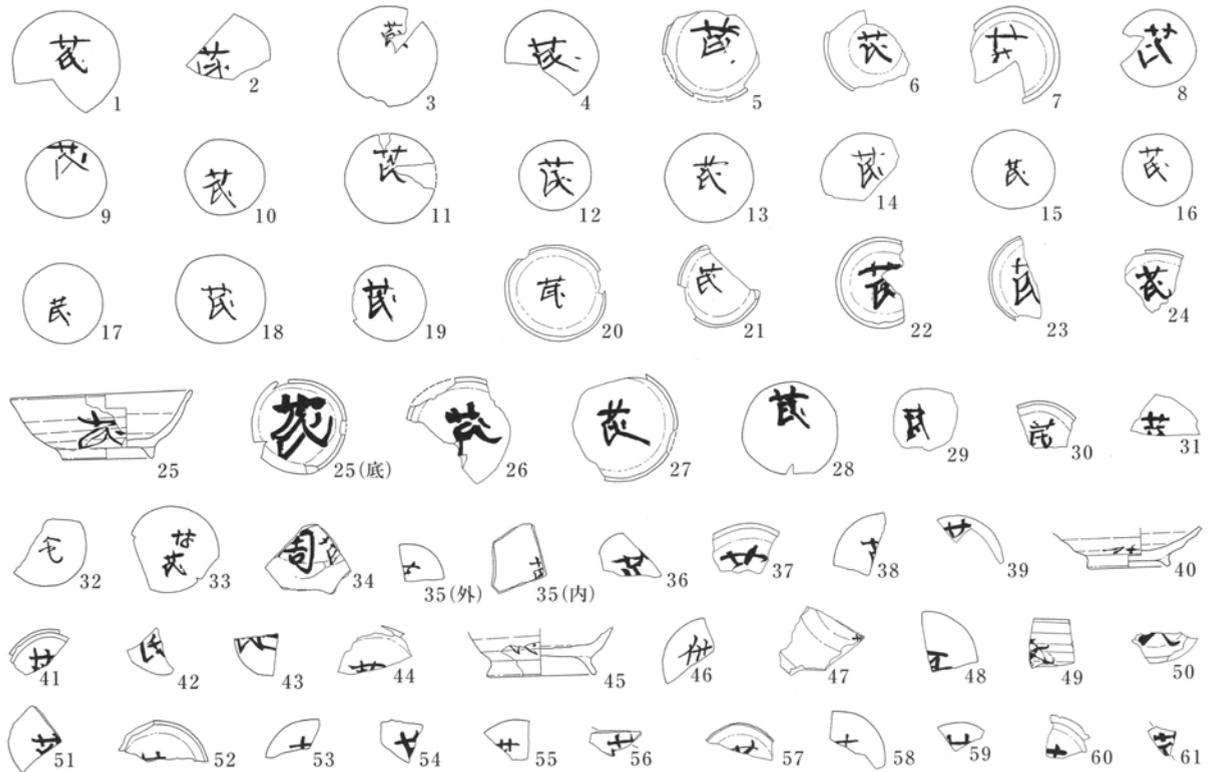
「苳」(22など)や「苳」の一部の可能性が高い「𠄎」が大部分で、その他に「周」(12)1点、「中尾」(54)1点、「合」(122)1点、「益」(132・145)などがある。

墨書のある須恵器は、一覧表(第5表、第17～19図)を参照。

第4章 石原東遺跡D区の遺構と遺物

第5表 石原東遺跡D1区包含層出土須恵器 墨書土器一覧表

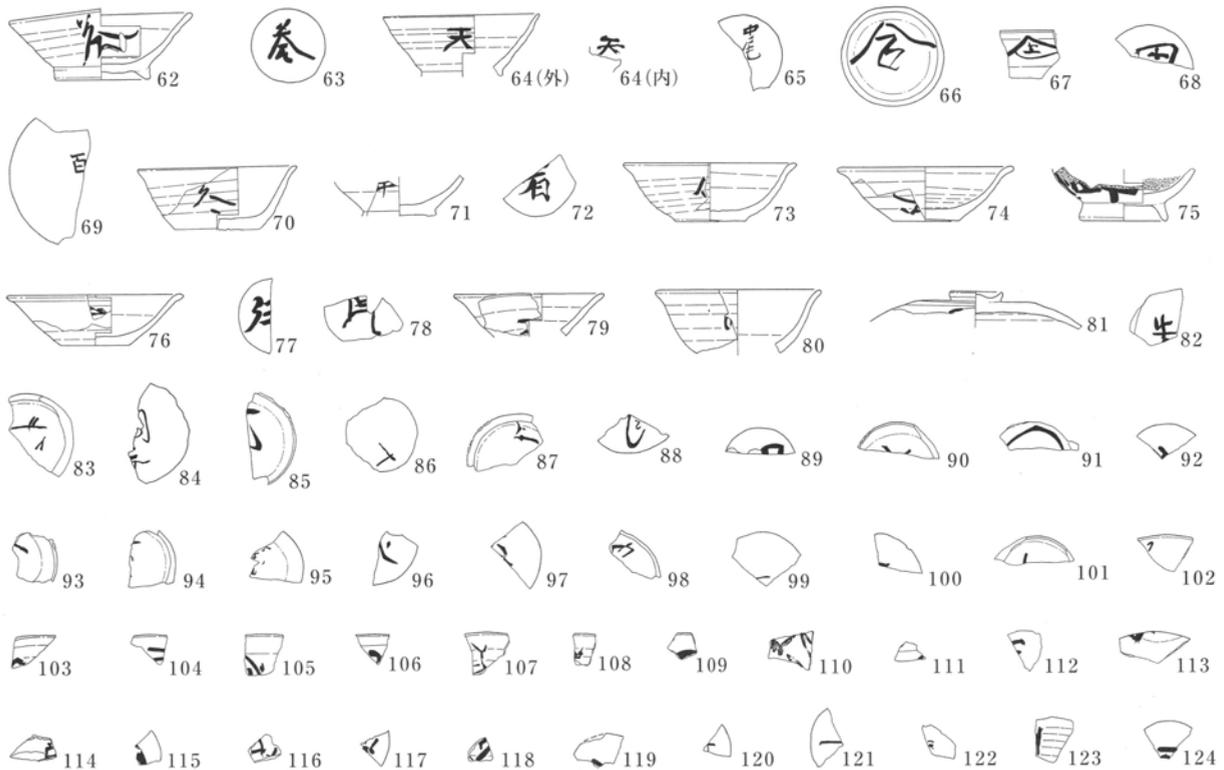
No.	土器 No.	器形	墨書の位置・方向	积文・文字情報	No.	土器 No.	器形	墨書の位置・方向	积文・文字情報
1	22	杯	底部外面	茂	31	67	杯	底部外面	茂
2	17	杯	底部外面	茂	32	50	杯	底部外面	□
3	23	杯	底部外面	茂	33	40	杯	底部外面	□[“カ”]/茂
4	59	杯	底部外面	茂	34	12	蓋	天井部外面	周/茂
5	103	椀	底部外面	茂	35	61	杯	底部内外面	□[茂カ](外)/茂(内)
6	190	皿	底部外面	茂	36	25	杯	底部外面	“[茂カ]
7	116	椀	底部外面	茂	37	119	椀	底部外面	“[茂カ]
8	70	杯	底部外面	茂	38	51	杯	底部外面	“[茂カ]
9	55	杯	底部外面	茂	39	52	杯	底部外面	“
10	73	杯	底部外面	茂	40	137	椀	体部外面逆位	“
11	35	杯	底部外面	茂	41	112	椀	底部外面	“
12	56	杯	底部外面	茂	42	21	杯	底部外面	□[茂カ]
13	39	杯	底部外面	茂	43	19	杯	底部外面	□[茂カ]
14	49	杯	底部外面	茂	44	117	椀	底部外面	“[茂カ]
15	75	杯	底部外面	茂	45	135	椀	体部外面正位	□[茂カ]
16	41	杯	底部外面	茂	46	43	杯	底部外面	□
17	74	杯	底部外面	茂	47	5	蓋	体部外面	□[“カ]
18	48	杯	底部外面	茂	48	18	杯	底部外面	□
19	198	皿	底部外面	茂	49	159	杯・椀	体部外面	□
20	193	皿	底部外面	茂	50	155	椀	底部外面	□[茂カ]
21	136	椀	底部外面	茂	51	45	杯	底部外面	□[茂カ]
22	147	椀	底部外面	茂	52	108	椀	底部外面	“
23	114	椀	底部外面	茂	53	44	杯	底部外面	□[“カ]
24	111	椀	底部外面	茂	54	84	杯	底部外面	□[“カ]
25	123	椀	底部外面 /体部外面正位	茂/茂	55	86	杯	底部外面	“
26	134	椀	底部外面	茂	56	181	杯・椀	底部外面	“
27	110	椀	底部外面	茂	57	120	椀	底部外面	□[“カ]
28	60	杯	底部外面	茂	58	28	杯	底部外面	□[“カ]
29	82	杯	底部外面	茂	59	83	杯	底部外面	“
30	156	椀	底部外面	茂	60	148	椀	底部外面	□[“カ]
					61	85	杯	底部外面	□[茂カ]



第17図 D1区遺物包含層出土墨書土器(須恵器) - 1

[3] 奈良・平安時代の遺構と遺物

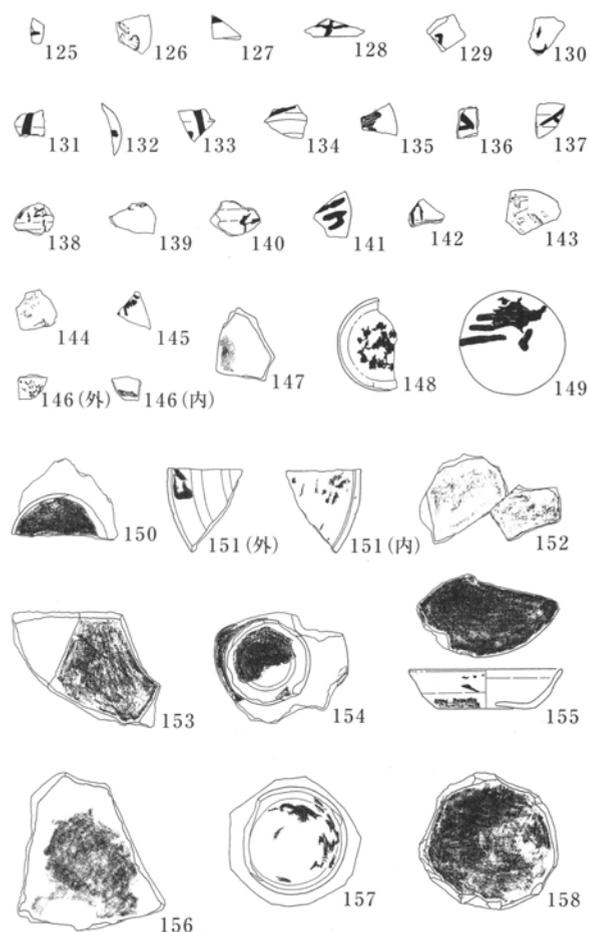
No.	土器 No.	器形	墨書の位置・方向	釈文・文字情報	No.	土器 No.	器形	墨書の位置・方向	釈文・文字情報
62	132	椀	体部外面正位	益	93	115	椀	底部外面	墨痕
63	145	椀	底部外面	益	94	140	椀	底部外面	墨痕
64	124	椀	体部内外面正位	天(外・内)	95	154	椀	底部外面	墨痕
65	54	杯	底部外面	中尾	96	24	杯	底部外面	□
66	122	椀	底部外面	合	97	29	杯	底部外面	墨痕
67	160	杯・椀	体部外面正位	へ/上	98	138	椀	底部外面	□
68	46	杯	底部外面	□	99	88	杯	底部外面	墨痕
69	33	杯	底部内面	百	100	37	杯	底部外面	墨痕
70	129	椀	体部外面正位	□	101	118	椀	底部外面	墨痕
71	146	椀	体部外面正位	□[中カ]	102	167	杯・椀	体部外面	墨痕
72	20	杯	底部外面	□[有カ]	103	163	杯・椀	体部外面	墨痕
73	72	杯	底部外面正位	□[イカ]	104	168	杯・椀	体部外面	墨痕
74	80	杯	体部外面	□	105	161	杯・椀	体部外面	墨痕
75	133	椀	体部外面	□	106	164	杯・椀	体部外面	墨痕
76	79	杯	体部外面	□	107	162	杯・椀	体部外面	墨痕
77	77	杯	底部外面 / 体部外面	□ 内面パレットか	108	166	杯・椀	体部外面	墨痕
78	13	蓋	天井部外面	□	109	165	杯・椀	体部外面	墨痕
79	125	椀	体部外面	墨痕	110	188	杯・椀	底部外面	墨痕
80	127	椀	体部外面	墨痕	111	173	杯・椀	体部外面	墨痕
81	3	蓋	体部外面	墨痕	112	66	杯	底部外面	墨痕
82	87	杯	底部外面	□	113	14	蓋	体部外面	墨痕
83	139	椀	底部外面	□	114	92	杯	底部外面	墨痕
84	16	杯	底部外面	□	115	98	杯	底部外面	墨痕
85	142	椀	底部外面	□	116	182	杯・椀	底部外面	墨痕
86	62	杯	底部外面	墨痕	117	95	杯	底部外面	墨痕
87	143	椀	底部外面	□	118	174	杯・椀	体部外面	墨痕
88	64	杯	底部外面	□	119	90	杯	底部外面	墨痕
89	65	杯	底部外面	□	120	89	杯	底部外面	墨痕
90	141	椀	底部外面	□	121	26	杯	底部外面	墨痕
91	153	椀	底部外面	□	122	93	杯	底部外面	墨痕
92	30	杯	底部外面	墨痕	123	169	杯・椀	体部外面	墨痕
					124	63	杯	底部外面	墨痕



第18図 D1区遺物包含層出土墨書土器(須恵器) - 2

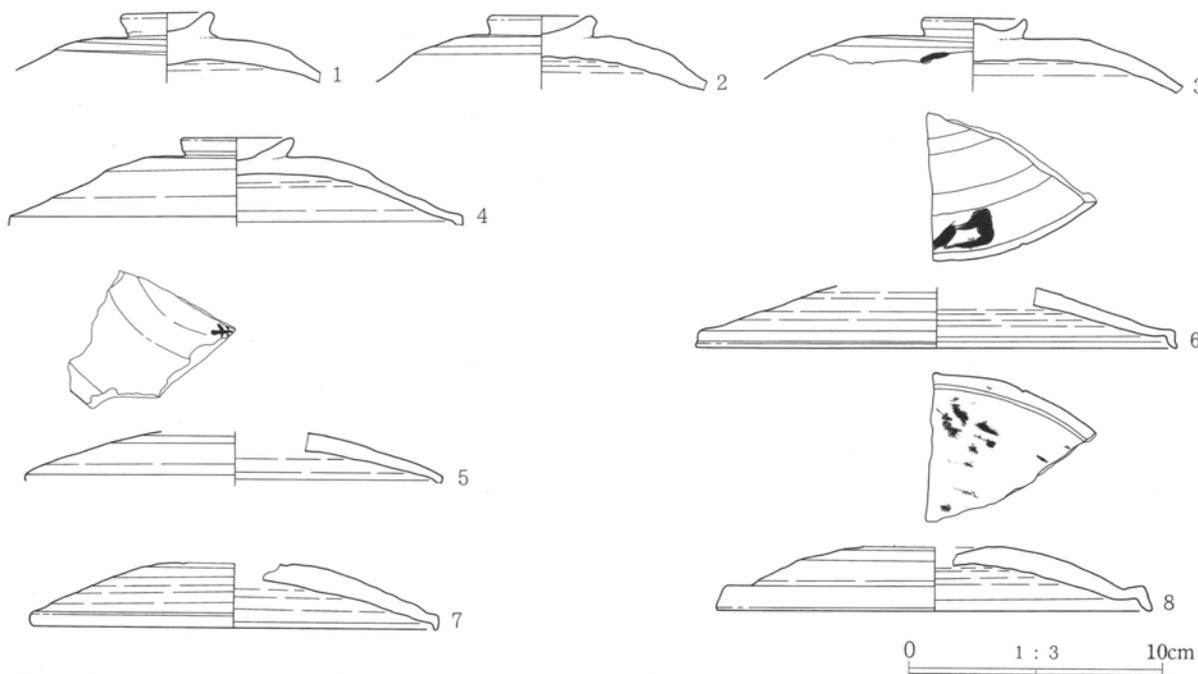
第4章 石原東遺跡D区の遺構と遺物

No.	土器 No.	器形	墨書の位置・方向	釈文・文字情報
125	94	杯	底部外面	墨痕
126	97	杯	底部外面	墨痕
127	178	杯・椀	体部外面	墨痕
128	99	杯	体部外面	□
129	186	杯・椀	底部外面	墨痕
130	183	杯・椀	底部外面	墨痕
131	176	杯・椀	体部外面	□
132	91	杯	底部外面	墨痕
133	171	杯・椀	体部外面	□
134	172	杯・椀	体部外面	墨痕
135	101	杯	底部外面	墨痕
136	184	杯・椀	底部外面	墨痕
137	170	杯・椀	体部外面	□
138	177	杯・椀	体部外面	墨痕
139	187	杯・椀	底部外面	墨痕
140	175	杯・椀	体部外面	墨痕
141	96	杯	底部外面	墨痕
142	180	杯・椀	体部外面	墨痕
143	27	杯	底部外面	墨痕
144	100	杯	底部内面	パレットか
145	185	杯・椀	底部外面	墨痕
146	179	杯・椀	体部外面	外面 墨痕 内面パレットか
147	144	椀	底部内面	墨痕
148	102	椀	底部外面	墨痕
149	15	杯	底部内面	□
150	107	椀	底部外面	パレットか
151	6	蓋	体部外面	外面 墨痕 内面パレットか
152	9	蓋	体部内面	パレットか
153	228	大甕	胴部内面	パレットか
154	196	皿	底部外面	パレットか
155	34	杯	体部内外面	外面 墨痕 内面パレットか
156	227	大甕	胴部内面	パレットか
157	105	椀	底部外面	パレットか
158	106	椀	底部内面	転用硯か

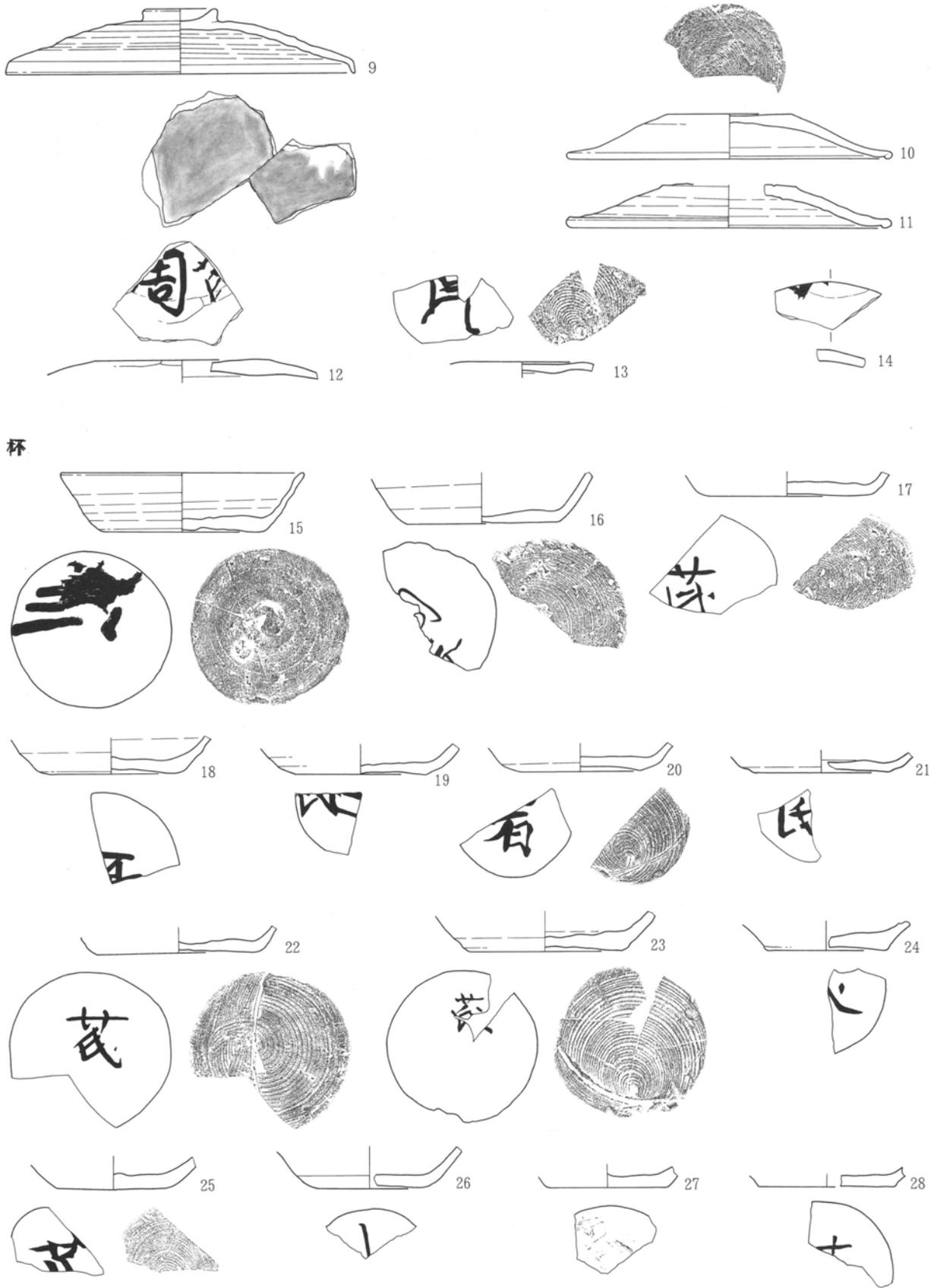


第19図 D1区遺物包含層出土墨書土器(須恵器) - 3

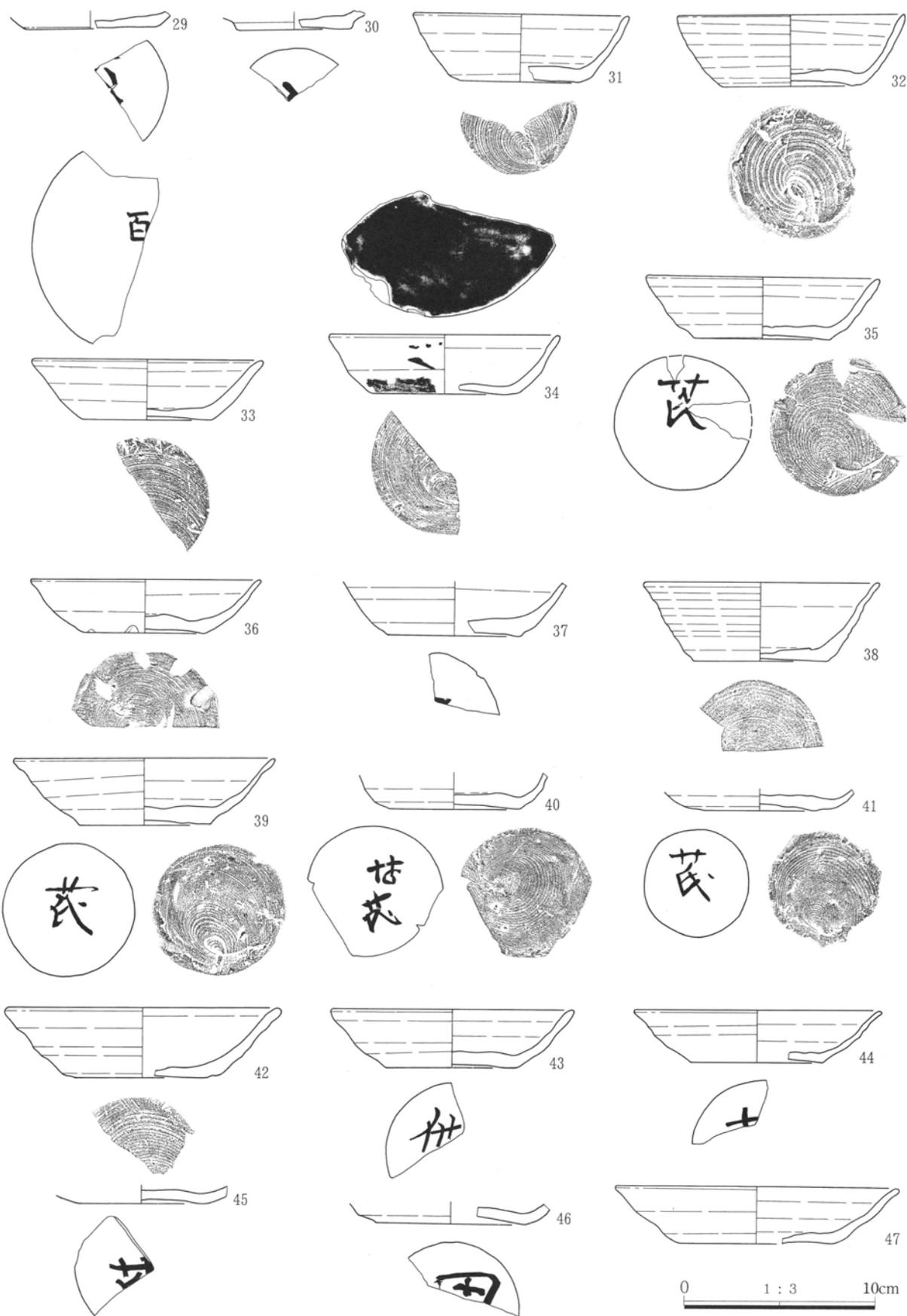
蓋



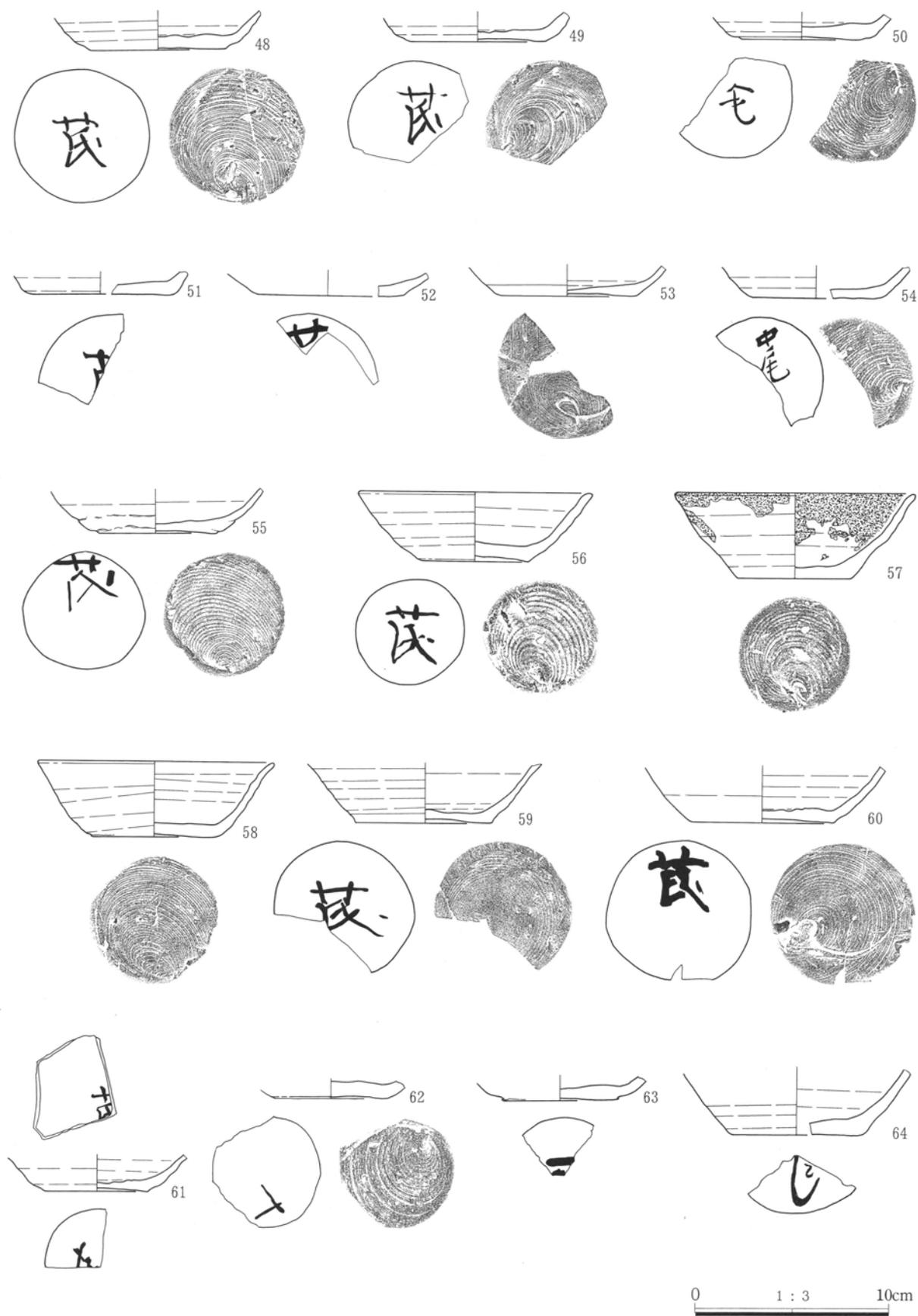
第20図 D1区遺物包含層出土須恵器(1)



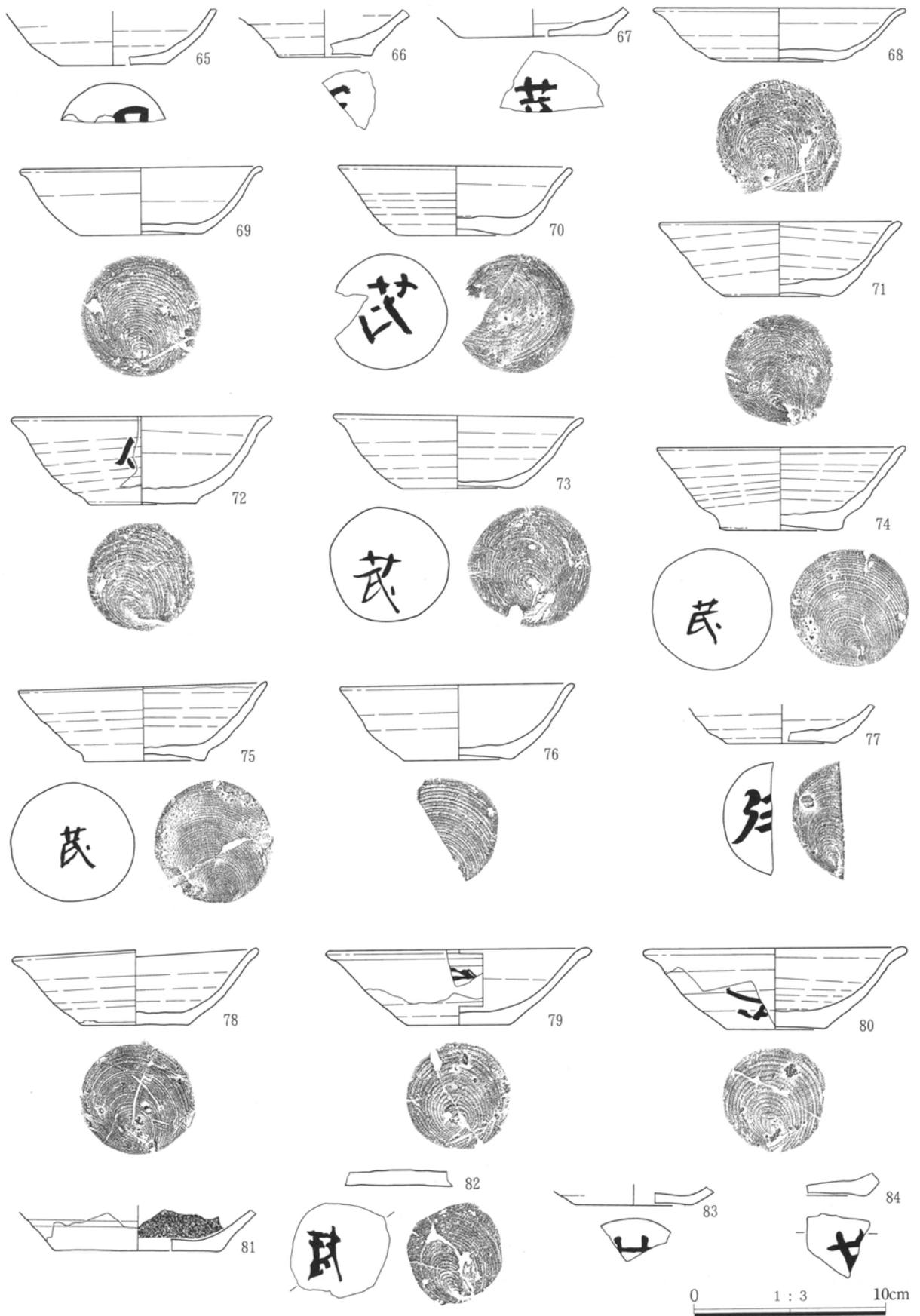
第21図 D1区遺物包含層出土須恵器(2)



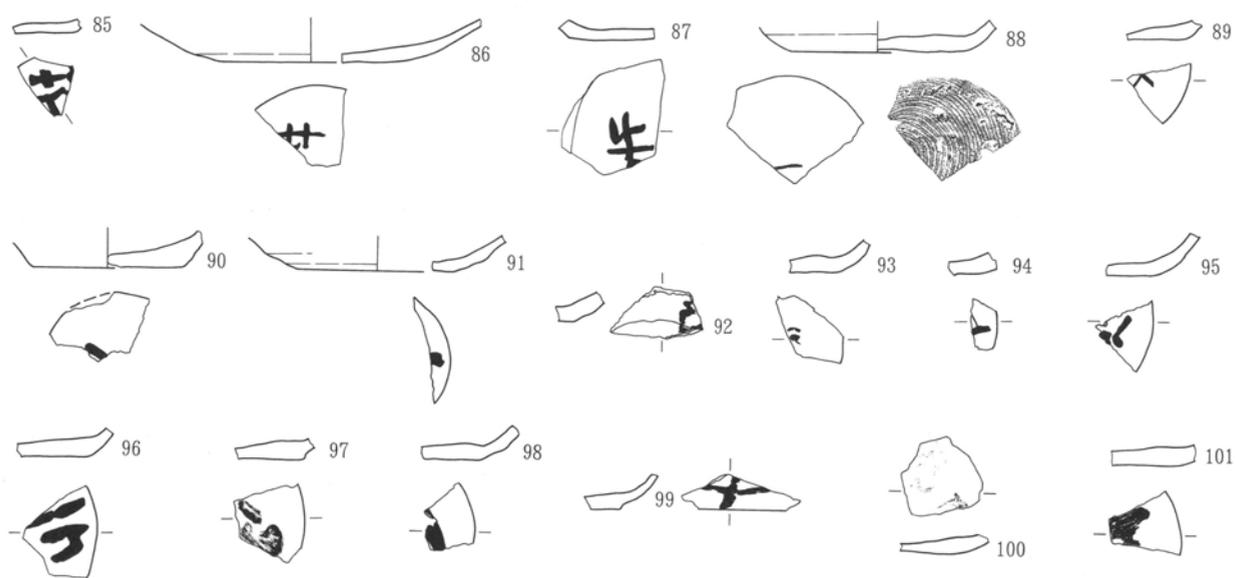
第22図 D1区遺物包含層出土須恵器(3)



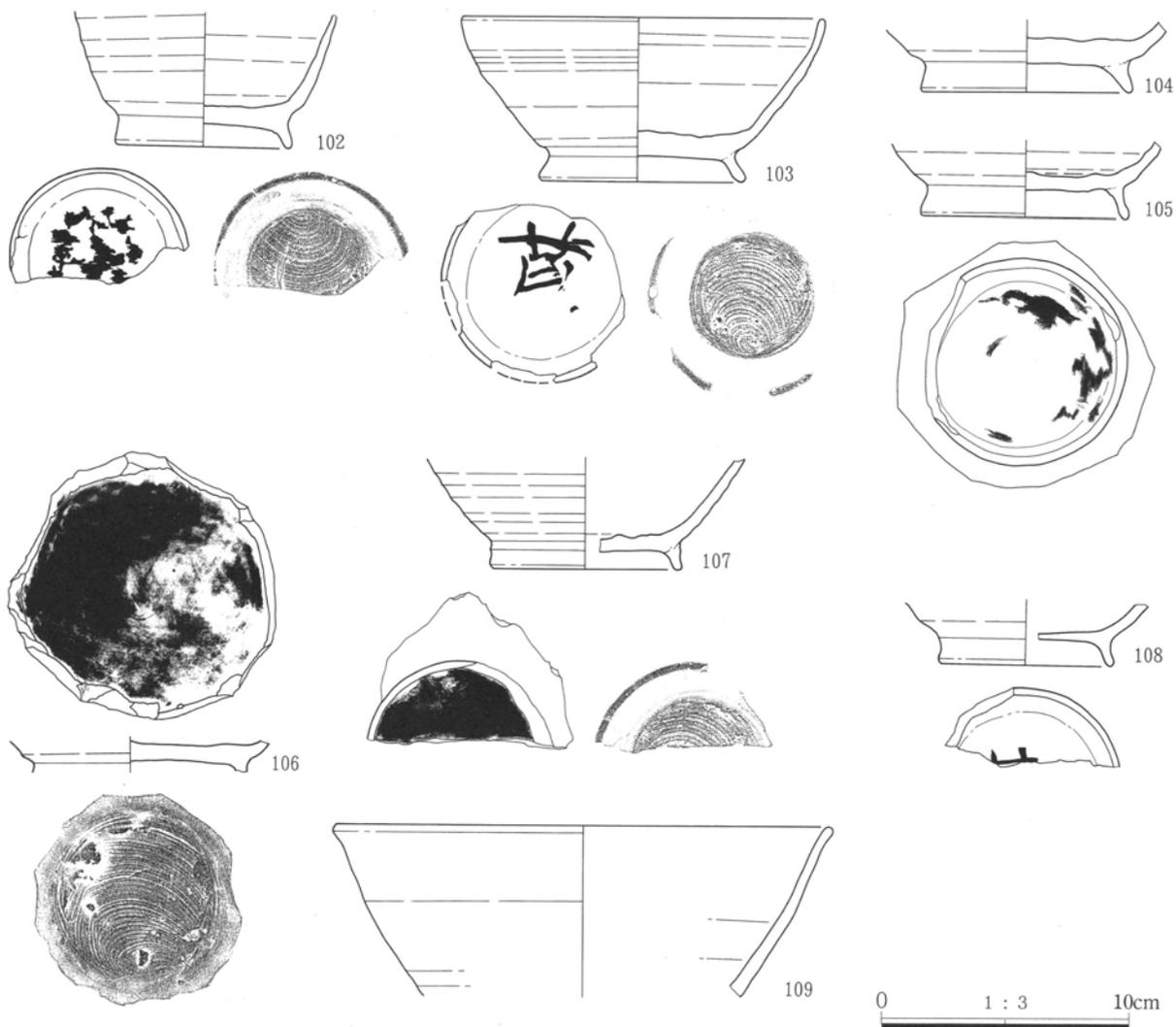
第23図 D1区遺物包含層出土須恵器(4)



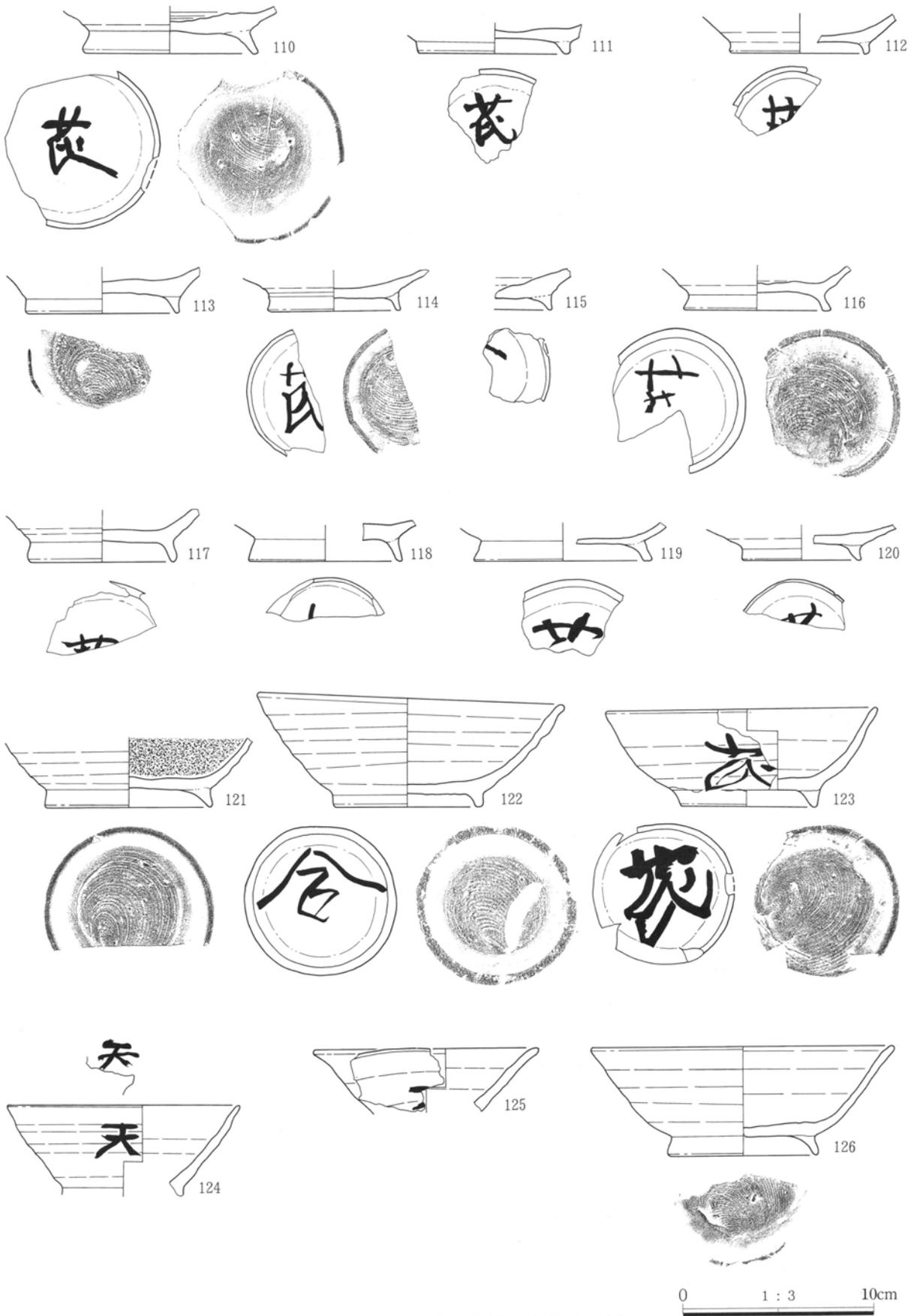
第24図 D1区遺物包含層出土須恵器(5)



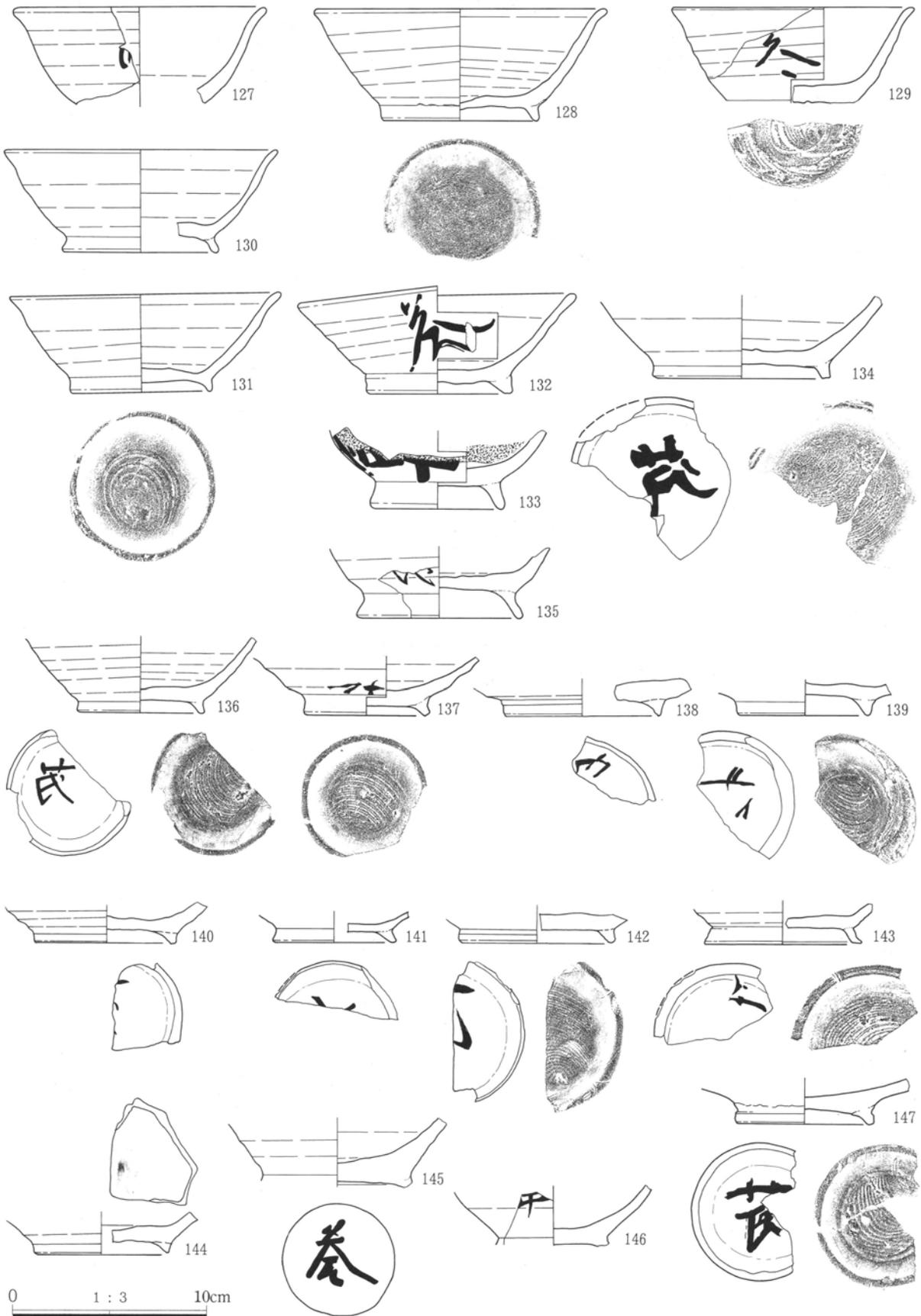
椀



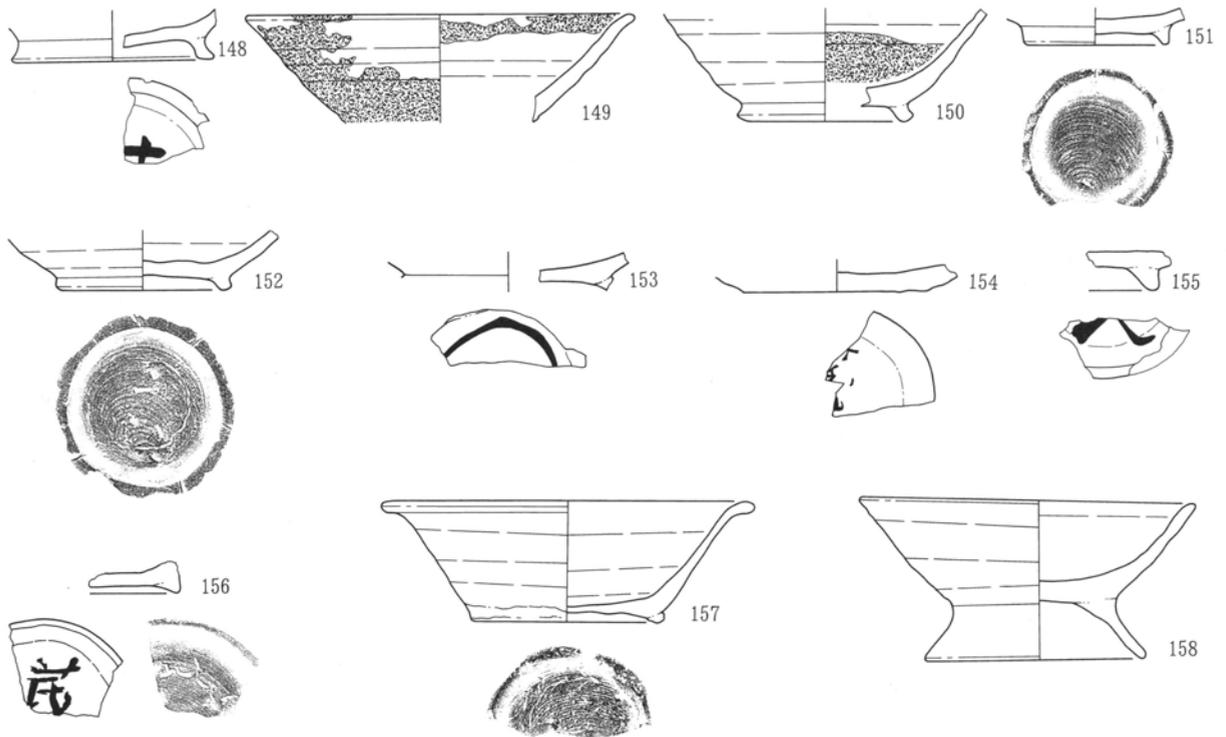
第25図 D1区遺物包含層出土須恵器(6)



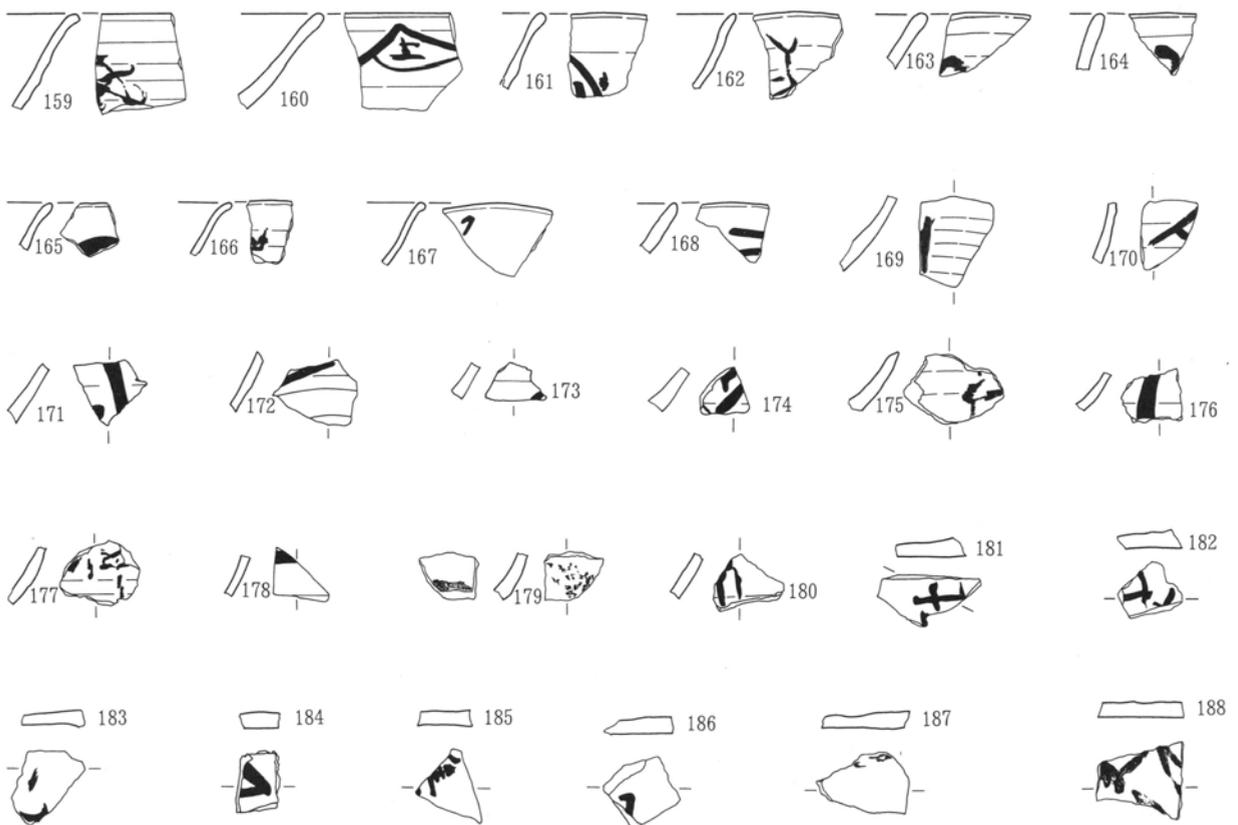
第26図 D1区遺物包含層出土須恵器(7)



第27図 D1区遺物包含層出土須恵器(8)



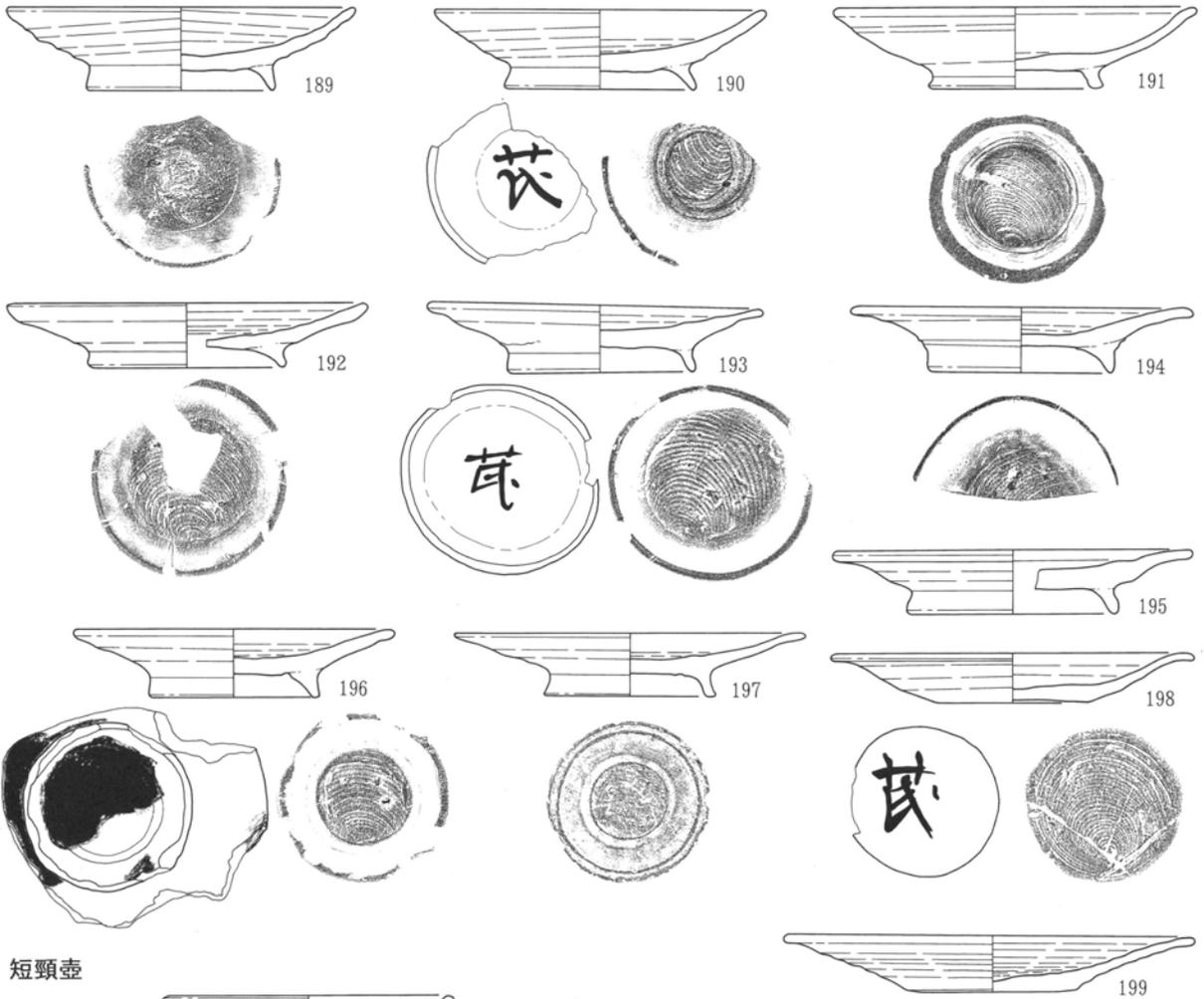
墨痕のある須恵器片



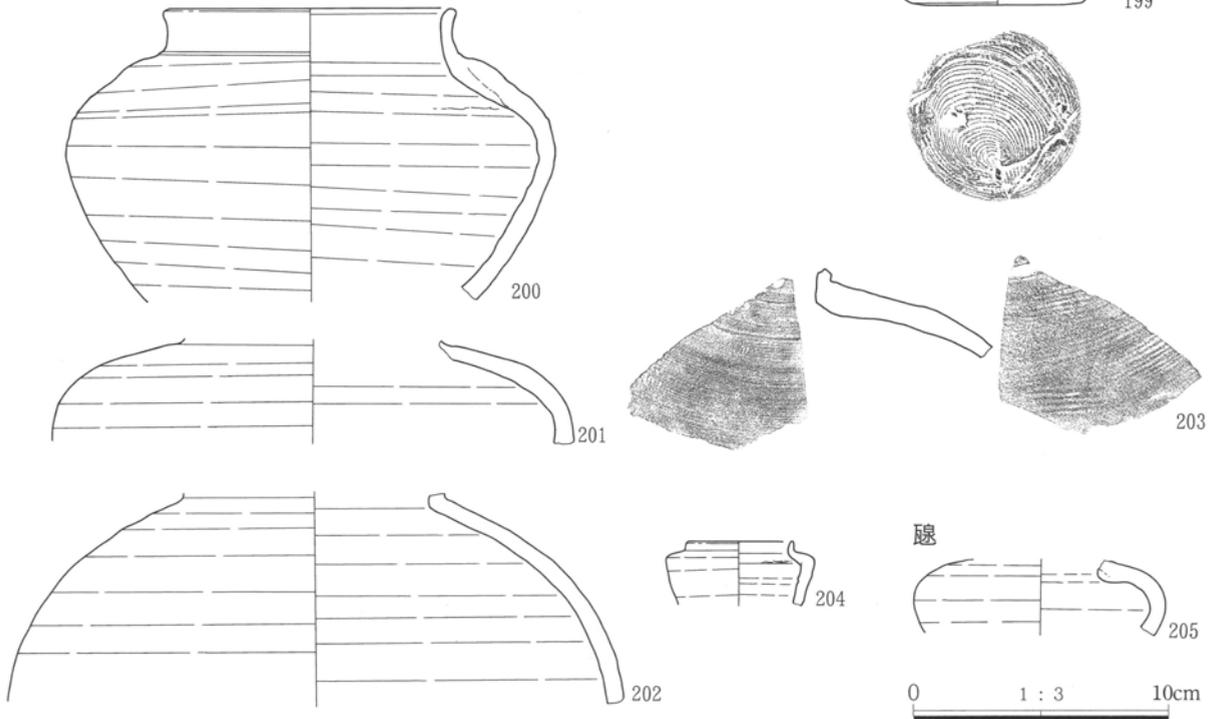
0 1 : 3 10cm

第28図 D1区遺物包含層出土須恵器(9)

皿

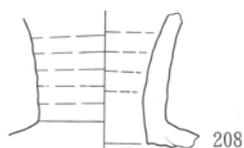
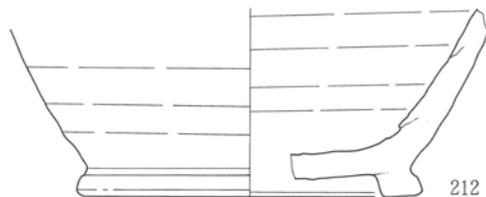
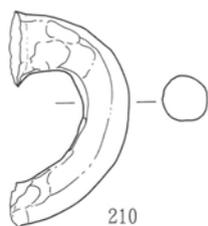
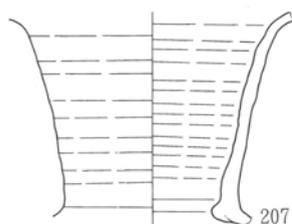
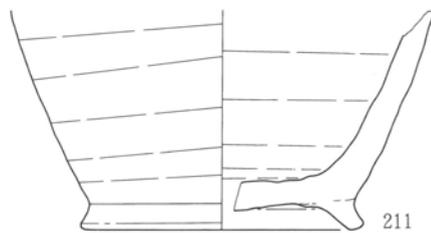
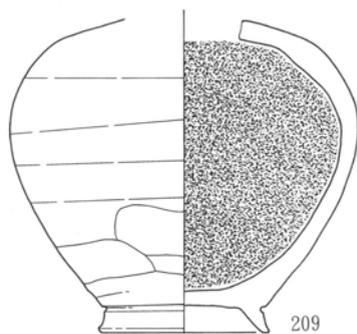
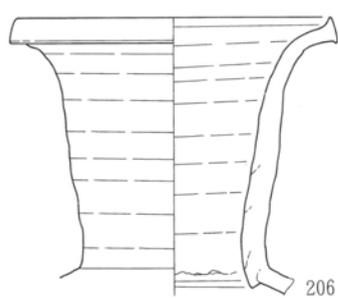


短頸壺

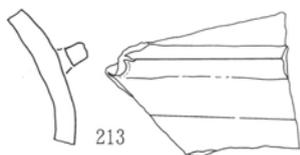


第29図 D1区遺物包含層出土須恵器(10)

長頸壺



突帯付四耳壺



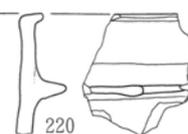
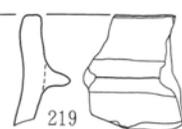
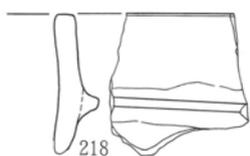
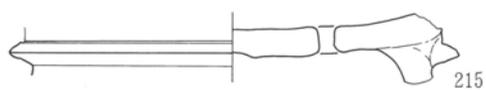
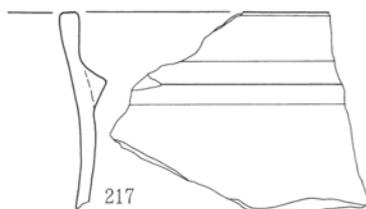
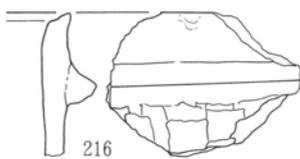
鉢



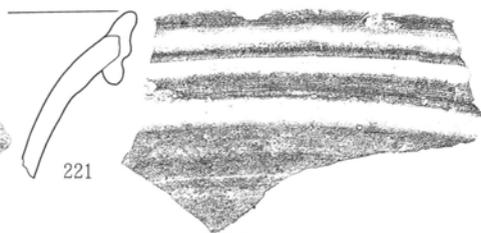
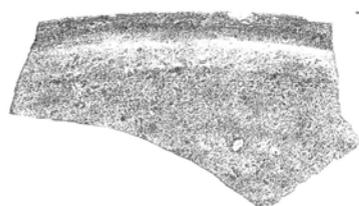
有孔鏢付鉢



羽釜

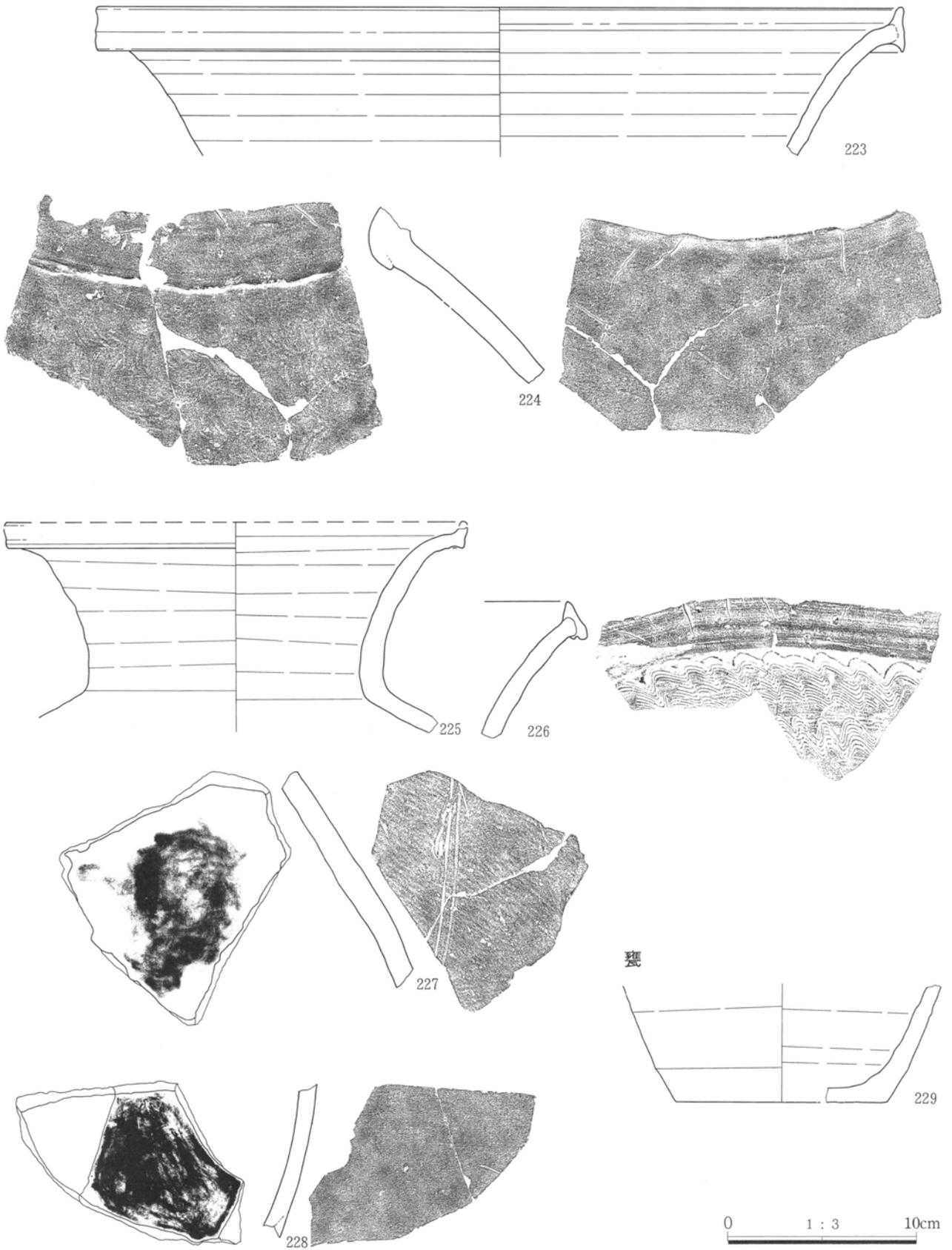


大甕



0 1:3 10cm

第30図 D1区遺物包含層出土須恵器(11)



第31図 D1区遺物包含層出土須恵器(12)

第4章 石原東遺跡D区の遺構と遺物

D1区遺物包含層出土須恵器 観察表

No.	挿図 図版 No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
1	第20図 PL-18	須恵器 蓋	摘み～体部	口 - 高 2.8 残 摘径 3.7	①細砂 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。摘みは貼付。天井部中ほどは回転ヘラ削り。
2	第20図 PL-18	須恵器 蓋	摘み～体1/6	口 - 高 2.9 残 摘径 4.3	①砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。摘みは貼付。天井部中ほどは回転ヘラ削り。
3	第20図 PL-18	須恵器 蓋	摘み～体部	口 - 高 3.0 残 摘径 4.1	①砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。摘みは貼付。天井部中ほどは回転ヘラ削り。外面に墨痕あり。
4	第20図 PL-18	須恵器 蓋	口～摘み片	口(9.0) 高 3.5 残 摘径 4.5	①砂粒 ②還元焰 ③暗青灰色	ロクロ成形、右回り回転。摘みは貼付。天井部中ほどは回転ヘラ削り。
5	第20図 PL-18	須恵器 蓋	体部片	口 - 高 1.9 残 最大径(16.5)	①細砂 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。体部外面に墨書、「□」[“カ】。
6	第20図 PL-18	須恵器 蓋	口～体部1/6	口(19.0) 高 2.5 残 摘径 -	①細砂 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形。外面に墨痕あり。内面は、パレットか。
7	第20図 PL-18	須恵器 蓋	口～天井1/4	口(16.2) 高 2.6 残 摘径 -	①細砂 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。天井部中ほどは回転ヘラ削り。
8	第20図 PL-18	須恵器 蓋	口～天井1/6	口(17.2) 高 2.6 残 摘径 -	①砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。天井部中ほどは回転ヘラ削り。
9	第21図 PL-18	須恵器 蓋	1/6	口(18.2) 高 3.4 摘径 3.9	①細砂 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。摘みは貼付。天井部中ほどは回転ヘラ削り。内面の墨痕は、パレットの可能性あり。
10	第21図 PL-18	須恵器 蓋	1/4	口(16.9) 高 2.4 天井径 6.5	①粗砂 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。天井部は回転糸切り。
11	第21図 PL-18	須恵器 蓋	口～天井1/3	口(16.9) 高 2.3 天井径(7.0)	①粗砂 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。天井部回転糸切り。
12	第21図 PL-18	須恵器 蓋	天井1/4	口 - 高 1.1 残 天井径(9.0)	①細砂 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。天井部中ほどは回転ヘラ削り。天井部外面に墨書、「周」/「茂】。
13	第21図 PL-18	須恵器 蓋	天井1/4	-	①細砂 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。天井部外面に墨書、「□】。
14	第21図 PL-18	須恵器 蓋	天井部片	-	①細砂 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。体部回転ヘラ削り。体部外面に墨痕あり。
15	第21図 PL-18	須恵器 杯	1/5	口(12.8) 高 3.1 底 8.0	①細砂 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部切り離しは、ヘラ起こし技法。底部内面に墨書、「□】。
16	第21図 PL-18	須恵器 杯	体～底部1/3	口 - 高 2.1 残 底(8.0)	①細砂 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。底部外面に墨書、「□】。
17	第21図 PL-18	須恵器 杯	底部1/5	口 - 高 1.2 残 底(8.8)	①細砂 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。底部外面に墨書、「茂】。
18	第21図 PL-18	須恵器 杯	底部2/3	口 - 高 1.9 残 底(7.6)	①細砂 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。底部外面に墨書、「□】。
19	第21図 PL-18	須恵器 杯	底部1/5	口 - 高 1.6 残 底(6.8)	①細砂 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。底部外面に墨書、「□」[茂カ】。
20	第21図 PL-18	須恵器 杯	底部1/3	口 - 高 1.5 残 底(6.2)	①細砂 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。体部外面自然釉。底部外面に墨書、「□」[有カ】。
21	第21図 PL-18	須恵器 杯	底部1/6	口 - 高 1.1 残 底(7.0)	①細砂 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。底部外面に墨書、「□」[茂カ】。
22	第21図 PL-18	須恵器 杯	底部	口 - 高 1.3 残 底 8.4	①細砂 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。底部外面に墨書、「茂】。
23	第21図 PL-18	須恵器 杯	底部	口 - 高 2.0 残 底 8.0	①細砂 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。底部外面に墨書、「茂】。
24	第21図 PL-18	須恵器 杯	底部片	口 - 高 1.5 残 底(6.3)	①細砂 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。底部外面に墨書、「□】。
25	第21図 PL-18	須恵器 杯	底部1/6	口 - 高 1.8 残 底(2.9)	①砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。底部外面に墨書、「”」[茂カ】。
26	第21図 PL-18	須恵器 杯	底部片	口 - 高 2.2 残 底(5.6)	①砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、底部は回転糸切り。底部外面に墨痕あり。
27	第21図 PL-18	須恵器 杯	底部片	-	①砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。底部外面に墨痕あり。
28	第21図 PL-18	須恵器 杯	底部1/5	口 - 高 1.0 残 底(7.0)	①細砂 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。底部外面に墨書、「□」[“カ】。
29	第22図 PL-18	須恵器 杯	底部片	口 - 高 0.8 残 底(6.8)	①細砂 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。底部外面に墨痕あり。
30	第22図 PL-18	須恵器 杯	底部片	口 - 高 0.9 残 底(6.0)	①砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。底部外面に墨痕あり。自然釉。

[3] 奈良・平安時代の遺構と遺物

No.	挿図 No. 図版 No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
31	第22図 PL-19	須恵器 杯	1/2	口(11.4)高3.6 底(6.2)	①細砂 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。内外面の色調の違いは焼成時の重ね焼き痕か。
32	第22図 PL-19	須恵器 杯	1/3	口(12.0)高3.8 底(7.2)	①細砂 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。硬質。
33	第22図 PL-19	須恵器 杯	1/3	口(12.2)高3.2 底6.8	①細砂 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。底部内面に墨書、「百」。
34	第22図 PL-19	須恵器 杯	1/3	口(12.2)高3.1 底(7.8)	①砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。内外面に墨痕あり。内面はパレットか。
35	第22図 PL-19	須恵器 杯	1/3	口(12.3)高3.3 底7.2	①細砂 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。内外面の色調の違いは焼成時の重ね焼き痕か。底部外面に墨書、「茂」。
36	第22図 PL-19	須恵器 杯	1/3	口(12.2)高2.8 底(6.4)	①細砂 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。底部外面窪みあり。
37	第22図 PL-19	須恵器 杯	体~底部1/5	口 - 高2.9残 底(7.0)	①細砂 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。底部外面に墨痕あり。
38	第22図 PL-19	須恵器 杯	1/4	口(12.4)高6.2 底(7.0)	①砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。硬質。
39	第22図 PL-19	須恵器 杯	3/4	口13.8 高3.6 底6.9	①細砂 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。底部外面に墨書、「茂」。
40	第22図 PL-19	須恵器 杯	底部2/3	口 - 高2.9残 底6.8	①細砂 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。底部外面に墨書、「□」[“カ]。「茂」。
41	第22図 PL-19	須恵器 杯	底部	口 - 高1.1残 底5.8	①砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。底部外面に墨書、「茂」。
42	第22図 PL-19	須恵器 杯	1/4	口(14.6)高3.7 底(7.0)	①粗砂 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。
43	第22図 PL-19	須恵器 杯	1/4	口(12.8)高3.1 底(6.8)	①細砂 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。底部外面に墨書、「□」。
44	第22図 PL-19	須恵器 杯	1/6	口(13.0)高2.8 底(7.0)	①細砂 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。底部外面に墨書、「□」[“カ]。
45	第22図 PL-19	須恵器 杯	底部1/4	口 - 高0.9残 底(7.0)	①細砂 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。底部外面に墨書、「□」[茂カ]。
46	第22図 PL-19	須恵器 杯	底部1/3	口 - 高1.2残 底(7.6)	①細砂 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。底部外面に墨書、「□」。
47	第22図 PL-19	須恵器 杯	1/4	口(14.8)高3.0 底(8.0)	①細砂 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。内外面の色調の違いは焼成時の重ね焼き痕か。
48	第23図 PL-19	須恵器 杯	底部	口 - 高2.0残 底7.0	①細砂 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。底部外面に墨書、「茂」。
49	第23図 PL-19	須恵器 杯	底部1/3	口 - 高1.5残 底(7.0)	①細砂 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。底部外面に墨書、「茂」。
50	第23図 PL-19	須恵器 杯	底部1/4	口 - 高1.4残 底(6.3)	①細砂 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。底部外面に墨書、「□」。
51	第23図 PL-19	須恵器 杯	底部1/4	口 - 高1.3残 底(7.4)	①細砂 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。底部外面に墨書、「”」[茂カ]。
52	第23図 PL-19	須恵器 杯	底部1/4	口 - 高1.3残 底(8.0)	①細砂 ②還元焰 ③灰オリーブ色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。底部外面に墨書、「”」。
53	第23図 PL-19	須恵器 杯	底部1/3	口 - 高1.6残 底(7.2)	①砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。内外面の色調の違いは焼成時の重ね焼き痕か。
54	第23図 PL-19	須恵器 杯	底部	口 - 高1.7残 底(6.4)	①砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。底部外面に墨書、「中尾」。
55	第23図 PL-19	須恵器 杯	体~底部	口 - 高2.3残 底6.2	①細砂 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。底部外面に墨書、「茂」。
56	第23図 PL-19	須恵器 杯	1/3	口(12.3)高3.6 底6.1	①粗砂 ②還元焰 ③暗灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。底部外面に墨書、「茂」。
57	第23図 PL-20	須恵器 杯	1/3	口(12.1)高4.5 底6.0	①粗砂 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。油煙付着。灯明皿か。
58	第23図 PL-20	須恵器 杯	3/4	口12.3 高4.0 底6.4	①砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。外面自然釉。
59	第23図 PL-20	須恵器 杯	体~底部1/2	口 - 高3.1残 底7.1	①細砂 ②還元焰 ④灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。底部外面に墨書、「茂」。
60	第23図 PL-20	須恵器 杯	体~底部1/2	口 - 高3.0残 底7.4	①細砂 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。底部外面に墨書、「茂」。
61	第23図 PL-20	須恵器 杯	体~底部1/5	口 - 高2.0残 底(5.4)	①細砂 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。底部内外面に墨書、内面に「茂」、外面に「□」[茂カ]。

第4章 石原東遺跡D区の遺構と遺物

No.	挿図No. 図版No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
62	第23図 PL-20	須恵器 杯	底部片	口 - 高 0.9 残 底 (5.8)	①砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。底部外面に墨痕あり。
63	第23図 PL-20	須恵器 杯	底部片	口 - 高 1.2 残 底 (6.0)	①砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。底部外面に墨痕あり。
64	第23図 PL-20	須恵器 杯	体~底部片	口 - 高 3.5 残 底 (7.0)	①砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。底部外面に墨書、「□」。
65	第24図 PL-20	須恵器 杯	体~底部1/3	口 - 高 2.9 残 底 (5.8)	①細砂 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。底部外面に墨書、「□」。
66	第24図 PL-20	須恵器 杯	底部片	口 - 高 2.4 残 底 (5.0)	①細砂 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、底部は回転糸切り。底部外面に墨痕あり。
67	第24図 PL-20	須恵器 杯	底部1/4	口 - 高 1.4 残 底 (8.0)	①砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。内外面の色調の違いは焼成時の重ね焼き痕か。底部外面に墨書、「茂」。
68	第24図 PL-20	須恵器 杯	1/3	口 (13.2) 高 2.8 底 6.0	①粗砂 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。
69	第24図 PL-20	須恵器 杯	1/2	口 (12.8) 高 3.5 底 6.4	①粗砂 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。
70	第24図 PL-20	須恵器 杯	1/2	口 12.3 高 3.7 底 6.1	①粗砂 ②還元焰 ③暗オリーブ灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。底部外面に墨書、「茂」。
71	第24図 PL-20	須恵器 杯	1/3	口 (12.7) 高 3.9 底 5.4	①細砂 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。
72	第24図 PL-20	須恵器 杯	1/4	口 (13.8) 高 4.6 底 5.7	①砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。底部外面正位に墨書、「□」 [「カ」]。
73	第24図 PL-20	須恵器 杯	3/4	口 13.7 高 3.9 底 6.2	①粗砂 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。底部外面に墨書、「茂」。
74	第24図 PL-20	須恵器 杯	1/3	口 (13.0) 高 4.4 底 6.4	①砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。体部外面自然釉。底部外面に墨書、「茂」。
75	第24図 PL-20	須恵器 杯	1/2	口 13.1 高 4.1 底 6.2	①細砂 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。底部外面に墨書、「茂」。
76	第24図 PL-20	須恵器 杯	1/4	口 (12.2) 高 3.9 底 (5.6)	①砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。
77	第24図 PL-20	須恵器 杯	底部1/3	口 - 高 2.0 残 底 (5.6)	①細砂 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。底部外面に墨書、「□」。内面パレットか。
78	第24図 PL-20	須恵器 杯	3/4	口 13.0 高 4.0 底 5.7	①細砂 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。火襷。
79	第24図 PL-20	須恵器 杯	1/4	口 (14.0) 高 4.0 底 5.4	①細砂 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。体部外面に墨書、「□」。
80	第24図 PL-20	須恵器 杯	1/3	口 (13.9) 高 4.3 底 5.2	①細砂 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。体部外面に墨書、「□」。
81	第24図 PL-20	須恵器 杯 漆付着	底部1/5	口 - 高 2.2 残 底 (9.0)	①砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。内面に漆が厚く付着。第6章自然科学分析「石原東遺跡出土漆関係遺物の断面観察」参照。
82	第24図 PL-21	須恵器 杯	底部片	-	①細砂 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。底部外面に墨書、「茂」。
83	第24図 PL-21	須恵器 杯	底部1/6	口 - 高 1.0 残 底 (6.0)	①細砂 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。底部外面に墨書、「'''」。
84	第24図 PL-21	須恵器 杯	底部片	-	①砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。底部外面に墨書、「□」 ['''カ]。
85	第25図 PL-21	須恵器 杯	底部片	-	①砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、底部は回転糸切り。底部外面に墨書、「□」 [茂カ]。
86	第25図 PL-21	須恵器 杯	体~底部1/6	口 - 高 1.8 残 底 (7.3)	①細砂 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。底部外面に墨書、「'''」。
87	第25図 PL-21	須恵器 杯	底部1/4	口 - 高 0.8 残 底 -	①細砂 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。底部外面に墨書、「□」。
88	第25図 PL-21	須恵器 杯	底部片	-	①砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。底部外面に墨痕あり。
89	第25図 PL-21	須恵器 杯	底部片	-	①砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。底部外面に墨痕あり。
90	第25図 PL-21	須恵器 杯	底部片	口 - 高 1.5 残 底 (6.0)	①細砂 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、底部は回転糸切り。底部外面に墨痕あり。
91	第25図 PL-21	須恵器 杯	底部片	口 - 高 1.5 残 底 (6.0)	①砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、底部は回転糸切り。底部外面に墨痕あり。内外面に火襷あり。

[3] 奈良・平安時代の遺構と遺物

No.	挿図 No. 図版 No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
92	第25図 PL-21	須恵器 杯	底部片	-	①砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、底部は回転糸切り。体部外面下部から底部に墨痕あり。
93	第25図 PL-21	須恵器 杯	底部片	-	①砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。底部外面に墨痕あり。
94	第25図 PL-21	須恵器 杯	底部片	-	①砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、底部外面に墨痕あり。
95	第25図 PL-21	須恵器 杯	底部片	-	①砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、底部は回転糸切り。底部外面に墨痕あり。
96	第25図 PL-21	須恵器 杯	底部片	-	①砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、底部は回転糸切り。底部外面に墨痕あり。
97	第25図 PL-21	須恵器 杯	底部片	-	①砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、底部は回転糸切り。底部外面に墨痕あり。
98	第25図 PL-21	須恵器 杯	底部片	-	①砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、底部は回転糸切り。底部外面に墨痕あり。
99	第25図 PL-21	須恵器 杯	底部片	-	①砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。体部外面下部に墨書、「□」。
100	第25図 PL-21	須恵器 杯	底部片	-	①砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、底部は回転糸切り。底部内面に墨痕あり。パレットか。
101	第25図 PL-21	須恵器 杯	底部片	-	①砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。底部外面に墨痕あり。
102	第25図 PL-21	須恵器 椀	体部1/2	口 - 高 5.5残 底 6.9 高台 7.2	①細砂 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。底部外面に墨痕あり。
103	第25図 PL-21	須恵器 椀	1/3	口 (15.2) 高 6.7 底 (7.5) 高台 (8.4)	①細砂 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。底部外面に墨書、「茂」。
104	第25図 PL-21	須恵器 椀	底部1/2	口 - 高 2.8残 底 8.4 高台 8.6	①砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部切り離し技法はナデで不明。高台は貼付。外面自然釉。
105	第25図 PL-21	須恵器 椀	底部	口 - 高 3.1残 底 7.9 高台 8.4	①粗砂 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。体部外面自然釉。底部外面パレットか。
106	第25図 PL-21	須恵器 椀	底部	口 - 高 1.2残 底 8.6 高台 -	①砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。高台部打ち欠いた痕あり。底部内面磨減痕あり。転用硯か。
107	第25図 PL-21	須恵器 椀	底部1/3	口 - 高 4.5残 底 7.7 高台 7.9	①砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。底部外面はパレットか。
108	第25図 PL-21	須恵器 椀	底部1/3	口 - 高 2.6残 底 (7.0) 高台 (7.1)	①粗砂 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。底部外面に墨書、「𠄎」。
109	第25図 PL-21	須恵器 椀	口~体部1/3	口 (20.4) 高 7.0残 底 - 高台 -	①粗砂 ②還元焰 ③灰オリーブ色	ロクロ成形、右回り回転。大形。
110	第26図 PL-21	須恵器 椀	底部	口 - 高 2.5残 底 (8.5) 高台 (11.2)	①砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。底部外面に墨書、「茂」。
111	第26図 PL-21	須恵器 椀	底部1/4	口 - 高 1.5残 底 (7.6) 高台 (8.0)	①細砂 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。底部外面に墨書、「茂」。
112	第26図 PL-21	須恵器 椀	底部1/4	口 - 高 2.0残 底 (7.2) 高台 (7.4)	①細砂 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。底部外面に墨書、「𠄎」。
113	第26図 PL-21	須恵器 椀	底部1/2	口 - 高 2.6残 底 (8.0) 高台 (8.2)	①砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。内外面の色調の違いは焼成時の重ね焼き痕か。
114	第26図 PL-21	須恵器 椀	底部1/3	口 - 高 2.1残 底 (6.8) 高台 (7.0)	①細砂 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。底部外面に墨書、「𠄎」。
115	第26図 PL-21	須恵器 椀	底部片	-	①砂粒 ②還元焰 ③灰黄色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。底部外面に墨痕あり。
116	第26図 PL-22	須恵器 椀	底部3/4	口 - 高 2.4残 底 7.2 高台 (7.8)	①粗砂 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。底部外面に墨書、「茂」。
117	第26図 PL-22	須恵器 椀	底部1/2	口 - 高 2.8残 底 (7.5) 高台 (7.8)	①細砂 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。内外面の色調の違いは焼成時の重ね焼き痕か。底部外面に墨書、「𠄎」 [茂カ]。
118	第26図 PL-22	須恵器 椀	底部片	口 - 高 2.1残 底 (7.6) 高台 (8.2)	①細砂 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、底部は回転糸切り。高台は貼付。底部外面に墨痕あり。
119	第26図 PL-22	須恵器 椀	底部1/4	口 - 高 2.0残 底 (8.8) 高台 (9.4)	①細砂 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。内外面の色調の違いは焼成時の重ね焼き痕か。底部外面に墨書、「𠄎」 [茂カ]。
120	第26図 PL-22	須恵器 椀	底部1/3	口 - 高 1.8残 底 (6.0) 高台 (6.4)	①細砂 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。底部外面に墨書、「□」 [茂カ]。
121	第26図 PL-22	須恵器 椀	体~底部1/2	口 - 高 3.6残 底 8.6 高台 8.8	①砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。黒色味の強い付着物は被熱を受けた油脂類の付着か。

第4章 石原東遺跡D区の遺構と遺物

No.	挿図 No. 図版 No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
122	第26図 PL-22	須恵器 椀	3/4	口15.8 高6.1 底8.0 高台7.9	①砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。底部外面に墨書、「合」。
123	第26図 PL-22	須恵器 椀	2/3	口14.4 高5.3 底7.5 高台7.1	①細砂 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。底部外面と体部外面正位に墨書、「茂」。
124	第26図 PL-22	須恵器 椀	口～体部1/4	口(12.4)高4.8残 底6.4	①砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。体部内外面正位に墨書、「天」。
125	第26図 PL-22	須恵器 椀	口縁～体部片	口(12.0)高3.3残 底- 高台-	①砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、体部外面に墨痕あり。
126	第26図 PL-22	須恵器 椀	1/4	口(16.0)高5.8 底(7.6) 高台(7.9)	①粗砂 ②酸化焰 ③にぶい黄橙	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。内外面の色調の違いは焼成時の重ね焼き痕か。
127	第27図 PL-22	須恵器 椀	口～体部片	口(13.2)高5.0残 底- 高台-	①細砂 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、底部外面に墨痕あり。
128	第27図 PL-22	須恵器 椀	1/3	口(15.2)高5.8 底(8.2) 高台(8.2)	①粗砂 ②酸化焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部切り離し技法はナデで不明。高台は貼付。
129	第27図 PL-22	須恵器 椀	1/4	口(12.5)高5.0残 底(6.7) 高台-	①砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付であるが剥落。体部外面正位に墨書、「□」。
130	第27図 PL-22	須恵器 椀	1/5	口(14.1)高5.3 底(7.6) 高台(8.0)	①砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。
131	第27図 PL-22	須恵器 椀	2/3	口14.0 高5.1 底7.3 高台7.4	①砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。表面に炭化物付着。いぶし焼成。
132	第27図 PL-22	須恵器 椀	2/3	口14.5 高5.6 底7.6 高台7.7	①細砂 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。体部外面正位に墨書、「益」。
133	第27図 PL-22	須恵器 椀	体～底部1/4	口- 高4.1残 底6.5 高台7.0	①砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。体部外面に墨書「□」。油脂類と思われる付着物のため、文字が判読出来ない。底部内面の黒色の付着物は熱を受けて部分的に炭化した油脂類か。
134	第27図 PL-22	須恵器 椀	体～底部1/2	口- 高4.3残 底(9.1) 高台(9.2)	①粗砂 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。底部外面に墨書、「茂」。
135	第27図 PL-22	須恵器 椀	底部1/3	口- 高3.7残 底(7.8) 高台(8.1)	①細砂 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。内外面の色調の違いは焼成時の重ね焼き痕か。体部外面正位に墨書、「□」[茂カ]。
136	第27図 PL-23	須恵器 椀	底部1/3	口- 高3.9残 底(6.4) 高台(6.6)	①細砂 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。底部外面に墨書、「茂」。
137	第27図 PL-23	須恵器 椀	体～底部	口- 高3.0残 底(6.4) 高台(6.5)	①砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。体部外面逆位に墨書、「〃」。
138	第27図 PL-23	須恵器 椀	底部片	-	①粗砂 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、底部は回転糸切り。高台は貼付。底部外面に墨書、「□」。
139	第27図 PL-23	須恵器 椀	底部片	口- 高1.6残 底(7.2) 高台(6.8)	①砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、底部は回転糸切り。高台は貼付。底部外面に墨書、「□」。
140	第27図 PL-23	須恵器 椀	底部片	口- 高2.1残 底(7.2) 高台(7.4)	①砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、底部は回転糸切り。高台は貼付。底部外面に墨痕あり。
141	第27図 PL-23	須恵器 椀	底部片	口- 高1.6残 底(8.0) 高台(8.2)	①砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、底部は回転糸切り。高台は貼付。底部外面に墨書、「□」。
142	第27図 PL-23	須恵器 椀	底部片	口- 高1.5残 底(8.0) 高台(8.2)	①砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。底部外面に墨書、「□」。
143	第27図 PL-23	須恵器 椀	底部片	口- 高2.1残 底(7.3) 高台(8.1)	①粗砂 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。底部外面に墨書、「□」。
144	第27図 PL-23	須恵器 椀	底部片	口- 高2.2残 底(7.0) 高台(7.1)	①細砂 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。底部外面に墨痕あり。
145	第27図 PL-23	須恵器 椀	体～底部	口- 高3.8残 底7.5 高台-	①細砂 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部切り離し技法はナデにより不明。高台は貼付。底部外面に墨書、「益」。
146	第27図 PL-23	須恵器 椀	体～底部1/3	口- 高3.0残 底(5.6) 高台-	①細砂 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。体部外面正位に墨書、「□」[中カ]。
147	第27図 PL-23	須恵器 椀	底部2/3	口- 高2.4残 底6.8 高台7.2	①砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。底部外面に墨書、「茂」。
148	第28図 PL-23	須恵器 椀	底部1/6	口- 高2.0残 底(7.6) 高台(8.0)	①砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。底部外面に墨書、「□」[マカ]。
149	第28図 PL-23	須恵器 杯・椀	口～体部1/4	口(15.4)高4.3残 底- 高台-	①砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。内外面黒色なのは焼成時の吸炭か。黒色味の強い付着物は被熱を受けた油脂類の付着か。
150	第28図 PL-23	須恵器 椀	体～底部1/4	口- 高4.5残 底(6.6) 高台(7.0)	①砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切りか。高台は貼付。内面の黒色の付着物は炭化物か。

[3] 奈良・平安時代の遺構と遺物

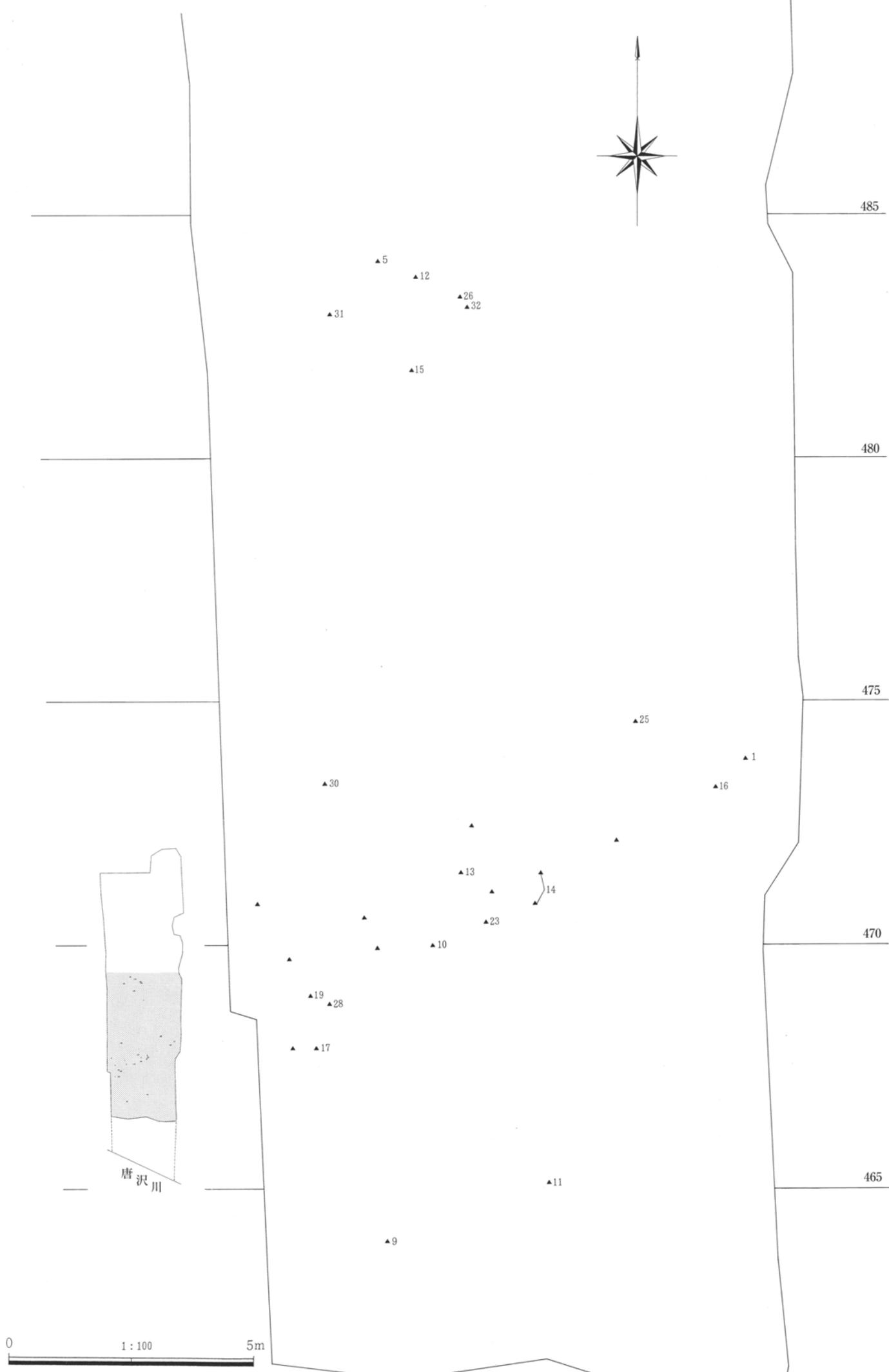
No.	挿図 No. 図版 No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ③色調	②焼成	特徴など
151	第28図 PL-23	須恵器 椀	底部片	口 - 高 1.5 残 底 5.8 高台 5.8	①細砂 ③灰色	②還元焰	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。いぶし焼成。
152	第28図 PL-23	須恵器 椀	底部片	口 - 高 2.3 残 底 6.9 高台 7.0	①砂粒 ③灰色	②還元焰	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。表面に炭化物付着。
153	第28図 PL-23	須恵器 椀	底部 1/3	口 - 高 1.4 残 底 (8.2) 高台 -	①砂粒 ③灰白色	②還元焰	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付であるが剥落。底部外面に墨書、「□」。
154	第28図 PL-23	須恵器 椀	底部片	口 - 高 1.0 残 底 (7.2)	①細砂 ③灰白色	②還元焰	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。底部外面に墨痕あり。
155	第28図 PL-23	須恵器 椀	底部 1/6	-	①砂粒 ③灰白色	②還元焰	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。底部外面に墨書、「□」[茂カ]。
156	第28図 PL-23	須恵器 椀	底部 1/5	-	①細砂 ③灰色	②還元焰	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。底部外面に墨書、「茂」。
157	第28図 PL-23	須恵器 椀	1/4	口 (14.8) 高 4.8 底 (7.5) 高台 7.6	①粗砂 ③灰白色	②酸化焰 ③ぎみ	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。
158	第28図 PL-23	須恵器 椀	ほぼ完形	口 13.4 高 6.6 底 6.4 高台 (8.8)	①砂粒 ③にぶい ③にぶい ③灰色	②酸化焰 ③にぶい ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部切り離し技法はナデで不明。高台は貼付。
159	第28図 PL-23	須恵器 杯・椀	口～体部片	口 - 高 3.9 残 底 -	①細砂 ③灰色	②還元焰	ロクロ成形。体部外面に墨書、「□」。
160	第28図 PL-23	須恵器 杯・椀	口～体部 1/6	口 - 高 3.8 残 底 -	①細砂 ③灰白色	②還元焰	ロクロ成形。体部外面正位に墨書、「^」/「上」。
161	第28図 PL-23	須恵器 杯・椀	口縁～体部片	-	①砂粒 ③灰色	②還元焰	ロクロ成形、体部外面に墨痕あり。
162	第28図 PL-23	須恵器 杯・椀	口縁～体部片	-	①砂粒 ③灰白色	②還元焰	ロクロ成形、体部外面に墨痕あり。
163	第28図 PL-23	須恵器 杯・椀	口縁～体部片	-	①細砂 ③灰白色	②還元焰	ロクロ成形、体部外面に墨痕あり。
164	第28図 PL-23	須恵器 杯・椀	口縁～体部片	-	①細砂 ③灰白色	②還元焰	ロクロ成形、体部外面に墨痕あり。
165	第28図 PL-23	須恵器 杯・椀	口縁～体部片	-	①砂粒 ③灰色	②還元焰	ロクロ成形、体部外面に墨痕あり。
166	第28図 PL-23	須恵器 杯・椀	口縁～体部片	-	①砂粒 ③灰色	②還元焰	ロクロ成形、体部外面に墨痕あり。
167	第28図 PL-23	須恵器 杯・椀	口縁部片	-	①粗砂 ③灰色	②還元焰	ロクロ成形、口縁外面に墨痕あり。
168	第28図 PL-23	須恵器 杯・椀	口～体部片	-	①細砂 ③灰白色	②還元焰	ロクロ成形、体部外面に墨痕あり。
169	第28図 PL-23	須恵器 杯・椀	体部片	-	①細砂 ③灰白色	②還元焰	ロクロ成形、体部外面に墨痕あり。
170	第28図 PL-24	須恵器 杯・椀	体部片	-	①砂粒 ③ぎみ	②酸化焰 ③橙色	ロクロ成形、内面黒色。体部外面に墨書、「□」。
171	第28図 PL-24	須恵器 杯・椀	体部片	-	①細砂 ③灰白色	②還元焰	ロクロ成形、体部外面に墨書、「□」。
172	第28図 PL-24	須恵器 杯・椀	体部片	-	①砂粒 ③灰色	②還元焰	ロクロ成形、体部外面に墨痕あり。
173	第28図 PL-24	須恵器 杯・椀	体部片	-	①細砂 ③灰白色	②還元焰	ロクロ成形、体部外面に墨痕あり。
174	第28図 PL-24	須恵器 杯・椀	体部片	-	①細砂 ③灰白色	②還元焰	ロクロ成形、体部外面に墨痕あり。
175	第28図 PL-24	須恵器 杯・椀	体部片	-	①砂粒 ③灰色	②還元焰	ロクロ成形、体部外面に墨痕あり。
176	第28図 PL-24	須恵器 杯・椀	体部片	-	①砂粒 ③灰色	②還元焰	ロクロ成形、体部外面に墨書、「□」。
177	第28図 PL-24	須恵器 杯・椀	体部片	-	①砂粒 ③灰色	②還元焰	ロクロ成形、体部外面に墨痕あり。
178	第28図 PL-24	須恵器 杯・椀	体部片	-	①細砂 ③灰白色	②還元焰	ロクロ成形、体部外面に墨痕あり。
179	第28図 PL-24	須恵器 杯・椀	体部片	-	①細砂 ③灰色	②還元焰	ロクロ成形、体部内外面に墨痕あり。内面はバレットか。
180	第28図 PL-24	須恵器 杯・椀	体部片	-	①砂粒 ③ぎみ	②酸化焰 ③灰褐色	ロクロ成形、底部は回転糸切り。体部外面に墨痕あり。
181	第28図 PL-24	須恵器 杯・椀	底部片	-	①砂粒 ③灰色	②還元焰	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。底部外面に墨書、「'''」。

第4章 石原東遺跡D区の遺構と遺物

No.	挿図 No. 図版 No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
182	第28図 PL-24	須恵器 杯・椀	底部片	-	①砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、底部は回転糸切り。底部外面に墨痕あり。
183	第28図 PL-24	須恵器 杯・椀	底部片	-	①砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、底部は回転糸切り。底部外面に墨痕あり。
184	第28図 PL-24	須恵器 杯・椀	底部片	-	①砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、底部は回転糸切り。底部外面に墨痕あり。
185	第28図 PL-24	須恵器 杯・椀	底部片	-	①砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、底部は回転糸切り。底部外面に墨痕あり。
186	第28図 PL-24	須恵器 杯・椀	底部片	-	①砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、底部は回転糸切り。底部外面に墨痕あり。
187	第28図 PL-24	須恵器 杯・椀	底部片	-	①砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。底部外面に墨痕あり。
188	第28図 PL-24	須恵器 杯・椀	底部片	-	①細砂 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、底部は回転糸切り。底部外面に墨痕あり。
189	第29図 PL-24	須恵器 皿	1/2	口 13.9 高 3.3 底 7.3 高台 7.5	①粗砂 ②還元焰 ③暗灰色	ロクロ成形、底部切り離し技法は不明。高台は貼付。
190	第29図 PL-24	須恵器 皿	1/2	口 (13.2) 高 3.2 底 (7.1) 高台 7.7	①粗砂 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。底部外面に墨書、「茂」。
191	第29図 PL-24	須恵器 皿	1/3	口 (14.4) 高 3.3 底 (6.6) 高台 7.0	①砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。
192	第29図 PL-24	須恵器 皿	1/4	口 (14.4) 高 2.6 底 7.8 高台 8.0	①砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。
193	第29図 PL-24	須恵器 皿	ほぼ完形	口 13.4 高 2.9 底 7.4 高台 7.5	①細砂 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。底部外面に墨書、「茂」。
194	第29図 PL-24	須恵器 皿	1/2	口 (13.6) 高 (2.6) 底 (7.8) 高台 (7.4)	①砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。自然釉。
195	第29図 PL-24	須恵器 皿	1/4	口 (14.2) 高 2.5 底 (8.0) 高台 (8.2)	①砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。色調の違いは焼成時の重ね焼き痕か。
196	第29図 PL-24	須恵器 皿	1/2	口 (12.8) 高 2.7 底 6.6 高台 6.8	①砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。底部外面に墨痕あり。パレットか。
197	第29図 PL-24	須恵器 皿	1/3	口 (14.0) 高 2.5 底 6.4 高台 7.0	①粗砂 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、底部切り離し技法は不明。高台は貼付。
198	第29図 PL-24	須恵器 皿	1/3	口 (14.4) 高 2.0 底 6.1	①砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。底部外面に墨書、「茂」。
199	第29図 PL-24	須恵器 皿	3/4	口 16.3 高 2.4 底 6.8	①粗砂 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。
200	第29図 PL-24	須恵器 短頸壺	口～胴部1/4	口 (11.6) 高 11.6 残 底 - 胴径 (19.4)	①砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。自然釉掛かる。
201	第29図 PL-24	須恵器 短頸壺	肩部片	口 - 高 4.1 残 底 - 最大径 (20.6)	①砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。内面自然釉。
202	第29図 PL-24	須恵器 短頸壺	肩部片	口 - 高 8.4 残 底 -	①砂粒 ②還元焰 ③灰色	硬質。ロクロ成形、右回り回転。内面黒色、墨か。
203	第29図 PL-24	須恵器 短頸壺か	肩部片	口 - 高 4.7 残 底 -	①細砂 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、回転方向不明。外面カキ目。外面自然釉。
204	第29図 PL-24	須恵器 短頸壺	口～肩部1/4	口 (4.3) 高 2.6 残 底 - 胴径 (5.9)	①細砂 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形。自然釉掛かる。小形。
205	第29図 PL-24	須恵器 壺	体～肩部片	口 - 高 2.9 残 底 - 最大径 (9.9)	①砂粒 ②還元焰 ③灰色	小形の壺。ロクロ成形、右回り回転。
206	第30図 PL-25	須恵器 長頸壺	口縁部1/2	口 (13.0) 高 11.0 残 底 - 頸径 (7.4)	①細砂 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。頸部に接合痕あり。
207	第30図 PL-25	須恵器 長頸壺	口縁部1/3	口 - 高 8.4 残 底 - 頸径 7.0	①細砂 ②還元焰 ③暗灰色	ロクロ成形、右回り回転。頸部に接合痕あり。自然釉掛かる。
208	第30図 PL-25	須恵器 長頸壺	頸部	口 - 高 5.4 残 底 - 頸径 5.0	①細砂 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。頸部に接合痕あり。自然釉掛かる。
209	第30図 PL-25	須恵器 壺	体～底部1/3	口 - 高 12.4 残 底 6.5	①砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部切り離し技法はナデで不明。高台は貼付。外面下半へう削り。内面の黒色や褐色の附着物は漆ではなく、油脂類の一種か。
210	第30図 PL-25	須恵器 壺	把手	-	①砂粒 ②還元焰 ③暗灰色	把手は貼付。縦方向のナデ。
211	第30図 PL-25	須恵器 壺	底部2/3	高 8.7 残 底 (10.6) 高台 (11.2)	①粗砂 ②還元焰 ③灰色	硬質。ロクロ成形、右回り回転。底部切り離し技法はナデで不明。高台は貼付。
212	第30図 PL-25	須恵器 壺	底部片	高 7.4 残 底 (12.8) 高台 (13.7)	①砂粒 ②酸化焰 ③ぎみ③にぶい橙色	ロクロ成形、右回り回転。高台は貼付。

[3] 奈良・平安時代の遺構と遺物

No.	挿図 No. 図版 No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
213	第30図 PL-25	須恵器 突 帯付四耳壺	胴部片	口 - 高 5.3 残 底 -	①砂粒 ②還元焰 ③暗灰色	ロクロ成形、右回り回転。突帯は貼付。突出部に穴を穿つ。
214	第30図 PL-25	須恵器 鉢	口縁片	-	①砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。
215	第30図 PL-25	須恵器 有孔罽付鉢	底部片	口 - 高 2.8 残 底 -	①粗砂 ②還元焰 ③灰白色	やや軟質。胎土は粗い。ロクロ成形。底部下位の脚部最上位に罽が巡る。底部と脚部に接合痕あり。底部に径5～7mmの穿孔を1つ確認。2002「福島曲戸遺跡」群埋文に類似資料あり。
216	第30図 PL-25	羽釜	口縁部片	口 - 高 5.7 残 底 -	①粗砂 ②酸化焰 ③にぶい橙色	ロクロ成形。罽は貼付。胴部外面、下位から罽に向けて縦方向のヘラ削り。
217	第30図 PL-25	羽釜	口～体部片	口 - 高 7.8 残 底 -	①砂粒 ②酸化焰 ③褐色	ロクロ成形。罽は貼付。
218	第30図 PL-25	羽釜	口縁部片	口 - 高 5.6 残 底 -	①粗砂 ②酸化焰 ③にぶい橙色	ロクロ成形。罽は貼付。
219	第30図 PL-25	羽釜	口縁部片	口 - 高 4.4 残 底 -	①粗砂②酸化焰 ③灰白～褐色	ロクロ成形。罽は貼付。
220	第30図 PL-25	羽釜	口縁部片	口 - 高 4.8 残 底 -	①粗砂②酸化焰 ③灰白～褐色	ロクロ成形。罽は貼付。
221	第30図 PL-25	須恵器 大甕	口縁部片	口 - 高 6.6 残 底 -	①砂粒 ②還元焰 ③暗灰色	硬質。内外面横ナデ。
222	第30図 PL-25	須恵器 大甕	頸部片	口 - 高 6.3 残 底 -	①粗砂 ②還元焰 ③灰色	やや軟質。頸部内外面横ナデ。波状文巡る。
223	第31図 PL-25	須恵器 大甕	口縁部1/4	口(43.0)高 7.8 残 底 -	①粗砂 ②還元焰 ③灰色	やや軟質。口縁部内外面横ナデ。
224	第31図 PL-26	須恵器 大甕	肩部片	-	①粗砂 ②還元焰 ③灰色	硬質。内面当て目。器肉厚い。
225	第31図 PL-26	須恵器 大甕	口～肩部1/2	口(24.8)高 11.0 残 底 -	①粗砂 ②還元焰 ③灰色	硬質。口縁部から頸部の内外面横ナデ。やや厚く自然袖掛かる。器肉厚い。
226	第31図 PL-26	須恵器 大甕	口縁部片	口 - 高 7.3 残 底 -	①砂粒 ②還元焰 ③暗灰色	硬質。口縁部に波状文巡る。自然袖掛かる。
227	第31図 PL-26	須恵器 大甕	胴部片	口 - 高 11.6 残 底 -	①砂粒 ②還元焰 ③灰色	硬質。器肉厚い。内外面ナデ。内面墨痕あり。パレットに転用か。
228	第31図 PL-26	須恵器 大甕	胴部片	口 - 高 8.2 残 底 -	①砂粒 ②還元焰 ③灰白色	硬質。内面当て目。内面一面に墨痕あり。破損後、パレットに転用されたものか。
229	第31図 PL-26	須恵器 甕	底部片	口 - 高 6.3 残 底(11.2)	①砂粒 ②還元焰 ③暗灰色	ロクロ成形、右回り回転。外面弱い叩き目。体部下位削り。



3. D1区遺物包含層出土の灰釉陶器・緑釉陶器(第34～36図、PL5・6・26・27)

D1区遺物包含層では、灰釉陶器542点(4.99kg)・緑釉陶器5点(0.07kg)が出土した。出土した灰釉陶器は、椀134点(1.63kg)、皿93点(1.15kg)、椀・皿18点(0.18kg)、段皿15点(0.21kg)、瓶類113点(1.29kg)、蓋1点(0.03kg)、耳皿2点(0.06kg)、器種不明166点(0.44kg)に分類できる。緑釉陶器は4点が椀で、1点が小破片のため器種不明である。

灰釉陶器は、器形が復元できるものと墨痕のあるものをこの項に掲載した。掲載外の灰釉陶器は分類して、数量・重量をはかり、一覧表(第2・第3表)に示した。掲載遺物は、灰釉陶器椀15点、皿5点、椀・皿1点、段皿3点、瓶4点、小瓶2点、長頸壺1点、蓋1点、耳皿2点である。緑釉陶器は、稀少なため、小破片でも掲載した。

灰釉陶器542点の内、胎土・釉調・焼成などで時期・産地の判別できるものが232点ある。時期・

産地の判別できる灰釉陶器片は、黒笹14号窯式期16点(680g)、黒笹90号窯式期1点(10g)、光ヶ丘1号窯式期120点(1,080g)、大原2号窯式期93点(1,210g)、大原2号窯式期から虎溪山1号窯式期2点(30g)である。緑釉陶器5点の内、胎土・釉調・焼成などで時期・産地の判別できるものが4点ある。時期・産地の判別できる緑釉陶器片は、黒笹90号窯式期1点、京都洛北産3点である。

墨書土器は灰釉陶器椀3点、皿2点の5点である。3点は「芪」と判読でき、2点は判読不可能(1点は「益」か)である。「芪」と書かれた墨書土器は、黒笹14号窯式期1点、光ヶ丘1号窯式期1点、大原2号窯式期1点である。墨書のある灰釉陶器・緑釉陶器は、一覧表(第6表、第33図)を参照。

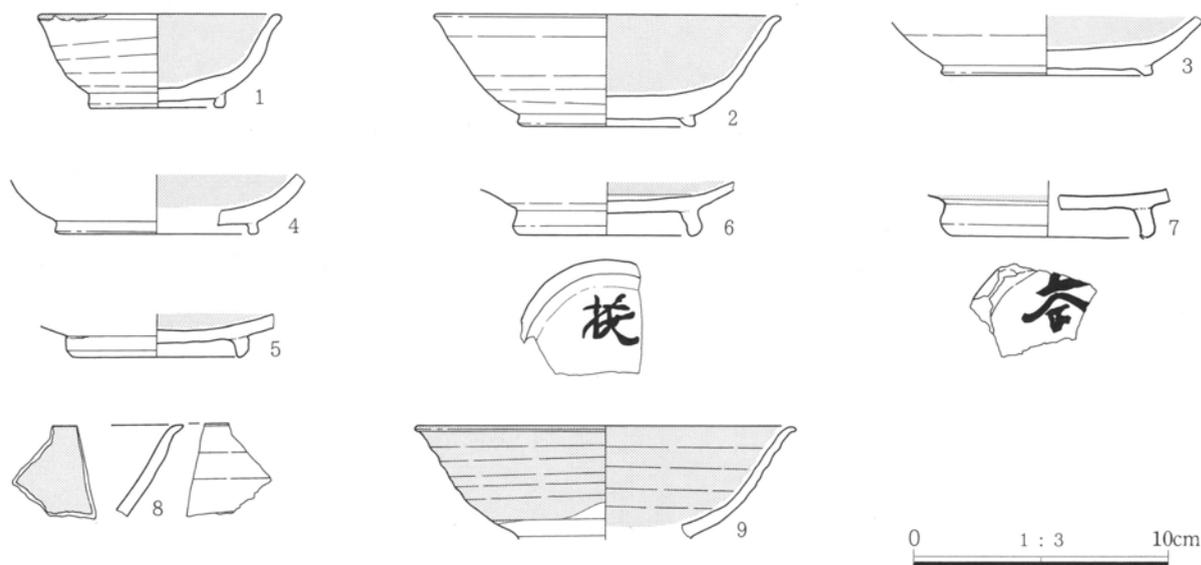
第6表 石原東遺跡 D1区遺物包含層出土灰釉陶器 墨書土器一覧表

No.	土器 No.	器形	墨書の位置・方向	釈文・文字情報
1	6	椀	底部外面	芪
2	15	皿	底部外面	芪
3	23	皿	底部外面	芪
4	7	椀	底部外面	□[益カ]
5	11	椀	底部外面	□
6	26	蓋	体部内面	パレットか

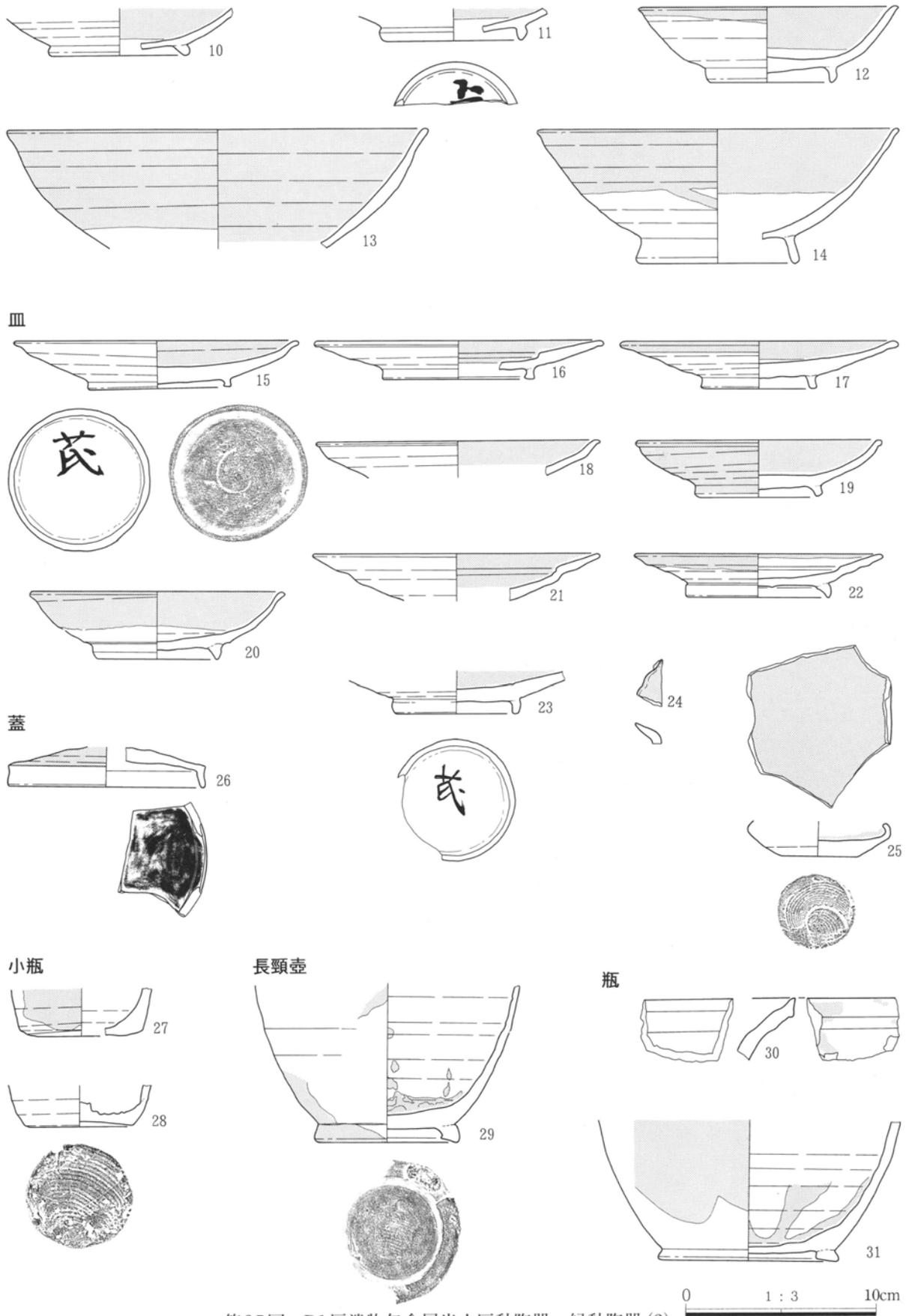


第33図 D1区遺物包含層出土墨書土器(灰釉陶器・緑釉陶器)

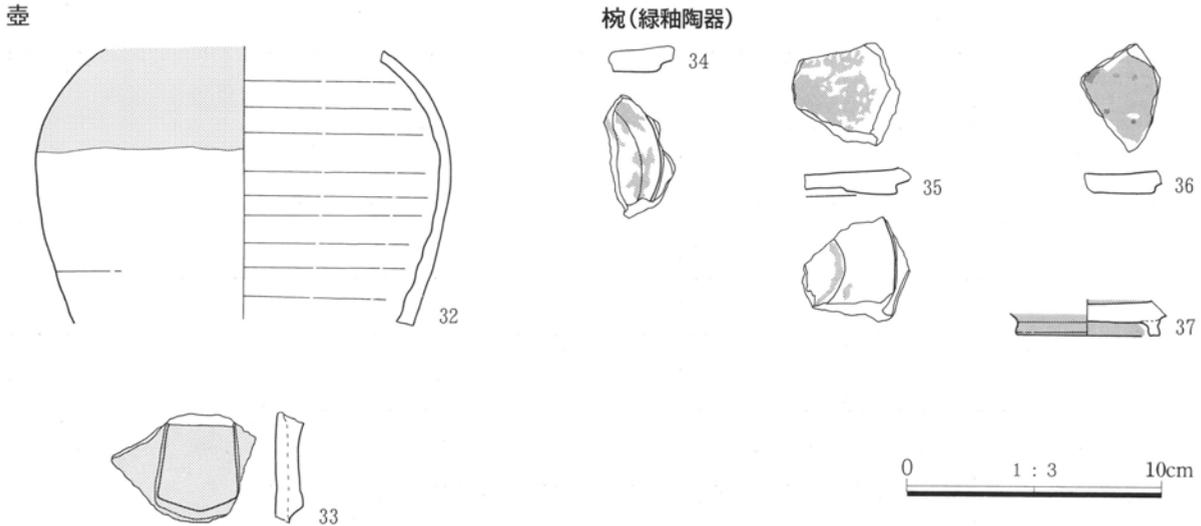
椀



第34図 D1区遺物包含層出土灰釉陶器・緑釉陶器(1)



第35図 D1区遺物包含層出土灰釉陶器・緑釉陶器(2)



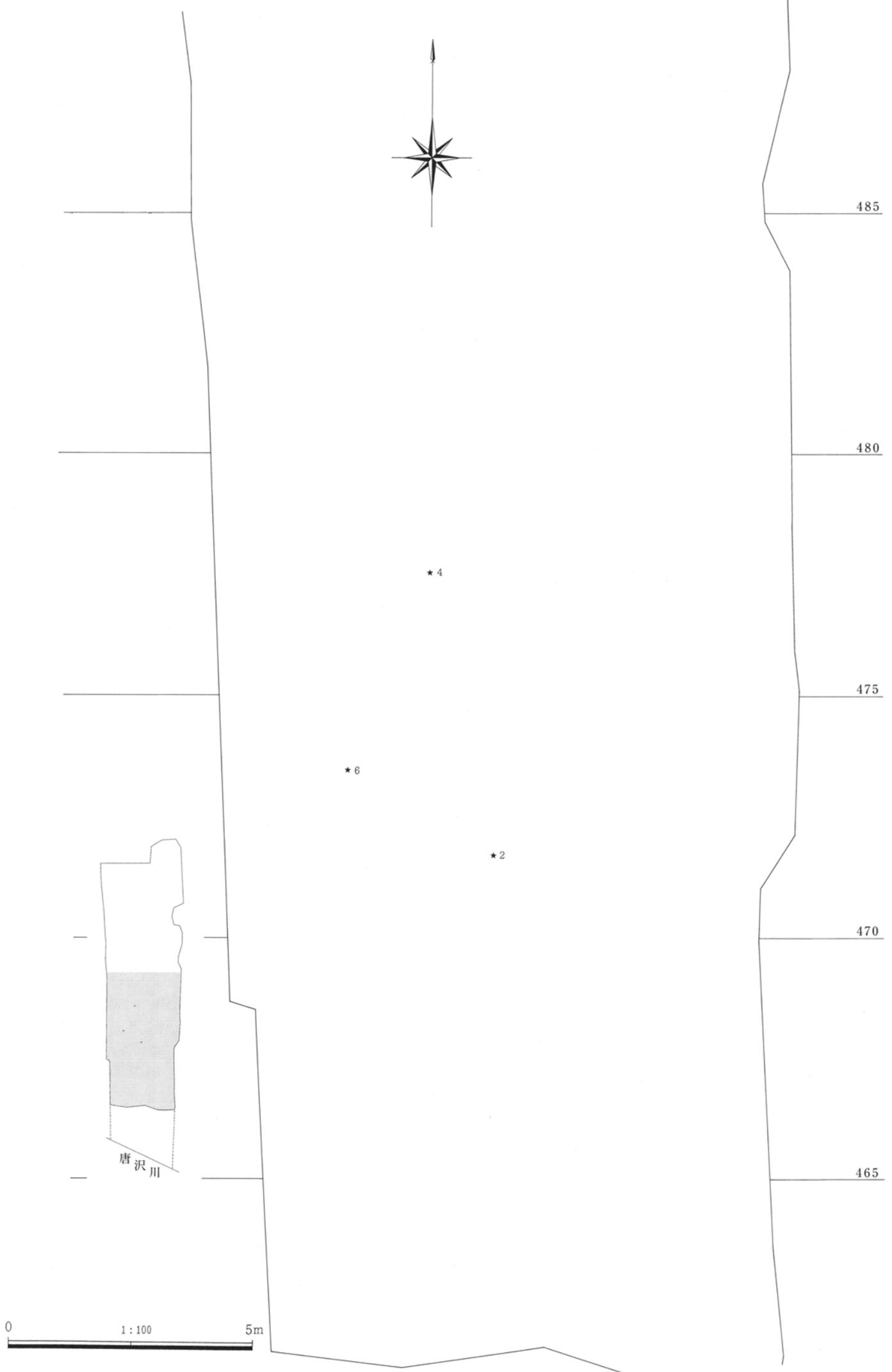
第36図 D1区遺物包含層出土灰釉陶器・緑釉陶器(3)

D1区遺物包含層出土灰釉陶器・緑釉陶器 観察表

No.	挿図No. 図版No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
1	第34図 PL-26	灰釉陶器 椀	完形	口 9.7 高 3.8 底 5.4 高台 (5.5)	①細砂 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部切り離し技法はナデで不明。高台は貼付。施釉は内面のみ全面に施され、釉調は透明感のある緑色。黒笹14号窯式期。
2	第34図 PL-26	灰釉陶器 椀	1/4	口 (13.8) 高 4.4 底 (6.9) 高台 (7.0)	①細砂 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部切り離し技法はナデで不明。高台は貼付。施釉は内面のみ全面に施され、釉調は透明感のある緑色。黒笹14号窯式期。
3	第34図 PL-26	灰釉陶器 椀	底部2/3	口 - 高 2.3残 底 8.2 高台 8.4	①細砂 ②還元焰 ③オリーブ灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部切り離し技法はナデで不明。高台は貼付。施釉は内面のみ全面に施され、釉調は透明感のある緑色。黒笹14号窯式期。
4	第34図 PL-26	灰釉陶器 椀	体~底部片	口 - 高 2.4残 底 (8.0) 高台 (8.2)	①細砂 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形。底部切り離し技法はナデで不明。高台は貼付。施釉は内面のみ全面に施され、釉調は透明感のある緑色。黒笹14号窯式期。
5	第34図 PL-26	灰釉陶器 椀	底部2/3	口 - 高 1.7残 底 (7.1) 高台 (7.2)	①細砂 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部切り離し技法はヘラナデで不明。高台は貼付。施釉方法は刷毛塗り、釉調は透明感のない緑色をおびた灰色。光ヶ丘1号窯式期。
6	第34図 PL-26	灰釉陶器 椀	底部1/4	口 - 高 2.1残 底 (7.2) 高台 (7.5)	①細砂 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部切り離し技法はヘラナデで不明。高台は貼付。施釉方法は刷毛塗り、釉調は緑色をおびた灰色。光ヶ丘1号窯式期。底部外面に墨書、「茂」。
7	第34図 PL-26	灰釉陶器 椀	底部片	-	①細砂 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部切り離し技法はヘラナデで不明。高台は貼付。釉調は緑色をおびた灰色。光ヶ丘1号窯式期。底部外面に墨書、「□」[益カ]。
8	第34図 PL-26	灰釉陶器 椀	口縁部片	-	①細砂 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形。施釉方法は刷毛塗り、釉調は透明感のある緑色。光ヶ丘1号窯式期。
9	第34図 PL-26	灰釉陶器 椀	1/6	口 (15.1) 高 4.4残 底 (6.8)	①細砂 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。施釉方法は刷毛塗り、釉調は透明感のある緑色。光ヶ丘1号窯式期。
10	第35図 PL-26	灰釉陶器 椀	体~底部1/3	口 - 高 2.5残 底 (7.2) 高台 (7.4)	①細砂 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部切り離し技法はナデで不明。高台は貼付。釉調は透明感のある緑色をおびた灰色。大原2号窯式期。
11	第35図 PL-26	灰釉陶器 椀	底部1/3	口 - 高 1.7残 底 (7.0) 高台 (7.8)	①細砂 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。釉調は透明感のある緑色をおびた灰色。大原2号窯式期。底部外面に墨書、「□」。
12	第35図 PL-26	灰釉陶器 椀	1/3	口 (13.7) 高 4.1 底 6.8 高台 6.8	①細砂 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部切り離し技法はナデで不明。高台は貼付。釉調は透明感のある緑色をおびた灰色。施釉方法は漬け掛け。大原2号窯式期。
13	第35図 PL-27	灰釉陶器 椀	口~体部1/4	口 (22.2) 高 6.3残 底 - 高台 -	①細砂 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。釉調は透明感のない緑色をおびた灰色。施釉方法は漬け掛け。大原2号窯式期。外面下半は削り。
14	第35図 PL-27	灰釉陶器 椀	1/4	口 (19.1) 高 7.1 底 (8.0) 高台 (8.6)	①細砂 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部切り離し技法はナデで不明。高台は貼付。釉調は透明感のある緑色をおびた灰色。施釉方法は漬け掛け。大原2号窯式期。

第4章 石原東遺跡D区の遺構と遺物

No.	挿図 No. 図版 No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
15	第35図 PL-27	灰釉陶器 皿	ほぼ完形	口 15.1 高 2.6 底 7.5 高台 7.6	①細砂 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部切り離し技法はナデで不明。高台は貼付。施釉は内面のみ全面に施され釉調は透明感のあるうすい緑色。黒笹14号窯式期。底部外面に墨書「茂」。
16	第35図 PL-27	灰釉陶器 段皿	1/5	口(15.3) 高 2.1 底(8.0) 高台(8.1)	①細砂 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部切り離し技法はナデで不明。高台は貼付。施釉は内面のみ全面に施され、釉調は透明感のある緑色。黒笹14号窯式期。
17	第35図 PL-27	灰釉陶器 皿	1/4	口(14.8) 高 2.5 底(6.0) 高台(6.2)	①細砂 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部切り離し技法はヘラナデで不明。高台は貼付。施釉方法は刷毛塗り、釉調は透明感のある緑色。光ヶ丘1号窯式期。
18	第35図 PL-27	灰釉陶器 皿	口～体部1/5	口(15.0) 高 1.9残 底 - 高台 -	①細砂 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。施釉方法は刷毛塗り、釉調は灰色。光ヶ丘1号窯式期。
19	第35図 PL-27	灰釉陶器 皿	1/3	口(13.0) 高 3.0 底(6.7) 高台(6.8)	①細砂 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部切り離し技法はヘラナデで不明。高台は貼付。施釉方法は刷毛塗り、釉調は透明感のある緑色。光ヶ丘1号窯式期。
20	第35図 PL-27	灰釉陶器 皿	1/3	口(13.5) 高 3.6 底(6.8) 高台(6.8)	①細砂 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部切り離し技法はヘラナデで不明。高台は貼付。施釉方法は刷毛塗り、釉調は緑色をおびた灰白色。光ヶ丘1号窯式期。
21	第35図 PL-27	灰釉陶器 段皿	口～体部1/4	口(15.2) 高 2.5残 底 -	①細砂 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。施釉方法は刷毛塗り、釉調は緑色をおびた灰色。光ヶ丘1号窯式期。
22	第35図 PL-27	灰釉陶器 段皿	1/3	口(13.2) 高 2.3残 底(7.4) 高台(7.6)	①細砂 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部切り離し技法はナデで不明。高台は貼付。釉調は灰色。施釉方法は漬け掛け。大原2号窯式期。
23	第35図 PL-27	灰釉陶器 皿	体～底部	口 - 高 2.2残 底 6.6 高台 6.8	①細砂 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部切り離し技法はナデで不明。高台は貼付。内面見込み部重ね焼き痕あり。大原2号窯式期。底部外面に墨書、「茂」。
24	第35図 PL-27	灰釉陶器 耳皿	口縁部片	-	①細砂 ②還元焰 ③オリーブ灰色	内外面釉あり。口縁部はヒダ状を呈する。
25	第35図 PL-27	灰釉陶器 耳皿	体～底部	口 - 高 1.8残 底 4.3	①細砂 ②還元焰 ③オリーブ灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。釉調は透明感のないやや緑色をおびた灰色。大原2号窯式期。
26	第35図 PL-27	灰釉陶器 蓋	口～天井部 1/6	口(10.4) 高 2.1残	①細砂 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。施釉は外面に施されている。釉調は透明感のある淡い緑色。内面全面に墨痕あり。パレットに転用か。
27	第35図 PL-27	灰釉陶器 小瓶	底部1/2	口 - 高 2.5残 底(4.8)	①細砂 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、回転方向不明。底部切り離し技法は糸切りか。胴部最下半～底部はヘラナデ。釉調は透明感のある濃い緑色。
28	第35図 PL-27	灰釉陶器 小瓶	底部	口 - 高 2.2残 底 5.7	①細砂 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。内面にロクロ痕が顕著にみられる。
29	第35図 PL-27	灰釉陶器 長頸壺	胴～底部	口 - 高 8.3残 底(7.7)	①細砂 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。糸切り後、回転ヘラ調整。胴部下半は回転ヘラ削り。釉調は透明感のある緑色。
30	第35図 PL-27	灰釉陶器 瓶	口縁片	-	①細砂 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、回転方向不明。釉調は透明感のある緑色。
31	第35図 PL-27	灰釉陶器 瓶	胴～底部1/4	口 - 高 7.4残 底 9.1 高台 9.5	①細砂 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部切り離し技法は糸切りか。高台は貼付。釉調は透明感のある緑色。
32	第35図 PL-27	灰釉陶器 瓶	肩～胴部1/5	胴径(17.1)	①細砂 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。釉調は透明感のある緑色。
33	第35図 PL-27	灰釉陶器 瓶	把手片	-	①細砂 ②還元焰 ③灰白色	把手は貼付。釉調は透明感のある緑色。
34	第35図 PL-27	緑釉陶器 椀	底部1/4	-	①細砂 ②還元焰 ③灰白～淡黄色	高台はベタ高台か。外面の釉は剥落。高台は回転ヘラ削り。京都洛北産。
35	第35図 PL-27	緑釉陶器 椀	底部1/5	-	①細砂 ②還元焰 ③灰白～淡黄色	高台は蛇目高台。底部摩耗のため整形痕は不明。京都洛北産か。
36	第35図 PL-27	緑釉陶器 椀	底部1/5	-	①細砂 ②還元焰 ③灰白～淡黄色	高台はベタ高台。底部摩耗のため整形痕は不明。内面に緑釉が施されている。京都洛北産。
37	第35図 PL-27	緑釉陶器 椀	底部1/2	口 - 高 1.4残 底(5.6) 高台 -	①細砂(密) ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、回転方向不明。底部切り離し技法はナデで不明。高台は貼付。施釉は内外面全面に丁寧に施されている。釉調は透明感のある濃い緑色。黒笹90号窯式期。

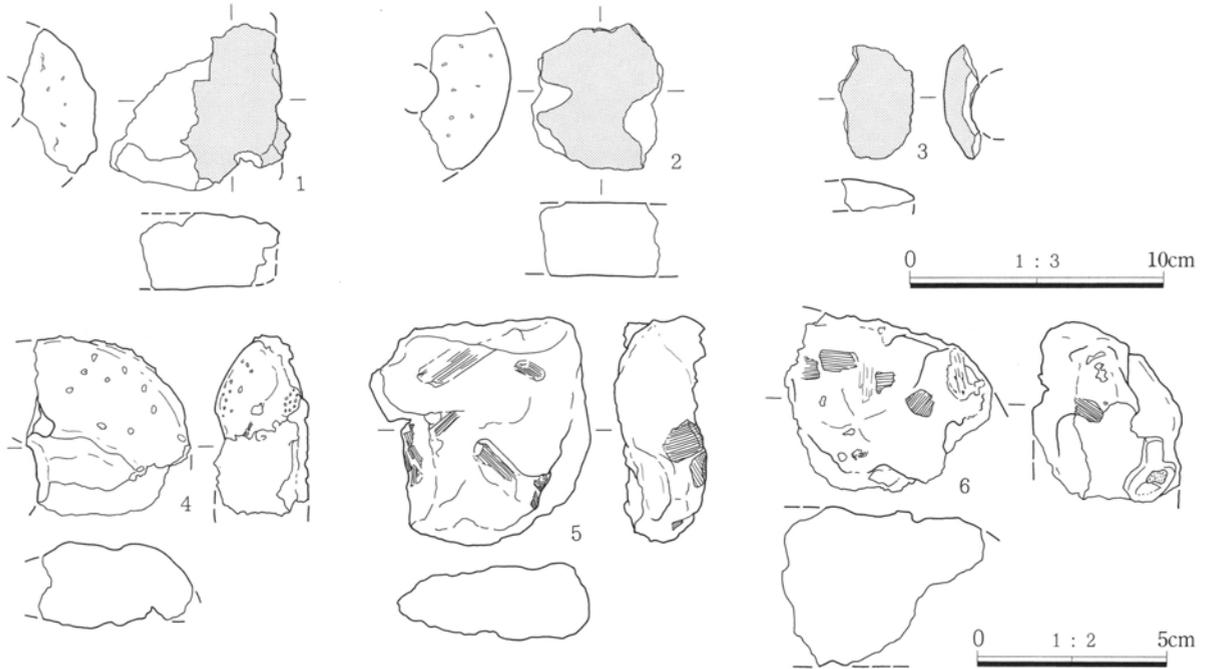


第37図 D1区遺物包含層鉄関連遺物の出土状況

4. D1区遺物包含層出土の鉄関連遺物(第38図、PL5・6・27)

鉄関連遺物は、6点出土した。羽口3点、椀形鍛冶滓2点、流動滓1点である。4は、非鉄(銅)系の滓の可能性がある流動滓である。本報告の内、非鉄(銅)系の可能性のある滓は、これ一点である。

遺物の出土地点から、鉄生産関連の遺構は検出されなかった。出土した遺物は、周辺からの廃棄の可能性が高い。



第38図 D1区遺物包含層鉄関連遺物出土遺物図

D1区遺物包含層出土鉄関連遺物観察表

No.	挿図No. 図版No.	遺物名	①重②磁③メ	出土位置 計測値 (cm)	特徴など
1	第38図 PL-27	羽口 先端部	①84.3 g ②3 ③なし	包含層 長さ 7.1 内径 (2.1) 外径 (7.5)	先端部や外面の一部が滓化した羽口先端部破片。先端部は平坦な面を持って溶損しており、木炭痕が表面に目立つ。外面にはやや白色の滓が生じており、特異な滓化を示す。通風孔部は作りの悪いもので、何回かの単位に分けて穿孔している。胎土はスサを混じえた強い粘質土。No.4の流動状の滓と表面のガラス質滓の類似点が多く、同一遺構からの廃棄品か。
2	第38図 PL-27	羽口 体部	①85.4 g ②1 ③なし	包含層 長さ 5.2残 内径 (2.0) 外径 (8.0)	羽口体部の小破片。通風孔径が小ぶりで、胎土や成形方法からみて石原東遺跡 D2区5住 - No.7 と極めて類似する。同遺構からの廃棄品か。
3	第38図 PL-27	羽口 先端部	①12.5 g ②1 ③なし	包含層 長さ 2.9残 内径 (3.0) 外径 (5.4)	羽口先端部の小破片。表面は黒色ガラス化して肉が薄くなっている。通風孔部の形状は正円形ではない。胎土は鉄滓片やスサの僅かに混じえる砂質土。
4	第38図 PL-27	流動滓	①56.2 g ②1 ③なし	包含層 長径 4.8 短径 4.3 厚さ 2.3	平面、円形を1/4に分割したような形状を持つ流動滓破片。上下面は生きており、側面2面が破面。上面は流動状で、白色滓が縞状に認められる。下面には木炭痕が残り、全体に皿状。保存処理のクリーニングの影響も加わりやや灰黒色で光沢を持つ。下面には気孔が密集する。下面の左側部下手には、白色滓中に表面が紫紅色の部分があり非鉄(銅)系の滓の可能性も残る。
5	第38図 PL-27	椀形鍛冶滓 (小)	①74.2 g ②4 ③なし	包含層 長径 6.1 短径 5.9 厚さ 2.0	やや扁平な小形の椀形鍛冶滓の半欠品。右側部から下手側が全面破面。上面には1cm大の木炭痕が全面に残り、皿状の下面には1cm大以下の木炭そのものを多量にかみ込んでいる。滓は密度がやや低く、風化も進んでいる。
6	第38図 PL-27	椀形鍛冶滓 (中)	①97.6 g ②4 ③なし	包含層 長径 5.5 短径 4.7 厚さ 4.2	椀形鍛冶滓の肩部破片。上下面が生きており、右側面と下手側が破面となる。やや結晶の発達した滓で、本来はさらに大きかった可能性が高い。風化も進んでいる。No.5とやや類似する。

①重量②磁着度③メタル度



5. D1区遺物包含層出土の木器類（第44～51図、PL7・28～32）

D1区遺物包含層からは、約300点もの木質遺物を取り上げられた。約300点の内、加工痕の認められるものは57点で、その他は自然木である。ここでは、加工痕のある57点をD1区遺物包含層出土木器類として掲載する。木器の分類及び名称は、『木器集成図録 近畿古代編』（1985 奈文研）に準じて笹澤が独自に行った。樹種同定は、株式会社パレオラボに依頼した。同定された樹種は、観察表に記載してある。同定に使用したプレパラートは、当事業団で作成した。プレパラートや光学顕微鏡写真などは、当事業団に保管してある。

用途が推測できた遺物は57点中、26点で、曲物・挽物といった容器、火鑽臼・搗粉木といった食器、杭などの部材に分類できる。最も多いのは容器の23点で、曲物20点、挽物3点を数える。挽物3点の内1点は、漆塗の皿である。

用途不明の加工材の大部分は板材で、厚さ1cm以下の薄板状のものが多い。ヒノキやケヤキといった本遺跡出土の曲物の底板と同じ樹種のもが多く、それらは、曲物の底板の破片の可能性も考えられる。

D1区遺物包含層出土の木器類は、農具や工具、建築部材などではなく、容器や食器を中心とした遺物構成であるという特徴を持つ。

容器 曲物（第44～47図 PL28・29）

D1区遺物包含層で出土した加工痕のある遺物57点の内、20点を曲物に分類した。曲物20点は、底板と側板が別々に出土しているため、蓋に用いられたのか、底に用いられたのか判別できないものが多い。出土した加工痕のある遺物の内、明らかに曲物と判るものだけで1/3以上を占める。前述した用途不明の加工材としたヒノキやケヤキの薄板が、曲物の底板であれば曲物の占有率はさらに上がる。

曲物は、スギやヒノキなどを柾目取りにして、薄く削ったものを曲げて側板を作り、底板を取り付ける単純な構造である。側板の合わせ目は、桜あるいは白樺の樹皮を帯状にしたもので縫い合わせる。こ

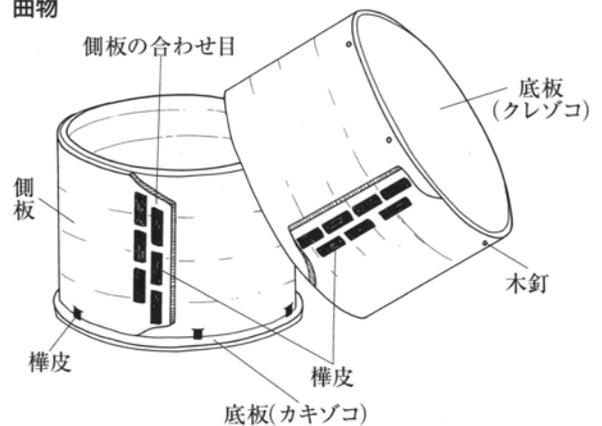
うした曲物の接合に使う桜や白樺の樹皮を樺皮と言ひ、接合方法を樺止めという。この場合の樺は、樹種を指すのではなく工芸材としての意味を持つので、桜などの樹皮でも樺皮とした。

曲物は、側板と底板の接合方法で2つに分類することがある。木製の釘を用いる接合方法と、樺皮を用いる方法である。前者は「木釘結合曲物」、後者は「樺皮結合曲物」とよばれている<sup>(1)</sup>。

一方で、側板と底板の接合形態で2つに分類することもある。底板が側板の内側に入り込む形態と、底板の径が側板の径より大きい形態である。前者は、「クレゾコ」、後者は「カキゾコ（カキイレゾコ）」とよばれている。この「クレゾコ」、「カキゾコ」という名称は、曲物の一大産地であった長野県木曾郡檜川村で用いられてきたものであるが、他に側板と底板の接合形態を表す適当な名称がないので、これらの名称が用いられてきたようである<sup>(2)</sup>。

本遺跡出土の曲物は、接合孔、木釘、樺皮の残存するものが少なく、接合形態によって分類することの方が容易であったため、「クレゾコ」や「カキゾコ」に分類した。木釘や樺皮が残存して接合方法の判明するものについては、個々に実測図や観察に記載することにした。

曲物



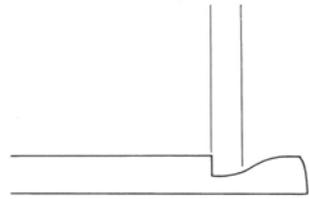
第40図 「カキゾコ」(左)と「クレゾコ」(右)

※図はカキゾコとクレゾコの曲物を模式的に表すために作成したもので、このような組み合わせの蓋と底を想定したものではない。

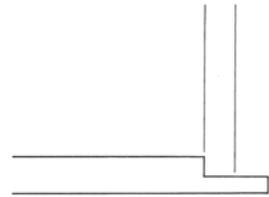
本遺跡出土の「カキゾコ」の曲物は、周縁加工形態の違いから、以下の図のように「カキゾコ A」と「カキゾコ B」に分類した。「カキゾコ A」は、側板をはめ込む段差が、底板の周縁部から斜め下に切り込むタイプで、「カキゾコ B」は、底板の周縁部から水平に切り込むタイプである。観察中にもこの用語を使用しているので、確認していただきたい。

また、底板の大きさで、曲物の性格が異なる可能性が考えられることから、大形・小形の分類を行った。便宜的に径20cm以下を小形、それ以上を大形とした。本遺跡出土の曲物は、13だけが径46cmと突出して大きい大形曲物で、その他は径20cm以下の小形曲物である。

さらに、底板の形状で、曲物の性格が異なる可能性も考えられることから、円形・楕円形の分類を行った。残存部分から、11・12を楕円形曲物として分類した。11・12以外は円形曲物に分類したが、残存位置によっては、楕円形曲物に分類される物もあるかもしれない。



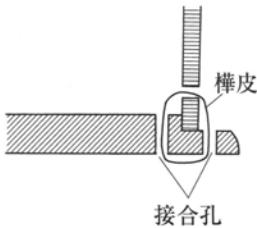
カキゾコ A 底板の周縁部から斜め下に切り込むタイプ



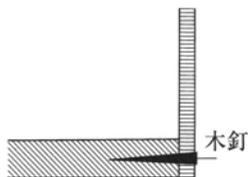
カキゾコ B 底板の周縁部から水平に切り込むタイプ

第42図 本遺跡出土曲物のカキゾコの分類

カキゾコ



クレゾコ



第41図 本遺跡出土曲物の接合方法の模式図

※本遺跡出土の「カキゾコ」の曲物は樺皮で接合され、「クレゾコ」の曲物は、木釘で接合されていた。他遺跡の出土例を見ると、「カキゾコ」でも木釘で接合するものもある。



いろいろな用途で使われた曲物

第43図 1『一遍上人絵伝』 2『飢餓草子』より図化 (参考資料)

#### 容器 挽物 (第47図、PL30)

3点を挽物に分類した。

挽物は、木材を刳って、およその形をととのえ、ロクロによって整形した容器であるので、刳物との差は、ロクロで整形の有無のみである。原則としては、ロクロの回転が利用できない変形の器が刳物である。<sup>(1)</sup> 本遺跡出土の21は、ロクロの爪痕、ロクロ目、22はロクロ目が観察できることから、刳物ではなく、挽物とした。21は、4ヶ所のロクロの爪痕が確認できる。爪は長径5.5cm、短径5.0cmを測る。中央に爪痕は確認できなかった。

23は残存状態が悪いが、表裏面に漆の塗膜が残存する漆塗りの挽物である。細かな破片10点が出土したが、同一個体であると思われる。1が口縁片、2～5が体部片、6～10が底部片であろう。接合しない小破片であるが、漆器の皿であると考えられる。

本県では、奈良・平安時代の漆器の出土例は、極めて希である。出土遺物の塗膜構造などについては、本報告、第6章の自然科学分析「出土漆器の塗膜構造」(小林正)にまとめて記載してあるので参照していただきたい。

#### 食器具 火鑽臼 (第47図、PL30)

1点(25)を火鑽臼に分類した。

25は、板状で、杵の当たったと思われる臼状の窪みが、並んで2個ある。

臼部には焼痕が観察できないが、形状から火鑽臼の可能性が考えられる。

#### 食器具 搗粉木 (第47図、PL30)

棒状で、木口面が凸レンズ状にすり減っている24を搗粉木に分類した。

24は、刃物痕が多数ある。斜め上から深く入れられた刃物痕が7箇所、その裏に、浅く細かく入れられた刃物痕が無数に観察できる。浅く細かい刃物痕は、木目に対して直角に入れられている。

『木器集成図録 近畿古代編』などに、堅杵の転用品の搗粉木に刃物痕のある例がある。

#### 部材 杭 (第48図、PL30)

26を杭に分類した。上部は欠損し、先端部のみの検出である。

#### 用途不明の加工材 (第48～51図、PL30～32)

31点が用途不明の加工材であった。用途不明の加工材は、孔のあるもの、出ほぞ加工のあるものや、柱状・棒状・板状のものがあった。板状のものは、厚手のものと薄手のものに分類した。

36～46は、薄手の板材である。36から42は本遺跡出土の曲物と同じ樹種のヒノキ・モミであり、曲物の底板の一部の可能性も考えられる。

31は、出ほぞ加工が施された部材である。組み合わせられた状況で発見されたものではないので、あくまでも推測の域は出ないが、建築部材にしては小形であるので、指物の部材の一部の可能性もある。31は、他の加工材に比べて、表面の加工が極めて丁寧である。樹種はヒノキで、一部の残存である。

27～29は、孔のある加工材である。孔は釘孔の可能性が考えられる。27から29は、クリ、クヌギ、ヒノキと樹種はそれぞれ異なる。

#### 註

(1)1985 『木器集成図録 近畿古代編』奈良文化財研究所

(2)1994 『瀬名遺跡Ⅲ』静岡県埋蔵文化財調査研究所

#### 引用・参考文献

1978 『伊場遺跡遺物編』浜松市教育委員会

1982 『日高遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団

1994 岩井宏實 『曲物』法政大学出版局

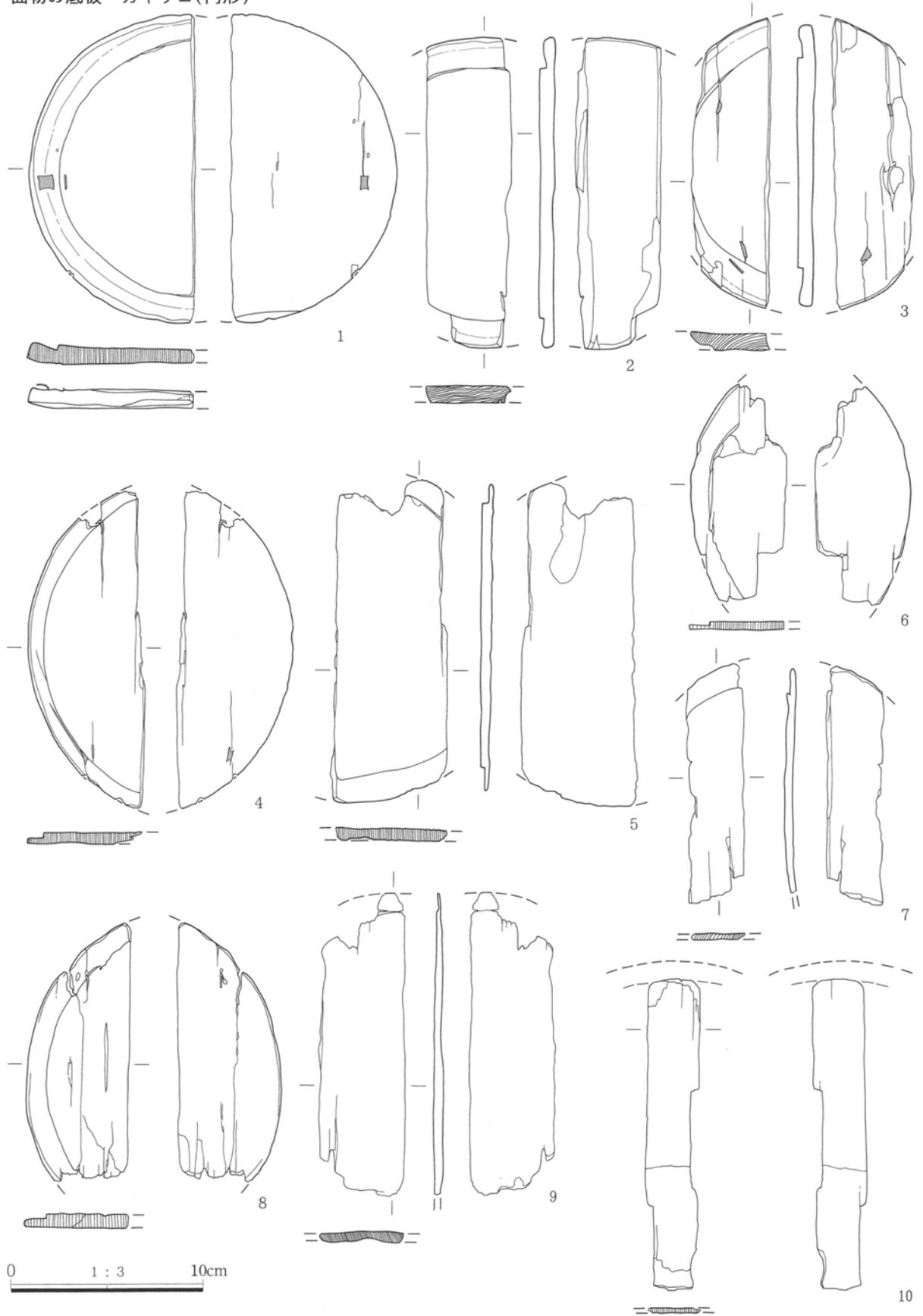
1996 上原真人「木製容器の種類と画期」『第39会研究集会 古代の木製食器』埋蔵文化財研究会

1996 『第39会研究集会 古代の木製食器』埋蔵文化財研究会

1996 『元総社寺田遺跡Ⅲ』群馬県埋蔵文化財調査事業団

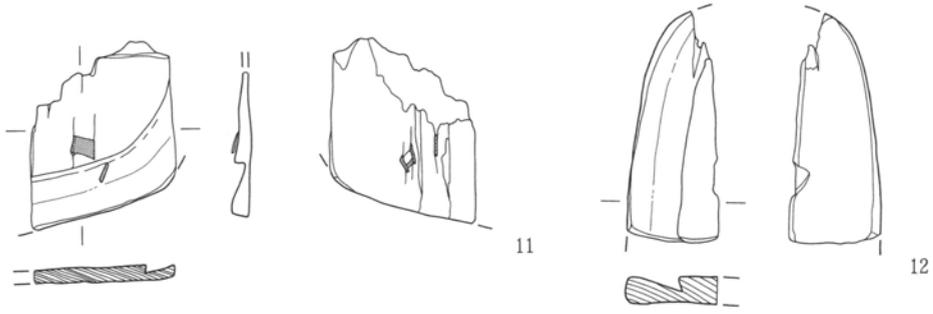
2000 飯塚武司「古代の木工挽物」『研究論集XⅧ』東京都埋蔵文化財センター

曲物の底板 カキソコ(円形)

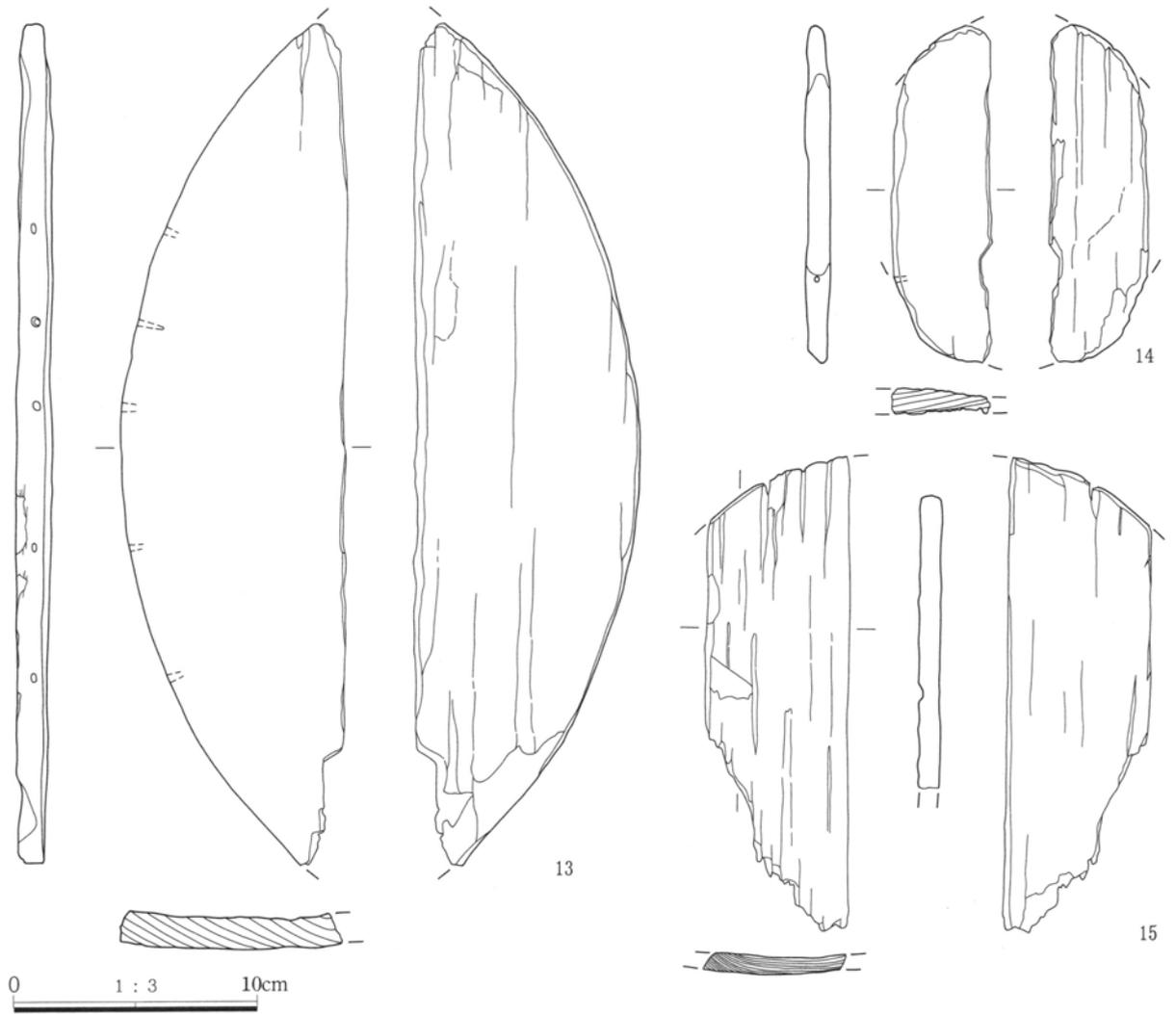


第44図 D1区遺物包含層出土木器(1)

曲物の底板 カキソコ(楕円形)

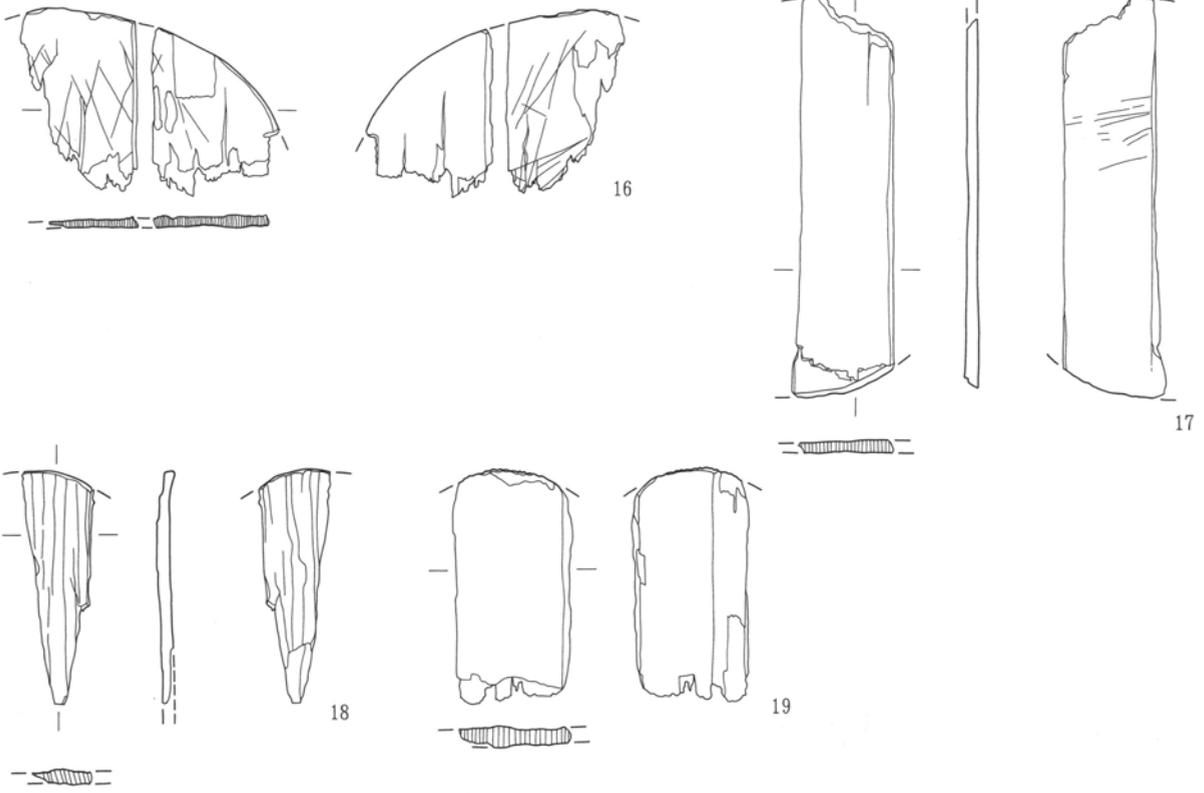


曲物の底板 クレソコ

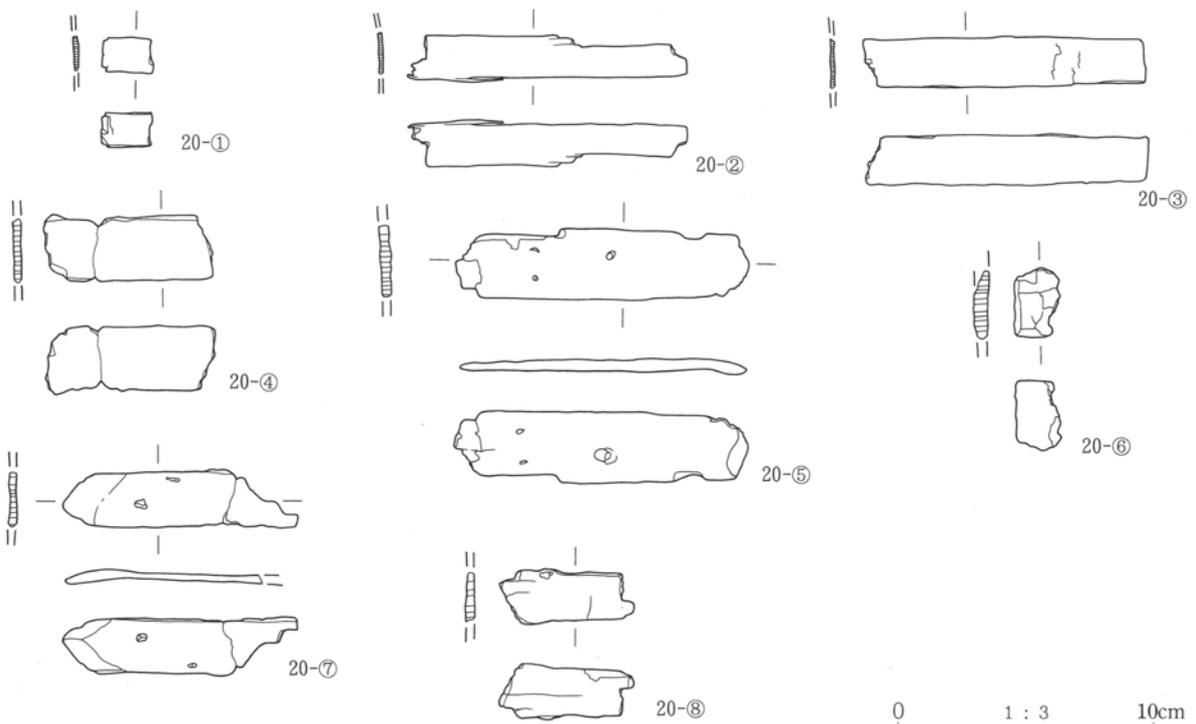


第45図 D1区遺物包含層出土木器(2)

曲物の底板か

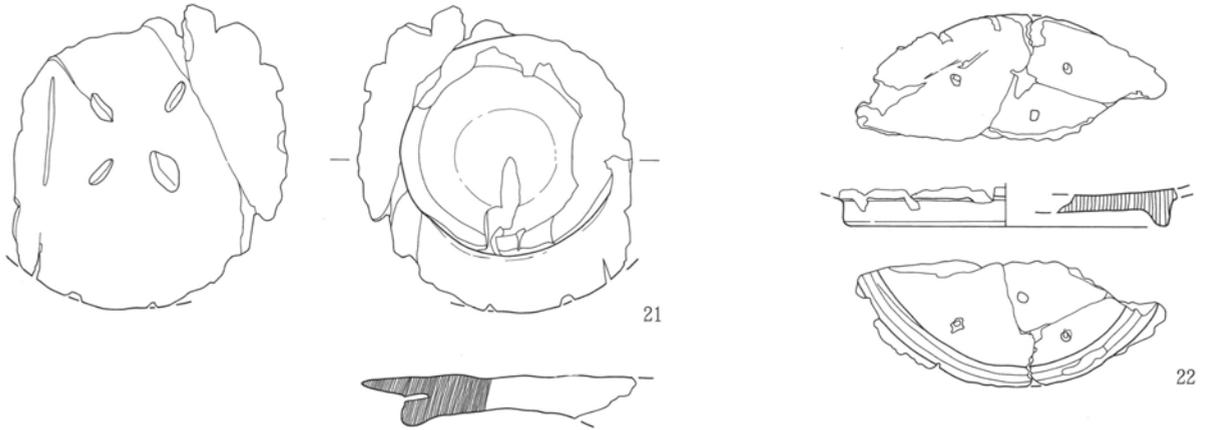


曲物の側板

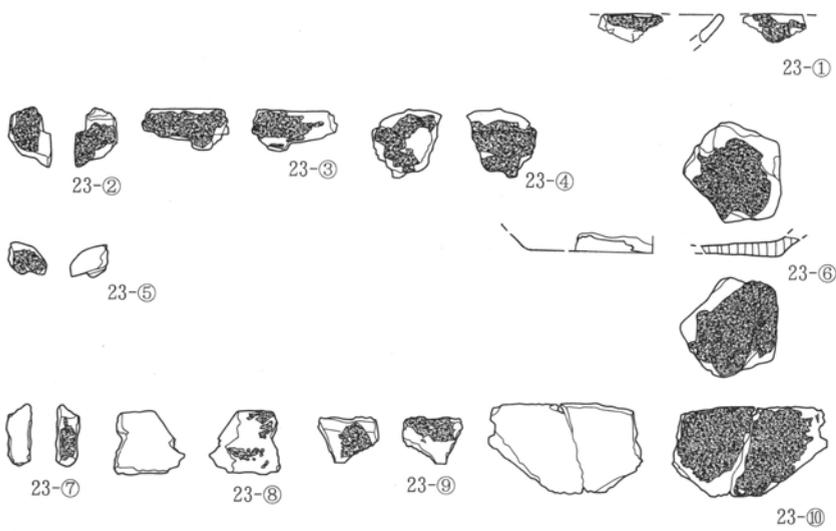


第46図 D1区遺物包含層出土木器(3)

挽物 皿



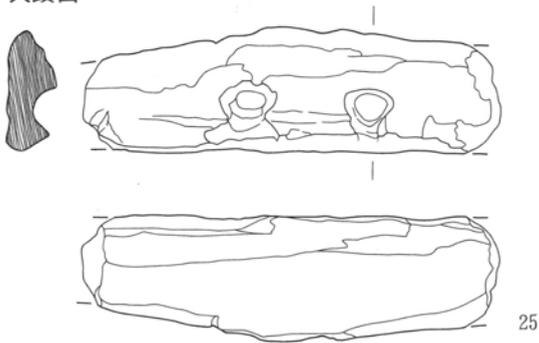
漆器 皿



播粉木



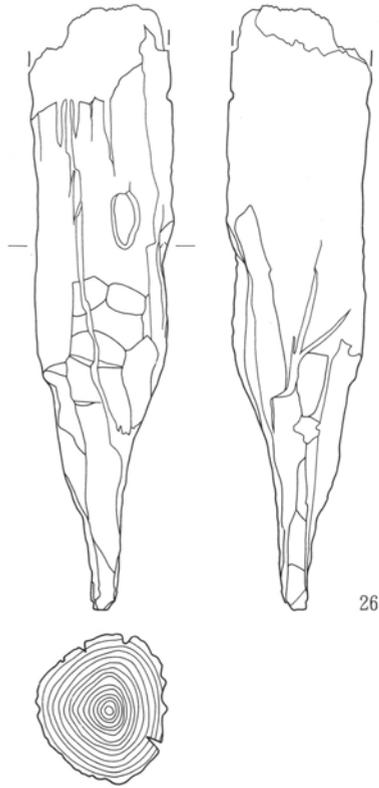
火鑽臼



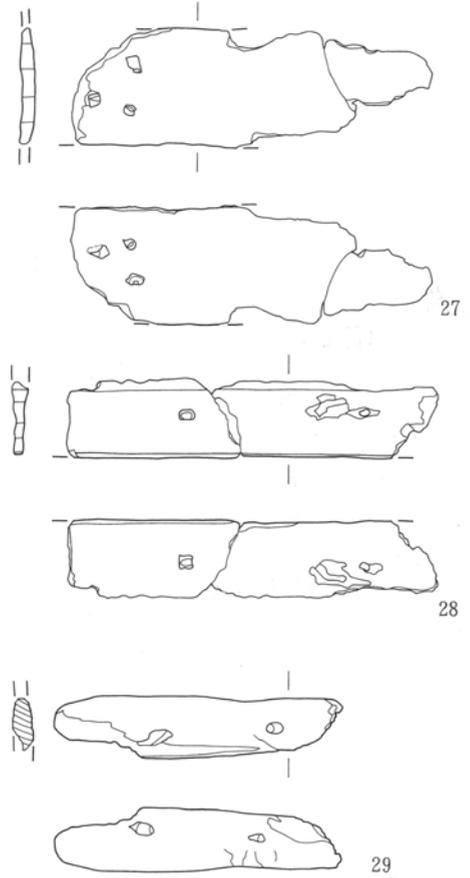
0 1 : 3 10cm

第47図 D1区遺物包含層出土木器(4)

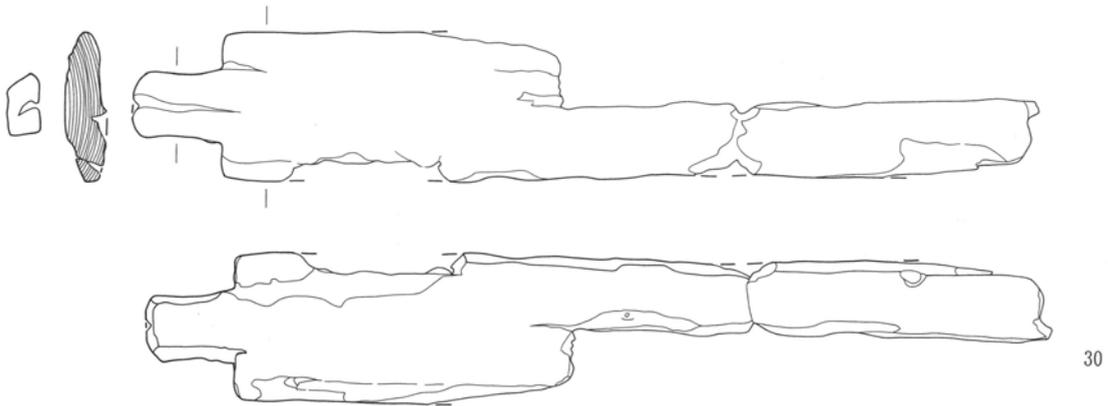
杭



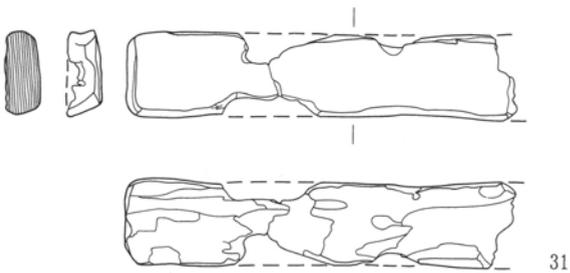
加工材(孔あり)



加工材(出ほぞ)

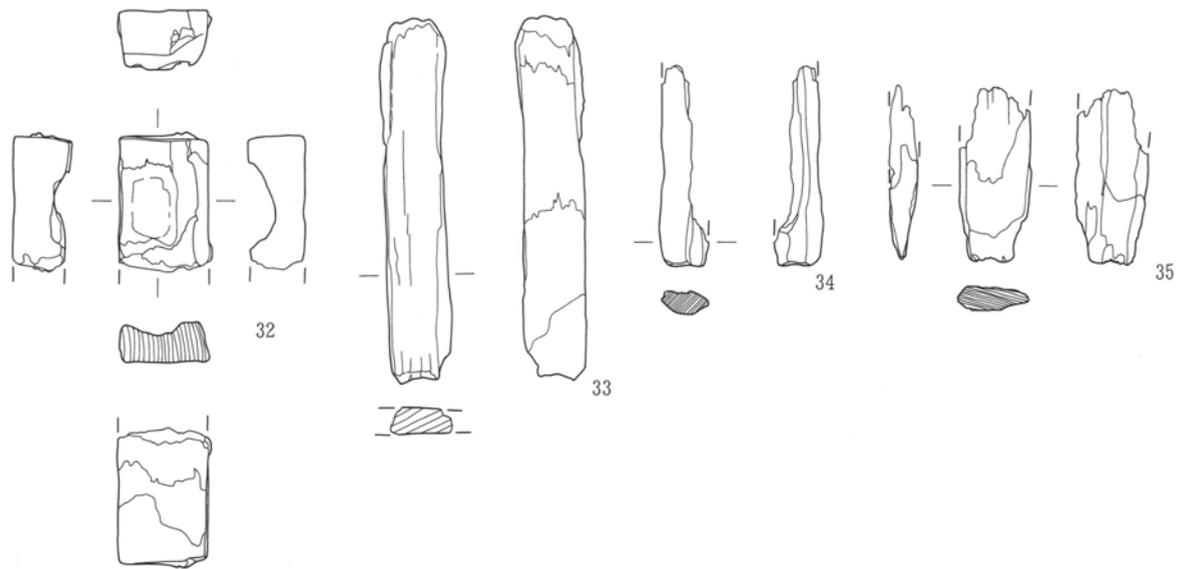


加工材(柱状・棒状)

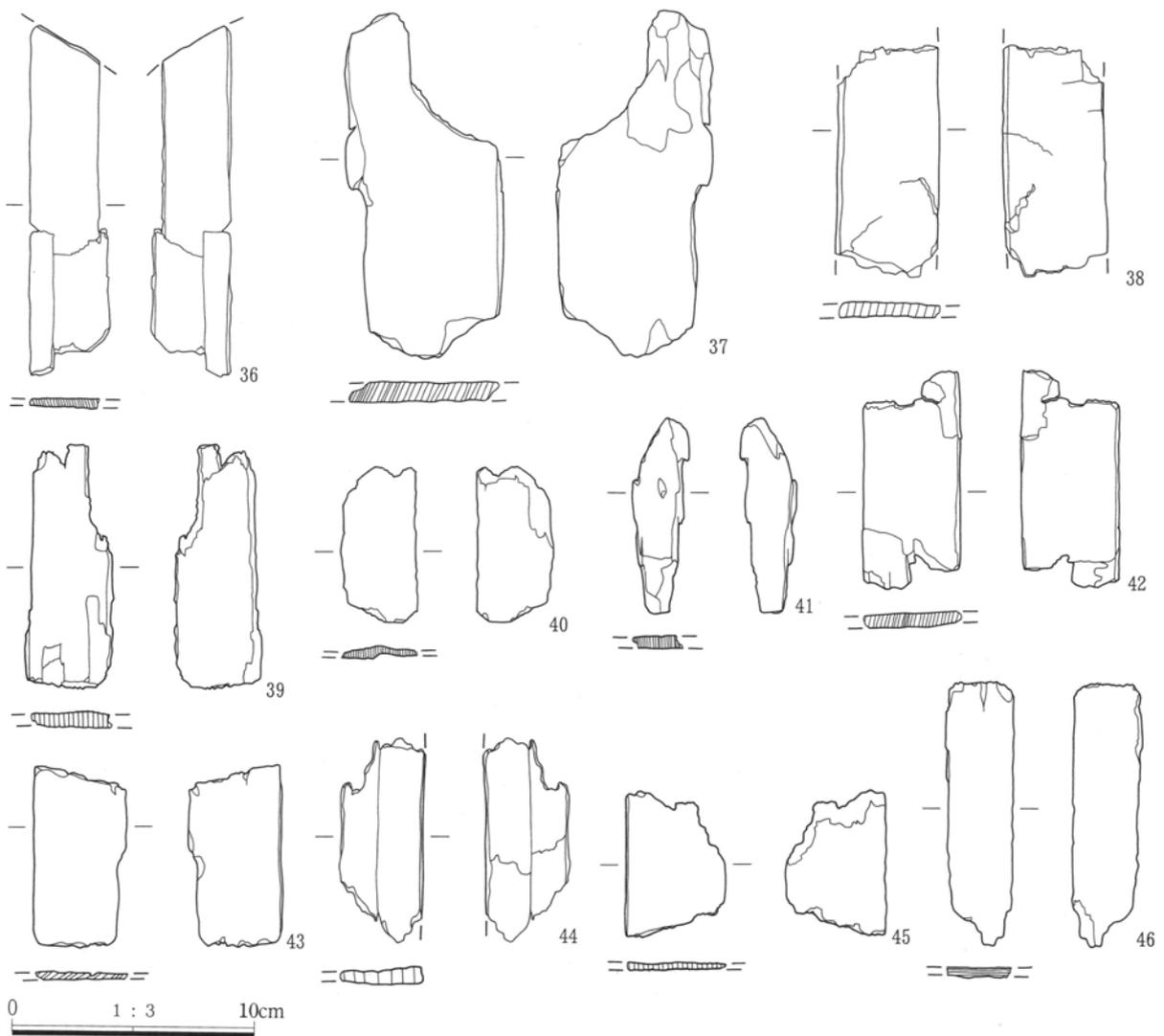


0 1 : 3 10cm

第48図 D1区遺物包含層出土木器(5)

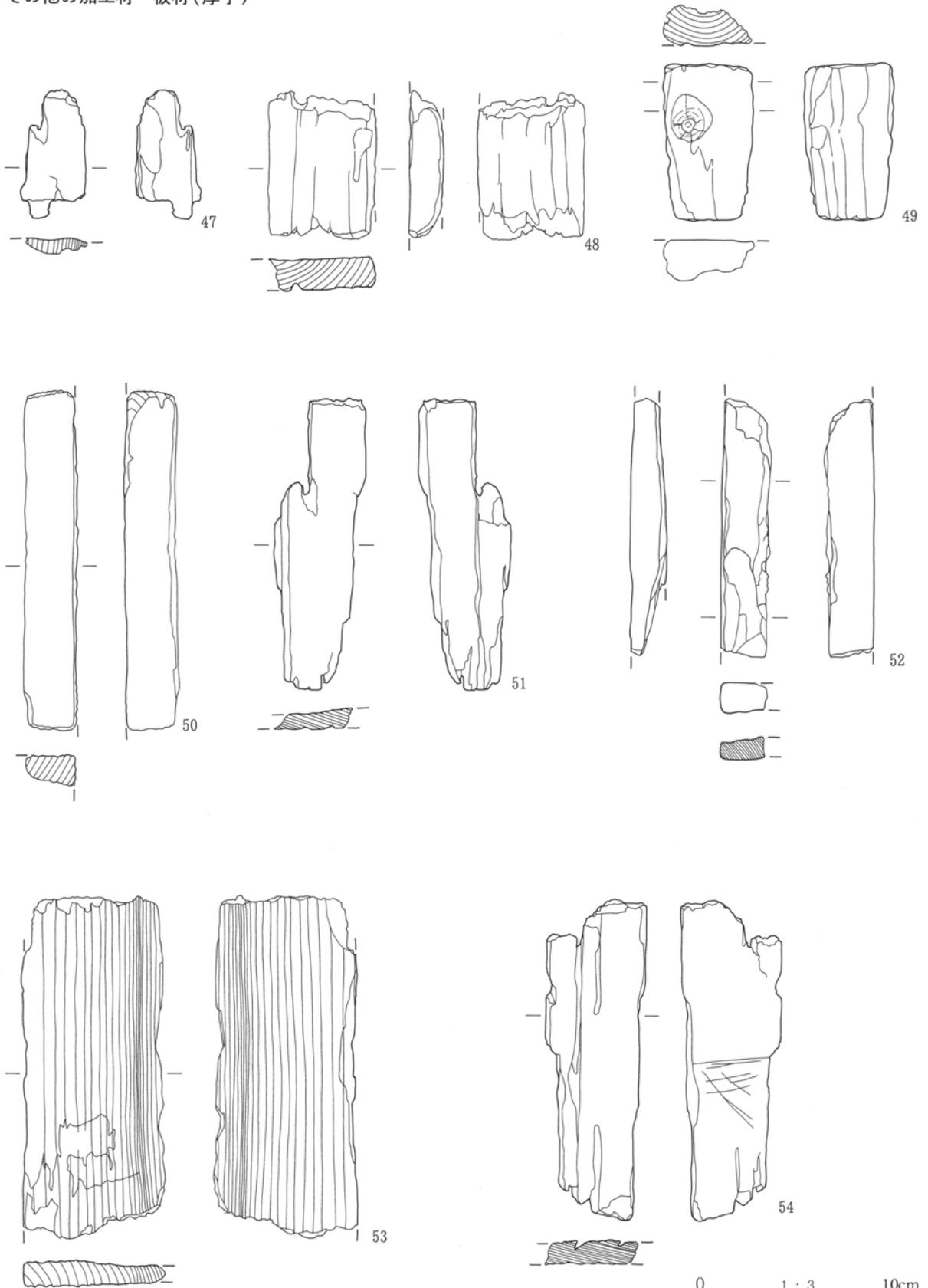


その他の加工材 板材(薄手)

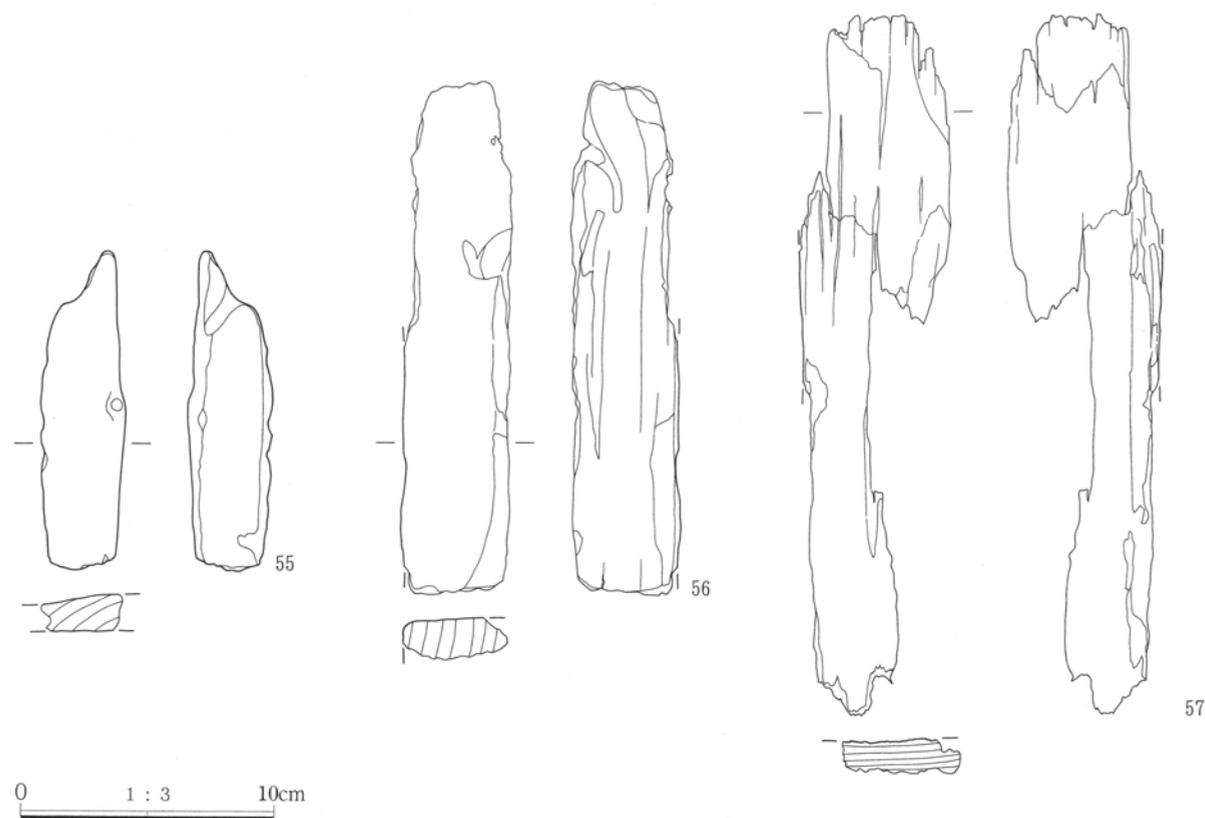


第49図 D1区遺物包含層出土木器(6)

その他の加工材 板材(厚手)



第50図 D1区遺物包含層出土木器(7)



第51図 D1区遺物包含層出土木器(8)

D1区遺物包含層出土木器観察表

No.	挿図 No. 図版 No.	木器	樹種 木取り	計測値 (cm)	特徴など
1	第44図 PL-28	円形曲物 底板か蓋板 カキゾコ A	モミ属 柾目	径 16.0 厚 1.0	小形円形曲物。カキゾコ底板または蓋板か。側板をはめ込む段差が、底(蓋)板の周縁から斜め下に切り込んで直に立ち上がる。樺皮で接合した樺皮結合曲物。側板との結合部1ヶ所あり。1ヶ所に2つの結合孔。結合孔には樺皮が残存。
2	第44図 PL-28	円形曲物 底板か蓋板 カキゾコ A	ヒノキ 板目	径 16.2 厚 0.9	小形円形曲物。カキゾコの底板または蓋板。残存部に接合孔確認できない。側板をはめ込む段差が、底(蓋)板の周縁から斜め下に切り込んで直に立ち上がる。厚みあり。残存部には側板との結合孔はない。
3	第44図 PL-28	円形曲物 底板か蓋板 カキゾコ A	ヒノキ 板目	径 (15.6) 厚 0.9	小形円形曲物。カキゾコの底板または蓋板。側板との接合部2ヶ所残存。2ヶ所にそれぞれ2つの結合孔。結合孔には樺皮が残存。側板をはめ込む段差が、底(蓋)板の周縁から斜め下に切り込んで直に立ち上がる。厚みあり。
4	第44図 PL-28	円形曲物 底板か蓋板 カキゾコ B	ヒノキ 柾目	径 (18.0) 厚 0.6	小形円形曲物。カキゾコの底板または蓋板。側板との結合部2ヶ所。1ヶ所に2つの結合孔。1ヶ所残存不良。結合孔には樺皮が残存。側板をはめ込む段差が、底(蓋)板の周縁から水平に切り込んで直に立ち上がる。
5	第44図 PL-28	円形曲物 底板か蓋板 カキゾコ B	ヒノキ 柾目	径 (17.2) 厚 0.6	小形円形曲物。カキゾコの底板または蓋板。側板をはめ込む段差が、底(蓋)板の周縁から水平に切り込んで直に立ち上がる。残存部には側板との結合孔はない。
6	第44図 PL-28	円形曲物 底板か蓋板 カキゾコ B	ヒノキ 柾目	径 (18.0) 厚 0.4	小形円形曲物。底板または蓋板か。側板をはめ込む段差が、底(蓋)板の周縁から水平に切り込んで直に立ち上がる。残存部には側板との結合孔はない。
7	第44図 PL-28	円形曲物 底板か蓋板 カキゾコ B	ヒノキ 追柾目	径 (16.0) 厚 0.5	小形円形曲物。カキゾコの底板または蓋板。側板をはめ込む段差が、底(蓋)板の周縁から斜め下に切り込んで斜めに立ち上がる。残存部には側板との結合孔はない。
8	第44図 PL-28	円形曲物 底板か蓋板 カキゾコ B	ヒノキ 柾目	径 (18.0) 厚 0.8	小形円形曲物か。カキゾコの底板または蓋板。側板をはめ込む段差が、底(蓋)板の周縁から水平に切り込んで直に近く立ち上がる。結合部1ヶ所に2つの結合孔。樺皮が残存。
9	第44図 PL-28	円形曲物 底板か蓋板 カキゾコ	ヒノキ 追柾目	径 - 厚 0.5	小形円形曲物。カキゾコの底板または蓋板。側板をはめ込む段差が僅かに残存。腐食激しく残存不良。残存部には側板との結合孔はない。

[3] 奈良・平安時代の遺構と遺跡

No.	挿図 No. 図版 No.	木器	樹種 木取り	計測値 (cm)	特徴など
10	第44図 PL-28	円形曲物 底板か蓋板 カキノコ	ヒノキ 榎目	径 - 厚 0.3	小形円形曲物。カキノコの底板または蓋板。側板をはめ込む段差が僅かに残存。腐食激しく残存不良。残存部には側板との結合孔はない。
11	第45図 PL-28	楕円形曲物 底板か蓋板 カキノコ A	ヒノキ 板目	径 - 厚 0.7	楕円形曲物。カキノコの底板または蓋板。側板との接合部1ヶ所に3つの接合孔。結合孔には樺皮が残存。側板をはめ込む段差が、底(蓋)板の周縁から斜め下に切り込んで直に立ち上がる。
12	第45図 PL-28	楕円形曲物 底板か蓋板 カキノコ A	アスナロ 板目	径 - 厚 1.1	楕円形曲物か。カキノコの底板または蓋板。側板をはめ込む段差が、底(蓋)板の周縁から斜め下に切り込んで直に立ち上がる。他に比べて厚みがある。残存部には側板との結合孔はない。
13	第45図 PL-29	円形曲物 底板か クレゾコ	モミ属 板目か	径(46.0) 厚 1.5	大形円形曲物。クレゾコの底板か。側面に木釘の痕が5ヶ所確認でき、その内4ヶ所に木釘が残存する。側面の断面形状は底面に対して垂直。片面のみの腐食は使用時のものか。
14	第45図 PL-29	円形曲物 底板か クレゾコ	モミ属 板目	径 15.0 厚 1.0	小形円形曲物。クレゾコの底板か。側面に木釘の痕が1ヶ所確認でき、木釘が残存する。側面の断面形状は底面に対して垂直。片面のみの腐食は使用時のものか。
15	第45図 PL-29	円形曲物 底板か クレゾコ	モミ属 板目	径(10.0) 厚 0.9	小形円形曲物の底板か。残存する側面の腐食が激しく木釘痕は確認できないが、クレゾコの底板の可能性ある。側面の断面形状は底面に対して垂直。片面のみの腐食は使用時のものか。
16	第46図 PL-29	円形曲物か 底板か蓋板 不明	不明 榎目	径(18.0) 厚 0.5	小形円形曲物か。底板または蓋板か。残存部には側板との結合孔はない。片面のみの腐食は使用時のものか。
17	第46図 PL-29	円形曲物か 底板か蓋板 不明	ヒノキ 榎目	径(15.8) 厚 0.5	小形円形曲物か。底板または蓋板か。残存部には側板との結合孔はない。側面の断面形状は斜め。
18	第46図 PL-29	円形曲物か 底板か蓋板 不明	ヒノキ 追榎目	径(16.0) 厚 0.5	小形円形曲物か。底板または蓋板か。残存部には側板との結合孔はない。側面の断面形状は底面に対して斜めか。
19	第46図 PL-29	円形曲物か 底板か蓋板 不明	不明 榎目	径 - 厚 0.9	小形円形曲物か。曲物の底板あるいは蓋板か。腐食進み残存不良。残存部には側板との結合孔はない。
20	第46図 PL-29	曲物 側板	A~Cモミ属 D~Hケヤキ 榎目	A:長(2.0)幅1.4厚0.2 B:長(10.9)幅1.9厚0.2 C:長(11.0)幅2.0厚0.2 D:長(6.6)幅2.5厚0.4 E:長(11.6)幅2.9厚0.5 F:長(1.8)幅2.7厚0.7 G:長(9.2)幅2.2厚0.4 H:長(5.3)幅2.1厚0.4 A~Cは比較的薄く、D~Hは比較的厚い。Eに3ヶ所、Gに2ヶ所の結合孔あり。	
21	第47図 PL-30	挽物 皿	ケヤキ 縦木取り	径 - 厚 1.9	周縁部分は腐食しており、概形は不明である。底部内面に4ヶ所のロクロの爪痕が残存。爪は5.5×5.0cmを測る。高台部にロクロ目が観察できる。未製品か。
22	第47図 PL-30	挽物 椀・皿	ケヤキ 縦木取り	径 - 厚 1.1	挽物の椀・皿の高台部。底部内面は腐食のため残存状態が良くない。高台部にロクロ目が観察できる。底部の3つの孔は補修孔か。
23	第47図 PL-30	漆器 皿	ケヤキ 縦木取り	厚 0.3~0.5	小形の皿状の漆器。①~⑩の破片が同一個体。①口縁片、②~⑤体部片、⑥~⑩が底部片であろう。漆塗膜の剥離した個所が所々あり、木地が露出していて残存状態は良くない。(第6章[3]分析参照)
24	第47図 PL-30	播粉木	不明 芯持ち材	長 27.0 残 最大径 4.5	小口面が凸レンズ状に播り減っている。刃物痕が多くある。上面の刃物痕は深いものが7ヶ所ある。左側下部の刃物痕は浅い物が多くある。
25	第47図 PL-30	火鑽臼	クリ 板目	長 16.3 残 幅 4.6 厚 1.9	2ヶ所の臼部が残存。残存する2つの臼部の径は、ほぼ同じ。底部で1.5cm、上部で2.0cm程度。深さはそれぞれ異なり、一方が1.5cm、もう一方が1.0cmを測る。
26	第48図 PL-30	杭	不明 芯持ち材	長 26.0 残 径 6.0	杭の先端部。加工痕が多くある。上部欠損状態で検出された。
27	第48図 PL-30	加工材 孔あり	クリ 榎目	長 14.2 幅 4.5 厚 0.6	孔のある加工材。板状の木片に3つの斜め方向の孔がある。孔は釘孔か。上下面が加工面。他は破面。3つの孔の径はどれも約5mm。
28	第48図 PL-30	加工材 孔あり	クスギ節 榎目	長 14.6 幅 3.1 厚 0.7	孔のある加工材。板状の木片に2つの斜め方向の孔がある。孔は釘孔か。上下面と側面1面が加工面。他は破面。2つの孔の径は3~5mm。
29	第48図 PL-30	加工材 孔あり	ヒノキ 追榎目	長 11.3 幅 2.5 厚 0.9	孔のある加工材。板状の木片に2つの斜め方向の孔がある。孔は釘孔か。上下面が加工面。他は破面。2つの孔の径は3~5mm。
30	第48図 PL-30	部材 出ほぞ部	クリ 板目か	長 35.5 残 幅 5.5 厚 1.5	角材の先端部に出ほぞを作る。幅6cm。出ほぞの幅2.2cm、長さ3cm。出ほぞ部分は破面なく残存している。
31	第48図 PL-31	加工材 木製品か	ヒノキ 榎目	長 15.4 幅 3.2 厚 1.4	4面加工面の柱状の加工材。2面破面。ヒノキを使用した木製品の一部か。丁寧な成・整形。

第4章 石原東遺跡D区の遺構と遺物

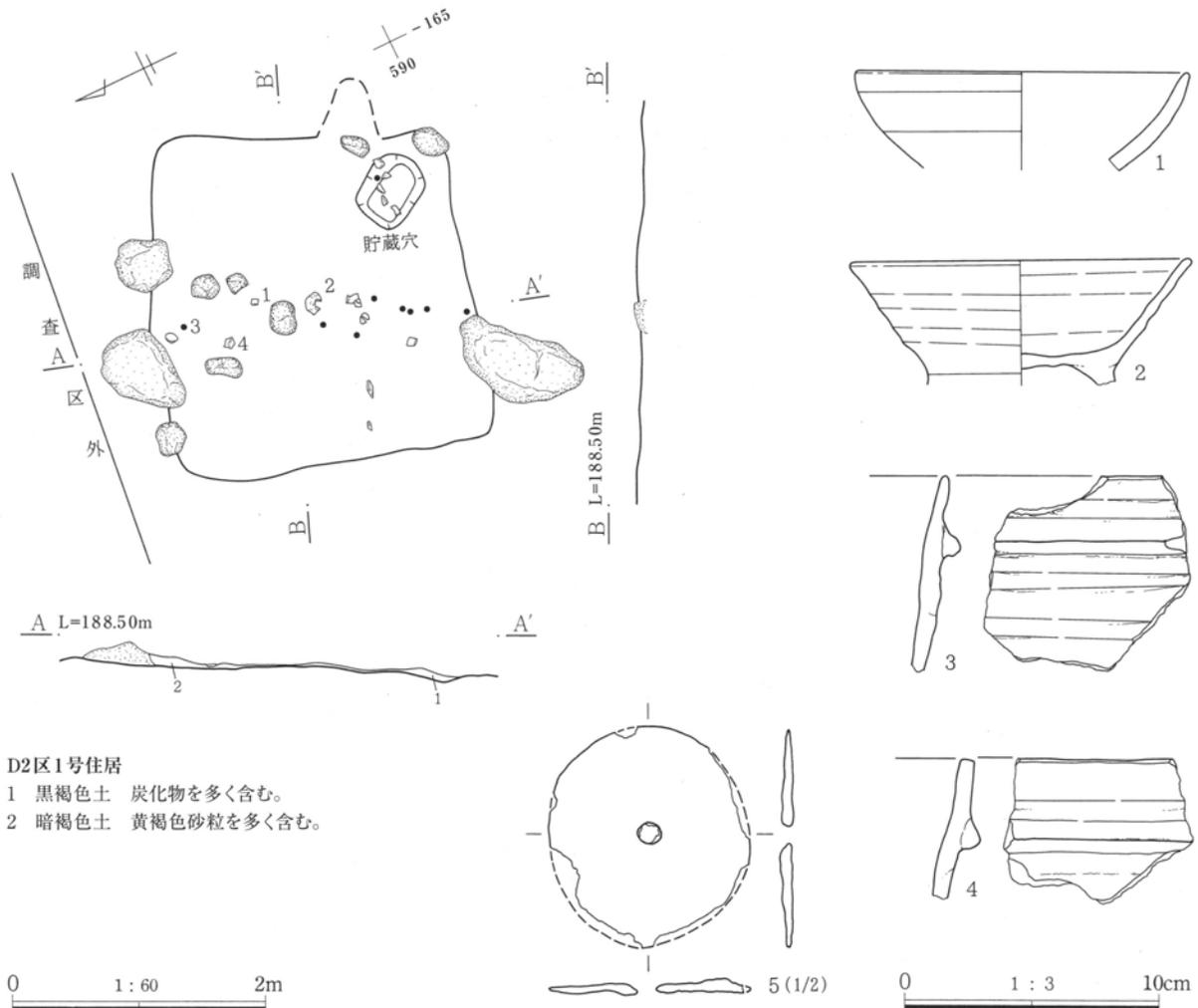
No.	挿図No. 図版No.	木器	樹種 木取り	計測値 (cm)	特徴など
32	第48図 PL-31	加工材 柱状	モミ属 榎目	長 5.5 幅 3.7 厚 2.3	5面加工面の柱状の加工材。1面は抉れている。1面は破面。
33	第49図 PL-31	両端が炭化 した加工材	アスナロ 板目	長 14.2 幅 2.3 厚 0.9	板状の木片。両端炭化。焼け焦げたものか。ほぼ廃棄時の状態を留める。
34	第49図 PL-31	加工材 棒状	モミ属 板目か	長 8.0残 幅 2.1残 厚 0.9	裏面破面の棒状加工材の先端部。先端部はやや丸みをつけて加工している。
35	第49図 PL-31	加工材 棒状	モミ属 板目	長 7.0残 幅 3.0残 厚 1.2残	上面下部を斜めに加工した棒状の加工材。先端部か。
36	第49図 PL-31	加工材 板材(薄)	ヒノキ 追榎目	長 14.4 幅 3.3 厚 0.4	上下面加工痕のある板材。側面に加工痕。
37	第49図 PL-31	加工材 板材(薄)	ヒノキ 追榎目	長 19.2 幅 6.5 厚 0.9	上下面加工面。側面はすべて破面の板材。
38	第49図 PL-31	加工材 板材(薄)	モミ属 榎目	長 9.5 幅 4.3 厚 0.7	左側面と上面が加工面の板材。他は破面。
39	第49図 PL-31	加工材 板材(薄)	モミ属 榎目	長 10.0残 幅 3.2残 厚 0.7	上下面加工面。側面はすべて破面の板材。
40	第49図 PL-31	加工材 板材(薄)	モミ属 榎目	長 6.2残 幅 3.3残 厚 0.5残	上面加工面。下面と側面はすべて破面。板材か。
41	第49図 PL-31	加工材 板材(薄)	モミ属 榎目	長 8.0 幅 2.3 厚 1.0	上下面加工面。側面はすべて破面の板材。
42	第49図 PL-31	加工材 板材(薄)	モミ属 追榎目	長 7.5 幅 3.7 厚 0.4	上下面加工面。側面はすべて破面の板材。
43	第49図 PL-31	加工材 板材(薄)	ツガ属 板目	長 7.0残 幅 3.5残 厚 0.4	上下面加工面の板材。他は破面。
44	第49図 PL-31	加工材 板材(薄)	不明 榎目	長 8.4 幅 3.5 厚 0.7	右側面と上下面が加工面の板材。他は破面。
45	第49図 PL-31	加工材 板材(薄)	不明 榎目	長 6.0 幅 4.2 厚 0.3	下面が加工面。側面はすべて破面の板材。
46	第49図 PL-31	加工材 板材(薄)	不明 板目	長 10.9 幅 2.9 厚 0.4	下面が加工面の板材。側面はすべて破面。
47	第50図 PL-32	加工材 板材(厚)	モミ属 榎目	長 6.5残 幅 3.5残 厚 0.7残	上面加工面。下面と側面はすべて破面。板材か。
48	第50図 PL-32	加工材 板材(厚)	モミ属 板目	長 7.0残 幅 5.1残 厚 1.7	下面と側面1面が加工面の板材。
49	第50図 PL-32	加工材 板材(厚)	モミ属 板目	長 7.8残 幅 4.2残 厚 2.0残	上面加工面。下面と側面はすべて破面。板材か。
50	第50図 PL-32	加工材 板材(厚)	モミ属 板目	長 17.2残 幅 2.5残 厚 1.5残	右側面と上面が加工面。他は破面。板材か。
51	第50図 PL-32	加工材 板材(厚)	モミ属 板目	長 15.0残 幅 4.0残 厚 1.3	上下面加工の板材。
52	第50図 PL-32	加工材 板材(厚)	モミ属 板目	長 12.7残 幅 2.6 厚 1.5	上下面加工面。側面はすべて破面の板材。
53	第50図 PL-32	加工材 板材(厚)	モミ属 板目	長 17.0残 幅 7.0残 厚 1.2	右側面と上下面が加工面の板材。他は破面。右側面と下面が炭化している。厚さ1.2cm程の板材。
54	第50図 PL-32	加工材 板材(厚)	モミ属 板目	長 15.5残 幅 4.0残 厚 1.5	上下面加工の板材。
55	第51図 PL-32	加工材 板材(厚)	クリ 板目	長 12.5残 幅 2.9残 厚 1.3	上下面加工面。側面はすべて破面の板材。
56	第51図 PL-32	加工材 板材(厚)	クヌギ節 追榎目	長 20.0 幅 4.3 厚 2.0	左側面と上面が加工面の板材。他は破面。
57	第51図 PL-32	加工材 板材(厚)	不明 板目	長 28.0残 厚 1.3	上面と側面1面が加工面。板材か。

(2) 竪穴住居

D2区1号住居(第52図、PL8・33)

位置 590-165 方位 E-24°-S 形状 長軸 2.59m・短軸2.51mで長軸を東西にもつ方形である。面積(6.28)m<sup>2</sup> 壁高 13cm 重複 なし 床面 明確な床面は検出されなかった。遺物の出土状況から床面とした。掘り方面を床面とする。壁溝 確認されなかった。柱穴 確認されなかった。貯蔵穴 住居の南東隅に設置。深さ30cm、長軸43cm、短軸56cmの角の丸い長方形を呈す。貯蔵穴内から羽釜の胴部、須恵器の椀が出土。竈 東壁の南側に設置。不明瞭。竈周辺に炭化物を多く含むとの調査所見を得た。遺物 床直から須恵器椀、杯・椀、羽釜、貯蔵穴内から鉄製紡錘車の円盤部、埋土から須恵器椀が出土

した。所見 方形の平面プラン、遺物の出土状況から、竪穴住居としたが、不明瞭な遺構である。残存状況が悪く、壁高を確認できない部分もあった。住居の北壁・南壁際で礫が確認された。礫は地山中のもので、住居廃絶後に混入したものではない。貯蔵穴内から鉄製紡錘車の円盤部が出土した。本遺構から約20m東の石原東遺跡D2区4号住居の埋土から鉄製紡錘車の可能性のある鍛造鉄製品、約350m北西の諏訪ノ木V遺跡1区3号住居の床直からは完形の鉄製紡錘車出土した。本遺構の時期は、出土遺物より10世紀後半に比定される。



第52図 D2区1号住居平面・断面図、出土遺物図

D2区1号住居出土遺物観察表

No.	挿図No. 図版No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ③色調	②焼成	特徴など
1	第52図 PL-33	須恵器 椀	+7 口~体部片	口(13.2) 高4.9残 底- 高台-	①粗砂 ③灰色	②還元焰	ロクロ成形、右回り回転。
2	第52図 PL-33	須恵器 椀	床直 口~高台3/4	口13.5 高5.0残 底7.3 高台-	①粗砂 ③灰色	②還元焰	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。
3	第52図 PL-33	羽釜	床直 口縁片	口- 高7.7残 底-	①粗砂 ③にぶい橙色	②酸化焰	銕は貼付。
4	第52図 PL-33	羽釜	床直 口縁片	口- 高5.6残 底-	①粗砂 ③にぶい橙色	②酸化焰	銕は貼付。
No.	挿図No. 図版No.	遺物名	①重②磁③メ	出土位置 計測値(cm)	特徴など		
5	第52図 PL-33	鉄製紡錘車 円盤部 軸なし	①16.8 ②8 ③H(○)	貯蔵穴 円盤径5.4 孔径0.4	鉄製紡錘車の円盤部。平面形は正円形ではなく、やや長手の円形となる。左側面は、2cm程の範囲で窪んでいる。下手側の1ヶ所と右側の2ヶ所の側部が小さく欠けている。円盤部全体としては平板ながらも、上面が僅かになで肩で、下面は僅かに肉が薄くなっている。中心部に残る軸部を通す孔はほぼ円形で、径は6.5mmを測る。		

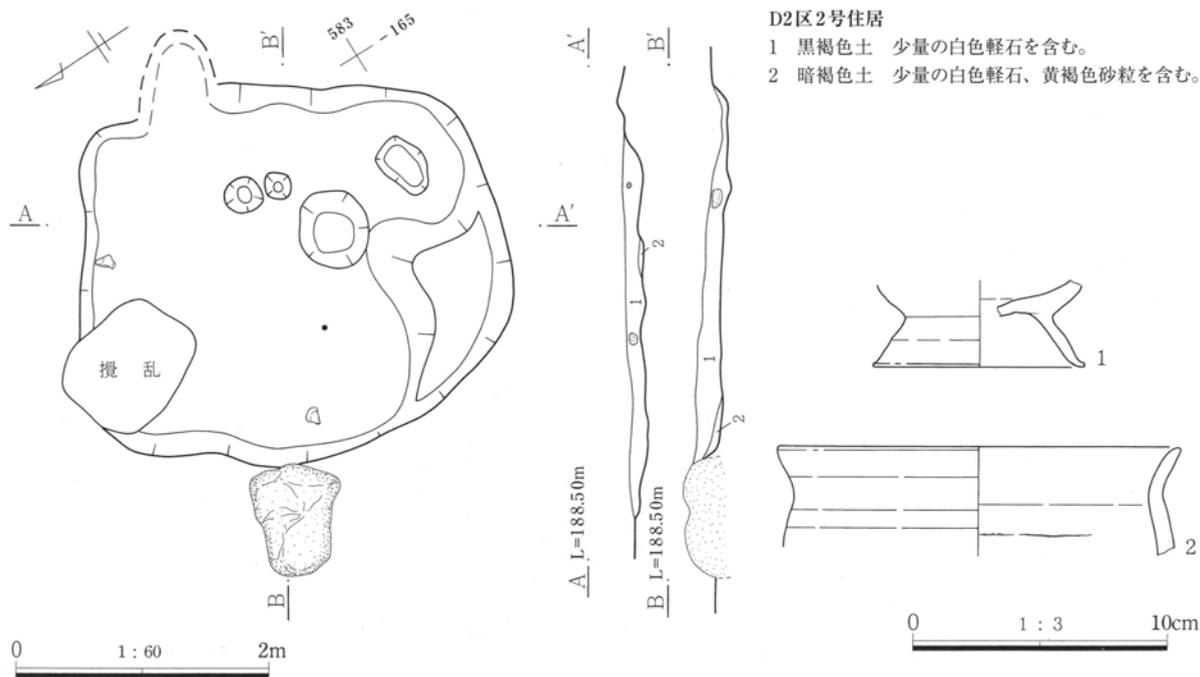
①重量②磁着度③メタル度

D2区2号住居(第53図、PL8・33)

位置 583-165 方位 E-24°-S 形状 長軸3.38m・短軸2.93mで長軸を東西にもつ隅丸方形である。

面積(7.38)m<sup>2</sup> 壁高20cm 重複 住居北角が攪乱に切られる調査所見を得た。床面 明確な床面は検出されなかった。掘り方面を床面とする。壁溝 確認されなかった。柱穴 確認されなかった。貯蔵穴 明確に検出されなかった。住居北角の窪みは、貯蔵穴の可能性はある。竈 不明瞭。南東壁の北側に竈

が設置された可能性が高いという調査所見を得た。埋土に焼土粒や炭化物粒は認められない。遺物 埋土から須恵器椀、羽釜、竈から須恵器甕が出土した。所見 方形の平面プラン、遺物の出土状況から、竪穴住居としたが、不明瞭な遺構である。特に竈の残存状況が悪く、埋土に焼土粒や炭化物粒は含まれず、灰層も確認されなかった。南西壁外の礫は地山中のものである。本遺構の時期は、出土遺物より10世紀第3四半期に比定される。



第53図 D2区2号住居平面・断面図、出土遺物図

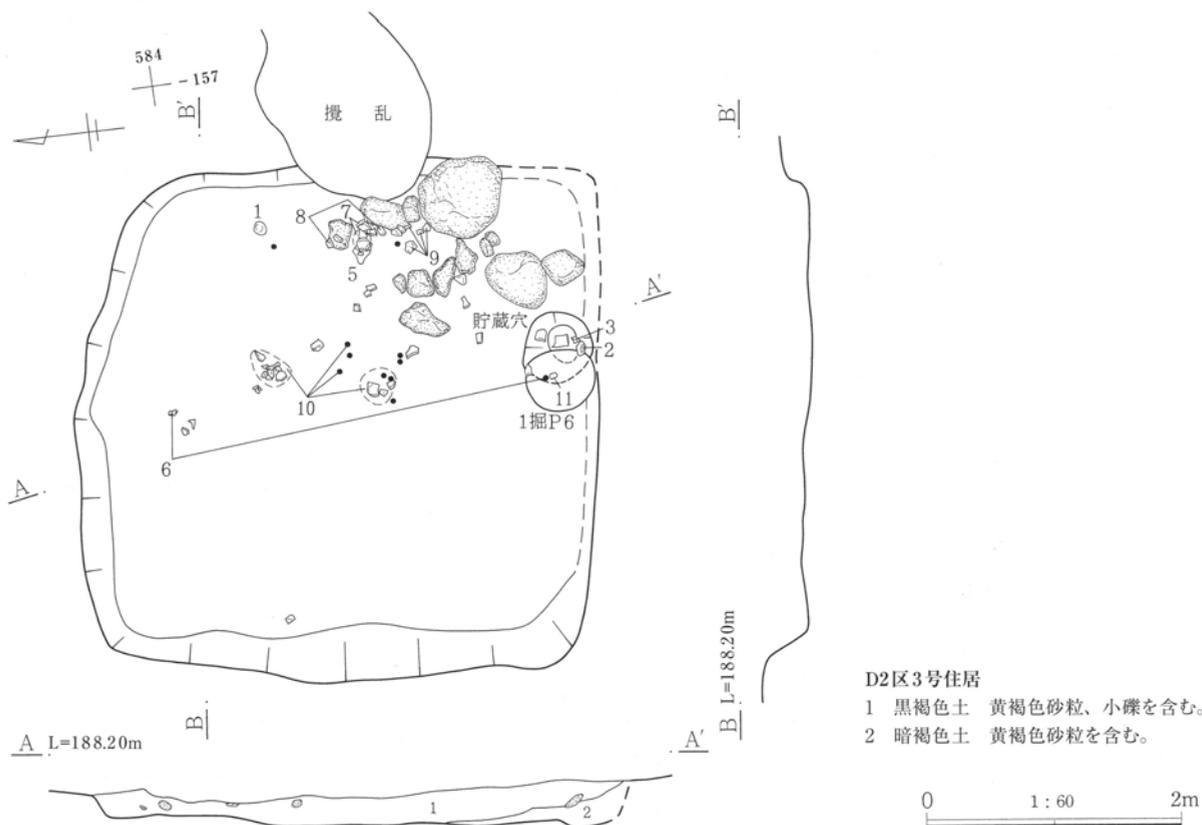
D2区2号住居出土遺物観察表

No.	挿図No. 図版No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ③色調	②焼成	特徴など
1	第53図 PL-33	須恵器 椀	埋土 底~高台1/3	口 - 高 3.5 残 底 (5.8) 高台 (8.4)	①粗砂 ③灰色	②還元焰	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。
2	第53図 PL-33	須恵器 甕	カマド 口縁片	口 (16.0) 高 4.3 残 底 -	①砂粒 ③明褐色	②良好	ロクロ成形。

D2区3号住居 (第54・55図、PL8・33)

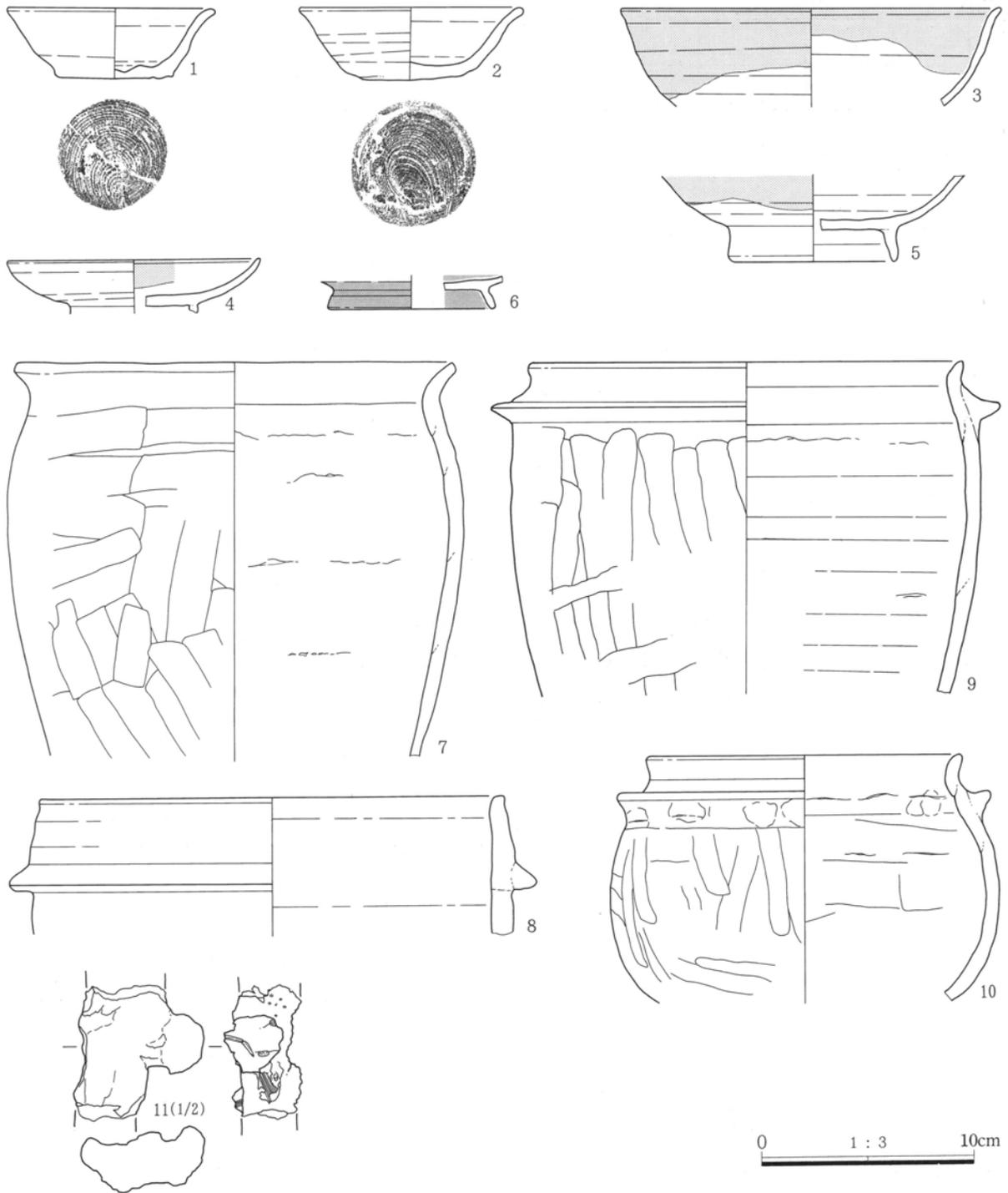
位置 584-157 方位 E-7°-S 形状 長軸 4.12m・短軸4.07mで長軸を南北にもつ方形である。面積(12.82)㎡ 壁高 36cm 重複 1号掘立柱建物と重複。1号掘立柱建物が、D2区3号住居を切って構築する調査所見を得た。床面 明確な床面は検出されなかった。掘り方面を床面とする。壁溝 確認されなかった。柱穴 確認されなかった。貯蔵穴 住居の南東に設置。深さ 22cm、長軸57cm、短軸52cmの楕円形を呈す。緑釉陶器椀、灰釉陶器椀、須恵器杯が出土。竈 攪乱が重複するため不明瞭。遺物 床直から羽釜、貯蔵穴内から緑釉陶器椀、灰釉陶器椀、須恵器杯、埋土から須恵器杯、灰釉陶器

皿、灰釉陶器椀、羽釜、土師器甕、須恵器椀、須恵器大甕、椀形鍛冶滓1点が出土した。所見 大小の礫が住居床面で確認された。礫は住居廃絶後に混入したのではなく、地山中に含まれているものである。方形の平面プラン、遺物の出土状況から、竪穴住居としたが、不明瞭な遺構である。竈位置は特定できない。椀形鍛冶滓1点が埋土から出土したが、鉄関連遺物は他になく、鍛冶工房に関連する遺構も検出されなかった。出土位置などから椀形鍛冶滓は他遺構からの混入の可能性が高い。本遺構の時期は、出土遺物より10世紀第3四半期に比定される。



第54図 D2区3号住居平面・断面図

第4章 石原東遺跡D区の遺構と遺物



第55図 D2区3号住居出土遺物図

D2区3号住居出土遺物観察表

No.	挿図No. 図版No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
1	第55図 PL-33	須恵器 杯	+7 ほぼ完形	口10.0 高3.3 底5.6	①粗砂 ②酸化焰 ③にぶい橙色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。
2	第55図 PL-33	須恵器 杯	貯蔵穴 完形	口10.6 高3.5 底5.0	①粗砂 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。
3	第55図 PL-33	灰釉陶器 椀	貯蔵穴 口～体部1/3	口(18.0) 高4.6残 底 - 高台 -	①細砂 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部切り離し技法はナデで不明。高台は貼付。釉調は透明感のある緑色をおびた灰色。施釉方法は漬け掛け。大原2号窯式期。

No.	挿図 No. 図版 No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
4	第55図 PL-33	灰釉陶器 皿	埋土 口~高台片	口(12.0)高2.6 底(6.0) 高台(6.0)	①細砂 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部切り離し技法はナデで不明。高台は貼付。釉調は透明感のある緑色をおびた灰色。施釉方法は漬け掛け。大原2号窯式期。
5	第55図 PL-33	灰釉陶器 椀	+16 体~高台1/3	口- 高4.1残 底8.0 高台7.7	①細砂 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部切り離し技法はナデで不明。高台は貼付。釉調は透明感のある緑色をおびた灰色。施釉方法は漬け掛け。虎渓山1号窯式期。
6	第55図 PL-33	緑釉陶器 椀	貯蔵穴 底~高台1/3	口- 高1.6残 底(7.6) 高台(8.0)	①細砂(密) ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、回転方向は不明。高台は貼付。内外面とも施釉。東海産。10世紀前半。
7	第55図 PL-33	土師器 甕	+16 口~胴部1/6	口(21.0)高18.7残 底-	①粗砂 ②良好 ③明褐色	口縁部から頸部は横ナデ。胴部ヘラ削り、内面ヘラナデ。
8	第55図 PL-33	羽釜	+13 口~胴上片	口(22.0)高6.5残 底- 鏝-	①粗砂 ②酸化焰 ③にぶい橙色	ロクロ整形。鏝は貼付。
9	第55図 PL-33	羽釜	+8 口~胴部1/5	口(20.6)高15.6残 底- 鏝(24.0)	①粗砂 ②酸化焰 ③にぶい橙色	ロクロ整形。鏝は貼付。胴部外面、体部から鏝に向けて縦方向のヘラ削り。
10	第55図 PL-33	羽釜	床直 口~胴部4/5	口15.0 高11.7残 底- 鏝17.7	①粗砂 ②酸化焰 ③にぶい橙色	鏝は貼付。胴部外面ヘラ削り。内面ヘラナデ
No.	挿図 No. 図版 No.	遺物名	①重②磁③メ	出土位置 計測値 (cm)	特徴など	
11	第55図 PL-33	椀形鍛冶滓 (小、含鉄)	①398 g ②7 ③錆化(△)	+8 長径4.2 短径4.2 厚さ2.1	小形の椀形鍛冶滓の肩部破片。短軸側の両側面が破面となる。上面はやや波状で全体的には平坦。下面是短軸方向に向かう舟底状。滓は中小の気孔の点在するもので、右側部寄りに含鉄部があったためか、放射割れが走る。	

①重量②磁着度③メタル度

D2区4号住居(第56・57図、PL8・34)

位置 575-146 方位 E-6°-S 形状 長軸  
4.12m・短軸4.06mで長軸を東西にもつ方形である。  
面積(15.06)㎡ 壁高 30cm 重複 住居北壁・南壁

が攪乱に切られる調査所見を得た。床面 明確な床  
面は検出されなかった。遺物の出土状況から床面と  
した。掘り方面を床面とする。壁溝 確認されなかつ

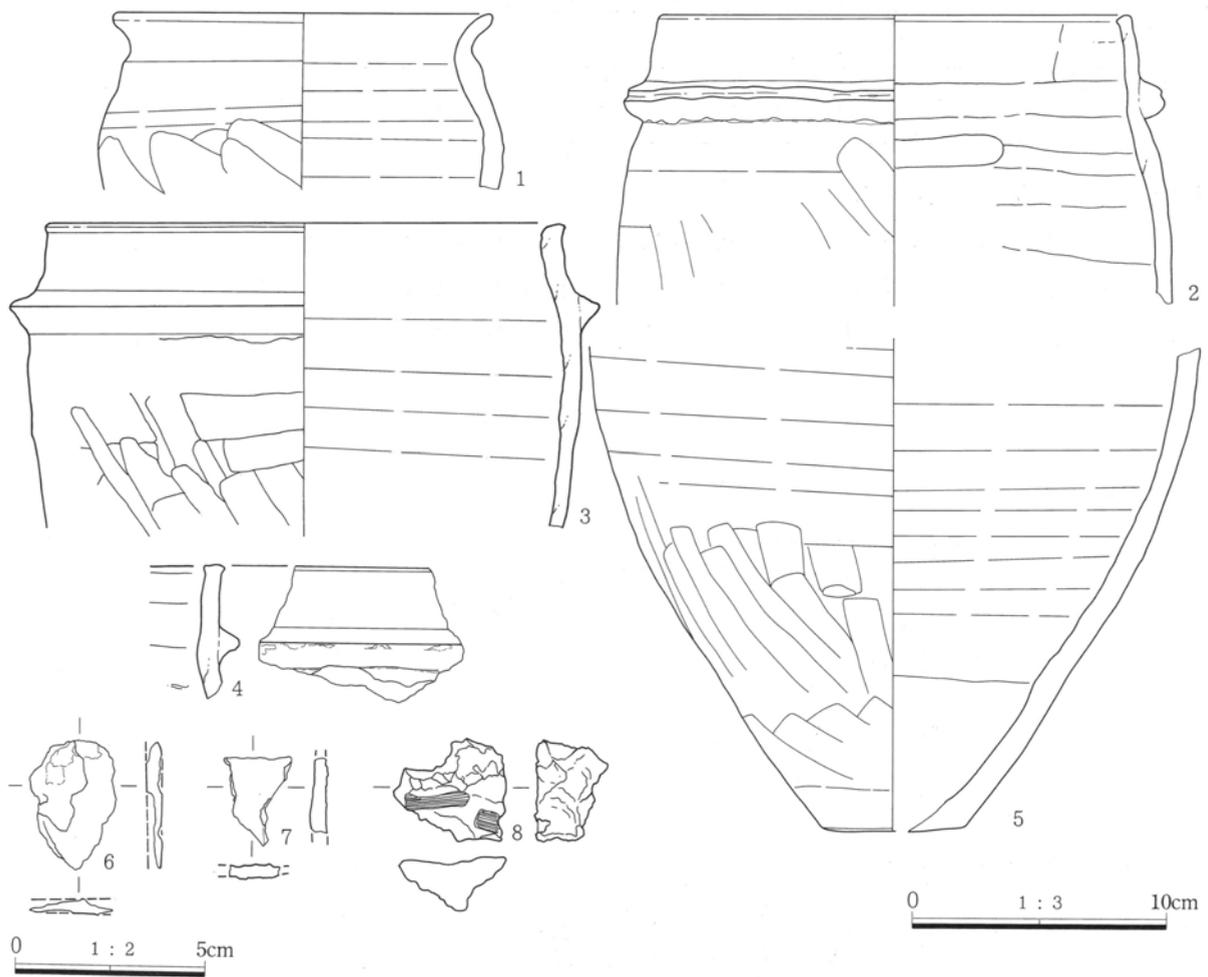


第56図 D2区4号住居平面・断面図

第4章 石原東遺跡D区の遺構と遺物

た。貯蔵穴 確認されなかった。竈 不明瞭。埋土に焼土粒や炭化物は認められない。竈は東壁の南側に設置された可能性が高いという調査所見を得た。  
 遺物 床直から土師器甕、須恵器杯、椀、羽釜、灰釉陶器杯、椀、埋土から鍛冶滓、薄板状の鍛造鉄製品が出土した。薄板状の鍛造鉄製品は鎌の可能性がある7、紡錘車の円盤部の可能性のある6の2点が出土した。実測可能な遺物が7個体ある。所見 大小の礫が住居床面で確認された。礫は地山中に含ま

れているものである。方形の平面プラン、遺物の出土状況から、竪穴住居としたが、不明瞭な遺構である。埋土から紡錘車の円盤部の可能性のある鉄製品(6)が出土した。本遺構から約20m西の石原東遺跡D2区1号住居の貯蔵穴から鉄製紡錘車の円盤部、約370m北西の諏訪ノ木V遺跡1区3号住居の床直からは完形の鉄製紡錘車が出土した。本遺構の時期は、出土遺物より10世紀第3四半期に比定される。



第57図 D2区4号住居出土遺物図

D2区4号住居出土遺物観察表

No.	挿図No. 図版No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ③色調	②焼成	特徴など
1	第57図 PL-34	土師器 甕	床直 口~肩部1/3	口(15.0)高7.0残 底-	①粗砂 ③明褐色	②良好	口縁部横ナデ、胴部外面ヘラ削り、内面ヘラナデ。
2	第57図 PL-34	羽釜	床直 口~胴上1/4	口(18.7)高11.5残 底- 鏝(21.3)	①粗砂 ③縮ぎみ	②酸化	鏝は貼付。胴部外面は、縦方向のヘラ削り。内面は横位ナデ。 ③にぶい橙色

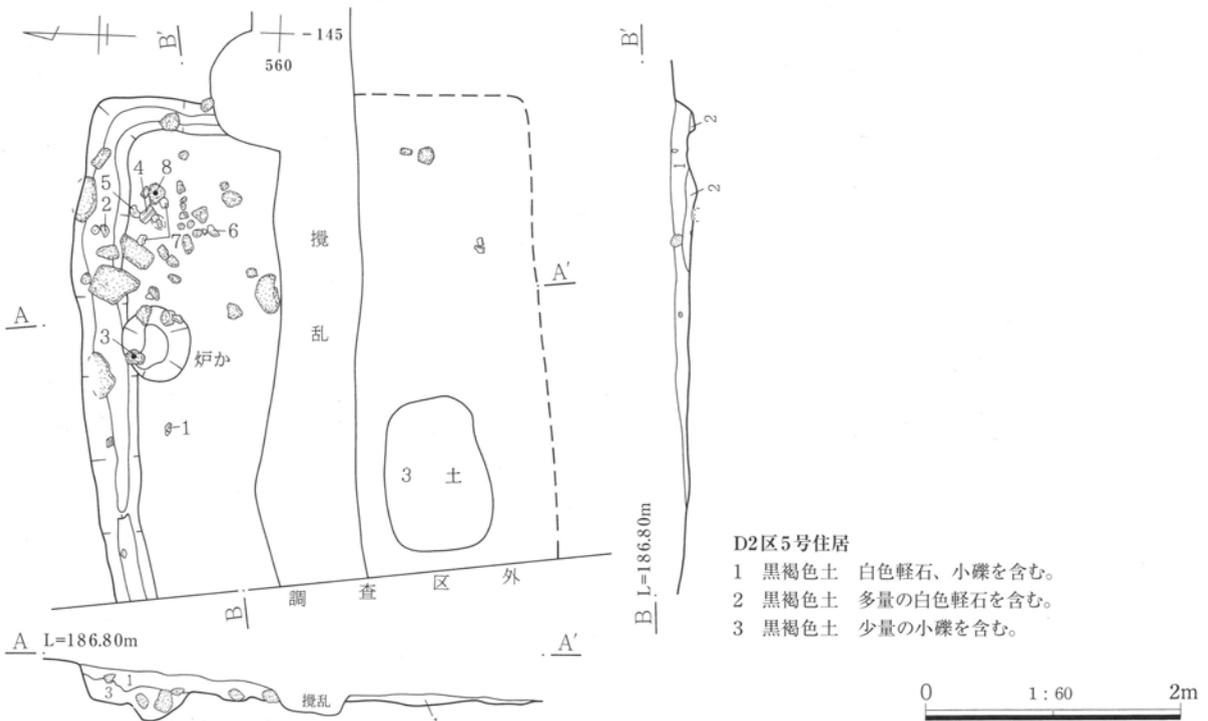
No.	挿図 No. 図版 No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
3	第57図 PL-34	羽釜	床直 口~胴上片	口(21.6)高11.8残 底 - 鏝(22.5)	①粗砂 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形。鏝は貼付。胴部外面ヘラ削り。
4	第57図 PL-34	羽釜	床直 口縁片	口 - 高5.3残 底 - 鏝 -	①粗砂 ②酸化焰 ③にぶい橙色	鏝は貼付。
5	第57図 PL-34	羽釜	床直 胴~底部2/3	口 - 高19.1残 底(5.6)	①粗砂 ②酸化焰 ③にぶい橙色	ロクロ整形。胴部外面ヘラ削り。
No.	挿図 No. 図版 No.	遺物名	①重②磁③メ	出土位置 計測値(cm)	特徴など	
6	第57図 PL-34	鍛造品 薄板状 紡錘車か	①4.2g ②5 ③錆化(△)	埋土 長3.4 幅2.2 厚0.4	薄板状の鉄製品の破片。表裏面の一部が層状に剥離している。左右方向の断面形でいうと、本来は右方向に向かい僅かに厚くなり、左側に向かい薄くなる鉄製品である。左側が円弧状に終息する点や、ひび割れも外周部に沿って伸びる点からみて、紡錘車の円盤部の肩部破片の可能性が高い。	
7	第57図 PL-34	鍛造品 薄板状 鎌か	①1.8g ②3 ③錆化(△)	埋土 長2.3 幅1.8 厚0.4	薄板状の鉄製品の破片。本来の厚みは2mm前後と薄い。上下面は平坦に成形され、左右の側部は破面となる。上手側の側部も破面の可能性を持つが、本来の平面形に沿って割れているのかもしれない。短軸端部側が僅かに薄くなる傾向をもち、鎌の破片かもしれない。	
8	第57図 PL-34	鍛冶滓	①8.7g ②1 ③なし	埋土 長径3.0 短径2.7 厚2.0	表裏に1~2cm大の木炭痕が目立つ鍛冶滓片。木炭痕と破面が交互に残り、本来の全体形状は不明。滓には中小の気孔が残り、結晶がやや発達する。結晶の発達具合からみて、中形から小形の椀形鍛冶滓の破片か。	

①重量②磁着度③メタル度

D2区5号住居(第58・59図、PL8・34)

位置 560-145 方位 測定不可能。形状 住居の南部分が不明瞭、西部分が調査区外のため、全形は確認できなかった。面積 不明。壁高 36cm 重複 3号土坑と重複。3号土坑が、D2区5号住居を切って構築する調査所見を得た。床面 明確な床面は検出されなかった。遺物の出土状況から床面とした。

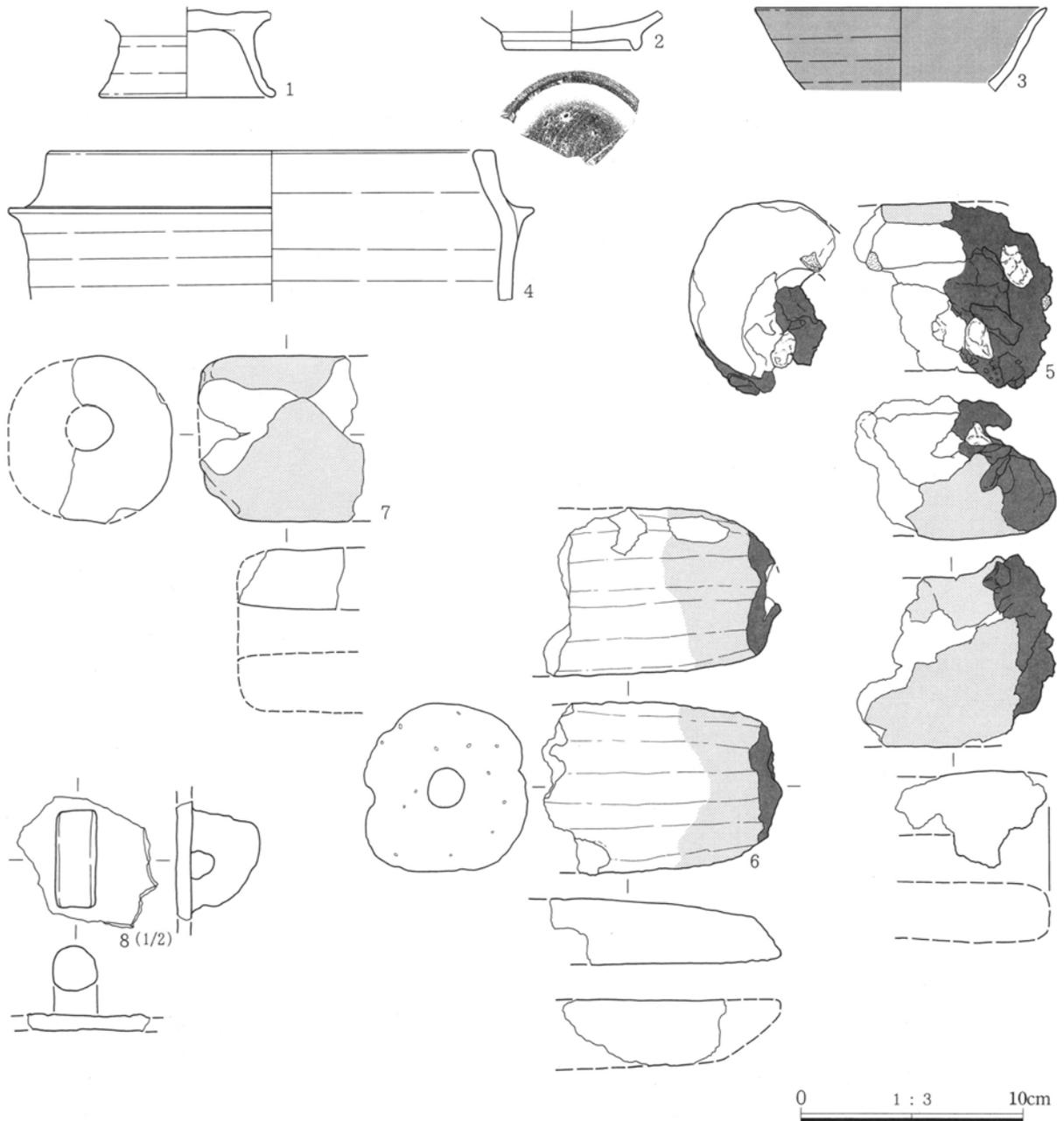
掘り方面を床面とする。北壁際の窪みは、焼土・炭化物粒が微量に混入し、炉の可能性があると調査所見である。窪みから、羽口が出土した。壁溝 幅20cm前後、深さ約8cm前後で壁際を掘り込む。レベルは一定せず、凹凸が多い。柱穴 確認されなかった。貯蔵穴 確認されなかった。竈 確認されなかった。



第58図 D2区5号住居平面・断面図

た。遺物 床直から緑釉陶器碗、灰釉陶器碗、須恵器碗、羽釜、羽口3点、鑄造品の把手部、埋土から灰釉陶器碗(2)が出土した。実測可能な遺物が8個体ある。所見 方形の平面プラン、遺物の出土状況から竪穴住居としたが、不明瞭な遺構である。緑釉陶器碗、灰釉陶器碗、土師器杯、羽釜などの遺物とともに、床直から羽口や鉄滓などが出土しており、鍛冶工房関連の遺構である可能性もある。羽口が出土した北壁際の窪みは、鍛冶炉の可能性が高いとの

調査所見である。遺構の残存状況が悪いため、詳細は不明である。窪みの埋土は住居の埋土とほとんど変化なく、窪み底部に微量の焼土粒や炭化物粒が確認されたとのことである。本遺構が鍛冶工房であれば、鑄造品の把手部は、故鉄として持ち込まれたものであろうか。本遺構の時期は、出土遺物より10世紀第3四半期に比定される。



第59図 D2区5号住居出土遺物図

D2区5号住居出土遺物観察表

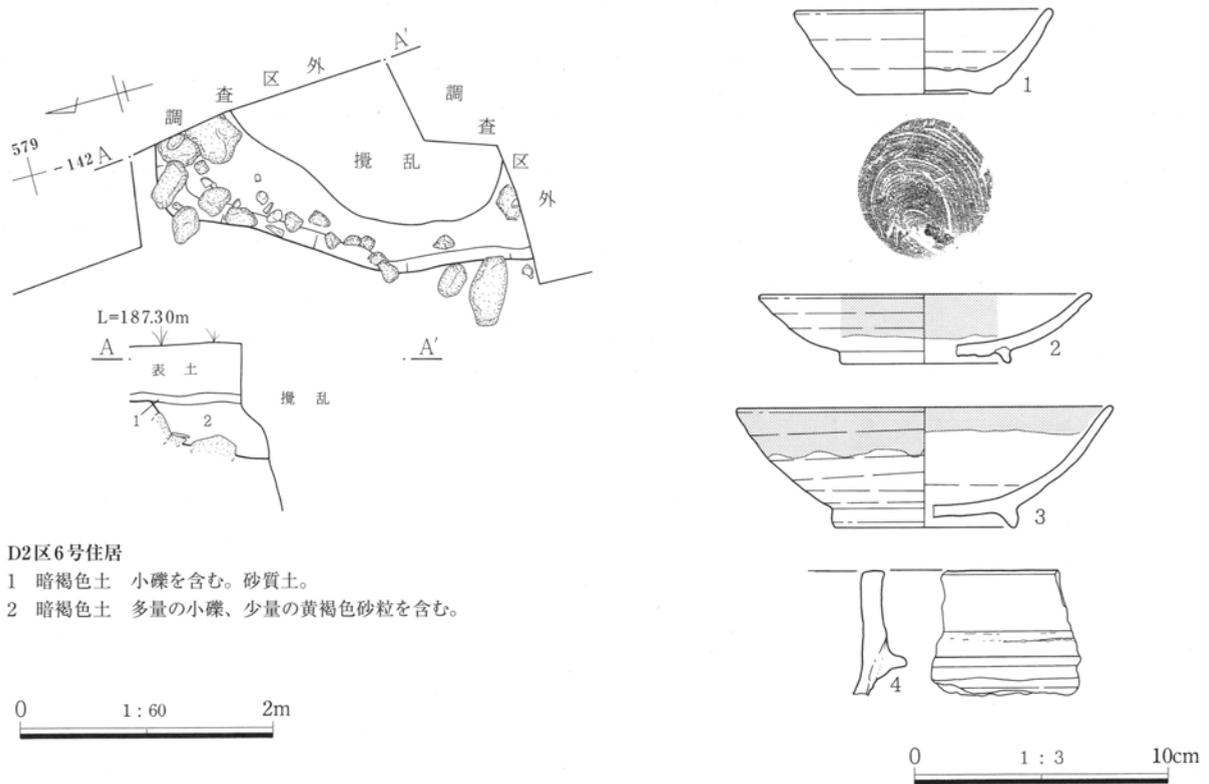
No.	挿図 No. 図版 No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
1	第59 PL-34	須恵器 椀	床直 高台部1/4	口 - 高 1.8 残 底 (6.0) 高台 (8.0)	①粗砂 ②酸化焰 ③橙色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。
2	第59 PL-34	灰釉陶器 椀	埋土 底～高台片	口 - 高 3.9 残 底 (6.3) 高台 (6.3)	①細砂 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。 大原2号窯式期。
3	第59 PL-34	緑釉陶器 椀	床直 口縁部片	口 (13.2) 高 3.7 残 底 -	①細砂 (密) ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。内外面とも施釉。東海産。10世紀前半。
4	第59 PL-34	羽釜	床直 口縁部片	口 (20.3) 高 6.8 残 底 - 鑄 (23.8)	①粗砂 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ整形。鑄は貼付。
No.	挿図 No. 図版 No.	遺物名	①重②磁③メ	出土位置 計測値 (cm)	特徴など	
5	第59図 PL-34	羽口 先端部 含鉄	①319 g ②5 ③特L (☆)	床直 長さ 9.0 残 内径 (2.5) 外径 (7.6)	通風孔部の前面に、鍛冶滓状となった小塊状の鉄塊が残されている、羽口の先端部破片。溶損角度は極めて強く、斜め方向になっている。通風孔部の径は2.5cm程度。先端部に固着する鉄塊は、2cm 大前後の長手の楕円形。一部は羽口先の滓層に潜り込んでいる。羽口胎土は軽石や安山岩系の石粒を含む砂質土。外面は丁寧に削り成形の後、ナデにより仕上げられている。含鉄で鍛冶素材の情報を持つ、まれな資料である。	
6	第59図 PL-34	羽口 先端部	①419 g ②2 ③なし	床直 長さ 10.8 残 内径 (1.8) 外径 (7.7)	外面の断面形が隅丸方形に成形された、羽口の体部から先端部破片。通風孔径がNo.7と同様、細いという特徴をもつ。1.7cm 前後の径。先端部は四方に向かい斜めに溶損しており、ほぼ1/4の部分が、ひび割れから欠落した状態で使用されている。そのため新たな破面も滓化・発泡している。外面は長軸方向に向かう削りにより整形されており、細い筋状の窪みや平坦面が残される。	
7	第59図 PL-34	羽口 体部	①204.2 g ②2 ③なし	床直 長さ 7.5 残 内径 (2.1) 外径 (7.5)	羽口の体部から基部にかけての破片。基部は平坦に整えられており、通風孔部の径が小さい。通風孔部は基部側が開きぎみで、先端部方向に向かい少し絞られている。胎土はやや砂質。外面は削りが丁寧に施されている。No.6と胎土や成・整形が異なるが、通風孔部の径が極めて細いという特色が共通する特異な羽口である。	
8	第59図 PL-34	鋳造品 把手部 環付部	①51.7 ②6 ③特L (☆)	床直 長 (4.2) 幅 (4.0) 厚 2.5	鋳造品の把手部にあたる、環付部を残す鉄製品の体部破片。環付部は幅1.2cm前後の厚くしっかりしたもので、上半部の方がより厚みがある。孔部は径7mm程で、鋳型のずれのためか、右方向に向い抜けている。体部は厚さ4～6mm前後で、比較的直線状である。環付の肩部に獣面がある例が多いが、本例は土砂が表面に残ったまま保存処理されているため、不明となっている。破片が小さく、環付が外側に付くのか、内耳なのかは判別しにくい。環付の形態から内耳の可能性を残す。	

①重量②磁着度③メタル度

## D2区6号住居 (第60図、PL8・34)

位置 579-142 方位 測定不可能。形状 住居の大部分が調査区域外になるため、全形は確認できなかった。北西部のみの検出。中央に円形の攪乱。面積 測定不可能。壁高 32cm 重複 住居中央が攪乱に切られる調査所見を得た。床面 不明瞭。壁溝 確認されなかった。柱穴 確認されなかった。貯蔵穴 確認されなかった。竈 確認されなかった。遺物 床直から灰釉陶器椀、埋土から須恵器杯、椀、

羽釜、灰釉陶器皿が出土した。実測可能な遺物が4個体ある。所見 住居床面に見られる礫は地山中のもので、住居廃絶後に混入したのではない。方形の平面プラン、遺物の出土状況から、竪穴住居としたが、不明瞭な遺構である。本遺構の時期は、出土遺物より10世紀第3四半期に比定される。



第60図 D2区6号住居平面・断面図、出土遺物図

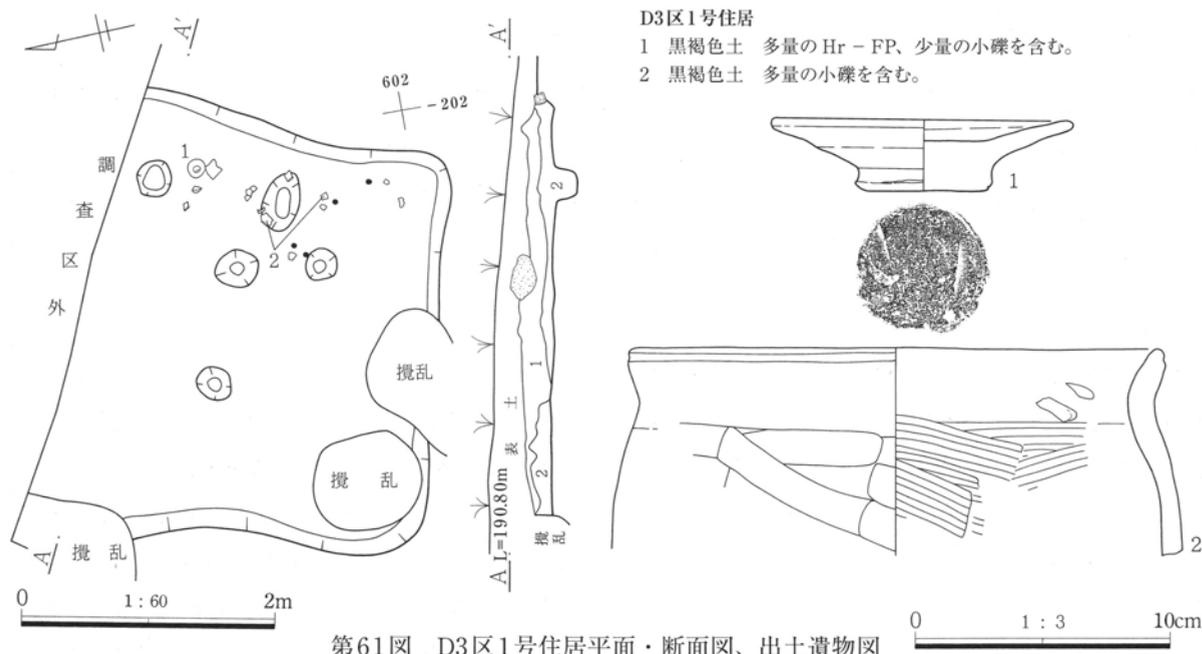
D2区6号住居出土遺物観察表

No.	挿図No. 図版No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
1	第60図 PL-34	須恵器 杯	+13 口~底部1/5	口(10.2) 高3.4 底5.4	①粗砂 ②酸化焰 ③にぶい橙色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。
2	第60図 PL-34	灰釉陶器 皿	+17 口~高台1/5	口(13.2) 高(2.7) 底(6.8) 高台(6.9)	①細砂 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。釉調は緑色をおびた灰色。施釉方法は漬け掛け。大原2号窯式期。
3	第60図 PL-34	灰釉陶器 椀	床直 口~高台1/3	口(15.0) 高4.8 底7.2 高台7.3	①細砂 ②酸化焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。釉調は透明感のない緑色をおびた灰色。施釉方法は漬け掛け。大原2号窯式期。
4	第60図 PL-34	羽釜	埋土 口縁部片	口 - 高4.9残 底 - 鏝 -	①粗砂 ②酸化焰 ③にぶい橙色	鏝は貼付。

D3区1号住居(第61図、PL8・35)

位置 602-202 方位 E-25°-S 形状 住居の北部分が調査区域外になるため、全形は確認できなかった。面積 測定不可能。壁高 12cm 重複 住居南西隅が攪乱に切られる調査所見を得た。床面 明確な床面は検出されなかった。遺物の出土状況から床面とした。掘り方面を床面とする。床面に数ヶ所、窪みがあるとの調査所見を得た。壁溝 確認されなかった。柱穴 確認されなかった。貯蔵穴 確認されなかった。竈 不明。遺物 床直から須恵器皿、土師

器甕、埋土から須恵器椀の高台部、灰釉陶器椀、灰釉陶器壺が出土した。実測可能な遺物2個体は床直から出土した。所見 住居床面に見られる礫は地山中のもので、住居廃絶後に混入したのではない。方形の平面プラン、遺物の出土状況から、竪穴住居としたが、不明瞭な遺構である。本遺構の時期は、出土遺物より10世紀後半に比定される。



第61図 D3区1号住居平面・断面図、出土遺物図

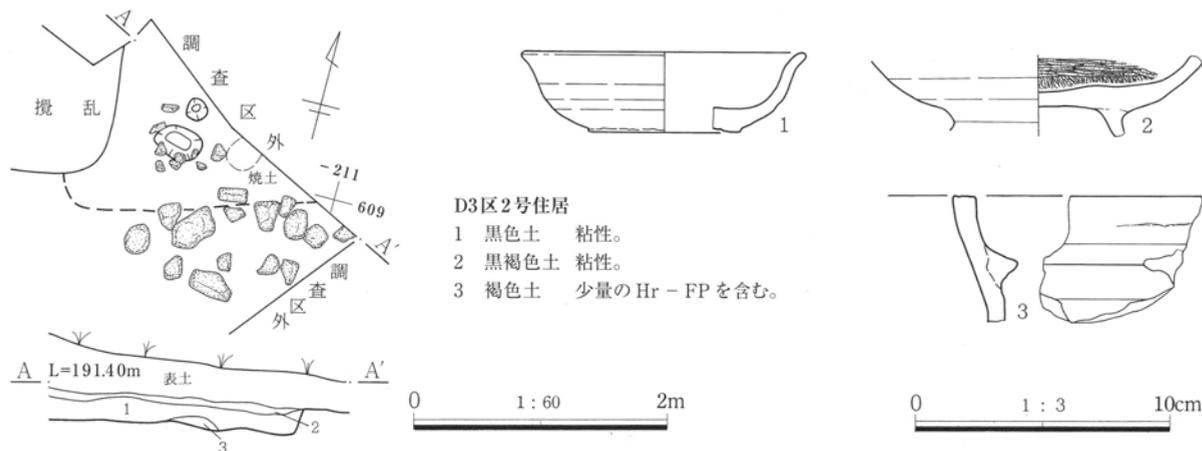
D3区1号住居出土遺物観察表

No.	挿図 No. 図版 No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
1	第61図 PL-35	須恵器 杯	床直 口~底部完形	口 11.8 高 2.8 底 5.4	①粗砂 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部切り離し技法はナデで不明。ベタ高台。
2	第61図 PL-35	土師器 甕	床直 口~肩部片	口 (21.1) 高 8.2残 底 -	①粗砂 ②良好 ③明褐色	口縁部から頸部は横ナデ。胴部は縦斜め方向のヘラ削り。内面はヘラナデ。

D3区2号住居 (第62図、PL8・35)

位置 609-211 方位 E-28°-S 形状 住居の大部分が調査区域外になるため、残存状況悪く全形は確認できなかった。面積 測定不可能。壁高 確認されなかった。重複 住居西壁周辺が攪乱に切られる調査所見を得た。床面 明確な床面は検出されなかった。掘り方面を床面とする。床面に焼土の広がる範囲がある。壁溝 確認されなかった。柱穴

確認されなかった。貯蔵穴 確認されなかった。竈 確認されなかった。遺物 埋土から須恵器杯、黒色土器碗、羽釜が出土した。実測可能な遺物が3個体ある。所見 住居範囲は不鮮明であった。方形の平面プランから、竪穴住居としたが、不明瞭な遺構である。本遺構の時期は、出土遺物より10世紀第3四半期に比定される。



第62図 D3区2号住居平面・断面図、出土遺物図

D3区2号住居出土遺物観察表

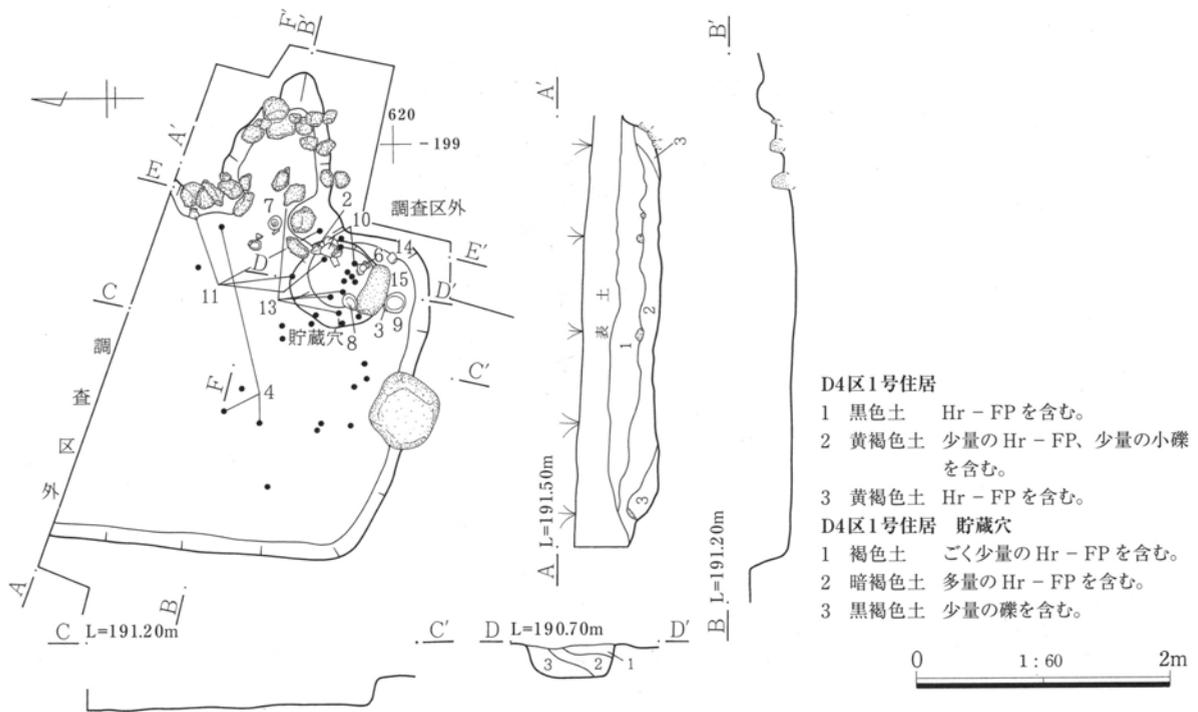
No.	挿図 No. 図版 No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
1	第62図 PL-35	須恵器 杯	埋土 口～底部1/4	口(11.2) 高3.2残 底(6.0)	①粗砂 ②酸化焰 ③にぶい橙色	ロクロ成形、右回り回転。
2	第62図 PL-35	黒色土器 椀	埋土 底～高台	口 - 高3.2残 底 - 高台 -	①粗砂 ②酸化焰 ③浅黄橙色	ロクロ成形、右回り回転。底部切り離し技法はナデで不明。高台は貼付。内面ミガキ、黒色。
3	第62図 PL-35	羽釜	埋土 口縁部片	口(20.8) 高5.0残 底 - 鏝 -	①粗砂 ②酸化焰 ③浅黄橙色	ロクロ成形。鏝は貼付。

D4区1号住居(第63～65図、PL9・35)

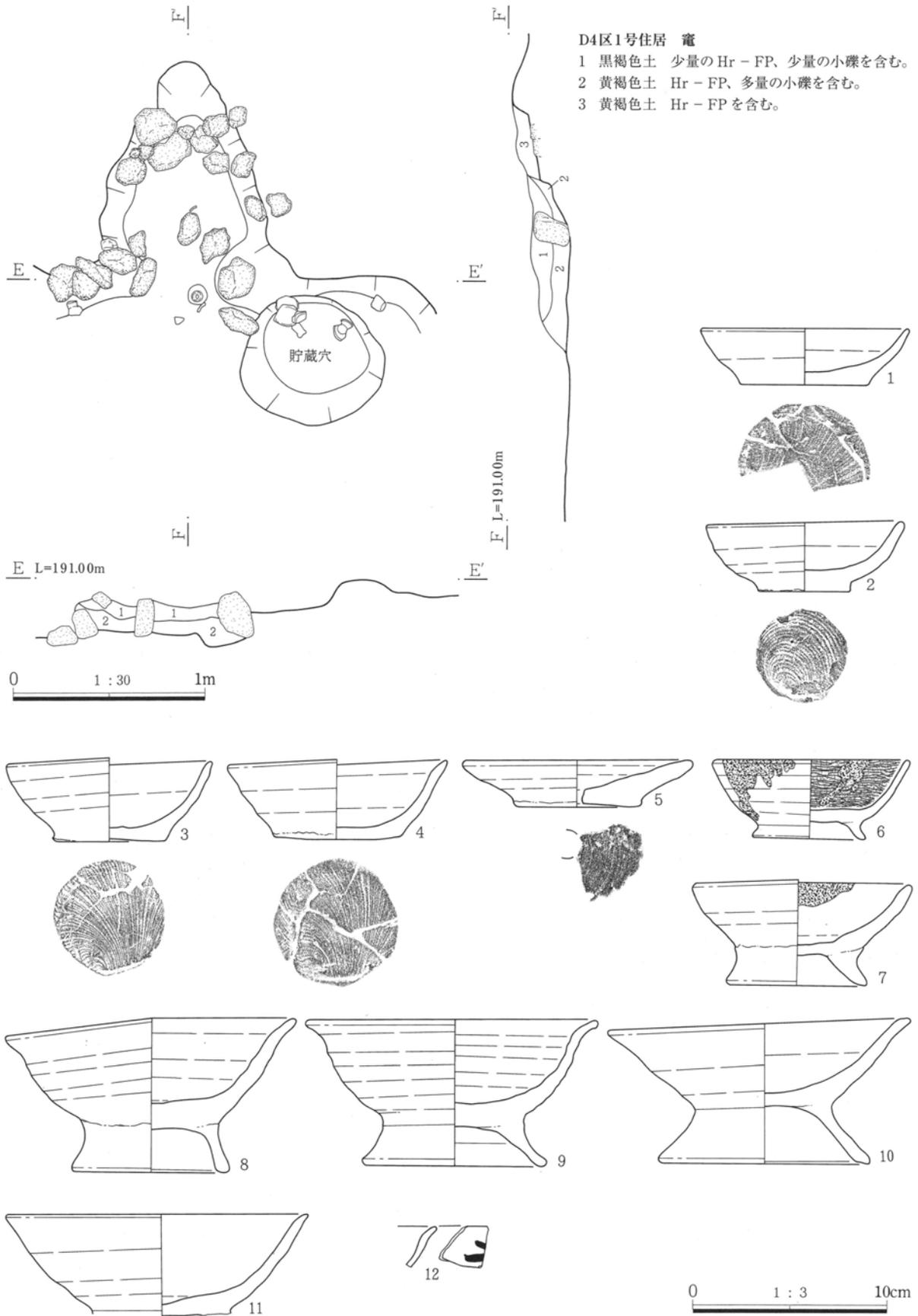
位置 620-199 方位 E-16°-S 形状 住居の北が調査区域外になるため、全形は確認できなかった。面積 測定不可能。壁高 30cm 重複なし。床面 比較的明瞭な床面が検出された。掘り方面を床面とする。壁溝 確認されなかった。

柱穴 確認されなかった。貯蔵穴 住居の南東隅に設置。深さ29cm・径67cmの円形を呈す。貯蔵穴内からは竈の天井石に用いられたと思われる未固結凝灰岩、黒色土器椀が出土。竈 東壁の南側に設置。燃焼部は幅56cm、奥行き85cm、煙道は幅33cm、奥行き28cmで緩やかに立ち上がる。埋土に焼土粒や炭化物は認められない。竈構築材として用いられた角の丸い礫が出土。燃焼部中央からは、ほぼ直方体の礫を利用した支脚石が出土した。支脚石に加工痕は認められない。竈の残存は比較的良好で、袖石、

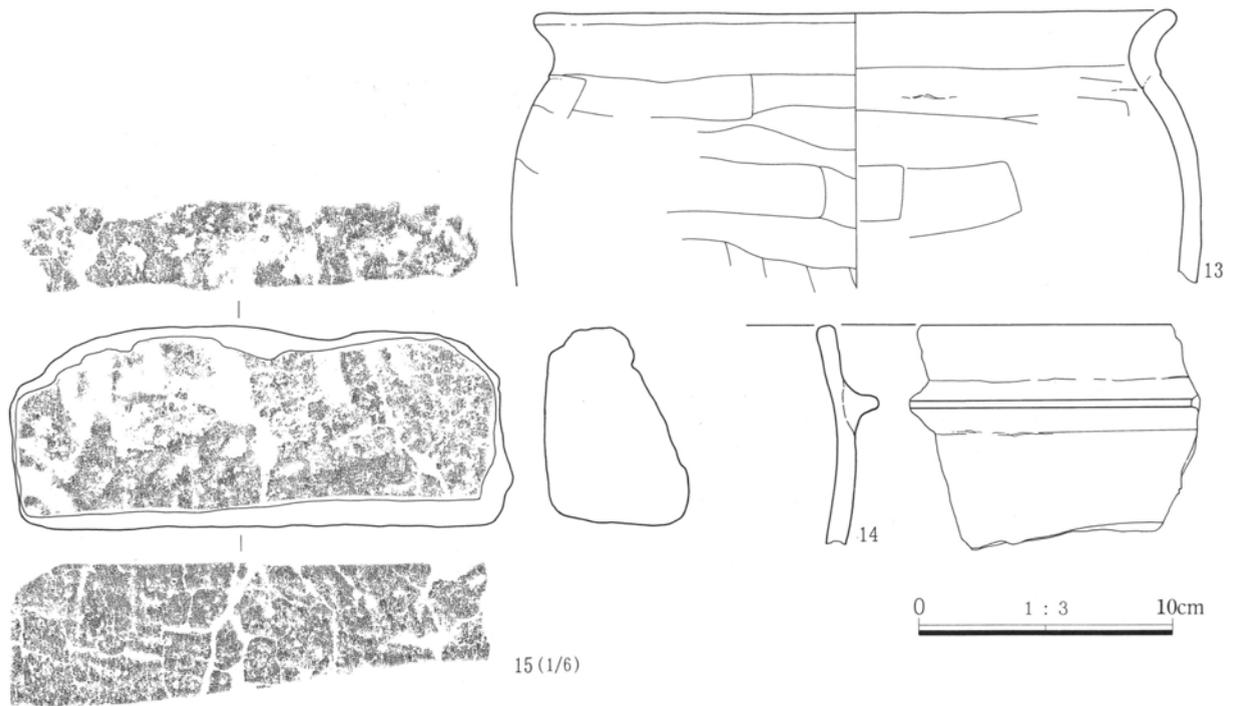
支脚石ともほぼ使用時の位地のまま検出された。遺物 実測可能な遺物が15個体ある。床直から須恵器杯、椀、羽釜、土師器甕、貯蔵穴内から黒色土器、竈の天井石に用いられたと思われる未固結凝灰岩、埋土から底部に穿孔のある須恵器杯(5)、墨痕のある須恵器杯・椀の体部片が出土した。所見 石原東遺跡D区の中なかで、唯一床面が明瞭に検出された住居である。南壁にある礫は地山中のものである。底部に穿孔のある須恵器杯(5)、墨痕のある須恵器杯・椀片、石原東遺跡D区・諏訪ノ木V遺跡で唯一の未固結凝灰岩を加工した竈構築材など、特徴のある遺物が出土した。本住居の時期は、出土遺物より10世紀後半に比定される。



第63図 D4区1号住居平面・断面図



第64図 D4区1号住居竈平面・断面図、出土遺物図



第65図 D4区1号住居出土遺物図

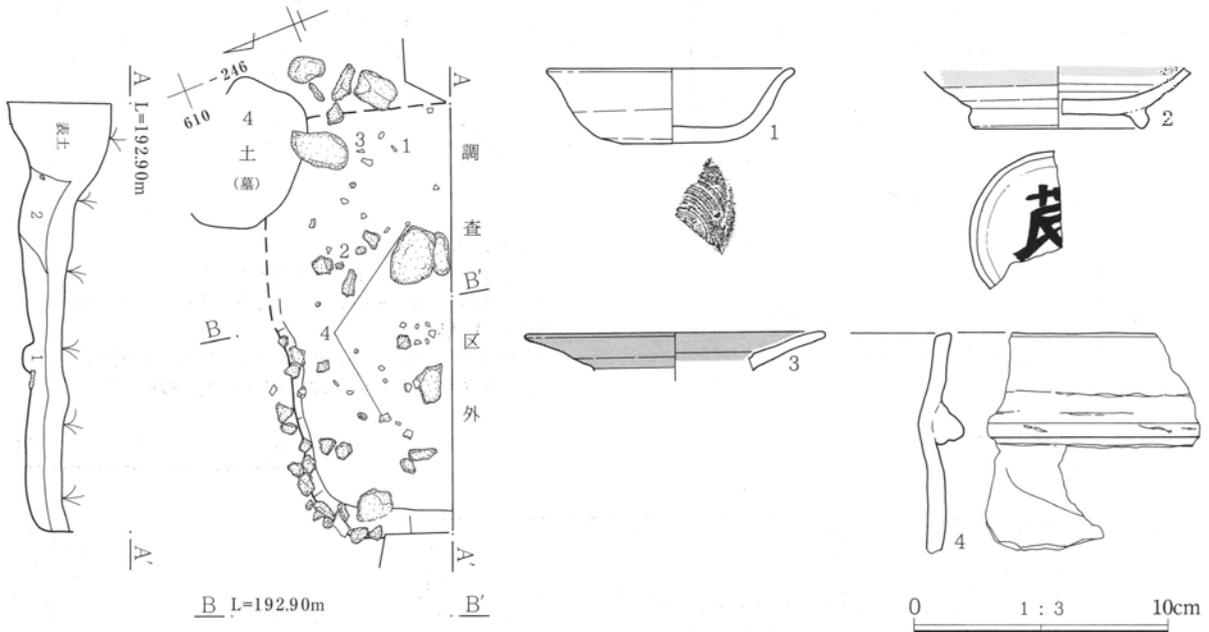
D4区1号住居出土遺物観察表

No.	挿図No. 図版No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
1	第64図 PL-35	須恵器 杯	埋土 口～底部1/3	口(10.8)高 3.0 底(6.6)	①粗砂 ②酸化埴 ③浅黄橙色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。
2	第64図 PL-35	須恵器 杯	床直 口～底部4/5	口 10.3 高 3.7 底 4.8	①粗砂 ②酸化埴 ③浅黄橙色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。
3	第64図 PL-35	須恵器 杯	+ 8 完形	口 10.7 高 4.3 底 5.8	①粗砂 ②酸化埴 ③浅黄橙色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。
4	第64図 PL-35	須恵器 杯	床直 ほぼ完形	口 11.4 高 4.2 底 6.6	①粗砂 ②酸化埴 ③浅黄橙色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。
5	第64図 PL-35	須恵器 杯	埋土 口～ 1/3	口(12.0)高 2.5 底(6.4) 穴径 0.9	①粗砂 ②酸化埴 ③浅黄橙色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。底部に穿孔あり。
6	第64図 PL-35	黒色土器 椀	貯蔵穴 口～高台2/3	口 10.2 高 4.2 底 5.3 高台 5.8	①細砂 ②酸化埴 ③にぶい黄橙色	ロクロ成形、右回り回転。底部切り離し技法はナデで不明。高台は貼付。内面ミガキ、黒色。
7	第64図 PL-35	須恵器 椀	床直 口～高台	口 11.4 高 5.5 底 6.2 高台 7.3	①粗砂 ②酸化埴 ③にぶい橙色	ロクロ成形、高台は貼付。底部切り離し技法はナデで不明。回転方向不明。内面スス付着。
8	第64図 PL-35	須恵器 椀	床直 口～高台	口 15.2 高 8.1 底 7.0 高台 8.3	①粗砂 ②酸化埴 ③にぶい橙色	ロクロ成形、右回り回転。底部切り離し技法はナデで不明。高台は貼付。
9	第64図 PL-35	須恵器 椀	+ 6 ほぼ完形	口 15.3 高 7.6 底 7.3 高台 9.6	①粗砂 ②酸化埴 ③にぶい橙色	ロクロ成形、右回り回転。底部切り離し技法はナデで不明。高台は貼付。
10	第64図 PL-35	須恵器 椀	床直 口～高台	口 15.7 高 7.6 底 7.1 高台 10.9	①粗砂 ②酸化埴 ③浅黄橙色	ロクロ成形、右回り回転。底部切り離し技法はナデで不明。高台は貼付。
11	第64図 PL-35	須恵器 椀	床直 高台部欠2/3	口 15.7 高 5.3残 底(7.2) 高台 -	①粗砂 ②酸化埴 ③にぶい橙色	ロクロ成形、右回り回転。底部切り離し技法はナデで不明。高台は貼付であるが剥落。
12	第64図 PL-35	須恵器 杯・椀	埋土 体部片	口 - 高 2.1残 底 - 高台 -	①粗砂 ②酸化埴 ③にぶい橙色	墨書、「□」。
13	第65図 PL-35	土師器 甕	床直 口～胴上1/3	口(25.4)高 10.8残 底 -	①粗砂 ②良好 ③明褐色	口縁部から頸部は横ナデ。胴部は横方向のヘラ削り。内面ヘラナデ。
14	第65図 PL-35	羽釜	床直 口～胴上片	口 - 高 8.7残 底 -	①粗砂 ②酸化埴 ③にぶい橙色	鐏は貼付。
15	第65図 PL-35	竈構築材 天井石か	貯蔵穴	長 39.0 幅 16.0 厚 11.0 重 6.10kg	未固結凝灰岩 (石材)	4面加工面、2面自然面のほぼ完存の竈構築材の可能性のある非常に珍しい未固結凝灰岩。竈構築材であるとすれば、未固結凝灰岩は、この1点。他の竈構築材は二ツ岳石。

D5区1号住居(第66図、PL10・36)

位置 610-246 方位 測定不可能。形状 住居の南部分が調査区域外になるため、全形は確認できなかった。北部分のみの検出。東は不明瞭。面積 測定不可能。壁高 23cm 重複 4号土坑(墓)と重複。4号土坑(墓)が、D5区1号住居を切って構築する調査所見を得た。床面 明確な床面は検出されなかった。遺物の出土状況から床面とした。掘り方面を床面とする。壁溝 確認されなかった。柱穴 確認されなかった。貯蔵穴 確認されなかった。竈 確認されなかった。遺物 床直から緑釉陶器段皿、灰釉

陶器碗、羽釜、埋土から須恵器杯、須恵器碗が出土した。実測可能な遺物が4個体ある。所見 方形の平面プラン、遺物の出土状況から、竪穴住居としたが、不明瞭な遺構である。底部外面に「茂」と書かれた灰釉陶器碗の墨書土器が床直から出土した。本遺構は「茂」の墨書土器が多量に出土したD1区遺物包含層から約180m離れて位置する。本遺構の時期は、出土遺物より10世紀第3四半期に比定される。



D5区1号住居

- 1 黒褐色土 ごく少量の礫を含む。
- 2 暗褐色土 少量の礫を含む。

0 1:60 2m

0 1:3 10cm

第66図 D5区1号住居平面・断面図、出土遺物図

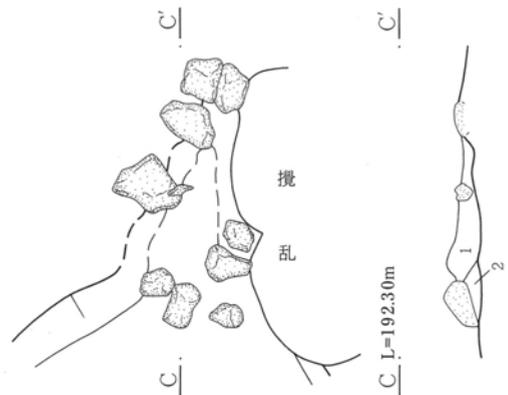
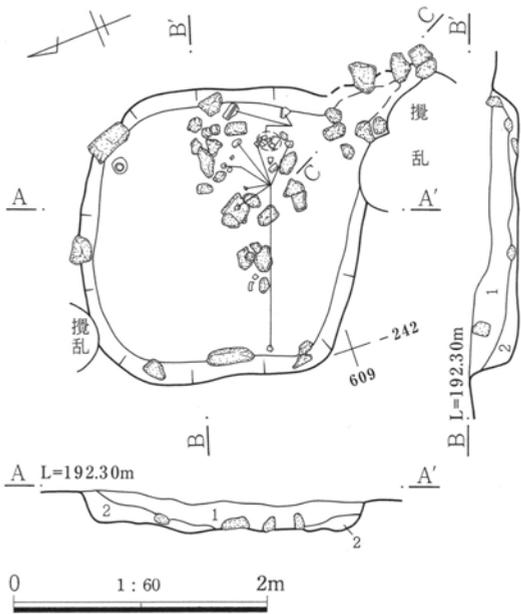
D5区1号住居出土遺物観察表

No.	挿図No. 図版No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
1	第66図 PL-36	須恵器 杯	+16 口~底部1/6	口(9.8) 高3.0 底4.2	①粗砂 ②酸化焰 ③にぶい橙色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。
2	第66図 PL-36	灰釉陶器 碗	床直 底~高台1/4	口 - 高 - 底(6.8) 高台(7.0)	①細砂 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。釉調は緑色をおびた灰色。施釉方法は漬け掛け。大原2号窯式期。底部外面に墨書、「茂」。
3	第66図 PL-36	緑釉陶器 段皿	床直 口縁片	口 - 高 - 底 -	①細砂(密) ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。内外面とも施釉。東海産。9世紀後半。
4	第66図 PL-36	羽釜	床直 口縁片	口 - 高8.7残 底 -	①粗砂 ②酸化焰 ③浅黄橙色	鑄は貼付。胴部外面ヘラ削り。

D5区2号住居(第67図、PL10・36)

位置 609-242 方位 E-82°-S 形状 長軸2.32m・短軸2.23mで長軸を南北にもつ方形である。面積 3.80㎡ 壁高 23cm 重複 住居北壁の一部、竈西の一部が攪乱に切られる。床面 明確な床面は検出されなかった。遺物の出土状況から床面とした。掘り方面を床面とする。壁溝 確認されなかった。柱穴 確認されなかった。貯蔵穴 確認されなかつ

た。竈 不明瞭。埋土に焼土粒や炭化物粒は検出されなかった。遺物 床直や埋土から羽釜、埋土から須恵器杯が出土した。実測可能な遺物が3個体ある。所見 方形の平面プラン、遺物の出土状況から、竪穴住居としたが、不明瞭な遺構である。本遺構の時期は、出土遺物より10世紀第3四半期に比定される。

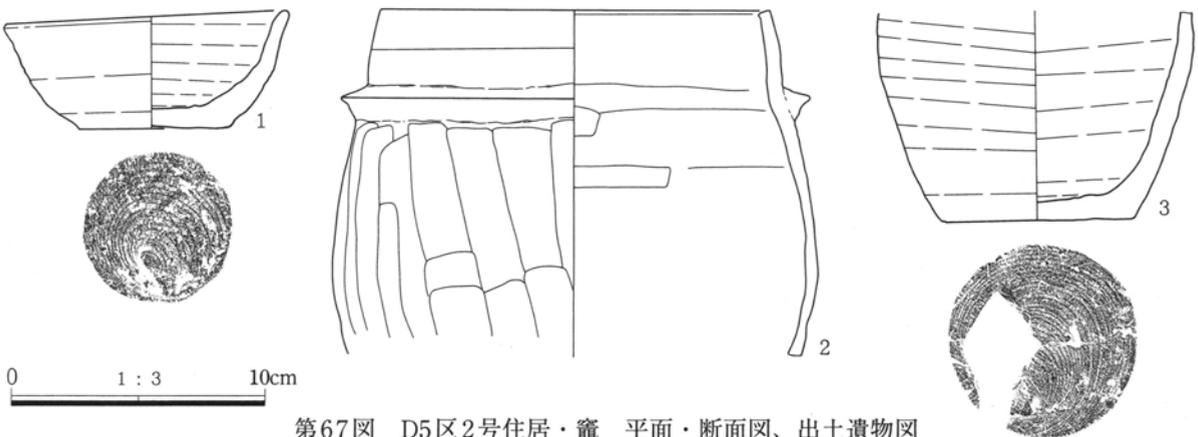


D5区2号住居

- 1 暗褐色土 多量の礫、多量の軽石を含む。
- 2 暗褐色土 Hr-FP、多量の軽石、多量の黄褐色砂粒を含む。

D5区2号住居 竈

- 1 暗褐色土 Hr-FP、礫、少量の黄褐色砂粒を含む。
- 2 暗褐色土 Hr-FP、礫、多量の黄褐色砂粒を含む。



第67図 D5区2号住居・竈 平面・断面図、出土遺物図

D5区2号住居出土遺物観察表

No.	挿図No. 図版No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
1	第67図 PL-36	須恵器 杯	+12 口~底部3/4	口11.4 高4.7 底6.0	①粗砂 ②酸化焰 ③浅黄橙色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。
2	第67図 PL-36	羽釜	+8 口~胴部1/2	口(15.6)高13.7残 底- 鏝18.5	①粗砂 ②酸化焰 ③浅黄橙色	鏝は貼付。 胴部外面、下位から鏝に向けて縦方向のヘラ削り。
3	第67図 PL-36	羽釜	床直 胴下~底1/3	口- 高8.2残 底7.8	①粗砂 ②還元焰 ③灰色	ロクロ整形。右回り回転。底部は回転糸切り。

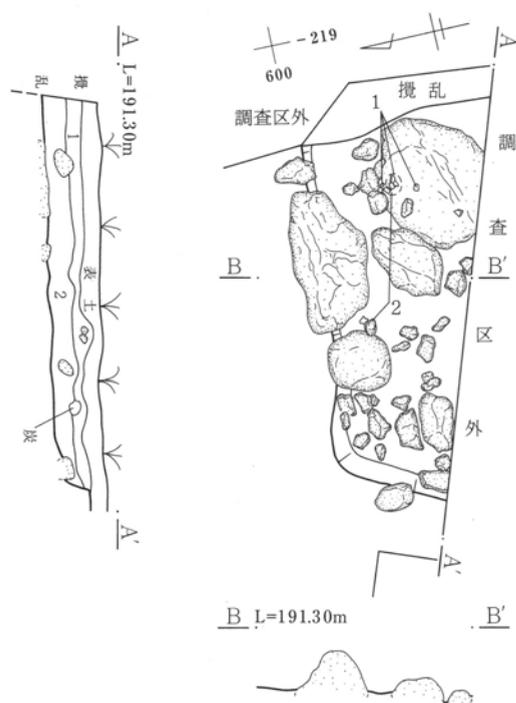
D5区3号住居(第68図、PL10・36)

位置 600-219 方位 測定不可能。形状 住居の南部分が調査区域外になるため、全形は確認できなかった。面積 測定不可能。壁高 16cm 重複 なし。床面 不明瞭。明確な床面は検出されなかった。掘り方面を床面とする。壁溝 確認されなかった。柱穴 確認されなかった。貯蔵穴 確認されなかった。竈 確認されなかった。

遺物 床直や埋土から須恵器杯、埋土から羽釜胴部が出土した。須恵器杯2個体は、墨書土器である。床直から出土した須恵器杯の体部外面に「真」(2)、

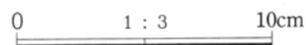
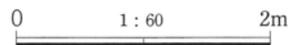
埋土から出土した須恵器杯(1)の体部外面に判読できない文字が記されていた。

所見 住居床面に見られる礫は地山中のものである。遺物の出土状態などから、住居の床面と認定する調査所見を得た。方形の平面プラン、遺物の出土状況から、竪穴住居としたが、不明瞭な遺構である。本遺構は墨書土器が多量に出土したD1区遺物包含層から約170m離れて位置する。本遺構の時期は、出土遺物より10世紀第3四半期に比定される。



D5区3号住居

- 1 黒褐色土 多量の礫、多量の軽石を含む。
- 2 暗褐色土 多量の礫、多量の軽石、多量の黄褐色土を含む。



第68図 D5区3号住居平面・断面図、出土遺物図

D5区3号住居出土遺物観察表

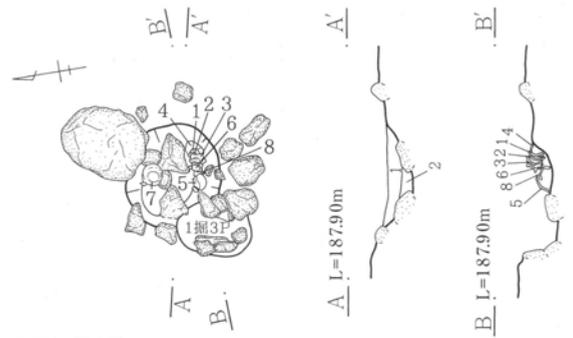
No.	挿図No. 図版No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
1	第68図 PL-36	須恵器 杯	+12 ほぼ完形	口10.0 高3.4 底6.2	①粗砂 ②酸化焙 ③浅黄橙色	ロクロ成形、右回り回転。底部切り離し技法は砂粒の付着で不明。体部外面に墨書、「□」。
2	第68図 PL-36	須恵器 杯	床直 完形	口11.2 高3.4 底6.0	①粗砂 ②酸化焙 ③浅黄橙色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。体部外面正位に墨書、「真」。

(3) 土坑

石原東遺跡D区で検出された奈良・平安時代の土坑は、D2区1号土坑の1基だけである。

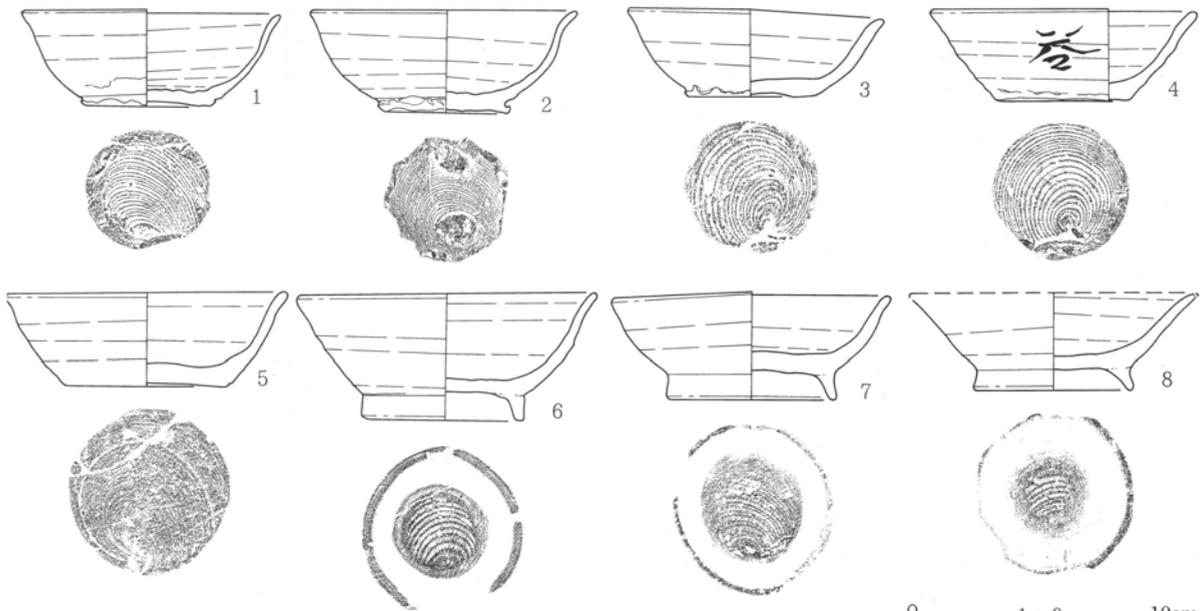
1号土坑(第69図、PL10・36)

土坑はほぼ円形で、径53cm、深さ25cmを測る。埋土はブロック状で、人為的に埋められたことがわかる。本遺構から出土した遺物は須恵器杯5点、須恵器碗3点である。1~4、6は伏せた状態で重なって出土しており、4の体部外面の墨書は、「益」と判読できる可能性がある。



D2区1号土坑

- 1 暗褐色土 軽石を含む。ブロック状。
- 2 暗褐色土 1層に黄褐色砂粒が少量混入。

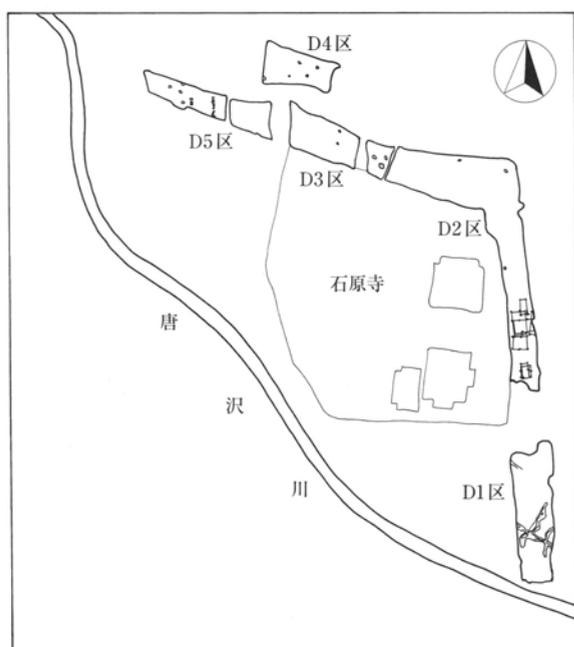


第69図 D2区1号土坑平面・断面図、出土遺物図

D2区1号土坑出土遺物観察表

No.	挿図 No. 図版 No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
1	第69図 PL-36	須恵器 杯	+1 2/3	口 10.2 高 3.7 底 5.3	①砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。
2	第69図 PL-36	須恵器 杯	+2 2/3	口 10.6 高 4.1 底 5.2	①砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。
3	第69図 PL-36	須恵器 杯	+3 1/3	口 (10.2) 高 3.5 底 5.1	①砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。
4	第69図 PL-36	須恵器 杯	±0 完形	口 10.6 高 3.6 底 5.8	①砂粒 ②還元焰 ③灰黄色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。体部外面に墨書、「益」[益カ]。
5	第69図 PL-36	須恵器 杯	+5 1/2	口 11.2 高 3.7 底 6.3	①粗砂 ②酸化焰 ③にぶい褐色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。
6	第69図 PL-36	須恵器 碗	+1 1/2	口 11.9 高 5.0 底 6.4 高台 6.5	①砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。
7	第69図 PL-36	須恵器 碗	+4 ほぼ完形	口 11.1 高 4.3 底 6.5 高台 6.7	①砂粒 ②還元焰 ③にぶい褐色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。
8	第69図 PL-36	須恵器 碗	±0 1/3	口 (11.4) 高 (3.9) 底 6.0 高台 6.2	①砂粒 ②還元焰 ③浅黄色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。

## [4] 中世以降の遺構と遺物



石原東遺跡D区 中世以降の遺構

## 概要

本遺跡の中世以降の遺構は、掘立柱建物8棟、柱穴列1列、土坑3基、土坑墓30基、井戸1基、溝4条である。掘立柱建物はD2区に、土坑墓はD2区西端以西に集中する。

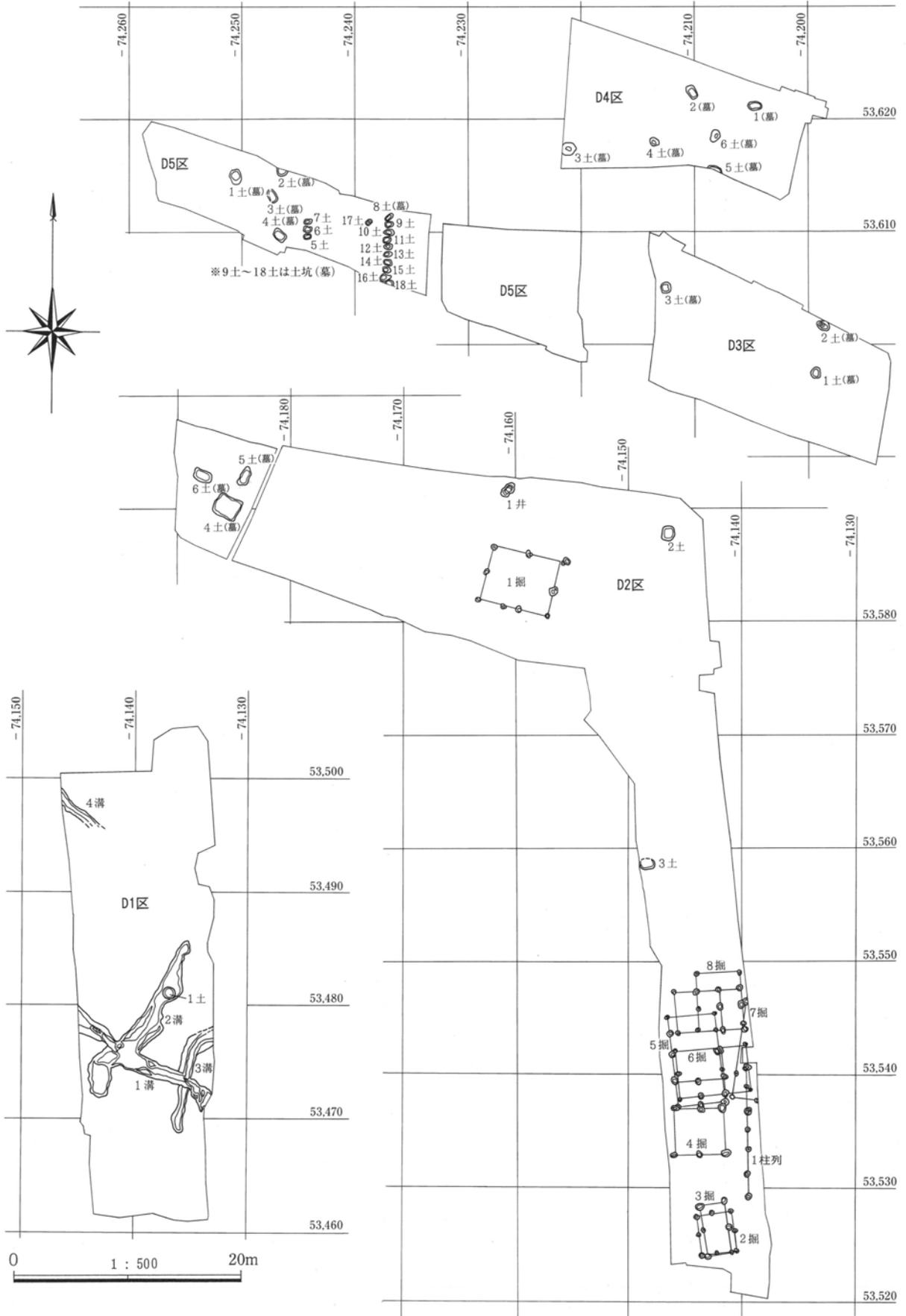
本遺跡と唐沢川の間には石原寺が所在する。調査以前、D2区以西は石原寺の墓域であった。渋川市誌によると、石原寺は光徳山孝顕院石原寺と呼ばれ、市内の天台宗眞光寺の門徒であるとのことである。この寺の山号・院号についてはいろいろあり、延享二年(1745)の「眞光寺門徒分限期」には「光徳山」とあって、それが「一石山」に訂正されており、院号は「慶寿院」となっている。寺の規模について「…境内 東西八拾間 南北四拾九間…」とあり、広い境内があったことが窺える。

D2区からD5区は、中世以降の土坑墓が多数検出された。



石原東遺跡D区に隣接する石原寺(北西より)

第4章 石原東遺跡D区の遺構と遺物



第70図 石原東遺跡D区 中世以降の遺構

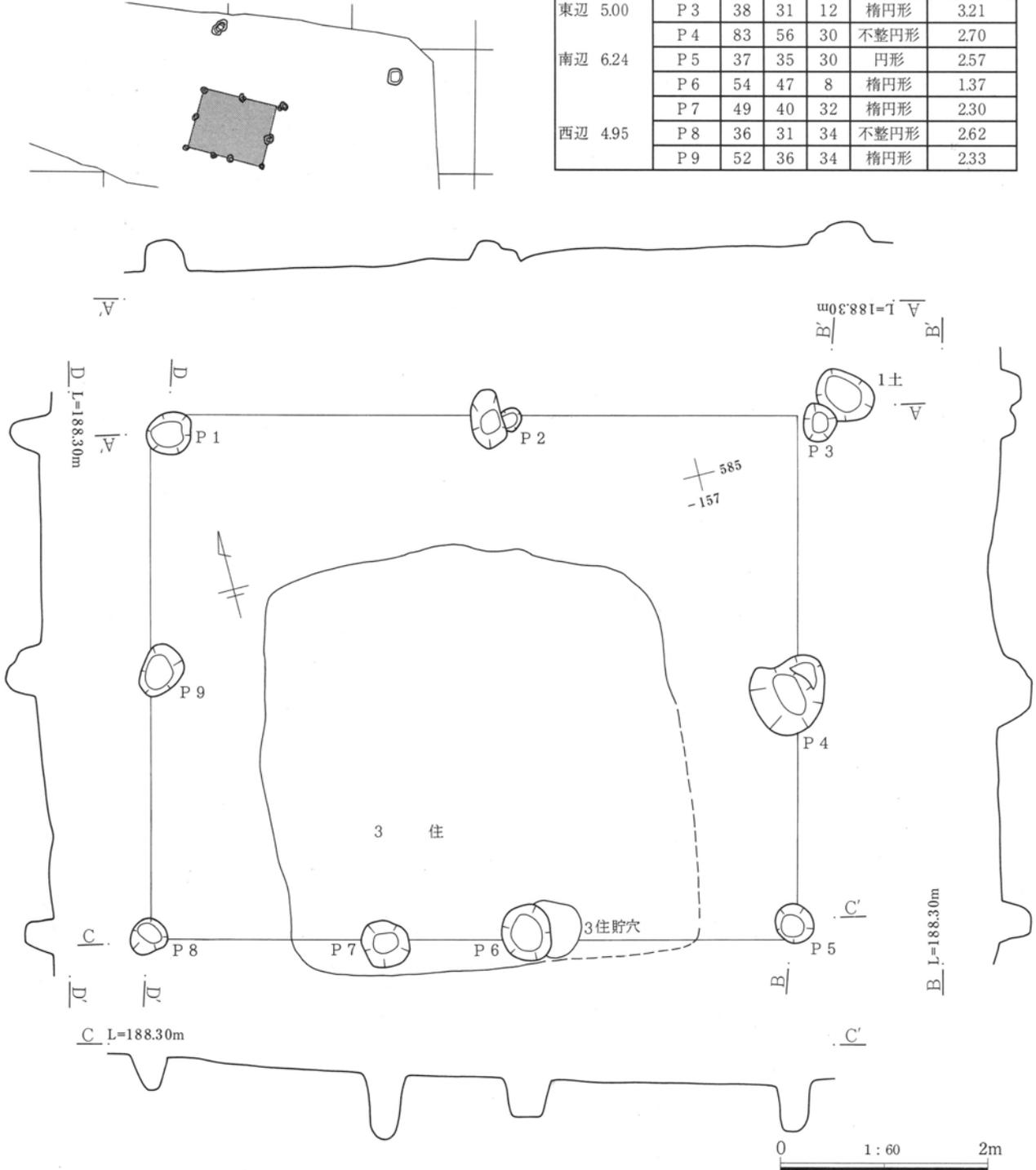
(1) 掘立柱建物

D2区1号掘立柱建物(第71図、PL11)

位置 585-157 主軸方向 N-77°-W 重複  
D2区3号住居と重複。本建物の方が住居より後出  
である。形態 身舎部分は2×2間(4.95~5.00m ×  
6.24~6.38m・16.5尺×21尺)、31.42㎡の東西棟。

D2区1号掘立柱建物 南北棟

規模	2×2間			面積	31.42㎡	
主軸方向	N-77°-W			庇	-	
桁・梁行きの 規模(m)	柱穴No.	規模(c m)			形状	次ピットと の間隔(m)
		長径	短径	深さ		
北辺 6.38	P 1	46	41	39	楕円形	3.11
	P 2	57	31	20	楕円形	3.18
東辺 5.00	P 3	38	31	12	楕円形	3.21
	P 4	83	56	30	不整形円形	2.70
南辺 6.24	P 5	37	35	30	円形	2.57
	P 6	54	47	8	楕円形	1.37
	P 7	49	40	32	楕円形	2.30
西辺 4.95	P 8	36	31	34	不整形円形	2.62
	P 9	52	36	34	楕円形	2.33



第71図 D2区1号掘立柱建物平面・断面図

第4章 石原東遺跡D区の遺構と遺物

柱間は桁側1.37～3.18m、梁側2.33～3.21m。

いずれの柱穴も柱痕跡は確認できなかった。柱穴は、楕円形、円形、不整形のもの混在し、長径36～83cm、短径31～56cm、深さ8～39cmで、大きなばらつきがある。

内部施設なし。 出土遺物なし。

D2区2号掘立柱建物(第72図)

位置 527-142 主軸方向 N-9°-W 重複 D2区3号掘立柱建物と重複。新旧関係は不明である。

形態 身舎部分は2×2間(3.09～3.11m×3.43～3.46m・10尺×11.5尺)、10.64㎡の南北棟。柱間は桁側1.33～1.77m、梁側1.65～1.78m。柱筋のとおりは良いが、北辺のP8が外側にずれる。正方形に近い。

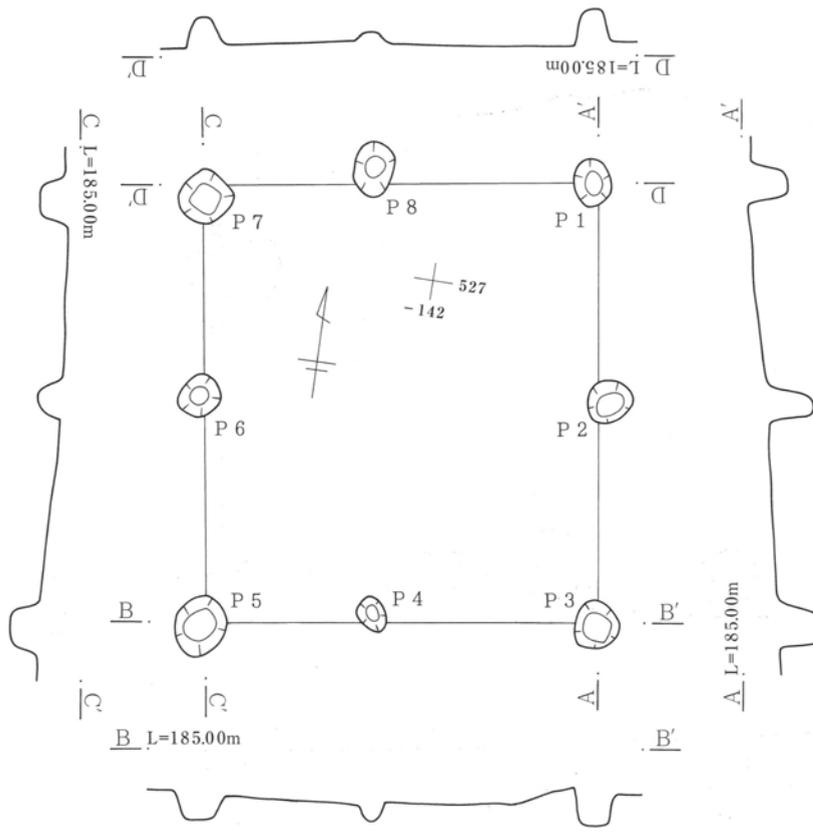
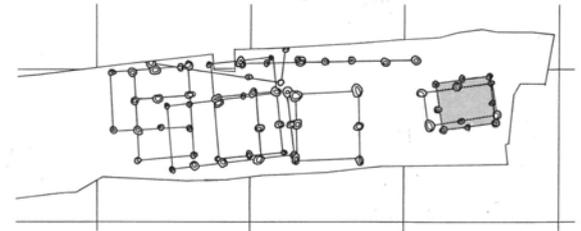
いずれの柱穴も柱痕跡は確認できなかった。柱穴

は、楕円形のものも多く、長径29～48cm、短径21～40cm、深さ8～35cmである。

内部施設なし。 出土遺物なし。

D2区2号掘立柱建物 南北棟

規模	2×2間		面積	10.68㎡		
主軸方向	N-9°-W		庇	-		
桁・梁行きの規模(m)	柱穴No.	規模(cm)			形状	次ビットとの間隔(m)
		長径	短径	深さ		
東辺 3.46	P1	36	28	30	楕円形	1.74
	P2	36	32	35	楕円形	1.72
南辺 3.09	P3	38	34	32	楕円形	1.76
	P4	29	21	14	楕円形	1.33
西辺 3.43	P5	48	40	23	楕円形	1.65
	P6	33	30	19	楕円形	1.78
北辺 3.11	P7	43	36	22	隅丸方形	1.34
	P8	42	31	8	楕円形	1.77



第72図 D2区2号掘立柱建物平面・断面図

D2区3号掘立柱建物 (第73図)

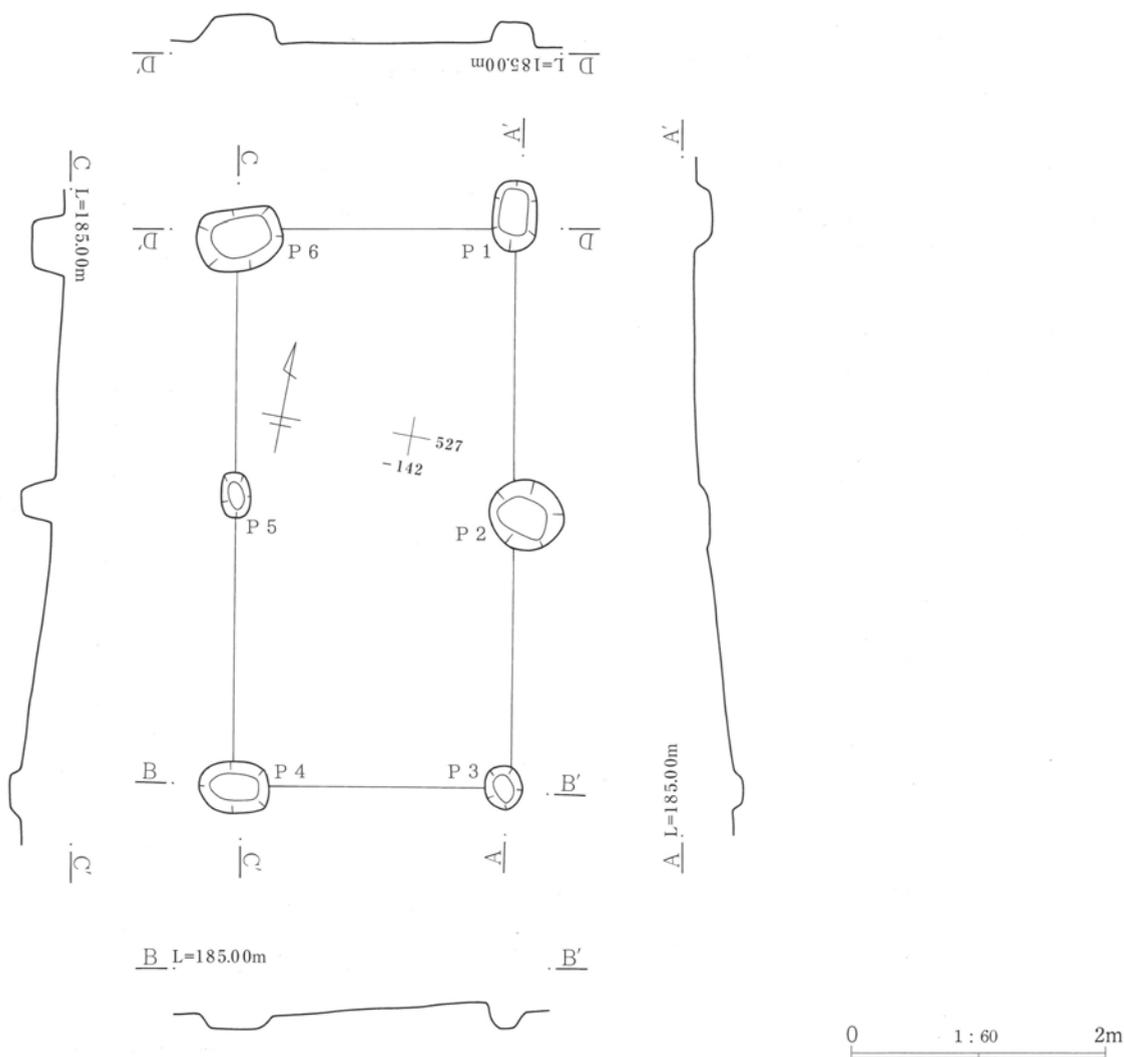
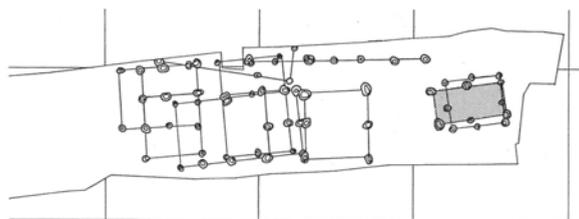
位置 527-142 主軸方向 N-9°-W 重複 D2区2号掘立柱建物と重複。新旧関係は不明である。

形態 身舎部分は1×2間(2.10~2.22m×4.37~4.43m・7尺×14.5尺)、9.5㎡の南北棟。柱間は桁側2.11~2.26m、梁側2.10~2.22m。東・西・南・北辺すべてで、直線的に柱穴が並び、ほとんど歪みのない長方形を呈す。

いずれの柱穴も柱痕跡は確認できなかった。柱穴は、楕円形のものも多く、長径34~59cm、短径23~54cm、深さ8~25cmで大きさにばらつきがある。内部施設なし。 出土遺物なし。

D2区3号掘立柱建物 南北棟

規模	1×2間			面積	9.5㎡	
主軸方向	N-9°-W			庇	-	
桁・梁行きの規模(m)	柱穴 No.	規模 (cm)			形状	次ピットとの間隔 (m)
		長径	短径	深さ		
東辺 4.43	P 1	55	34	15	楕円形	2.24
	P 2	59	54	8	楕円形	2.19
南辺 2.10	P 3	34	30	8	楕円形	2.10
	P 4	58	40	10	楕円形	2.11
西辺 4.37	P 5	35	23	17	楕円形	2.26
	P 6	58	46	25	隅丸方形	2.22



第73図 D2区3号掘立柱建物平面・断面図

D2区4号掘立柱建物(第74図、PL11)

位置 536-142 主軸方向 N-88°-W 重複 D2区5号掘立柱建物と重複。新旧関係は不明である。

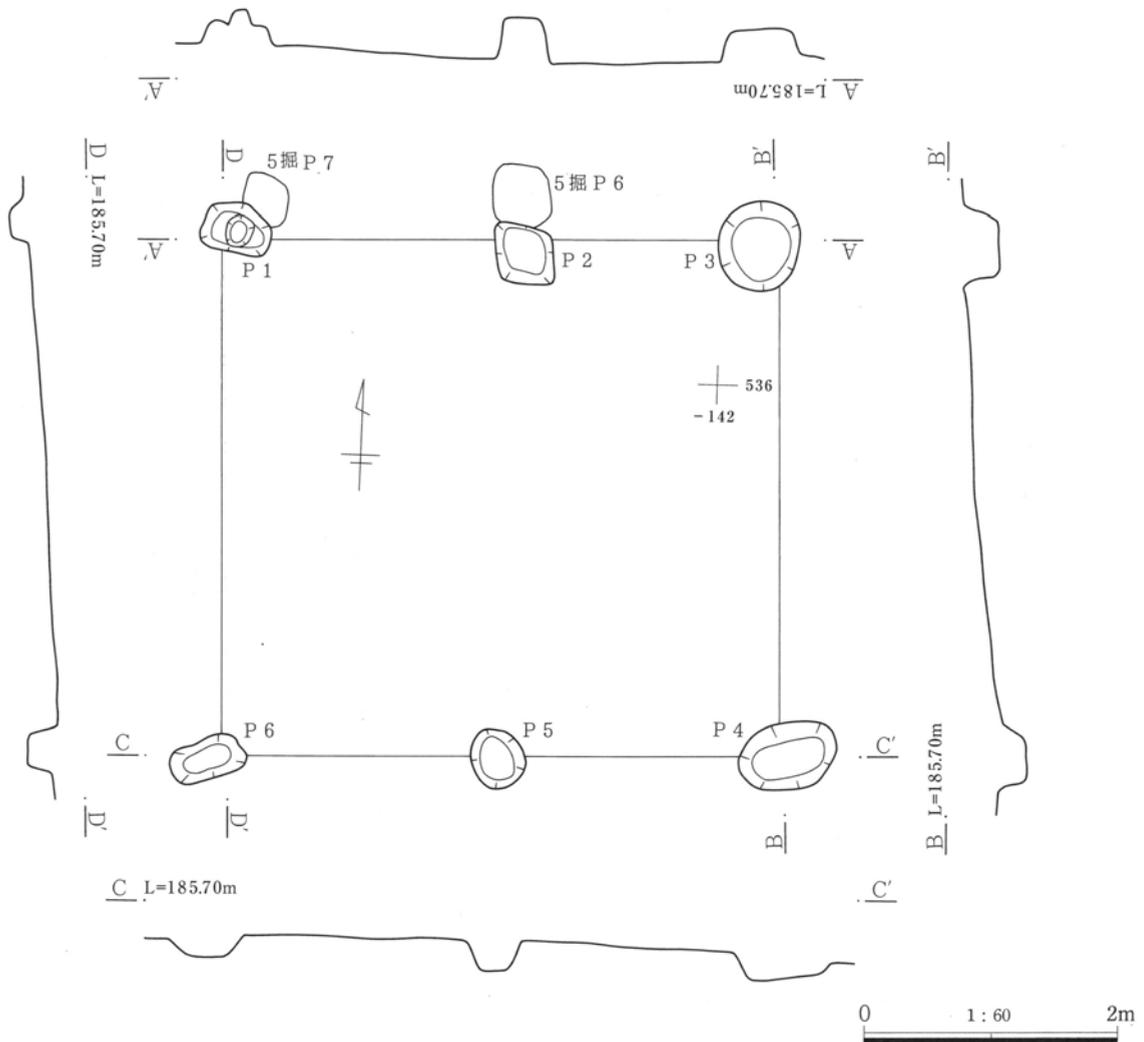
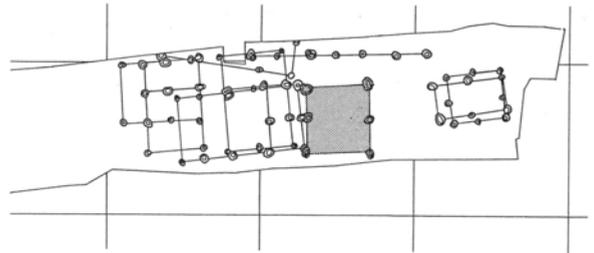
形態 身舎部分は1×2間(4.08~4.09m×4.34~4.39m・135尺×145尺)、17.87㎡の東西棟。柱間は桁側1.97~2.37m、梁側4.08~4.09m。東・西・南・北辺すべてで、直線的に柱穴が並び、ほとんど歪みはなく正方形に近い。北辺のP2は中央より東に寄る。

いずれの柱穴も柱痕跡は確認できなかった。柱穴は、楕円形、隅丸方形、隅丸長方形のものが混在し、長径47~79cm、短径29~62cm、深さ21~38cmで、ばらつきがある。

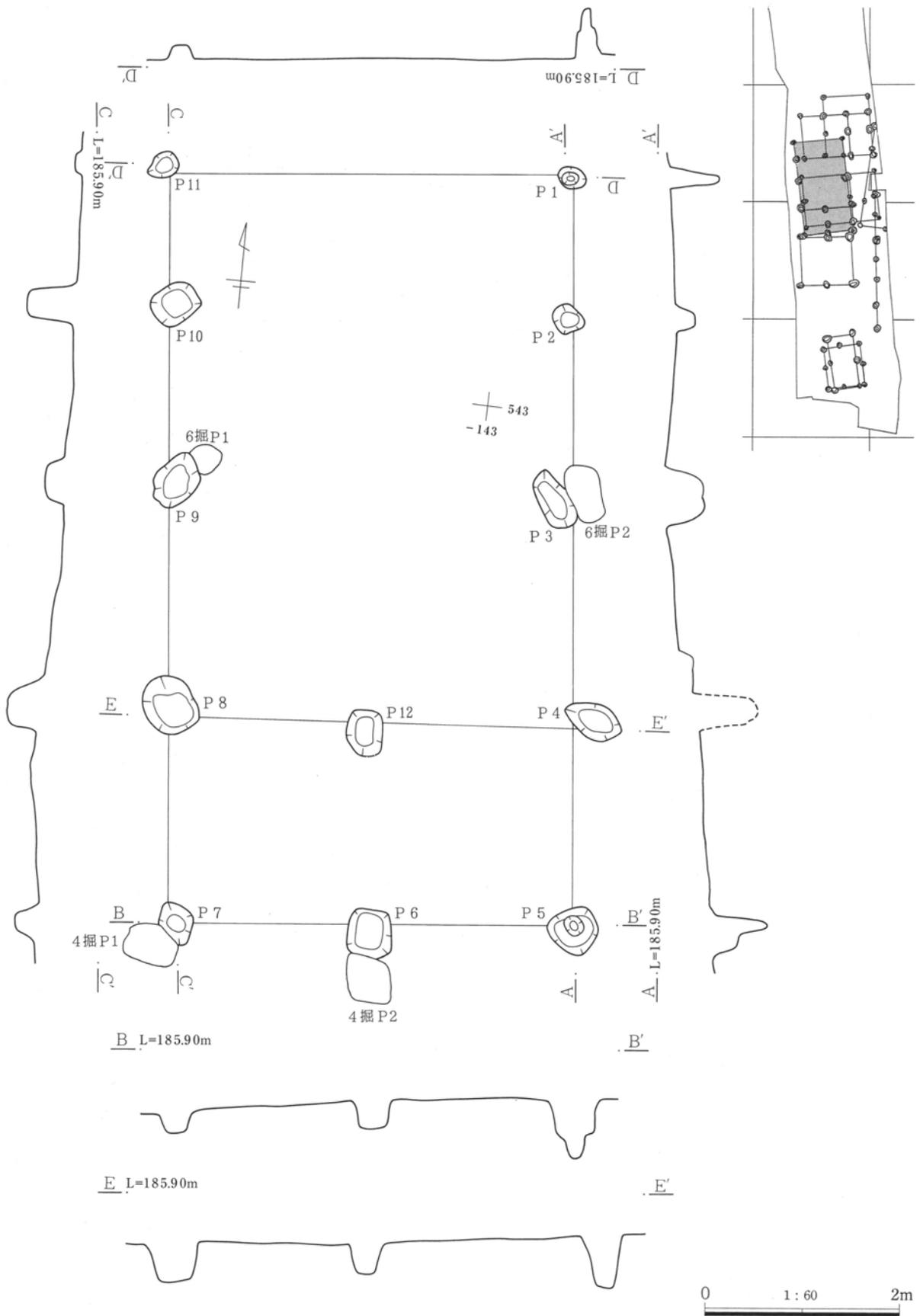
内部施設 なし。 出土遺物 なし。

D2区4号掘立柱建物 東西棟

規模	1×2間		面積	17.87㎡		
主軸方向	N-88°-E		庇	-		
桁・梁行きの規模(m)	柱穴No.	規模(cm)			形状	次ピットとの間隔(m)
		長径	短径	深さ		
北辺 4.34	P1	56	37	29	隅丸長方形	2.37
	P2	63	44	38	隅丸方形	1.97
東辺 4.08	P3	71	62	27	楕円形	4.08
南辺 4.39	P4	79	52	23	楕円形	2.26
	P5	47	41	21	楕円形	2.13
西辺 4.09	P6	60	29	28	隅丸長方形	4.09



第74図 D2区4号掘立柱建物平面・断面図



第75図 D2区5号掘立柱建物平面・断面図

#### 第4章 石原東遺跡D区の遺構と遺物

##### D2区5号掘立柱建物(第75図)

位置 543-143 主軸方向 N-8°-W 重複 D2区4・6・8号掘立柱建物と重複。新旧関係は不明である。形態 身舎部分は2×4間(4.12~4.13m×7.83~7.88m・13.5尺×26尺)、32.09㎡の南北棟。柱間は桁側1.45~2.42m、梁側1.95~2.17m。内側の梁間中央にP12を配置しており、間仕切かもしれない。柱筋のとおりは良い。北辺のP1とP11は柱間約1.5mと短く、庇の可能性もある。西・南・北辺で、直線的に柱穴が並ぶが、東辺のP3は内側に外れている。ほとんど歪みのない長方形を呈す。

いずれの柱穴も柱痕跡は確認できなかった。柱穴は、楕円形、隅丸長方形、隅丸方形、不整円形のもものが混在し、長径18~65cm、短径13~50cm、深さ7~50cmで、ばらつきがある。

内部施設 なし。 出土遺物 なし。

##### D2区6号掘立柱建物(第76図)

位置 540-140 主軸方向 N-84°-E 重複 D2区5・7号掘立柱建物、D2区1号柱穴列と重複。新旧関係は不明である。形態 身舎部分は2×3間(3.96~4.20m×5.92~6.19m・13.5尺×20.5尺)、26.80㎡の東西棟。柱間は桁側1.82~2.15m、梁側1.94~2.23m。東・西・南辺で、直線的に柱穴が並ぶが、北辺のP2は、内側に外れている。東辺から1間内側にP10があり、間仕切と思われる。ほとんど歪みのない長方形を呈す。

いずれの柱穴も柱痕跡は確認できなかった。柱穴は、楕円形、隅丸長方形、隅丸方形、円形、不整円形のもものが混在し、長径29~57cm、短径18~38cm、深さ7~64cmで、ばらつきがある。

内部施設 なし。 出土遺物 なし。

##### D2区7号掘立柱建物(第78図)

位置 540-140 主軸方向 N-75°-E 重複 D2区6・8号掘立柱建物、D2区1号柱穴列と重複。新旧関係は不明である。形態 身舎部分は(1)×(4)間(2.33×8.42m)、(9.81)㎡の南北棟か。柱間は桁

側1.93~2.05m、梁側2.33m。東・西・南・北辺すべてで、直線的に柱穴が並ぶが、西辺のP3、P4間の柱穴を検出できなかった。ほとんど歪みのない長方形を呈す。

いずれの柱穴も柱痕跡は確認できなかった。柱穴は、楕円形、不整円形、隅丸方形のもものが混在し、長径30~55cm、短径21~39cm、深さ18~75cmで、ばらつきがある。

内部施設 なし。 出土遺物 なし。

##### D2区8号掘立柱建物(第77図)

位置 548-141 主軸方向 N-86°-E 重複 D2区5・7号掘立柱建物と重複。新旧関係は不明である。形態 身舎部分は2×3間(3.64~3.70m×5.76~5.78m・12尺×19.5尺)、33.36㎡の東西棟。北辺の東2間分に北側へ1.38~1.45m離れて庇が付く。身舎部分は総柱構造で、西辺中央柱は未検出か省略である。柱間は桁側1.74~2.18m、梁間1.46~3.67m。南辺P8は柱筋より内側にはずれる。東辺P5と内部柱P10・P11は梁間中央より北にはずれるが、柱3本自体は直線的に良く並ぶ。

いずれの柱穴も柱痕跡は確認できなかった。柱穴は、円形、楕円形、不整円形、隅丸方形のもものが混在し、長径32~65cm、短径27~51cm、深さ10~81cmで、ばらつきがある。

内部施設 なし。 出土遺物 なし。

##### D2区1号柱穴列(第78図)

位置 536-140 主軸方向 N-89°-E 重複 D2区6・7号掘立柱建物と重複。新旧関係は不明である。形態 全長11.16mで南北に走行する。柱間は1.55~2.14mで一定しない。いずれの柱穴も柱痕跡は確認できなかった。柱穴は、楕円形、不整円形、隅丸方形のもものが混在し、長径36~55cm、短径30~49cm、深さ20~60cmで、ばらつきがある。

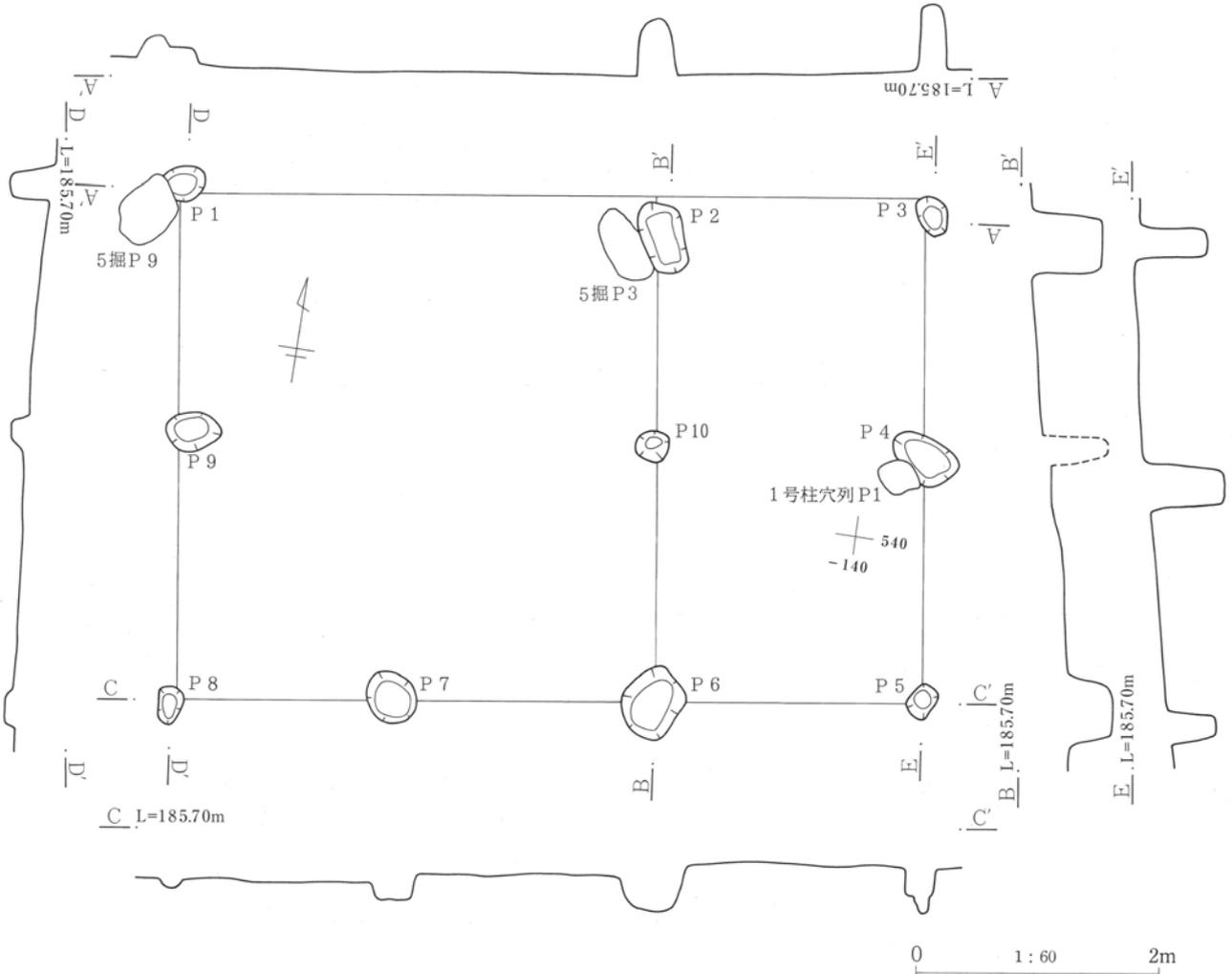
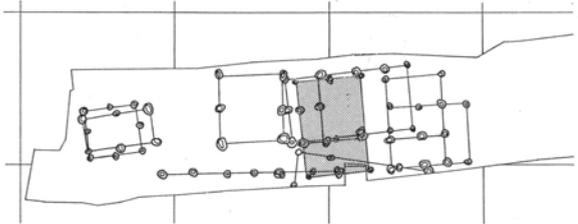
内部施設 なし。 出土遺物 なし。

D2区5号掘立柱建物 南北棟

規模	2×4間			面積	32.09㎡	
主軸方向	N-8°-W			庇	南	
桁・梁行きの規模(m)	柱穴 No.	規模(c m)			形状	次ピットとの間隔(m)
		長径	短径	深さ		
東辺 7.88	P 1	18	13	50	楕円形	1.48
	P 2	34	24	19	楕円形	1.96
	P 3	65	30	38	不整形円形	2.27
	P 4	61	35	10	楕円形	2.17
南辺 4.13	P 5	54	45	61	楕円形	2.15
	P 6	57	44	30	隅丸長方形	1.98
西辺 7.83	P 7	42	35	21	不整形円形	2.13
	P 8	64	50	42	隅丸長方形	2.42
	P 9	60	41	19	隅丸長方形	1.83
	P 10	52	39	50	隅丸長方形	1.45
北辺 4.12	P 11	34	26	7	楕円形	4.12
	P 12	48	37	31	隅丸長方形	P8〜1.95

D2区6号掘立柱建物 東西棟

規模	2×(2+1)間			面積	26.80㎡	
主軸方向	N-84°-E			庇	東	
桁・梁行きの規模(m)	柱穴 No.	規模(c m)			形状	次ピットとの間隔(m)
		長径	短径	深さ		
北辺 5.92	P 1	34	28	14	不整形円形	3.98
	P 2	52	32	47	隅丸長方形	1.94
東辺 3.96	P 3	34	25	59	楕円形	1.95
	P 4	57	33	64	不整形円形	2.01
南辺 6.19	P 5	30	20	39	隅丸長方形	2.22
	P 6	52	32	47	楕円形	2.15
西辺 4.20	P 7	45	38	22	円形	1.82
	P 8	31	18	8	楕円形	2.23
	P 9	45	34	15	楕円形	1.97
	P 10	29	24	7	楕円形	-

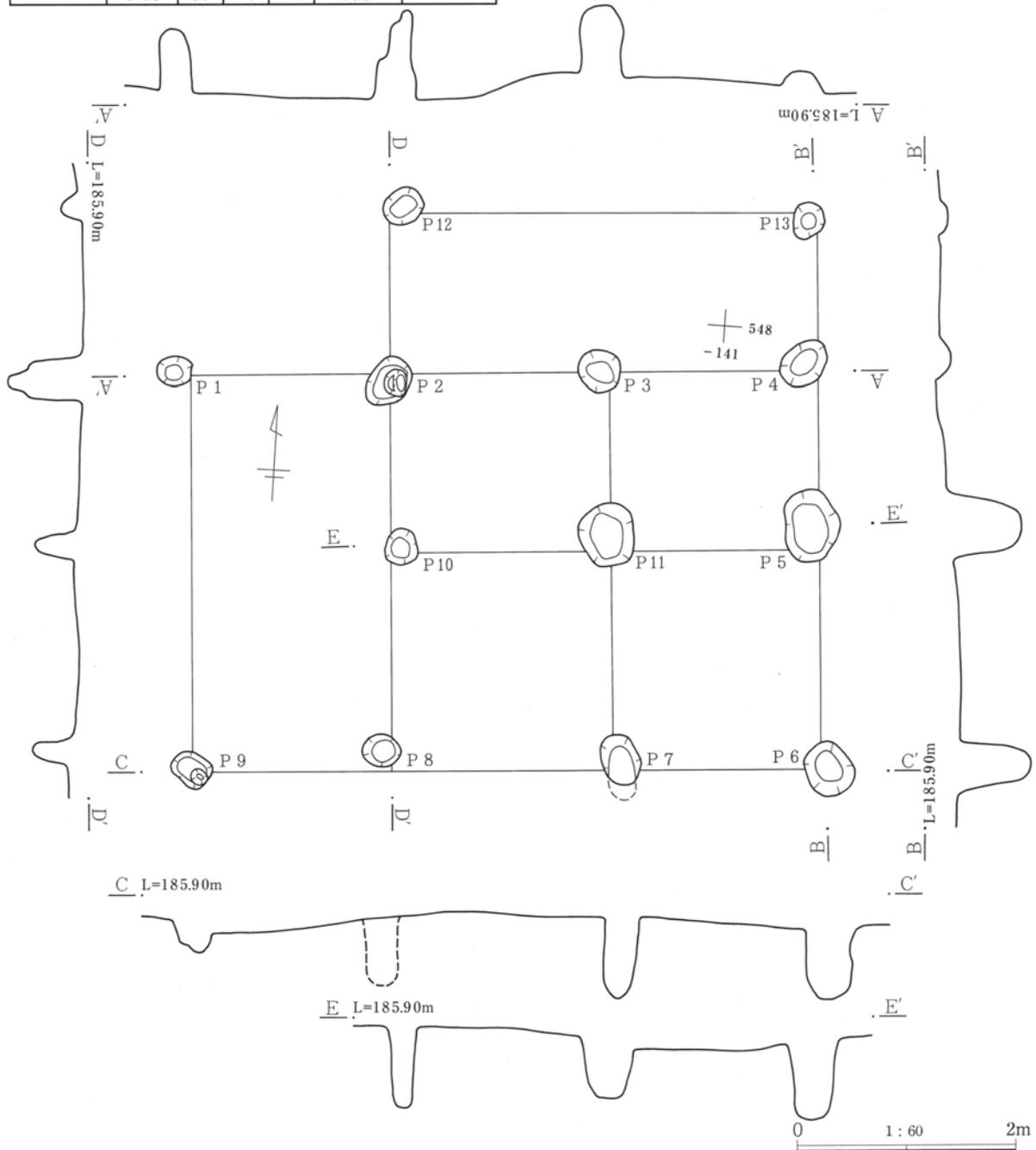
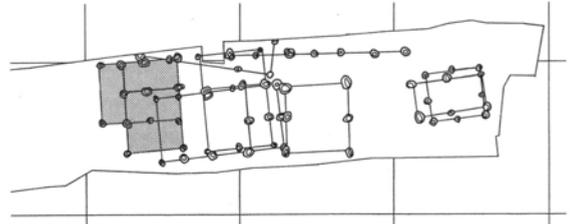


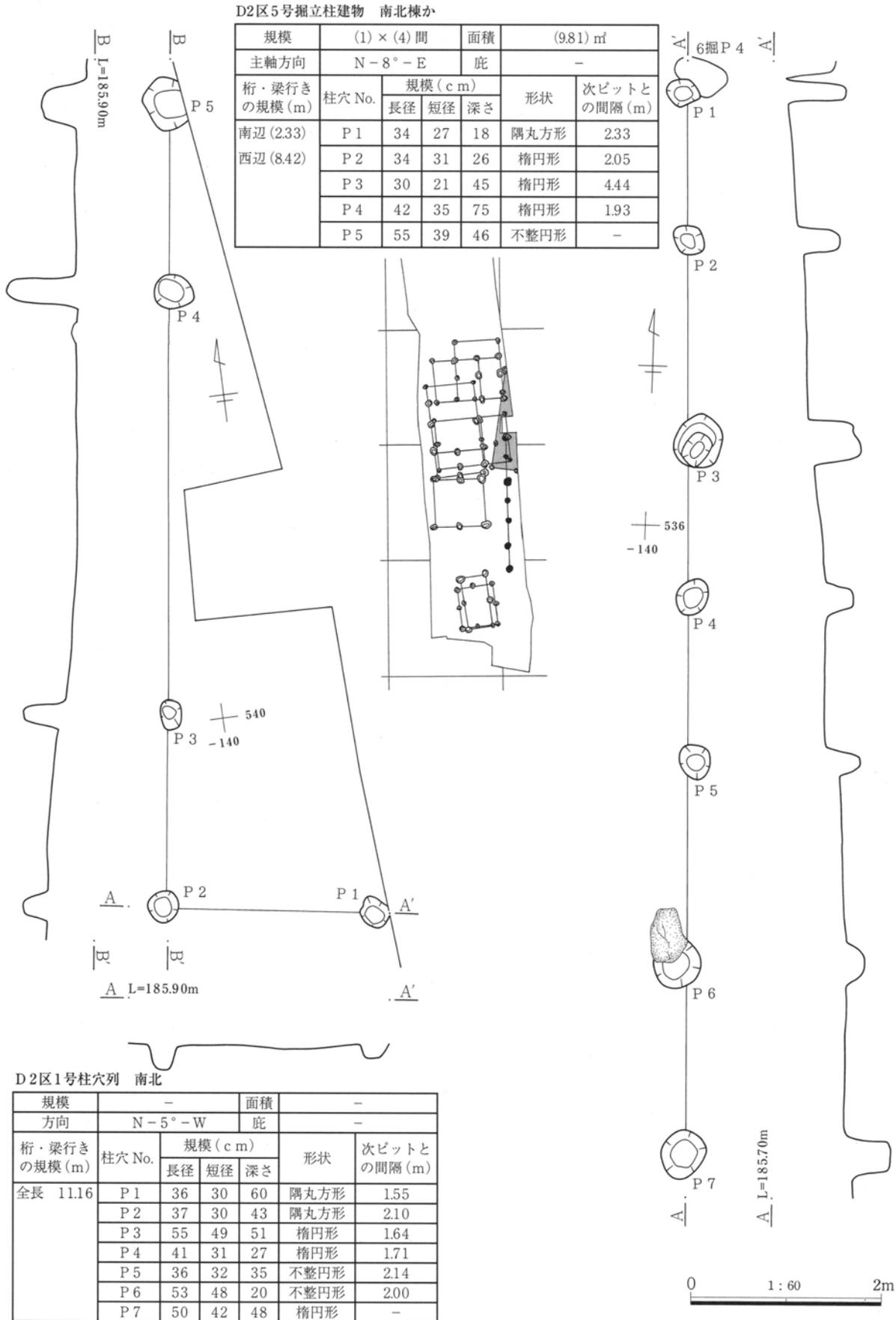
第76図 D2区6号掘立柱建物平面・断面図

第4章 石原東遺跡D区の遺構と遺物

D2区8号掘立柱建物 東西棟

規模	(2+1) × 3間			面積	33.36㎡	
主軸方向	N-86°-E			庇	北	
桁・梁行きの規模(m)	柱穴No.	規模(c m)			形状	次ピットとの間隔(m)
		長径	短径	深さ		
北辺 5.76	P 1	32	27	60	楕円形	1.96
	P 2	49	35	81	不整円形	1.94
	P 3	39	38	68	円形	1.86
東辺 3.70	P 4	48	46	24	楕円形	1.46
	P 5	65	50	70	不整円形	2.24
南辺 5.78	P 6	50	40	66	隅丸方形	1.86
	P 7	48	35	75	楕円形	2.18
西辺 3.67	P 8	35	30	62	円形	1.74
	P 9	36	29	30	隅丸方形	P1~3.64
	P 10	33	28	74	不整円形	1.92
北庇 3.70	P 11	57	51	57	不整円形	-
	P 12	38	33	21	楕円形	3.70
	P 13	35	28	10	円形	P4~1.30





第78図 D2区7号掘立柱建物、1号柱穴列 平面・断面図

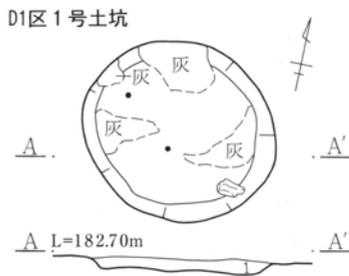
(2) 土坑

石原東遺跡D区では、中世以降の土坑3基、土坑墓30基が検出された。人骨や銭貨が出土したものを土坑墓とし、それ以外を土坑とした。

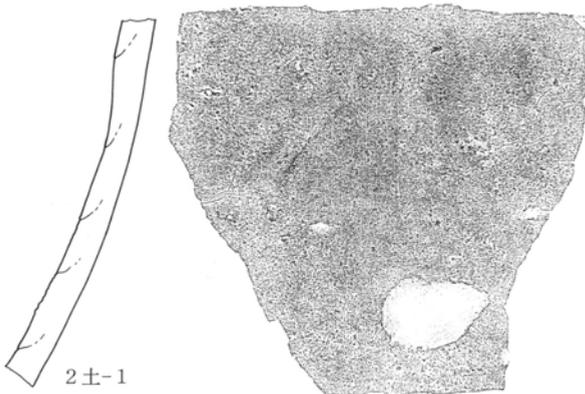
土坑・土坑墓の多くは時期判別の決め手になる遺物が含まれていなかったため、埋土や形状から時期を判別した。

D1区1号土坑(第79図、PL11)

本土坑は482-137グリッドに位置する。D1区2号溝と重複する。本土坑が溝を切る調査所見を得た。形態はほぼ正円形を呈す。規模は直径105cm、深さ8.5cmを測る。土坑内には炭化物が多量に残存していた。



D1区1号土坑  
1 黒褐色土 炭化物を多量に含む。



D2区2号土坑(第79図、PL36・37)

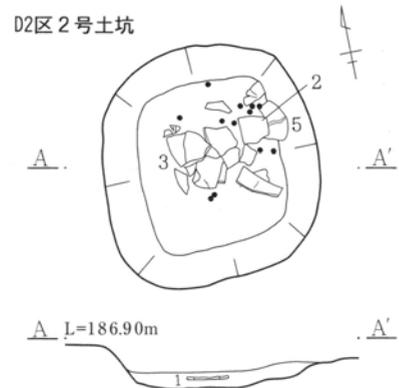
本土坑は589-146グリッドに位置する。他遺構との重複関係は確認されなかった。

形態は隅丸方形を呈す。規模は長径124cm、短径113cm、深さ24cmを測る。主軸方向はN-0°を指す。土坑内から常滑の甕、在地系土器の鍋が出土した。本遺構は、出土遺物から近世以降に比定される。

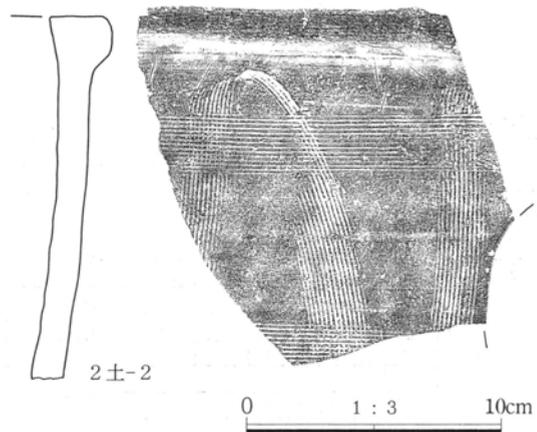
D2区3号土坑(第81図PL11・37)

本土坑は558-148グリッドに位置する。D2区5号住居と重複する。本土坑が住居を切る調査所見を得た。形態は隅丸方形を呈す。規模は長径121cm、短径83cm、深さ38cmを測る。主軸方向はN-81°-Eを指す。土坑内から常滑の甕、肥前磁器の椀が出土した。

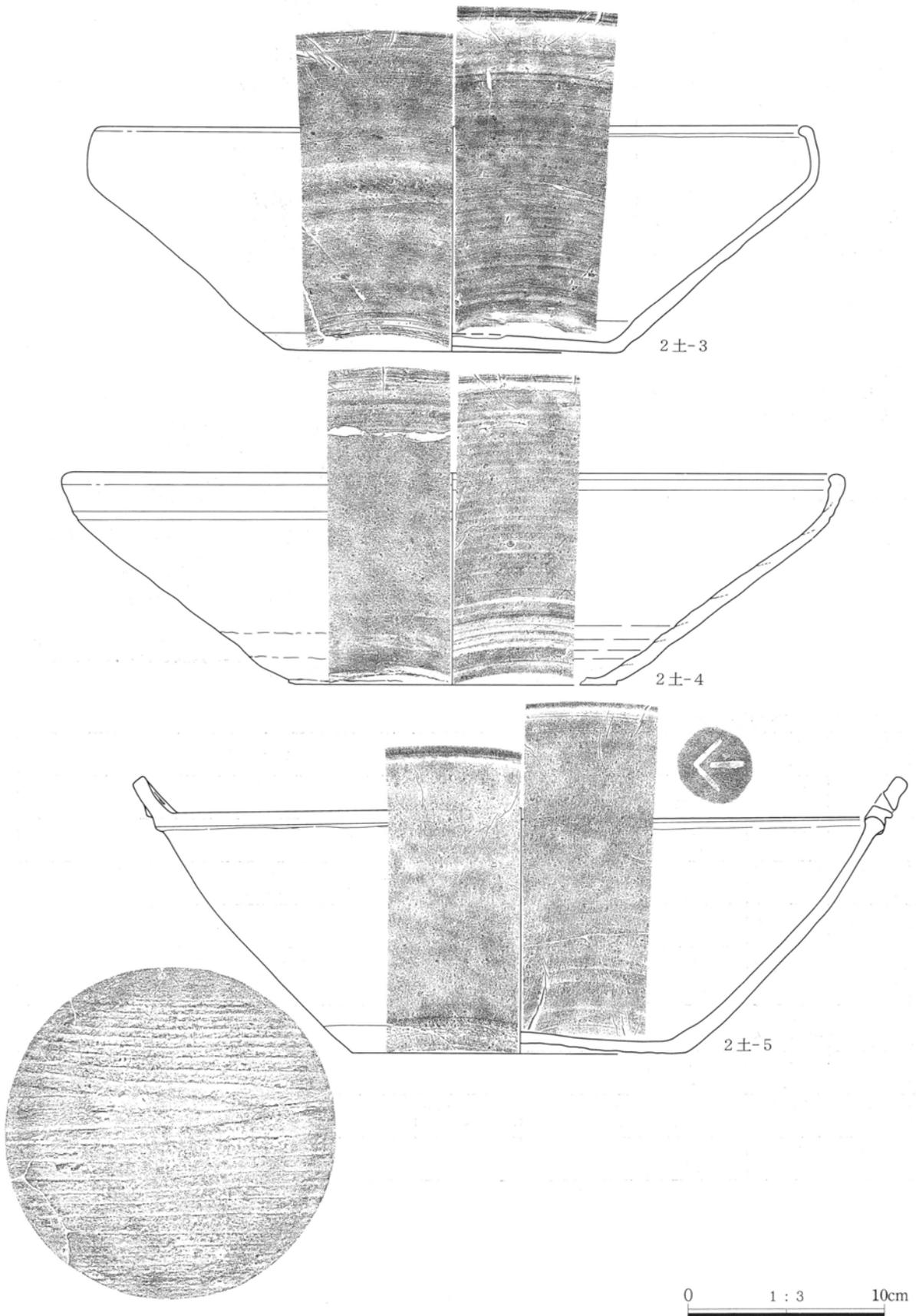
本遺構は、出土遺物から概ね近世に比定される。



D2区2号土坑  
1 黒褐色土 砂質、白色軽石粒を含む。粘性がなく崩れやすい。

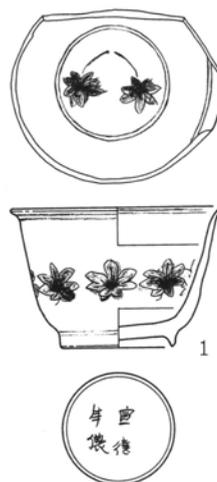
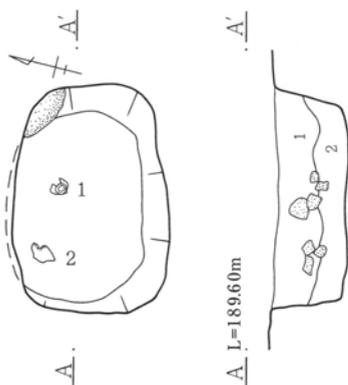


第79図 D1区1号、D2区2号土坑平面・断面図、出土遺物図



第80図 D2区2号土坑出土遺物図

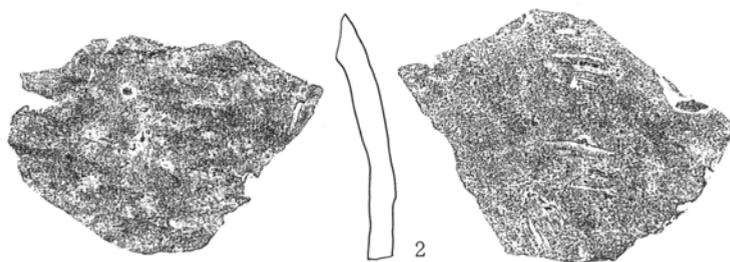
D2区3号土坑



D2区3号土坑

- 1 黒褐色土 径2~10cmの礫を多量に含む。
- 2 黒褐色土 白色軽石を少量含む。

0 1 : 40 1m



0 1 : 3 10cm

第81図 D2区3号土坑平面・断面図、出土遺物図

D2区2号土坑出土遺物観察表

No.	挿図No. 図版No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	特徴など
1	第79図 PL-36	常滑 甕	+10 体部下	口 - 高 14.5 残 底 -	江戸時代。
2	第79図 PL-36	在地系土器 カマド	+10 口縁片	口 - 高 14.4 残 底 -	外面ケン状工具による施文。焼き口部残る。近代～現代。
3	第80図 PL-37	在地系土器 鍋	±0 ほぼ完形	口 36.9 高 11.8 底 17.5	底部外面砂底。口縁部内湾する。器表黒色仕上げ。近代～現代。ススの付着が認められず、使用時間は短いと考えられる。
4	第80図 PL-36	在地系土器 鍋	+10 破片	口 (40.2) 高 10.9 底 (16.8)	近代。
5	第80図 PL-37	在地系土器 鍋	+10 完形	口 37.6 高 12.9 底 17.4	1対の吊り手を設ける。吊り手部に使用痕は認められない。底部外面板状圧痕あり。底部内面に「⊖」印1カ所。近代～現代。ススの付着が認められず、使用時間は短いと考えられる。

D2区3号土坑出土遺物観察表

No.	挿図No. 図版No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	特徴など
1	第81図 PL-37	肥前磁器 椀	+4 2/3	口 (8.6) 高 5.5 底 4.6 高台 4.6	高台内「宜徳年製」銘 17C後～18C初
2	第81図 PL-37	常滑 甕	+21 胴部片	口 - 高 9.6 残 底 -	中世。

### (3) 土坑墓

石原東遺跡 D 区では、中世以降の土坑・土坑墓 33基が検出された。33基の内、人骨、獣骨、銭貨が出土した 27基を土坑墓とした。位置、形態、規模については第7表に一覧で掲載してある。当初土坑墓とした D5区5 から 7号土坑で人骨として取り上げられた物体は、その後の分析により、人骨ではないとされたため、土坑とする。編集の経過で土坑墓の項での掲載となったが、本来、土坑の項に掲載

すべき遺構である。

一覧表の備考欄に自然科学分析とあるものは、第6章[1]「石原東遺跡出土人骨」(植崎修一郎)、[2]「石原東遺跡出土獣骨」(植崎修一郎)を参照していただきたい。なお、特異なものや遺物が多く出土している特徴的な土坑墓は下記に掲載する。

第7表 石原東遺跡 D 区中世以降 土坑墓 一覧表

No.	遺構名称	位置	平面形状	主軸方向	規模 (cm)			主な出土遺物・備考
					長さ	幅	深さ	
1	D2区-4号土坑	592-186	方形	N-52°-W	222	178	17	人骨(第6章 自然科学分析参照)
2	D2区-5号土坑	594-184	隅丸長方形	N-32°-E	150	75	32	人骨(第6章 自然科学分析参照)、石臼
3	D2区-6号土坑	593-187	隅丸長方形	N-66°-W	164	87	61	人骨、犬骨(第6章 自然科学分析参照)
4	D3区-1号土坑	598-199	円形	-	97	73	11	銭貨(政和通宝、景祐元宝)
5	D3区-2号土坑	601-198	楕円形	N-57°-W	114	77	12	銭貨(元祐通宝 他)
6	D3区-3号土坑	606-213	隅丸方形	N-13°-W	90	83	22	銭貨(元豊通宝、紹聖元宝、洪武通宝 他)
7	D4区-1号土坑	621-204	楕円形	N-84°-W	71	71	11	人骨(第6章 自然科学分析参照)
8	D4区-2号土坑	623-210	隅丸長方形	N-35°-W	120	71	32	人骨(第6章 自然科学分析参照) 銭貨(祥符通宝、永楽通宝)
9	D4区-3号土坑	618-220	不定形	-	112	(112)	22	人骨(第6章 自然科学分析参照)
10	D4区-4号土坑	619-214	不定形	-	75	65	32	銭貨(皇宋通宝、元祐通宝)
11	D4区-5号土坑	616-208	不定形	N-72°-W	67	-	24	人骨片?
12	D4区-6号土坑	619-209	楕円形	N-3°-E	106	70	31	人骨(第6章 自然科学分析参照) 銭貨(元豊通宝)
13	D5区-1号土坑	615-250	隅丸方形	N-20°-W	124	99	34	人骨(第6章 自然科学分析参照) 銭貨(祥符通宝 他)
14	D5区-2号土坑	615-246	不定形	N-68°-W	92	-	30	人骨(第6章 自然科学分析参照)
15	D5区-3号土坑	614-247	不定形	N-27°-W	116	-	36	馬歯(第6章 自然科学分析参照)
16	D5区-4号土坑	610-246	楕円形	N-53°-W	115	79	42	人骨(第6章 自然科学分析参照) 銭貨(文久元宝)
17	D5区-5号土坑	610-245	楕円形	N-75°-W	63	44	13	土坑(第6章 自然科学分析参照)
18	D5区-6号土坑	610-245	楕円形	N-85°-W	69	52	26	土坑(第6章 自然科学分析参照)
19	D5区-7号土坑	611-245	楕円形	N-75°-E	69	41	26	土坑(第6章 自然科学分析参照)
20	D5区-8号土坑	611-236	楕円形	N-53°-E	76	46	27	人骨片?
21	D5区-9号土坑	611-236	楕円形	N-0°	72	49	10	人骨片?
22	D5区-10号土坑	610-238	楕円形	N-71°-W	91	70	24	人骨片?
23	D5区-11号土坑	609-238	楕円形	N-66°-E	72	54	8	人骨片?
24	D5区-12号土坑	609-238	楕円形	N-63°-E	71	52	16	人骨片?
25	D5区-13号土坑	608-238	楕円形	N-0°	66	42	10	人骨片?
26	D5区-14号土坑	607-238	楕円形	N-56°-W	72	59	10	人骨片?
27	D5区-15号土坑	607-238	円形	-	68	52	8	人骨片?
28	D5区-16号土坑	606-238	不定形	N-80°-E	96	65	6	人骨片?
29	D5区-17号土坑	612-239	楕円形	N-37°-E	59	45	22	銭貨(永楽通宝)
30	D5区-18号土坑	606-236	不定形	N-74°-W	(69)	-	23	人骨片?

D2区4号土坑(墓) (第82図、PL11)

本土坑は592-186グリッドに位置する。他遺構との重複関係は確認されなかった。

形態は方形を呈す。規模は長径222cm、短径178cm、深さ17cmを測る。主軸方向はN-52°-Wを指す。

本遺構から出土した人骨は、分析の結果、3個体(人骨1~人骨3)であることが判明した。3個体の死亡年齢は、それぞれ約6才(人骨2)、9才(人骨1)、16才(人骨3)と推定された。出土位置などから人骨1から人骨3は合葬された可能性が高い。

D4区2号土坑(墓) (第84図、PL12・38)

本土坑は623-210グリッドに位置する。他遺構との重複関係は確認されなかった。形態は隅丸長方形を呈す。規模は長径120cm、短径71cm、深さ32cmを測る。主軸方向はN-35°-Wを指す。土坑内から人骨、銭貨が出土した。出土した銭貨は祥符通宝、永楽通宝である。鑄造年から1587年以降の遺構であることがわかる。

出土した人骨は1個体で、北西の頭位、屈葬により埋葬されていた。15~18才の女性であるとのこ

とである。

D4区6号土坑(墓) (第85図、PL13・38)

本土坑は619-209グリッドに位置する。他遺構との重複関係は確認されなかった。形態は楕円を呈す。規模は長径106cm、短径70cm、深さ31cmを測る。主軸方向はN-3°-Wを指す。土坑内から人骨、銭貨が出土した。出土した銭貨は元豊通宝である。鑄造年から1078年以降の遺構であることがわかる。

出土した人骨は1個体で、屈葬により埋葬されていた。30才代の男性であるとのことである。

D5区4号土坑(墓) (第85図、PL13・38)

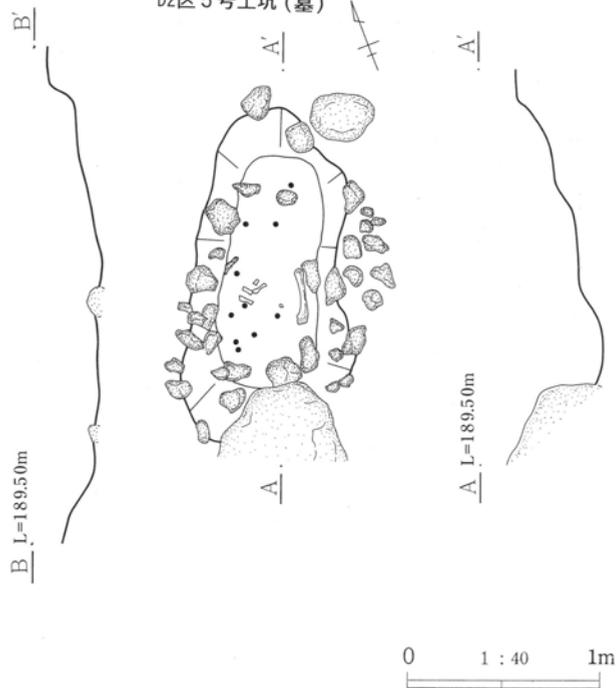
本土坑は610-246グリッドに位置する。D5区1号住居と重複する。D5区4号土坑がD5区1号住居を切る調査所見を得た。形態は楕円を呈す。規模は長径115cm、短径79cm、深さ42cmを測る。主軸方向はN-53°-Wを指す。土坑内から人骨、銭貨が出土した。出土した銭貨は文久永宝である。鑄造年から1868年以降の遺構であることがわかる。

出土した人骨は1個体で、40才代の女性であるとのことである。

D2区4号土坑(墓)

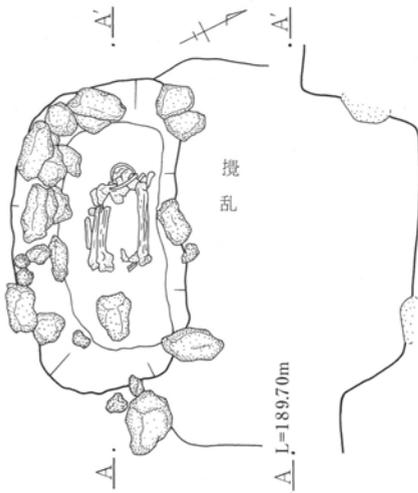


D2区5号土坑(墓)

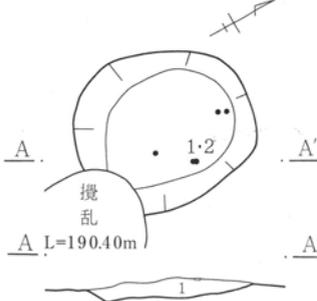


第82図 D2区4、5号土坑(墓)平面・断面図

D2区 6号土坑(墓)



D3区 1号土坑(墓)



D3区 1号土坑(墓)

1 黒褐色土 白色軽石を多量に含む。

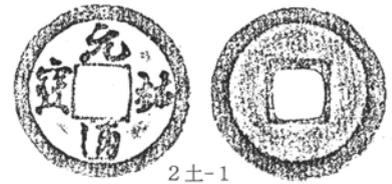
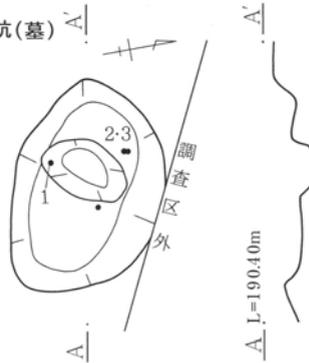


1土-1



1土-2

D3区 2号土坑(墓)



2土-1

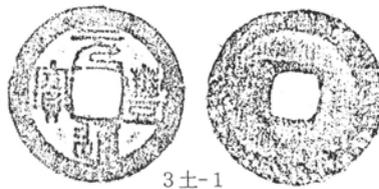
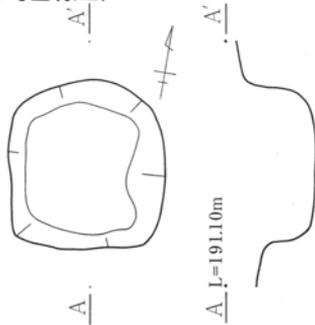


2土-2

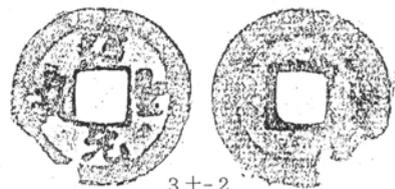


2土-3

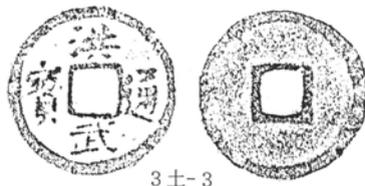
D3区 3号土坑(墓)



3土-1



3土-2



3土-3



3土-4



3土-5

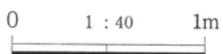


3土-6



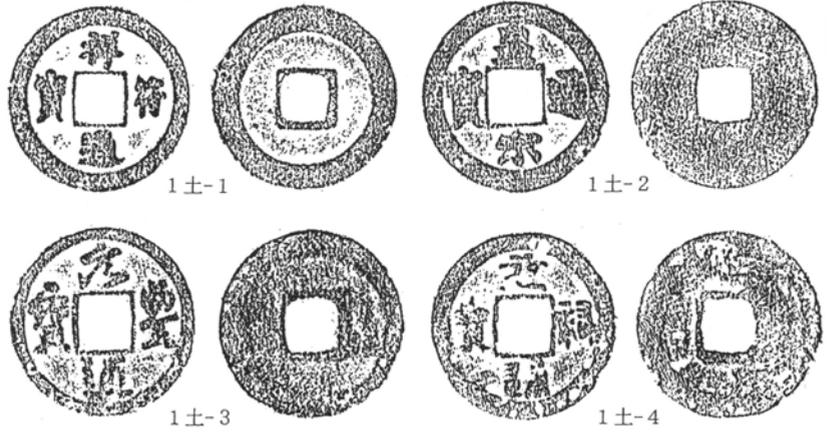
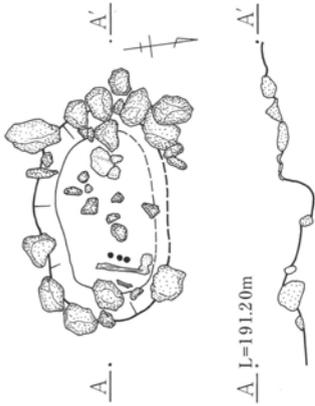
3土-7

銭貨1/1

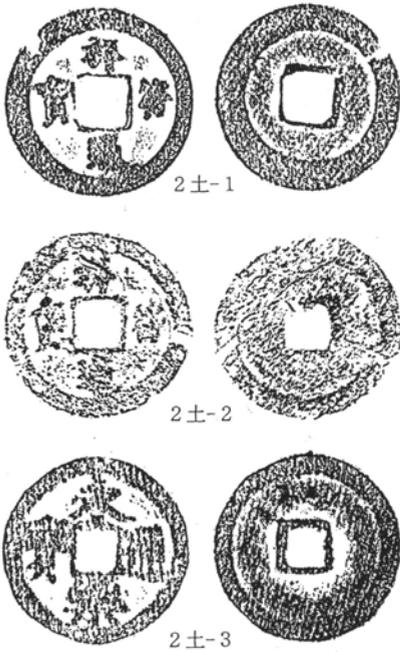
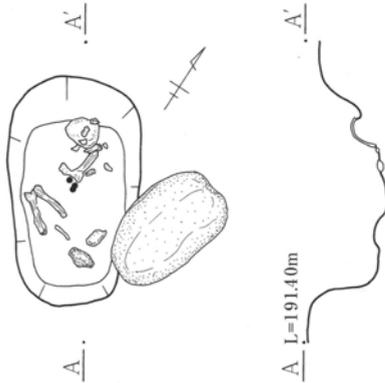


第83図 D2区6号、D3区1~3号土坑(墓)平面・断面図、出土遺物図

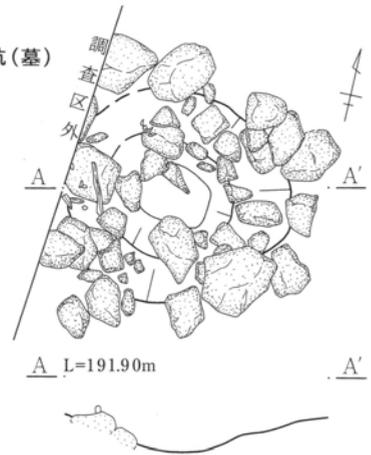
D4区1号土坑(墓)



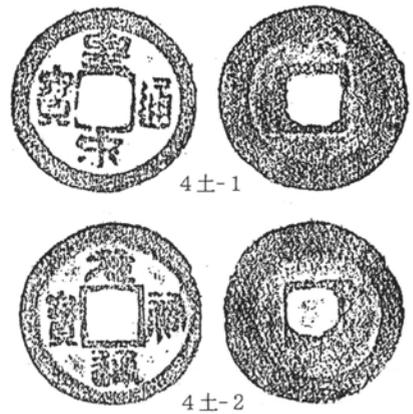
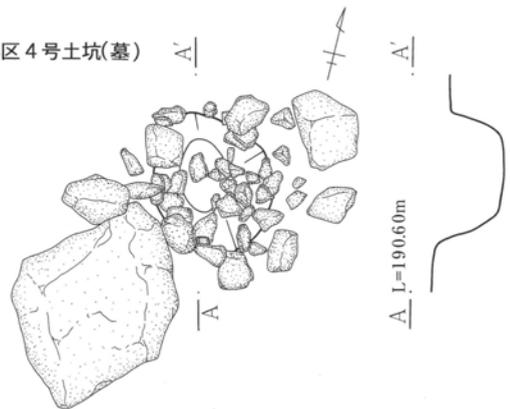
D4区2号土坑(墓)



D4区3号土坑(墓)



D4区4号土坑(墓)



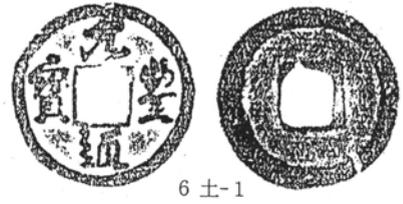
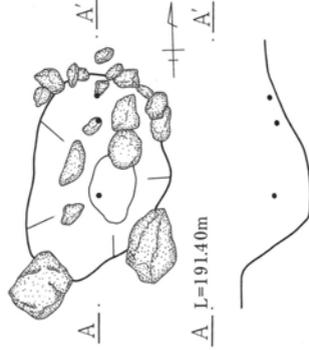
0 1:40 1m 錢貨1/1

第84図 D4区1~4号土坑(墓)平面・断面図、出土遺物図

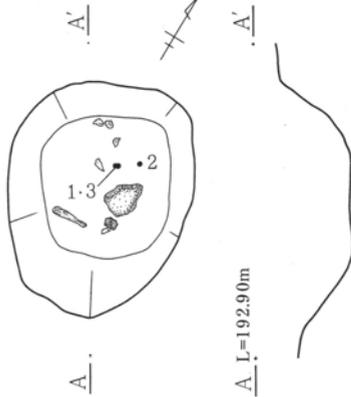
D4区 5号土坑(墓)



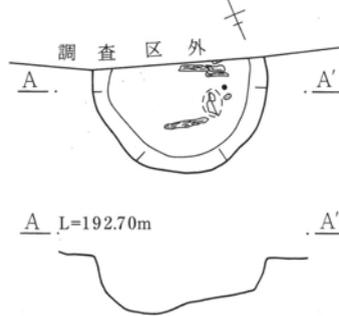
D4区 6号土坑(墓)



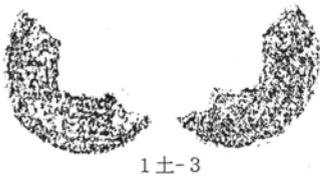
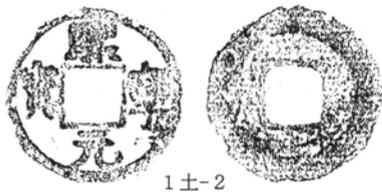
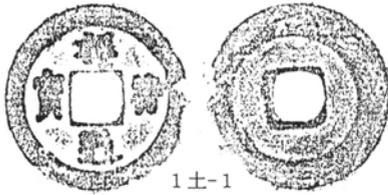
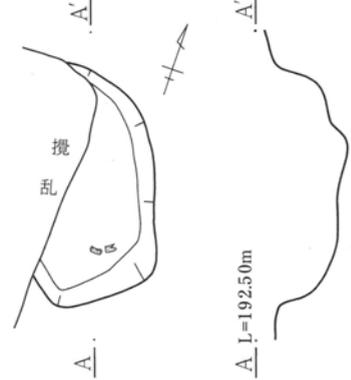
D5区 1号土坑(墓)



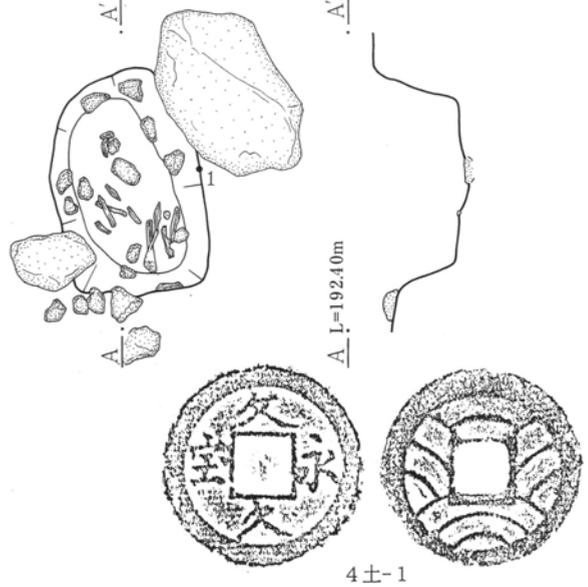
D5区 2号土坑(墓)



D5区 3号土坑(墓)

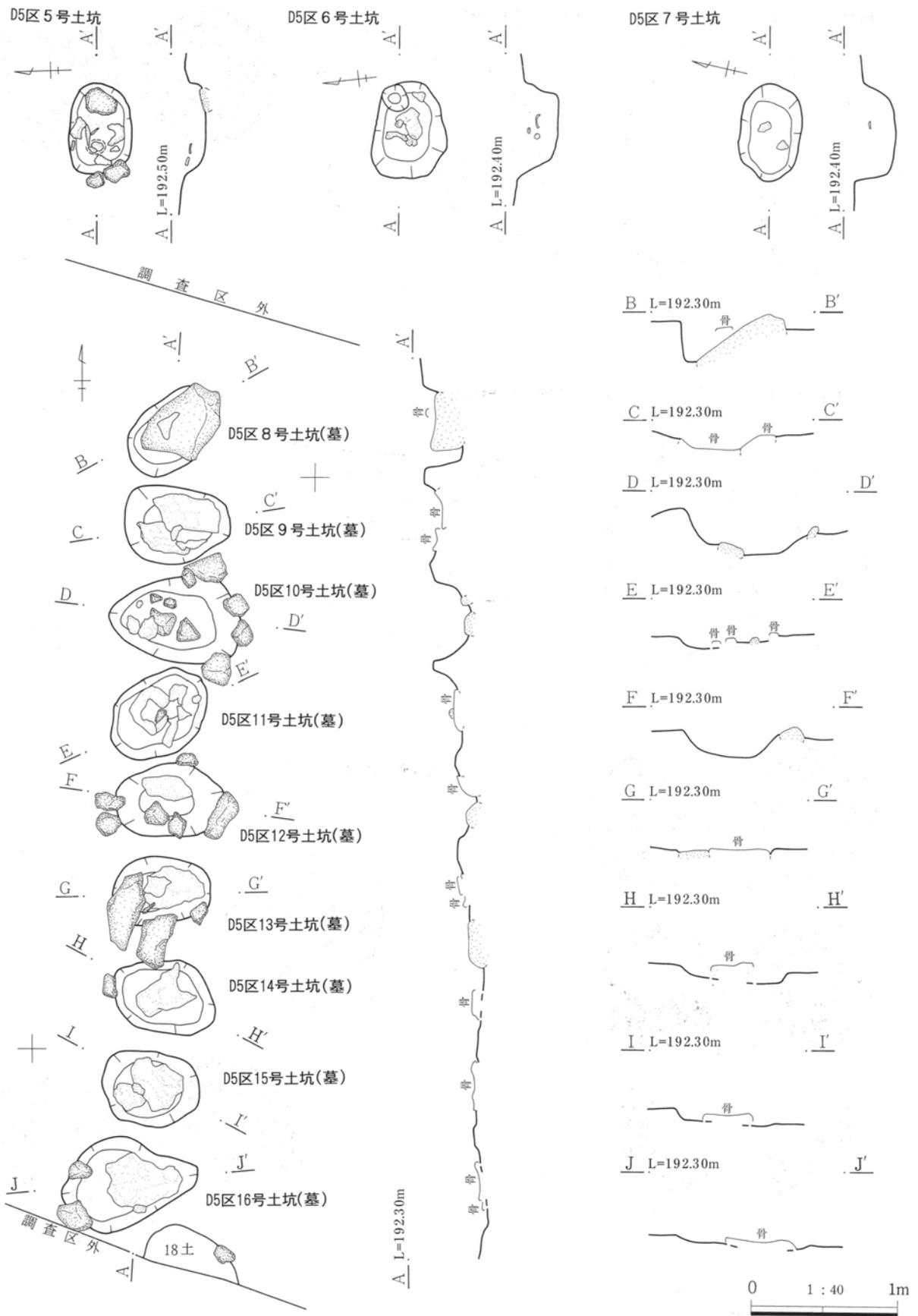


D5区 4号土坑(墓)



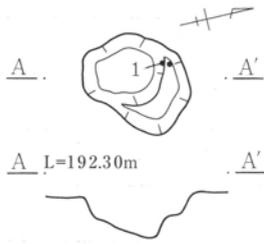
0 1:40 1m 錢貨1/1

第85図 D4区5、6号、D5区1~4号土坑(墓)平面・断面図、出土遺物図

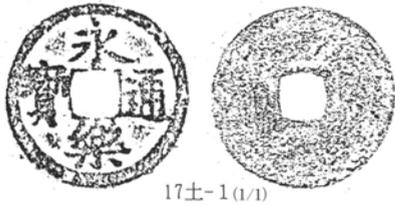
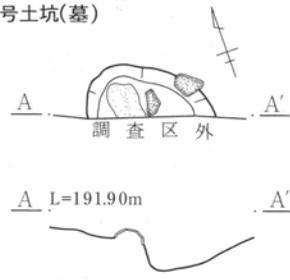


第86図 D5区5~7号土坑(墓)平面・断面図

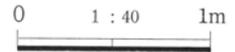
D5区17号土坑(墓)



D5区18号土坑(墓)



17土-1(1/1)



第87図 D5区17、18号土坑(墓)平面・断面図、出土遺物図

D3区1号土坑(墓)出土遺物観察表

No.	挿図No. 図版No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値・特徴など
1	第83図 PL-37	銭貨 政和通宝	+15 完形	外縁銭径24.75~25.00mm、外縁内径21.00~21.50mm、銭厚1.0mm、量目2.957g。
2	第83図 PL-37	銭貨 景祐元宝	+15 完形	外縁銭径24.50mm、外縁内径21.00mm、銭厚1.25mm、量目3.367g。

D3区2号土坑(墓)出土遺物観察表

No.	挿図No. 図版No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値・特徴など
1	第83図 PL-37	銭貨 元祐通宝	+20 完形	外縁銭径23.75~24.00mm、外縁内径18.75~19.00mm、銭厚1.25mm、量目2.803g。
2	第83図 PL-37	銭貨 ○平○○	+9 破片	外縁銭径(25.00)mm、外縁内径-、銭厚1.0mm、量目0.511g。
3	第83図 PL-37	銭貨 不明	+9 破片	外縁銭径-、外縁内径-、銭厚0.5mm、量目0.531g。

D3区3号土坑(墓)出土遺物観察表

No.	挿図No. 図版No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値・特徴など
1	第83図 PL-37	銭貨 元豊通宝	埋土 完形	外縁銭径23.50~24.00mm、外縁内径19.00mm、銭厚1.00mm、量目2.440g。
2	第83図 PL-37	銭貨 紹聖元宝	埋土 一部欠損	外縁銭径24.00mm、外縁内径18.25~18.50mm、銭厚1.00mm、量目2.721g。
3	第83図 PL-37	銭貨 洪武通宝	埋土 完形	外縁銭径22.75mm、外縁内径19.50mm、銭厚1.50mm、量目2.603g。
4	第83図 PL-37	銭貨 洪武通宝	埋土 完形	外縁銭径23.50~23.75mm、外縁内径20.00mm、銭厚1.75mm、量目3.336g。
5	第83図 PL-37	元○○宝	埋土 完形	外縁銭径24.00mm、外縁内径18.50~19.50mm、銭厚1.00mm、量目2.515g。
6	第83図 PL-37	銭貨 ○○○宝	埋土 破片	外縁銭径-、外縁内径-、銭厚1.0mm、量目0.882g。
7	第83図 PL-37	銭貨 ○○通○	埋土 破片	外縁銭径(26.00)mm、外縁内径-、銭厚1.25mm、量目0.809g。

第4章 石原東遺跡D区の遺構と遺物

D4区1号土坑(墓)出土遺物観察表

No.	挿図 No. 図版 No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値・特徴など
1	第84図 PL-37	銭貨 祥符通宝	埋土 完形	外縁銭径23.75～24.00mm、外縁内径19.50mm、銭厚1.0mm、量目3.295g。
2	第84図 PL-37	銭貨 皇宋通宝	埋土 完形	外縁銭径25.00mm、外縁内径19.00mm、銭厚0.75mm、量目2.617g。
3	第84図 PL-37	銭貨 元豊通宝	埋土 完形	外縁銭径25.00mm、外縁内径21.50～21.75mm、銭厚1.0mm、量目2.551g。
4	第84図 PL-37	銭貨 元祐通宝	埋土 完形	外縁銭径24.75～25.00mm、外縁内径19.25mm、銭厚1.00mm、量目3.016g。

D4区2号土坑(墓)出土遺物観察表

No.	挿図 No. 図版 No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値・特徴など
1	第84図 PL-38	銭貨 祥符通宝	埋土 完形	外縁銭径25.00mm、外縁内径18.75mm、銭厚1.10mm、量目2.549g。
2	第84図 PL-38	銭貨 祥符通宝	埋土 完形	外縁銭径24.50～25.00mm、外縁内径19.25～19.50mm、銭厚1.50mm、量目2.679g。
3	第84図 PL-38	銭貨 永楽通宝	埋土 完形	外縁銭径25.00～25.25mm、外縁内径20.25～20.50mm、銭厚1.0mm、量目2.969g。

D4区4号土坑(墓)出土遺物観察表

No.	挿図 No. 図版 No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値・特徴など
1	第84図 PL-38	銭貨 皇宋通宝	埋土 完形	外縁銭径25.25～25.50mm、外縁内径19.50～19.75mm、銭厚1.10mm、量目3.140g。
2	第84図 PL-38	銭貨 元祐通宝	埋土 完形	外縁銭径24.50～24.75mm、外縁内径18.75～19.00mm、銭厚1.0mm、量目2.562g。

D4区6号土坑(墓)出土遺物観察表

No.	挿図 No. 図版 No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値・特徴など
1	第85図 PL-38	銭貨 元豊通宝	埋土 完形	外縁銭径24.50mm、外縁内径21.25mm、銭厚1.10mm、量目2.309g。

D5区1号土坑(墓)出土遺物観察表

No.	挿図 No. 図版 No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値・特徴など
1	第85図 PL-38	銭貨 祥符通宝	±0 完形	外縁銭径24.75～25.25mm、外縁内径19.25mm、銭厚1.10mm、量目2.823g。
2	第85図 PL-38	銭貨 〇寧元宝	+4 完形	外縁銭径24.00～24.25mm、外縁内径21.50mm、銭厚1.25mm、量目2.852g。
3	第85図 PL-38	銭貨 不明	±0 破片	外縁銭径(23.00)mm、外縁内径-、銭厚1.20mm、量目1.314g。

D5区4号土坑(墓)出土遺物観察表

No.	挿図 No. 図版 No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値・特徴など
1	第85図 PL-38	銭貨 文久永宝	+2 完形	外縁銭径27.00mm、外縁内径21.25～21.75mm、銭厚1.25mm、量目3.874g。

D5区17号土坑(墓)出土遺物観察表

No.	挿図 No. 図版 No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値・特徴など
1	第87図 PL-38	銭貨 永楽通宝	+3 完形	外縁銭径24.50mm、外縁内径21.00mm、銭厚1.10mm、量目2.737g。

#### (4) 井戸

井戸はD2区に1基検出された。出土遺物もなく時期を比定することは難しい。

##### D2区1号井戸 (第88図、PL15)

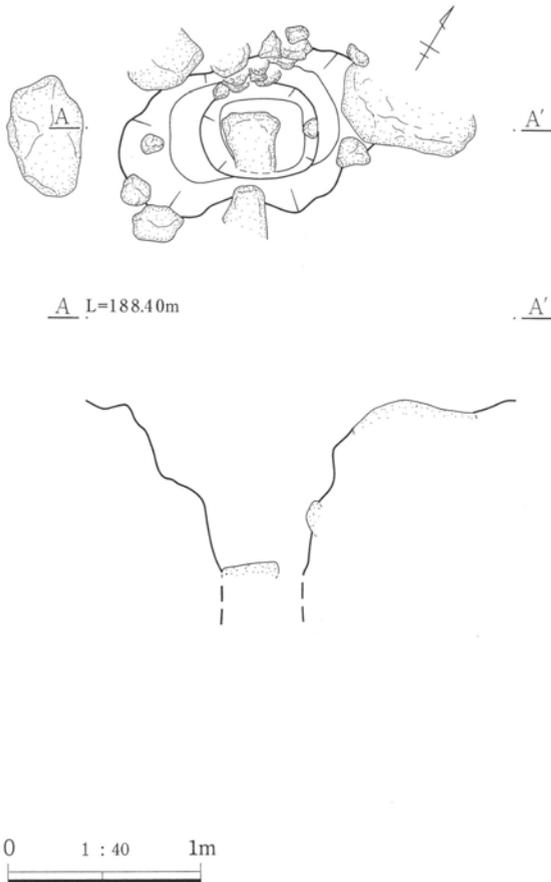
本井戸はD2区北側の590-160グリッド付近に位置する。重複する遺構は検出されなかった。

形態は楕円形を呈す。残存状況は良好であったが、調査時の湧水のため危険が生じたので、底部まで調査することが出来なかった。

規模は長軸136cm、短軸81cm、確認深度124cmを測る。

内部から井戸枠などの施設は確認されないことから素掘りの状態で使用されていたようである。

D2区1号井戸



第88図 D2区1号井戸平面・断面図

#### (5) 溝

溝はD1区に4条検出された。D2区からD5区では検出されなかった。検出された溝は、断面形状や規模とも様々である。いずれの溝も攪乱が著しく、残存状況が悪い。1号溝から3号溝は、重複しているが、ほぼ同時期の可能性が高いとの調査所見である。D1区南端で接する唐沢川は、概ね西から東に走行する。D1区の地形も唐沢川の走行の通り、西が高く東が低い。南北方向は唐沢川に向かって、若干南に傾斜している。

奈良・平安時代の遺物包含層確認面より上面で検出されたため、中世以降の遺構としたが、出土遺物もなく時期を比定することが難しい。

##### D1区1号溝 (第89図、PL15)

1区中央やや南に位置し、ほぼ東西に走行する。確認全長13.5m、最大深61cm、比高は93cmを測る。遺物はない。D1区1号土坑、D1区2号溝、D1区3号溝と重複する。1号土坑に切られ、D1区2号溝、D1区3号溝とほぼ同時期であるとの調査所見を得た。

本溝は、傾斜方向に走向しているため比高差が大きい。唐沢川にほぼ並行する走行である。

##### D1区2号溝 (第89図、PL15)

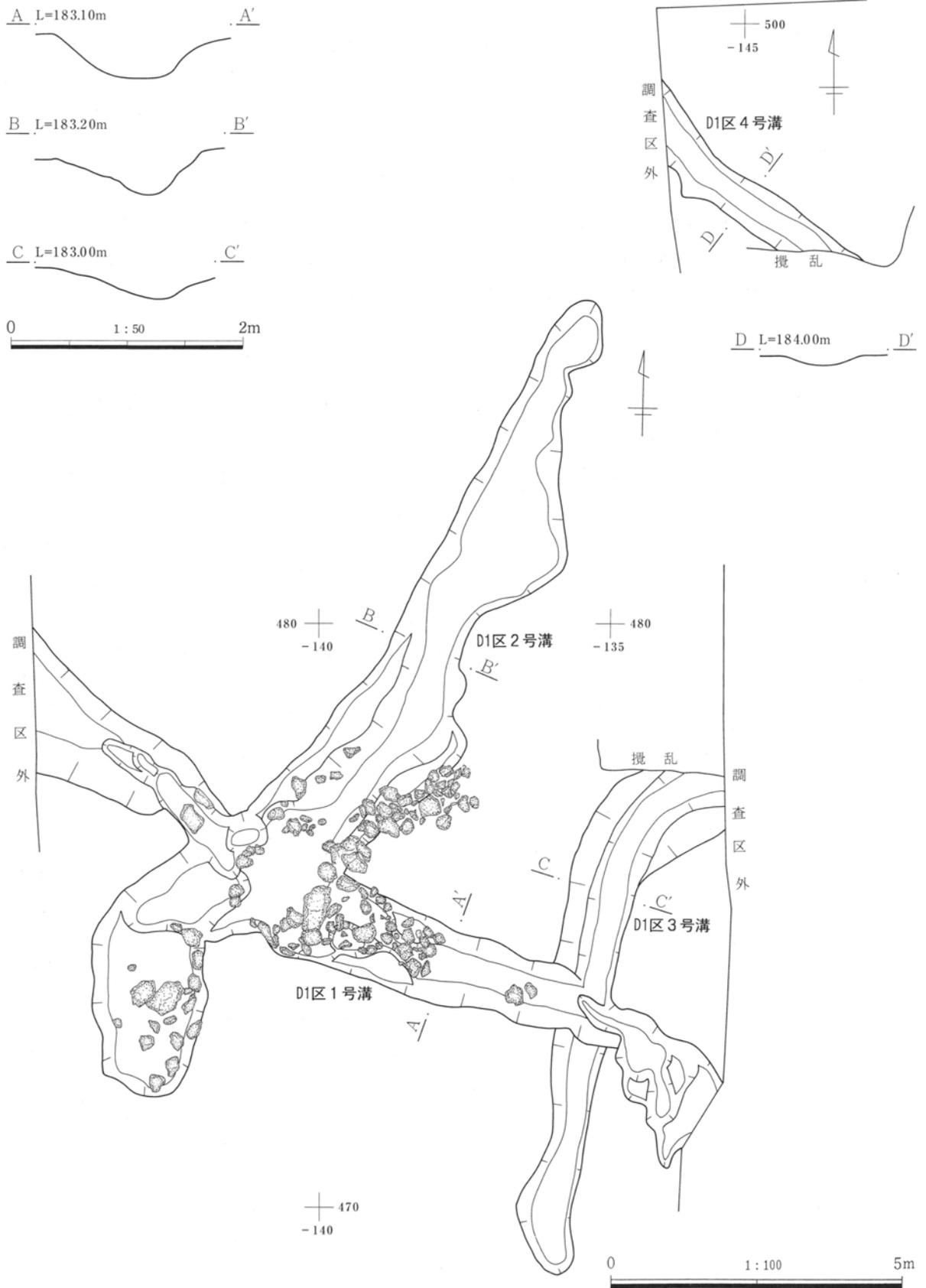
1区中央やや南に位置し、ほぼ南北に走行する。確認全長15.7m、最大深68cm、比高は30cmを測る。遺物はない。D1区1号溝と重複する。D1区1号溝とほぼ同時期であるとの調査所見を得た。

##### D1区3号溝 (第89図、PL15)

1区中央やや南に位置し、ほぼ南北に走行する。確認全長8.8m、最大深30cm、比高は21cmを測る。遺物はない。D1区1号溝と重複する。D1区1号溝とほぼ同時期であるとの調査所見を得た。

##### D1区4号溝 (第89図)

1区中央やや南に位置し、ほぼ南北に走行する。確認全長3.3m、最大深8cm、比高は8cmを測る。遺物はない。重複する遺構は検出されなかった。



第89図 D1区1~4号溝平面・断面図

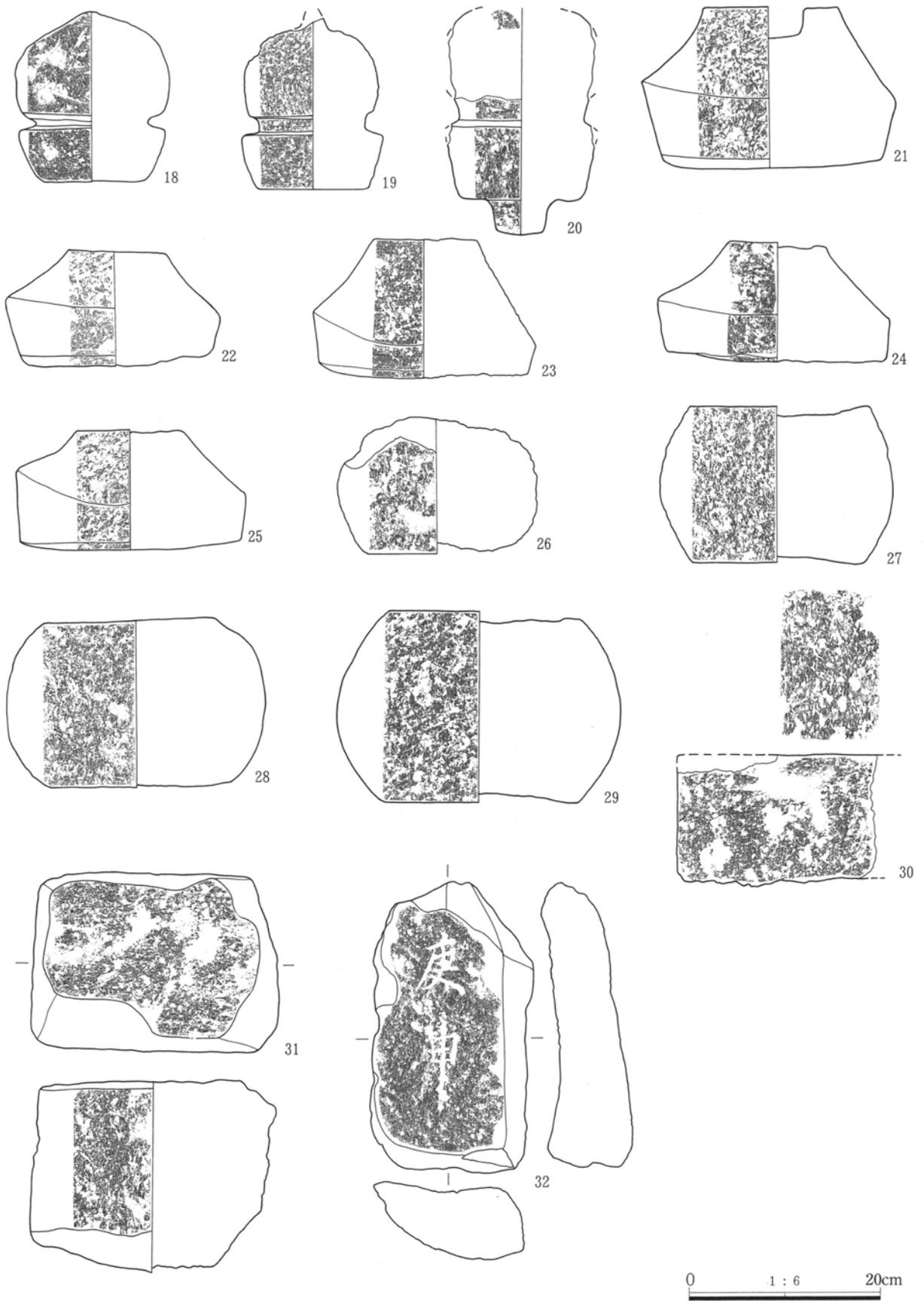
(6) 遺構外出土遺物 (第90～93図、PL38～40)

石原東遺跡 D 区では、五輪塔や銭貨を中心とした遺構外の遺物が出土した。石原東遺跡 D2区から D5区は、中世以降の土坑墓が多数検出された地区

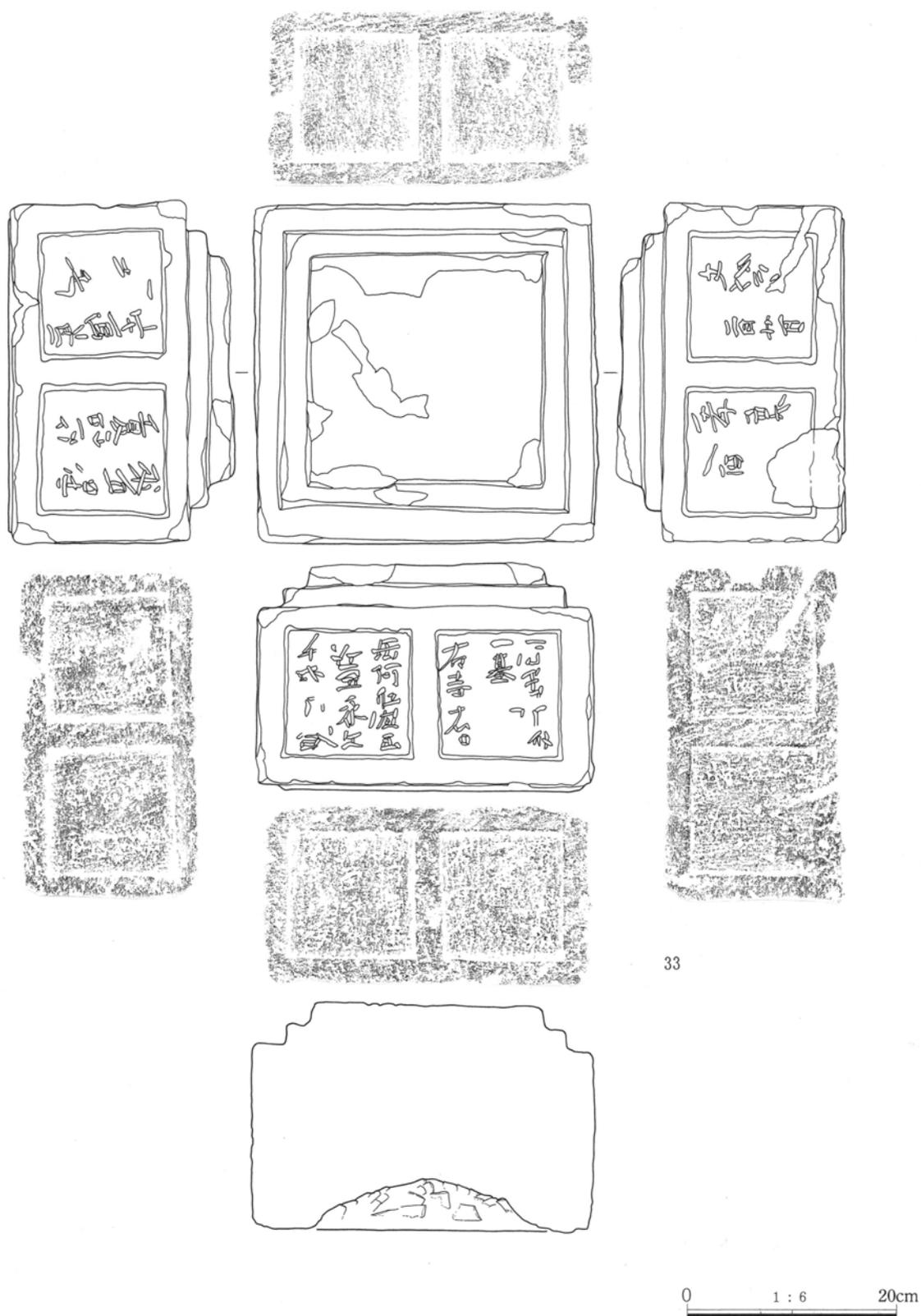
で、発掘調査以前は隣接する石原寺の墓域でもあった。また 46～48 の鉄関連の遺物は周辺の出土状況から奈良・平安時代の遺物である可能性が高い。



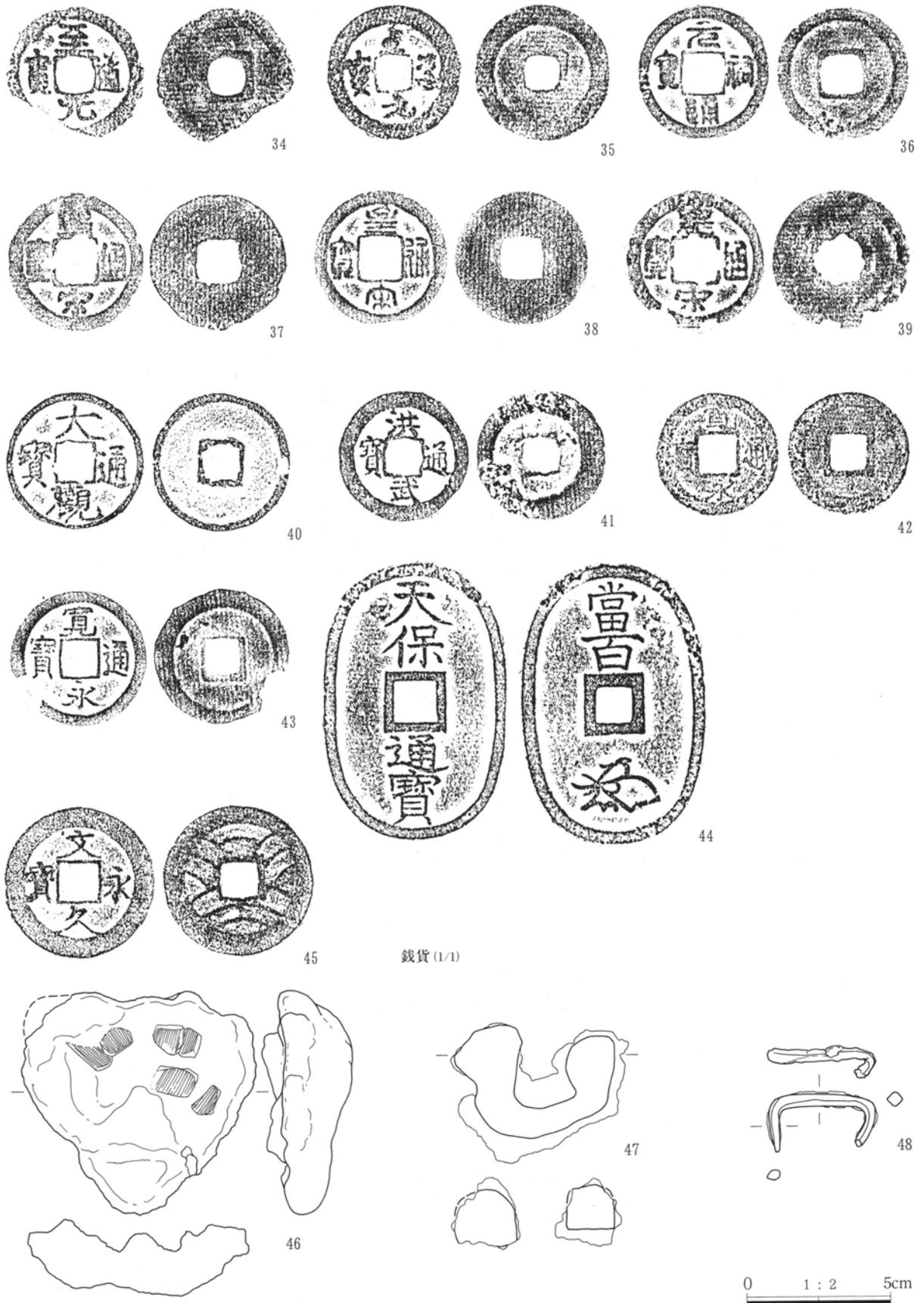
第90図 石原東遺跡 D 区 中世以降遺構外出土遺物図 (1)



第91図 石原東遺跡D区 中世以降遺構外出土遺物図(2)



第92図 石原東遺跡 D 区 中世以降遺構外出土遺物図(3)



第93図 石原東遺跡D区 中世以降遺構外出土遺物図(4)

石原東遺跡 D 区 中世以降遺構外出土遺物観察表

No.	挿図 No. 図版 No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	特徴など
1	第90図 PL-38	在地系土器 皿	D1区 3/5	口7.6 高1.9 底4.9	左回転糸切り無調節。中世。
2	第90図 PL-38	青磁 碗	D1区 底部片	口 - 高1.8残 底 -	中国製。中世。
3	第90図 PL-38	中国磁器 碗	D1区 体部片	口 - 高3.1残 底 -	外面鑄蓮弁文・龍泉窯系青磁。中世。
4	第90図 PL-38	瀬戸・美濃 磁器端反碗	D1区 1/3	口(10.1) 高4.7 底3.8 高台3.8	赤絵の端反碗。染め付けはなく、すべて上絵。焼継。19C中～後。
5	第90図 PL-38	肥前磁器 端反磁	D1区 1/5	口(10.2) 高5.4残 底(3.0)	釉に荒い貫入あり。やや焼成不良。19C前～中。波佐見系。
6	第90図 PL-38	肥前磁器 鉢	D1区 1/4	口 - 高2.9残 高台(8.0)	蛇1目凹型高台の八角系鉢。体部欠損部焼継。高台内焼継時の記号あり。
7	第90図 PL-38	瀬戸・美濃 磁器 皿	D1区 1/3	口(9.5) 高1.5 底(5.4) 高台(5.4)	型作り。内面も型による施文。白磁。19C中～後。
8	第90図 PL-38	陶器 灯明皿 蓋	D1区 1/2	口4.0 高1.1 底 -	京・信楽系?天井部外面灰釉。内面無釉。
9	第90図 PL-38	陶器 灯明皿	D1区 1/2	口(7.9) 高1.5 底(2.9)	京・信楽系?内面目痕2カ所残る。内面から口縁部外面灰釉。口縁部1ヶ所灯芯痕残る
10	第90図 PL-38	陶器 灯明具	D1区 破片	口 - 高2.2残 底 -	京・信楽系。内面櫛状工具による施文。内面から口縁部外面灰釉。
11	第90図 PL-38	京・信楽系 灯明受台	D2区 受部欠損	口4.6 高5.9 底6.1	脚底部と筒部内面を除き灰釉。貫入あり。19C。
12	第90図 PL-38	瀬戸・美濃 灯明受皿	D1区 1/3	口(9.9) 高2.1 底(4.2)	錆釉施釉後外面口縁部下の釉をぬぐい取る。
13	第90図 PL-38	在地系土器 不詳	D3区 口～底部片	口22.4 高3.8 底(20.0)	器表黒色仕上げ。外面ミガキ。外面型による施文。火消壺の蓋? 近代～現代。
14	第90図 PL-38	石製品 砥石	D1区	長(8.1) 幅3.2 厚2.7 重0.11kg	3面使用する。クシ歯状タガネ痕僅かに残る。江戸。砥沢石。
15	第90図 PL-38	石製品 凹み石	D1区 1/2	高13.0 径11.1 重1.02kg	原石の一面に播鉢状の孔を有する。孔の内面は研磨され平滑。用途として、接地面を持たないことから、手持ち使用による杓状製品の先端研磨加工用砥石と推察される。二ツ岳石。
16	第90図 PL-38	石製品 茶臼	埋土 受皿部破片	高 - 径(38.0) 重量0.15kg。	下臼。内外面共に丁寧な研磨整形。粗粒輝石安山岩。
17	第90図 PL-38	石製品 石臼	D1区 1/3	高15.0 径39.2 重2.455kg	下臼。側面は粗い成形痕を残す。挽面はやや片減りするものの、目は十分に残る。また、交差する浅い目の跡も残ることから、目立ての仕直しをしたものと思われる。粗粒輝石安山岩。
18	第91図 PL-39	石製品 五輪塔	D5区 一部欠損	高18.0 径16.2 重2.46kg	空風輪。形状は均質。底部は差し込み用の突起を持たず平坦。整形はやや粗雑で、粗削り時のノミ工具痕を残す。全体にやや風化し磨滅する。二ツ岳石。
19	第91図 PL-39	石製品 五輪塔	表採 完形	高(18.1) 径14.0 重2.95kg	空風輪。形状はやや歪む。底面は平坦で差し込み用の突起部を持たない。整形は全面にやや粗雑な研磨を施す。碑面は風化によりやや磨滅。二ツ岳石。
20	第91図 PL-39	石製品 五輪塔	D5区 1/3	高(23.7) 径(15.2) 重1.80kg	空風輪。形状はやや歪む。底面には差し込み用の突起部を有する。全体に風化による磨滅が著しく、整形の状態は不明。二ツ岳石。
21	第91図 PL-39	石製品 五輪塔	表採 略完形	高17.0 幅26.5 重15.27kg	火輪。形状は均質。上面は空風輪突起差し込み用の孔を有する。整形は全面に丁寧な研磨を施す。碑面の風化磨滅は少なく、上面には空風輪接触の擦れによる円形の痕跡を留める。二ツ岳石。
22	第91図 PL-39	石製品 五輪塔	D5区 完形	高12.1 幅22.2 重4.85kg	火輪。形状はやや歪む。上面は平坦で空風輪突起差し込み用の孔を持たない。整形は僅かに細いノミの工具痕を残すものの、全面に丁寧な研磨を施す。碑面は風化によりやや磨滅する。二ツ岳石。
23	第91図 PL-39	石製品 五輪塔	D5区 完形	高14.5 幅22.6 重6.63kg	火輪。形状は均質。上面は平坦で空風輪突起差し込み用の孔を持たない。整形は全面に丁寧な研磨を施す。表面の風化磨滅は少ない。二ツ岳石。
24	第91図 PL-39	石製品 五輪塔	D5区 略完形	高12.7 幅24.3 重5.53kg	火輪。形状は均質。上面は平坦で空風輪突起差し込み用の孔を持たない。整形は僅かに細いノミの工具痕を残すものの、全面に丁寧な研磨を施す。碑面の風化磨滅は少ない。二ツ岳石。
25	第91図 PL-39	石製品 五輪塔	D2区 完形	高12.6 幅24.0 重9.40kg	火輪。形状は均質で、整形は僅かに細いノミの工具痕を残すものの、全面に丁寧な研磨を施す。表面の風化磨滅は少ない。二ツ岳石。
26	第91図 PL-39	石製品 五輪塔	D1区 略完形	高14.2 幅20.8 重4.75kg	水輪。形状は小型でやや歪んで、側面に粗削り時の平坦面を残す。整形は粗雑で研磨はみられない。表面はやや風化し磨滅する。二ツ岳石。

第4章 石原東遺跡D区の遺構と遺物

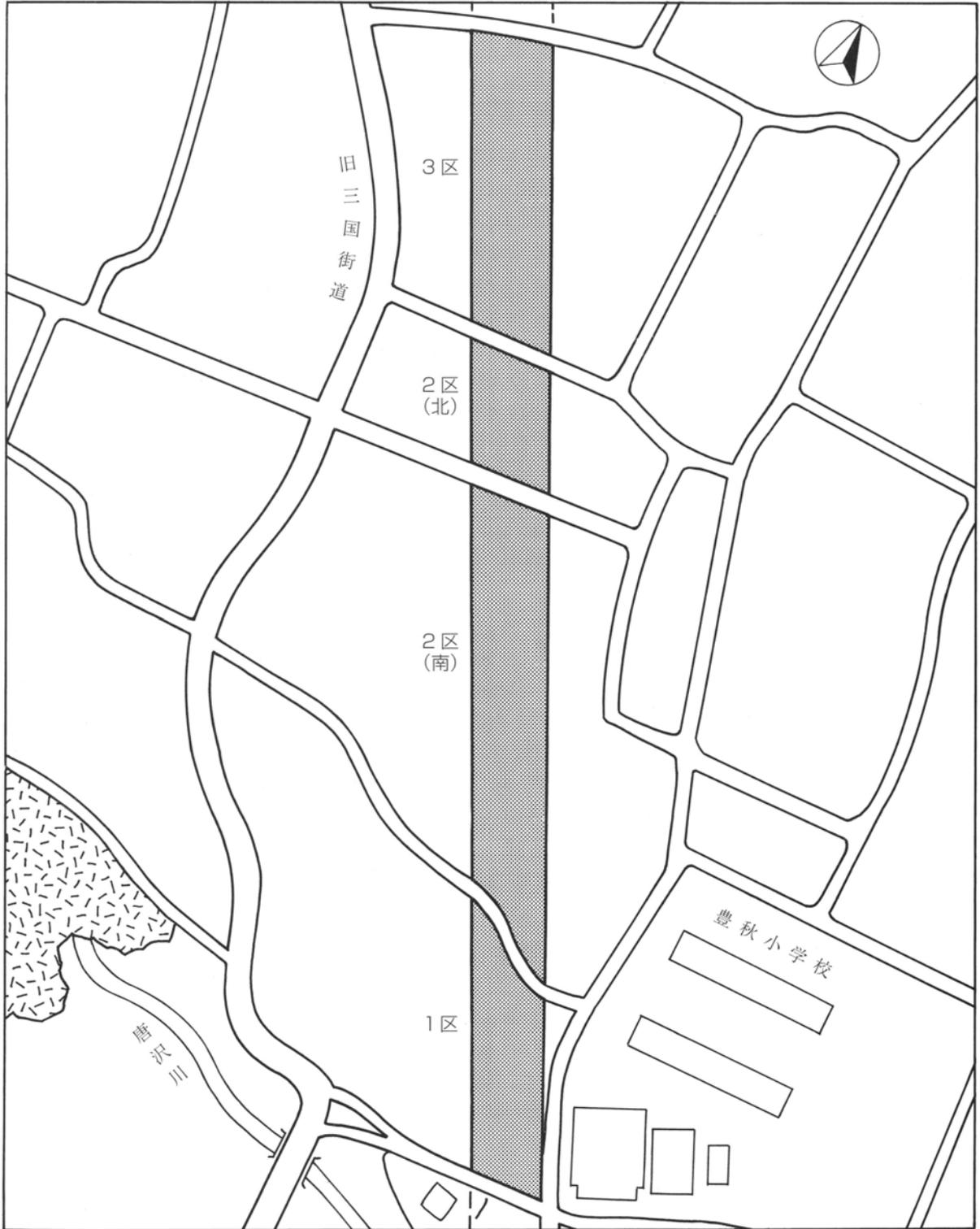
No.	挿図 No. 図版 No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	特徴など
27	第91図 PL-39	石製品 五輪塔	D5区 完形	高16.6 幅24.7 重11.15kg	水輪。形状は均質で天地面を窪ませる。整形は僅かに細いノミの工具痕を残すものの、全面に丁寧な研磨を施す。表面の風化磨滅は少ない。二ツ岳石。
28	第91図 PL-39	石製品 五輪塔	表採 一部欠損	高17.5 幅27.0 重12.10kg	水輪。形状はやや歪む。整形は全面に丸ノミの痕跡を筋状に残し、軽い研磨を施す。やや風化磨滅する。二ツ岳石。
29	第91図 PL-39	石製品 五輪塔	D5区 完形	高20.3 径30.4 重15.35kg	水輪。形状は均質で、天地面を浅く皿状に窪ませる。整形は天地面に粗削りの面を残し、側面は丁寧な研磨を施す。風化による磨滅は少ない。二ツ岳石。
30	第91図 PL-39	石製品 五輪塔	D5区 2/3	高13.5 幅(19.8) 重4.65kg	地輪。形状は均質で、整形は3面に丁寧な研磨を施す。表面の風化磨滅は少ない。二ツ岳石。
31	第91図 PL-39	石製品 五輪塔	D1区 一部欠損	高20.2 幅25.6 重10.22kg	地輪。形状はやや歪んで、長方体を呈する。整形は、やや粗雑な研磨を施す。やや風化磨滅する。二ツ岳石。
32	第91図 PL-39	石製品 庚申塔	D5区 完形	長30.0 幅16.0 厚9.0 重5.65kg	成形は正面にやや窪んだ平坦面を、上部に粗雑な山形を、右側面に粗雑な平坦面を造り出す他は、原石面を残す。碑面は研磨し、薬研彫りで「庚申」の文字を刻む。粗粒輝石安山岩。
33	第92図 PL-40	石製品 宝篋印塔	表採 完形	高21.8 幅32.8 重34.85kg	基部。4側面の内、3面の額部6ヶ所内に銘を刻むものの、原石含有鉱物や成形時の細かい工具痕が多く残るため、文字の判読は難しい。 「石□□塔 一基 右寺□□ 如阿禪定□ □□永世 □成□□」 「願□□□ □及□-□ □□□□ □□□□」 「文□□三年 二月廿一日 孝子 □白」 底面接地部の中央を浅く播鉢状に抉る。粗粒輝石安山岩。
34	第93図 PL-40	銭貨 至道元宝	D2区 一部欠損	外縁銭径2450mm、外縁内径1975mm、銭厚1.0mm、量目2.154g。	
35	第93図 PL-40	銭貨 ○○○○	D5区 完形	外縁銭径2400mm、外縁内径1750～1850mm、銭厚1.25mm、量目3.158g。	
36	第93図 PL-40	銭貨 元祐通宝	D2区 完形	外縁銭径2350～2375mm、外縁内径1850～1875mm、銭厚1.25mm、量目3.188g。	
37	第93図 PL-40	銭貨 皇宋通宝	D3区 完形	外縁銭径2425～2450mm、外縁内径1925mm、銭厚1.0mm、量目2.561g。	
38	第93図 PL-40	銭貨 皇宋通宝	D3区 完形	外縁銭径2350mm、外縁内径1900mm、銭厚0.8mm、量目1.827g。	
39	第93図 PL-40	銭貨 皇宋通宝	D3区 一部欠損	外縁銭径2450mm、外縁内径1925～1950mm、銭厚1.0mm、量目2.421g。	
40	第93図 PL-40	銭貨 大観通宝	D2区 完形	外縁銭径2425mm、外縁内径2150～2175mm、銭厚1.5mm、量目3.161g。	
41	第93図 PL-40	銭貨 洪武通宝	D3区 完形	外縁銭径2325mm、外縁内径1700～1750mm、銭厚1.75～1.0mm、量目3.119g。	
42	第93図 PL-40	銭貨 寛永通宝	D2区 完形	外縁銭径2150mm、外縁内径1750～1800mm、銭厚1.0mm、量目1.691g。	
43	第93図 PL-40	銭貨 寛永通宝	D3区 一部欠損	外縁銭径2425mm、外縁内径1925～1975mm、銭厚1.0mm、量目2.866g。	
44	第93図 PL-40	銭貨 天保通宝	D1区 完形	外縁銭径3275～4925mm、外縁内径2750～4450mm、銭厚2.5～1.5mm、量目19.770g。	
45	第93図 PL-40	銭貨 文久永宝	D1区 完形	外縁銭径2650mm、外縁内径1900～1925mm、銭厚1.0mm、量目3.624g。	
No.	挿図 No. 図版 No.	建物名	①重②磁③メ	出土位置 計測値 (cm)	特徴など
46	第93図 PL-40	腕形鍛冶滓 (小、含鉄)	①107.6g ②5 ③錆化(△)	D2区 長径8.2 短径7.8 厚2.6	平面、不整三角形をした小形の腕形鍛冶滓。上面は平坦ぎみで、木炭痕がやや強く残り、下面はやや乱れた腕形で、部分的に鍛冶炉の炉床土に接している。比重は低い。
47	第93図 PL-40	鉄製品 鍛造品	①75.2g ②6 ③L(●)	D2区 長径5.6 短径4.0 厚2.0	平面、U字状に折れ曲がった鉄製品。外周部には厚い酸化土砂が取り巻き、内部情報が読み取りにくい。上面や側面の一部の酸化土砂が剥離して、地の部分露出している。層状の剥離や放射割れが発達している。左側部は含鉄の鍛冶滓のような質感を示し、5mm前後の木炭痕が確認される。U字型に窪む内側の原因は不明。錆化が進んでおり、磁着は低くなっているため、含鉄の腕形鍛冶滓の可能性も残される。
48	第93図 PL-40	鉄製品 鍛造品 楔	①4.0g ②5 ③L(●)	D4区 長径3.8 短径2.1 厚0.5	断面方形をした、両面を折り曲げた鉄製品。左側の先端部は尖っており、右側は保存処理のためか、やや方柱状。ただし端部を徐々に細くする特色は、左側と同様である。全体に長軸方向にねじれており、本来の形であれば、斜めになにかを繋ぎ止めるものかもしれない。一見、釘を曲げた様にも見えるが、小形の楔と判断される。

①重量②磁着度③メタル度

## 第5章 諏訪ノ木V遺跡の遺構と遺物

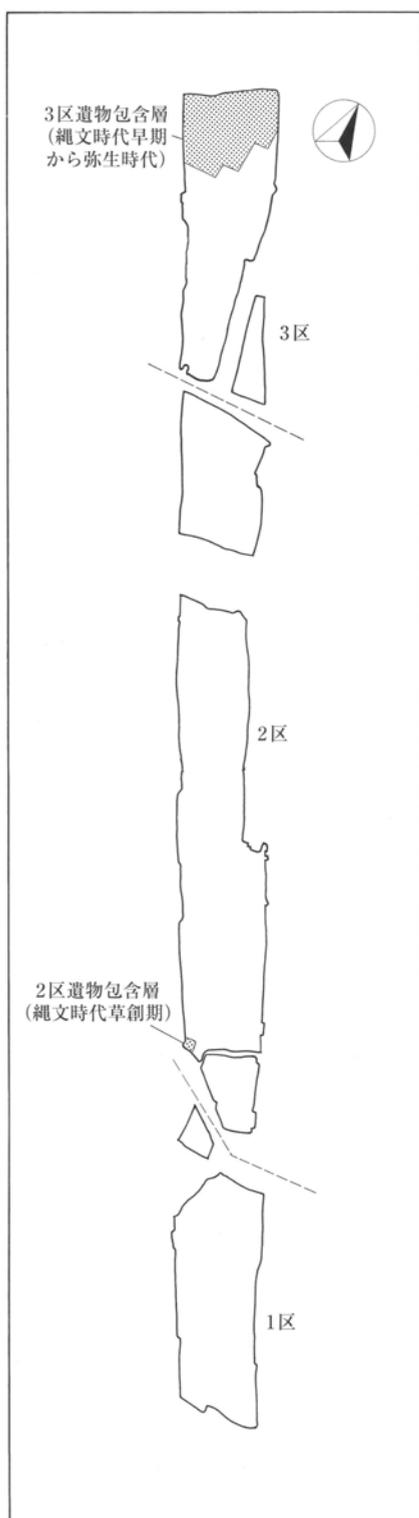


上空より撮影した諏訪ノ木V遺跡



前項写真の概略図

## [1] 弥生時代以前



諏訪ノ木V遺跡 弥生時代以前の遺構

## 概要

本遺跡地内には弥生時代以前の明確な遺構が検出されなかったものの、該期の遺物包含層2地点が確認された。

一つは、2区の縄文時代草創期に位置づけられる石器群を含む2区遺物包含層、もう一つは3区の縄文時代早期を中心とする縄文時代早期から弥生時代後期の土器・石器群を含む3区遺物包含層である。

まず第一に2区遺物包含層であるが、渋川市域において草創期にあたる遺物の発見は、本調査報告が初めてである。今回の調査では、水沢山山体崩落土の可能性が高い土層(基本土層第VII層)の直上<sup>(1)</sup>から縄文時代草創期の石器群が発見された。この堆積物の上層には、浅間-板鼻褐色軽石群(As-YP、約1.3~1.4万年前)が確認されていないことから、As-YP以降に水沢山の山体崩落が起こったとされている。今回の縄文時代草創期に位置づけられる石器の発見は、後期旧石器から縄文時代草創期のごく限られた期間に水沢山の山体崩落が起きたことを証明する一つの材料であり、該期の榛名山麓における歴史的・地理的環境を考察する上で非常に重要な発見である。

第二に3区遺物包含層であるが、縄文時代早期を中心とした遺物構成で、土器片481点、石器類805点が出土した。特に、個体復元された押型紋土器と三戸式土器は、重要な発見となった。土器観察を行った橋本淳(2004)によると、「当該期土器研究をすすめていくうえで欠かせないものとなると思われる。」<sup>(2)</sup>とのことである。

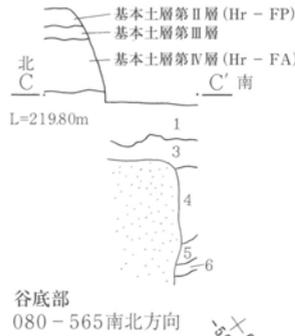
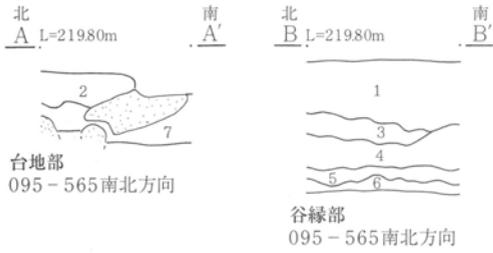
2区遺物包含層出土の縄文時代草創期の石器は当事業団中束耕志、3区遺物包含層出土の縄文土器は橋本淳による観察である。

## 註

(1) 詳細は第1章[1]位置と地理的環境を参照。

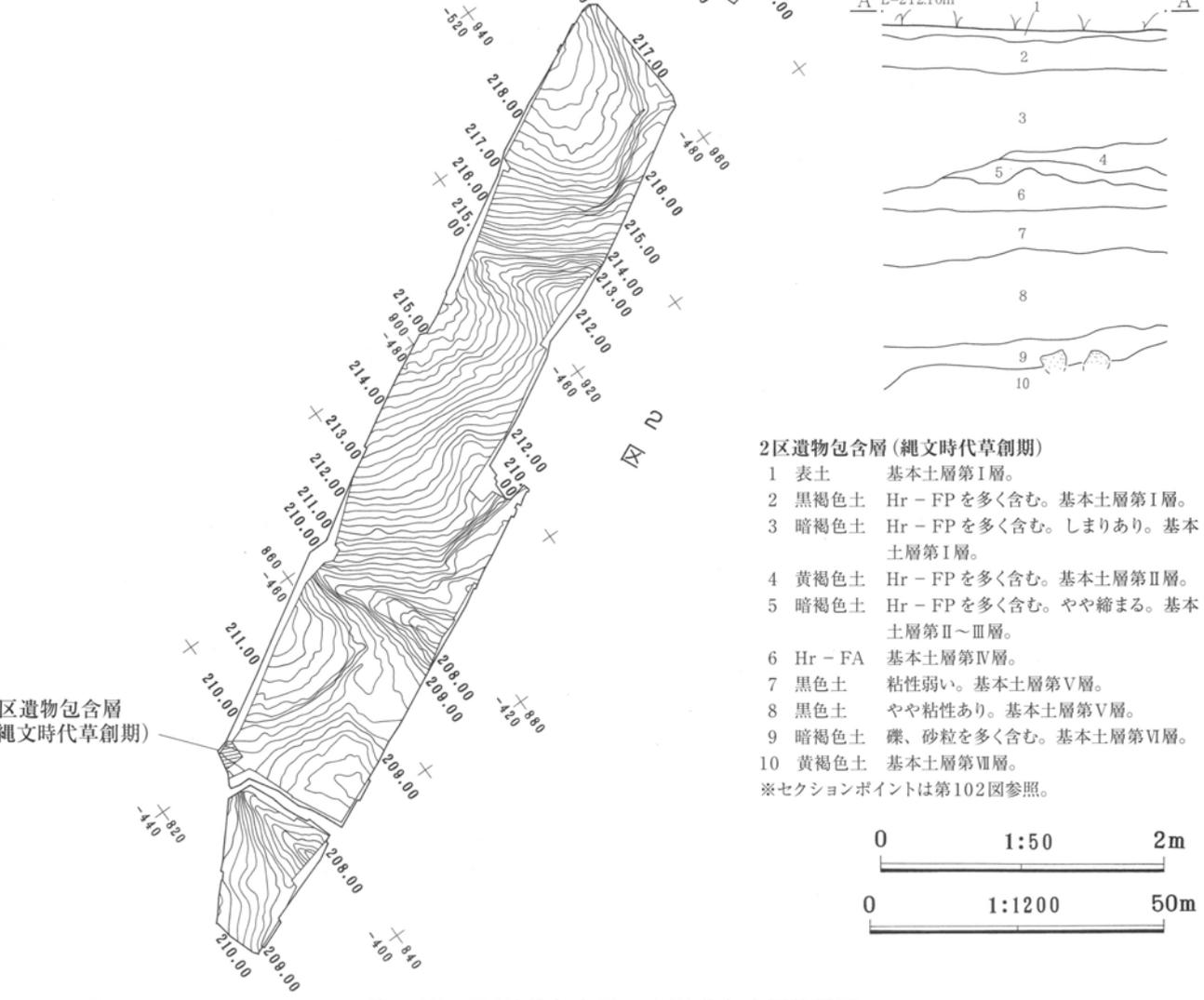
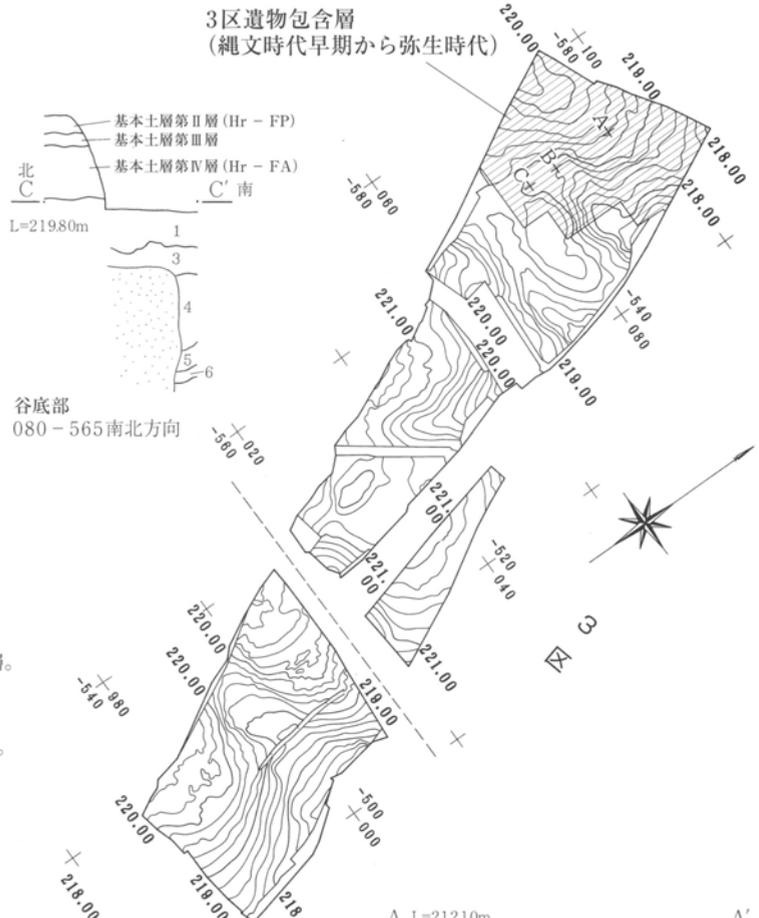
(2) 第7章考察[2]「諏訪ノ木V遺跡の早期縄紋土器について」より。

3区遺物包含層  
(縄文時代早期から弥生時代)



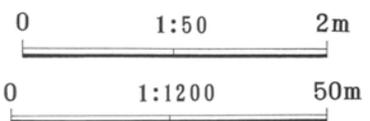
3区遺物包含層(縄文時代早期から弥生時代)

- 1 黒褐色土 白色粒、橙色粒を含む。基本土層第V層。
- 2 暗褐色土 ローム(基本土層第VII層)を多く含む。黄色が強い。基本土層第V~VII層の混土。
- 3 暗褐色土 白色粒、橙色粒を含む。基本土層第VI層。
- 4 黒褐色土 白色粒、橙色粒を多量に含む。基本土層第VI層。
- 5 暗褐色土 白色粒、橙色粒、赤色粒を含む。基本土層第VI層。
- 6 暗褐色土 白色粒、橙色粒、赤色粒を少量含む。基本土層第VI層。
- 7 暗褐色土 礫、砂粒を多く含む。基本土層第VI~VII層の混土。



2区遺物包含層(縄文時代草創期)

- 1 表土 基本土層第I層。
  - 2 黒褐色土 Hr - FPを多く含む。基本土層第I層。
  - 3 暗褐色土 Hr - FPを多く含む。しまりあり。基本土層第I層。
  - 4 黄褐色土 Hr - FPを多く含む。基本土層第II層。
  - 5 暗褐色土 Hr - FPを多く含む。やや締まる。基本土層第II~III層。
  - 6 Hr - FA 基本土層第IV層。
  - 7 黒色土 粘性弱い。基本土層第V層。
  - 8 黒色土 やや粘性あり。基本土層第V層。
  - 9 暗褐色土 礫、砂粒を多く含む。基本土層第VI層。
  - 10 黄褐色土 基本土層第VII層。
- ※セクションポイントは第102図参照。



(1) 2区遺物包含層

(縄文時代草創期)

概要

縄文時代草創期の存在は、調査最終段階の地山上面の確認調査により検出された。石器の出土状況と分布状態を把握しながら調査の進行を計った。調査が進むと、埋没していた小さな沢の底面に近い緩やかな斜面で、約150点余りの石器と剥片が集中して検出された。石器類の分布は、長径約3.5m・短径約2mの範囲に検出された。しかし、草創期段階の土器は検出されなかった。さらに、石器は調査区の西境際からも出土しているの、調査区外の西方向に分布が広がっている可能性が推測された。

1. 石器類出土の層位

石器類は現地表より約2m下、本遺跡基本土層第Ⅶ層上面より出土した。本遺跡では基本土層を上層よりⅠ層～Ⅶ層とした。第Ⅰ層は、現表土、第Ⅱ層は、榛名ニッ岳伊香保テフラ(Hr - FP)、第Ⅲ層は、黒色～黒褐色土層。第Ⅳ層は、ニッ岳洪川テフラ(Hr

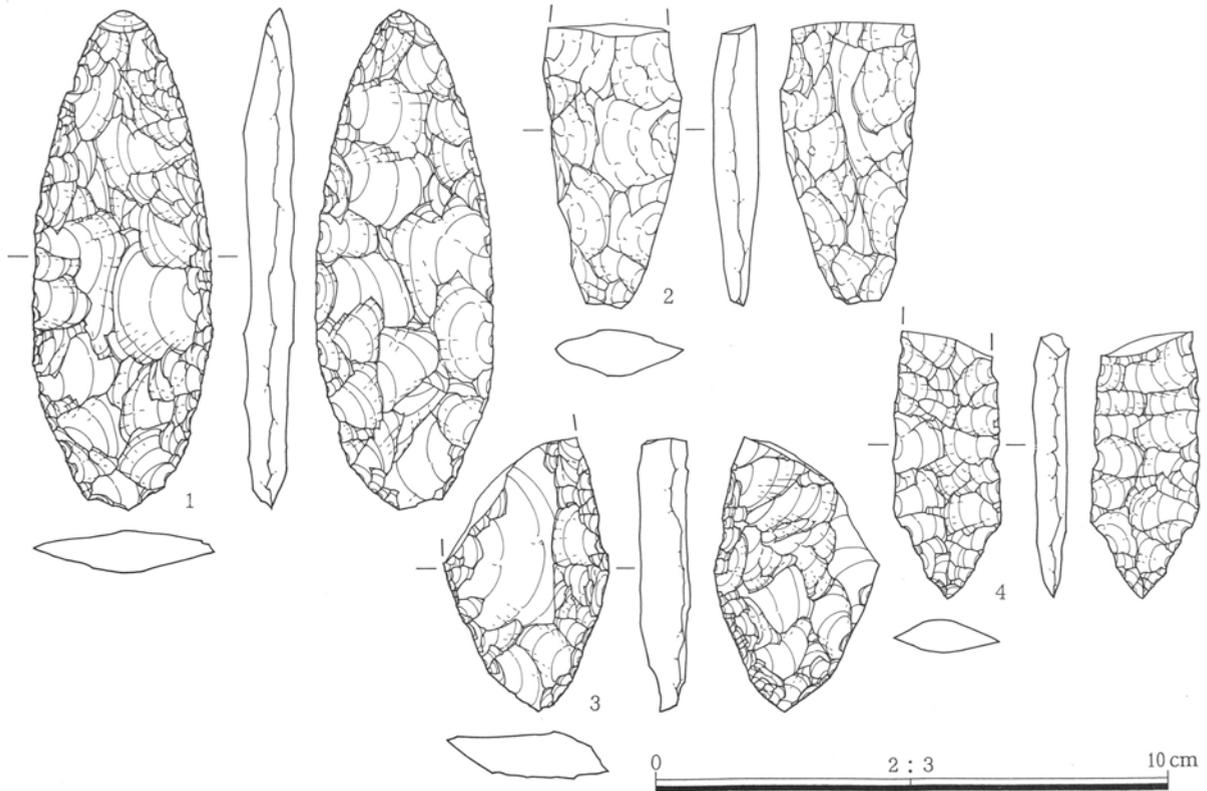
-FA)。第Ⅴ層は、黒色土層。Ⅵ層は、第Ⅴ層から第Ⅶ層への漸移層。Ⅶ層は、唐沢泥流堆積物(地山)である。Ⅶ層の唐沢泥流堆積物は黄褐色土層で、大小の礫が混入する。礫は拳大～径2mを超えるものまで多量に混入している。石器類はこの唐沢泥流堆積物上面より出土した。

2. 出土石器

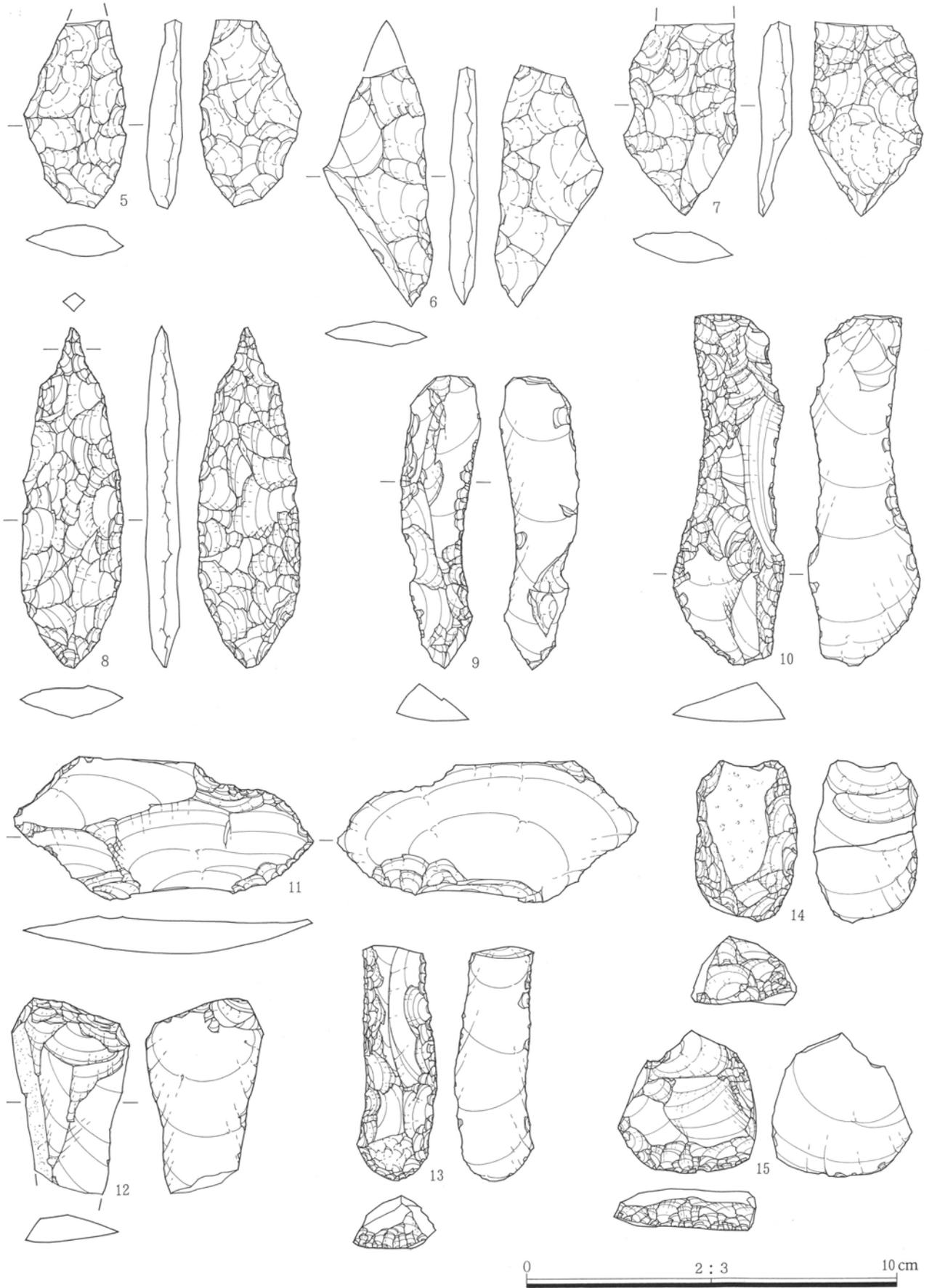
計158点が出土している。量的には剥片や碎片が約89%と圧倒的に多い。出土石器類には、尖頭器6点、有茎尖頭器2点、削器3点、ノッチドスクレイパー1点、搔器3点、半月形石器2点、両面加工石器1点と接合資料10点がある。完形に近い尖頭器が多く、珪質頁岩の接合資料があることが特徴的である。石器群に伴う土器は検出できてはいないが、有茎尖頭器や特異な形態の削器が認められることなどから、縄文時代草創期の石器群として位置づけた。

尖頭器(第95・96図、PL91) 1～3・5～7が尖頭器である。石材は黒色頁岩と珪質頁岩である。3が珪質頁岩で、それ以外は黒色頁岩である。

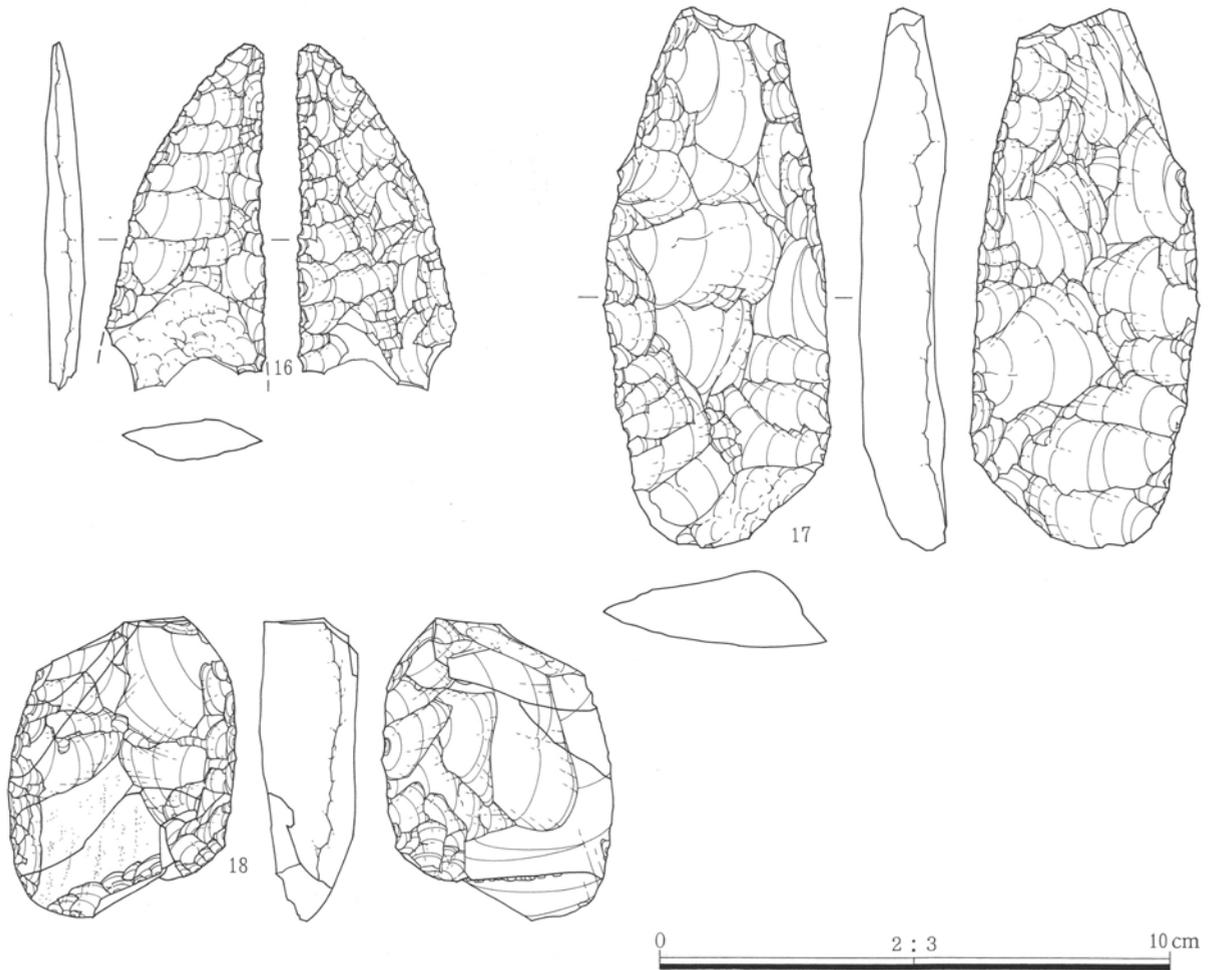
1は完形品の木葉形尖頭器である。細部調整はやや



第95図 2区遺物包含層出土石器(縄文時代草創期) - 1



第96図 2区遺物包含層出土石器(縄文時代草創期) - 2



第97図 2区遺物包含層出土石器(縄文時代草創期) - 3

粗い印象を受け、もう一段階の調整加工を施した可能性はあろう。器最大幅は、中央部からやや基部よりにある。正面右側縁部には微細な調整加工が施されている。また、正面先端部左側面の調整加工が十分ではなく、厚みをもっている。器長が9.9cm、最大幅3.6cm、厚さ1.0cm、重さ35.2gである(以下、法量については上記の順序で記載する)。2は器中央部から先端部にかけてと、基部の一部を欠損した柳葉形の尖頭器である。平面形は左右非対称である。また、背面右側面には加熱によると思われる「はじけ」が認められる。現存長5.6cm、2.7cm、0.9cm、15.0g。3は赤色味の強い珪質頁岩であり、珪質頁岩製の接合資料1と同一母岩の可能性もあろう。正面右側面と、背面左側縁部に調整加工が施されている。正面左側面には横位方向からの剥片剥離加工面左側面には横位方向からの剥片剥離加工面を残して

いる。同様に、背面右側面には、斜め基部方向からの剥片剥離痕を留めている。先端部を欠損している。製作途中の破損の可能性が高く、未製品である。現存長5.4cm、3.3cm、1.0cm、17.9g。6は先端部を欠損している。正面・背面ともに両側縁部からの調整は剥離が施されているが、微細な細部加工ではない。器厚も薄いことから、尖頭器製作途中の調整剥片の可能性もあろう。現存長6.5cm、3.0cm、0.8cm、12.7g。7は基部・先端部ともに欠損している。1と同様に、微細な槌状剥離が施されている。ただし、背面基部より「はじけ」が認められる。尖頭器としてほぼ完成していたと判断される。現存長5.3cm、3.1cm、0.9cm、13.6g。

有茎尖頭器(第95・96図、PL91) 4と8が黒色頁岩製の有茎尖頭器である。4は先端部を欠損している。本体から茎部への作りは、鈍角で「く」の字状に屈

曲し、幅広の茎を形作っている。正面と背面ともに左側縁方向から、微細な槌状剥離が施されている。現存長5.3cm、2.2cm、0.7cm、8.5g。8の先端部は細身でドリル状になっているが、摩耗等は認められないことと、茎部の形状から、先端部の尖った有茎尖頭器と認定した。基部よりが最大幅になる。また、正面右側縁の基部より「はじけ」が認められる。9.3cm、2.8cm、1.0cm、23.3g。

削器(第96図、PL91) 9・10が珪質頁岩製の削器で、12が黒色頁岩製の削器である。9・10は橙色ないし淡い赤色を帯びた珪質頁岩であり、同一の母岩から剥離された可能性が高い。縦長剥片を使用した特異な形態であり、部分的には凹状の刃部を形成する点が類似している。左右両側縁部に刃部を形成している。9は8.0cm、2.2cm、1.3cm、13.9g。特に、10の正面左側縁の下端部は丸みを帯び、凸状の刃部を構成している。9.6cm、3.0cm、1.0cm、25.3g。12は先端部を欠損している。正面左側には自然面を残し、右側縁部を刃部としている。現存長5.3cm、3.2cm、1.0cm、15.1g。

ノッチドスクレイパー(第96図、PL91) 11は黒色頁岩製の横長剥片を素材とした、菱形形状を呈するノッチドスクレイパーである。左右の突出した部分は三角形形状を呈し、尖った刃部を形成し、削器としている。3.9cm、8.2cm、1.0cm、31.0g。

搔器(第96図、PL91) 13・14は珪質頁岩製の搔器であり、15は硬質頁岩製の搔器である。13は打面を欠損している。縦長剥片を使用し、両側縁ともに刃部加工を施している。さらに、正面の刃部先端部に「はじけ」が認められる。6.4cm、2.2cm、1.4cm、13.8g。14も縦長剥片を使用している。正面に自然面を残し、基部は欠損している。ブランディングは粗いのと、3点の接合資料であることから、未製品の可能性もあろう。4.4cm、2.8cm、1.8cm、11.4g。15は円形に近い形状を呈する。3.9cm、3.8cm、1.1cm、15.0g。

半月形石器(第97図、PL92) 16・17は黒色頁岩製の半月形石器である。16は下半部を欠損して、

「はじけ」が認められる。三日月形を呈し、薄身に仕上げられている。現存長6.9cm、3.1cm、0.9cm、14.9g。17は先端部と基部の一部を欠損している。縦長剥片を素材とし、断面がハマボコ状を呈している。尖頭器の未製品の可能性もあるが、調整加工や断面と剥片の形状から、半月形石器の未製品と認定した。10.7cm、4.5cm、1.7cm、84.1g。

両面加工石器(第97図、PL92) 18は珪質頁岩製の両面加工石器である。一部自然面を残すが、石核の可能性もあろう。本資料は3点の接合資料である。正面と背面に調整加工を施した後に、剥離を施していることより、両面加工石器の転用品の可能性もあろう。6.0cm、4.5cm、2.0cm、55.3g。

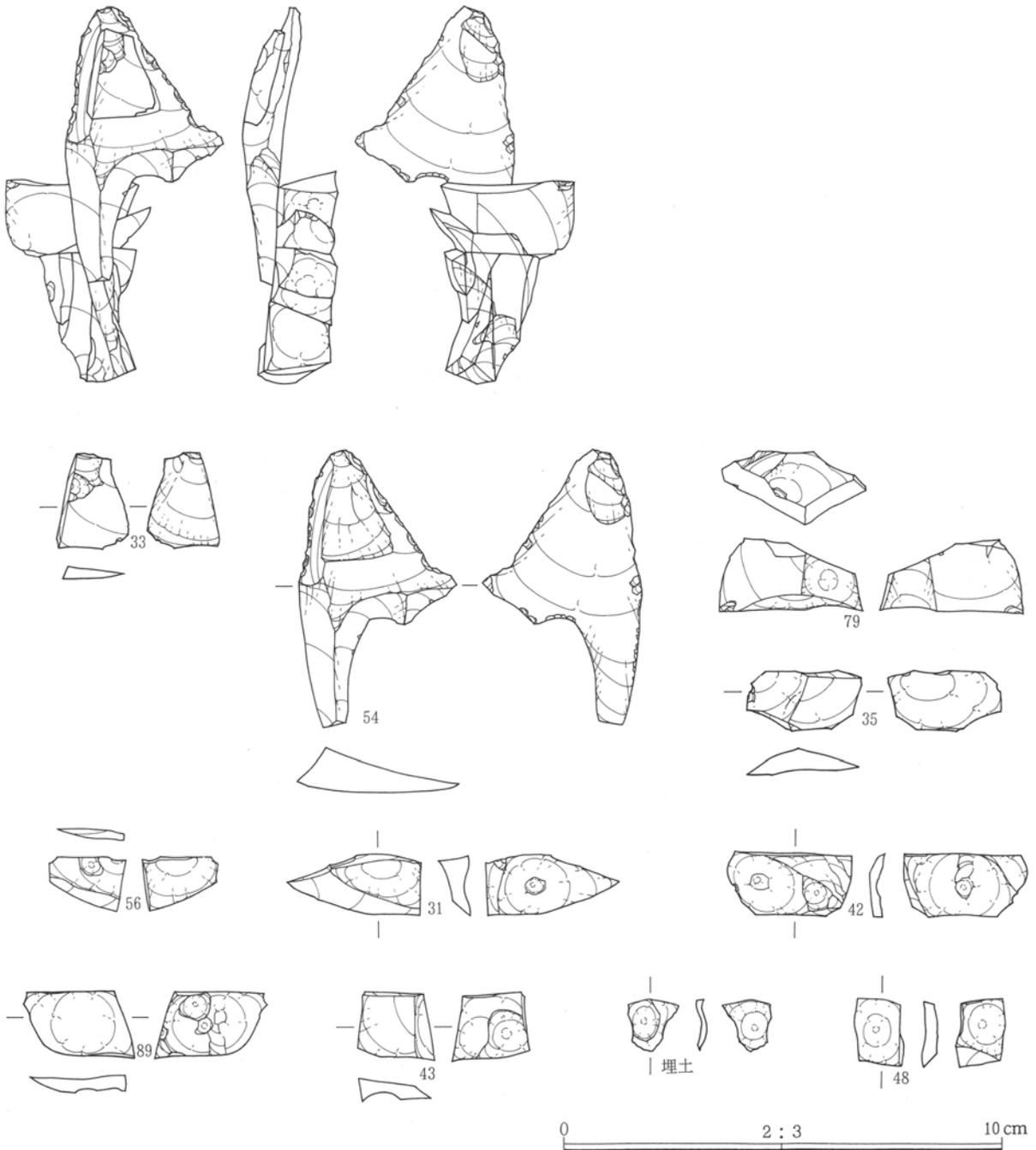
接合資料 接合資料は、10点を確認した。長径約3.5m、短径約2mの分布範囲に集中し、全て赤色みの強い珪質頁岩製であるが、接合資料-4と10は色調が異なる。刃部に加工痕のある剥片と剥離した剥片が接合する資料も見られる。また、本遺跡から出土した石器の中には、本種の珪質頁岩に類似する資料は、3・9・10・13である。

接合資料-1(第98図、PL92) 刃部に加工痕のある剥片1・剥片8等の製品と剥片11点の接合資料である。長軸3m、短軸1mで分布していた。剥離後に削器(ノッチドスクレイパーの可能性もある)として使用された資料である。本接合資料の下半部は、折断技法による剥片と縦長状の剥片を作出している。珪質頁岩。重さ31g。

接合資料-2(第99図、PL92) 縦長剥片を横位に3つに折断した7点の剥片接合資料である。打面よりの剥片と正面右下端部の3点の剥片は、加熱による破碎の可能性もある。さらに、正面打点部、及び右側は剥離されている。下部剥片の左側面は、黒色化している。珪質頁岩。24g。

接合資料-3(第99図、PL92) 3点の剥片接合資料である。1.8m離れて接合した。縦長状剥片の接合資料であるが、剥離後の使用は認められない。剥離前の正面右側の先端部に、刃部調整が認められる。

接合資料-1



第98図 2区遺物包含層出土石器接合資料(縄文時代草創期) - 1

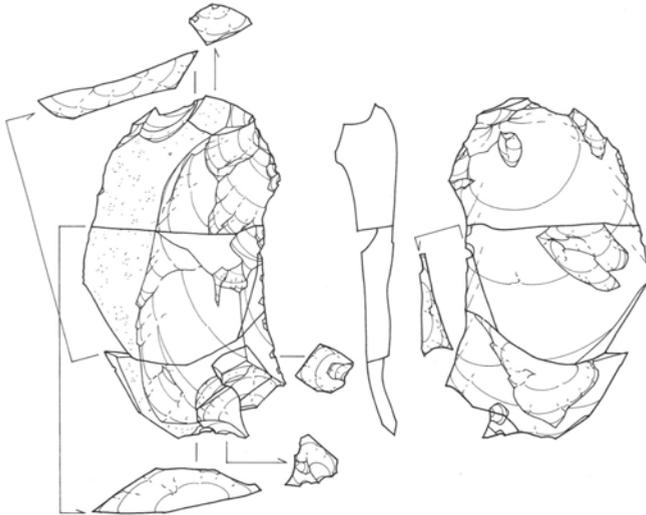
破損以前に正面右側縁部から、下端部への剥離をおこなった時点で、器体中央部で破損したものであろう。珪質頁岩。10g。

接合資料-4(第99図、PL92) 横長剥片を素材とし、剥片3点と貝殻状剥片5点の計8点の剥片接合資料である。色調は赤褐色からにぶい橙色の珪質頁岩であり、14の珪質頁岩ないし15の硬質頁岩に類似し

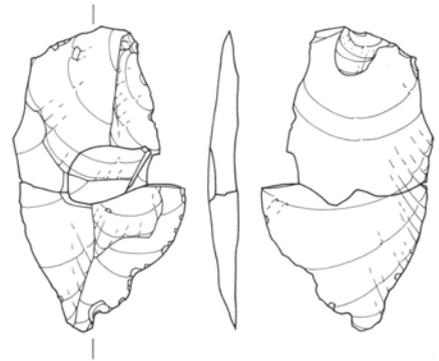
ている。正面中央部に自然面を残し、左突出部から調整剥離を施している。打面転位をしながら剥離している。横長剥片と剥離した剥片の両者とも刃部調整等は認められない。珪質頁岩。16g。

接合資料-5(第99図、PL93) 剥片2点の尖頭器未製品の接合資料である。0.4m離れて接合した。器体中央部で破損しているが、正面右側縁部に細かな

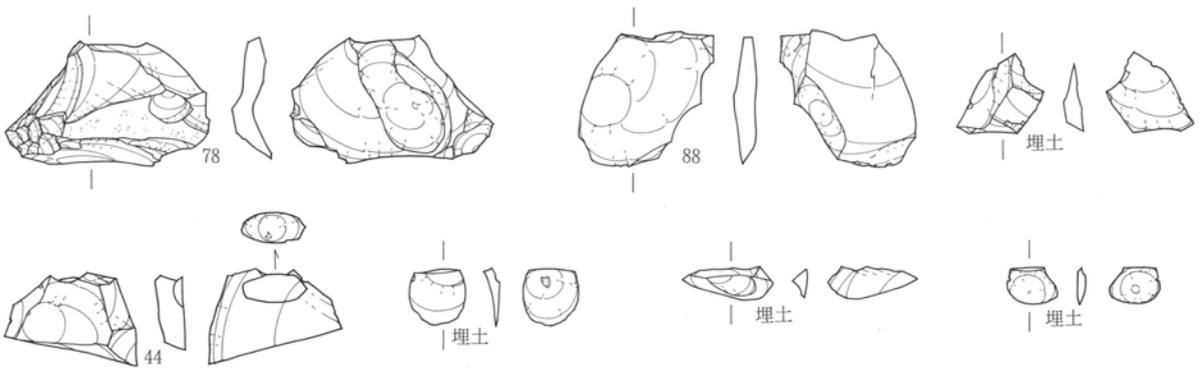
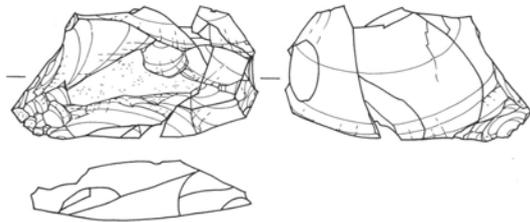
接合資料-2



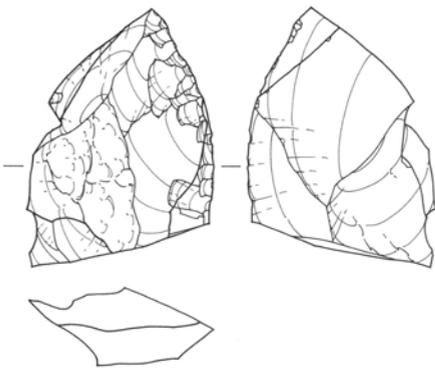
接合資料-3



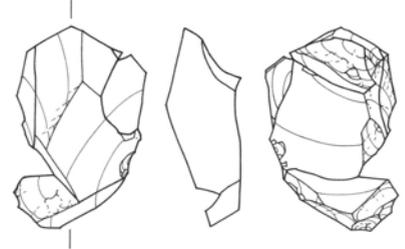
接合資料-4



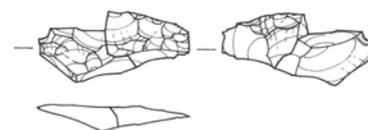
接合資料-5



接合資料-6



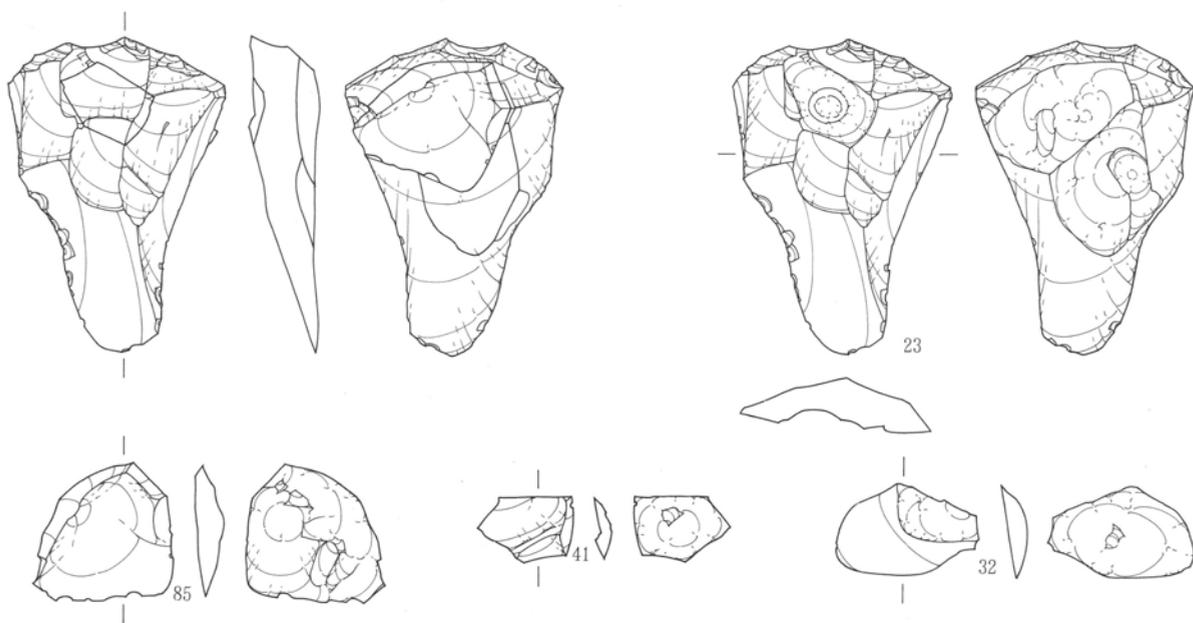
接合資料-7



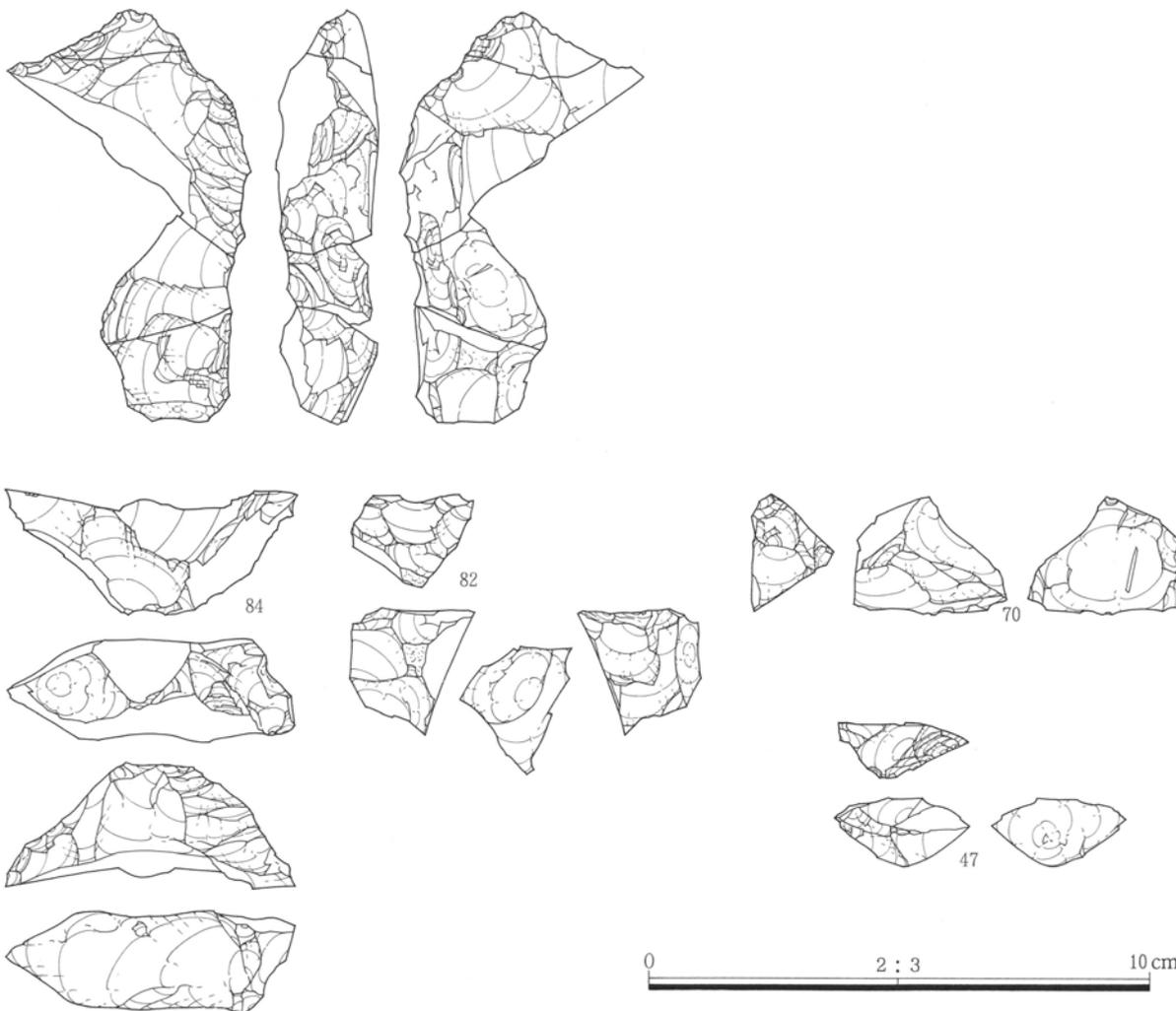
0 2:3 10cm

第99図 2区遺物包含層出土石器接合資料(縄文時代草創期) - 2

接合資料-8

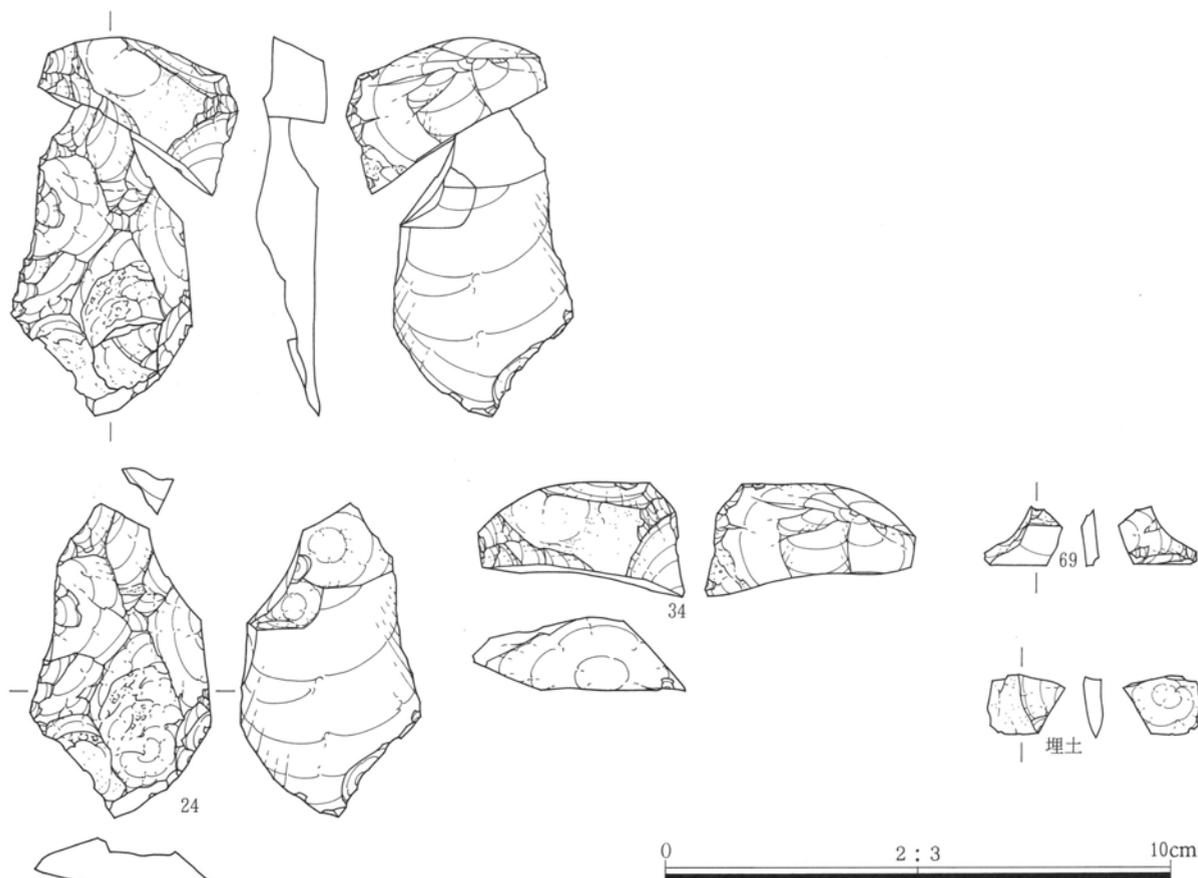


接合資料-9



第100図 2区遺物包含層出土石器接合資料(縄文時代草創期)-3

接合資料-10



第101図 2区遺物包含層出土石器接合資料(縄文時代草創期) - 4

調整加工が施されている。断面三角形の剥片であり、尖頭器の製作途中に破損し、さらに薄い削器等を目的として剥離を連続したが、再度破損した可能性が推測される。珪質頁岩。27g。

接合資料-6(第99図、PL93) 縦長状剥片を素材とした4点の調整剥片接合資料である。正面右側面に凹状の刃部加工が施されている。削器として使用されていた資料である。接合破片の色調も異なり、不自然な割れ方を呈していることより、加熱等により破損したと推定される。珪質頁岩。26g。

接合資料-7(第99図、PL93) 貝殻状剥片も含めた5点の接合資料である。一定方向からの打ちかきではなく、打面転位をおこないながら剥離したと考えられる。珪質頁岩。12g。

接合資料-8(第100図、PL93) 大型調整剥片4点の接合資料である。背面中央左側縁部に黒色の付着物が認められる。打面転位をおこなうとともに、

交互剥離により調整剥離をおこなっている。尖頭器作製のための剥片剥離途中で破損した接合資料の可能性があろう。珪質頁岩。43g。

接合資料-9(第100図、PL93) 調整剥片3点の接合資料である。正面右下端部から背面にかけて、黒色の付着物がある。また、一部剥片には加熱の「はじけ」が認められる。一方、上端部分の剥片には打点があり、下端部とは僅かな部分で接合している。別途本部分へ接合する剥片が、2点はあったものと推定される。断面三角形の縦長剥片の接合資料である。背面上端部に打点が認められる。正面左側面に調整加工が認められる。何らかの器種の製作途中の剥片資料であろう。珪質頁岩。33g。

接合資料-10(第101図、PL93) 貝殻状剥片2点の接合資料である。尖頭器等の細部調整剥片であろう。珪質頁岩。1g。

## 4. 石器の分布

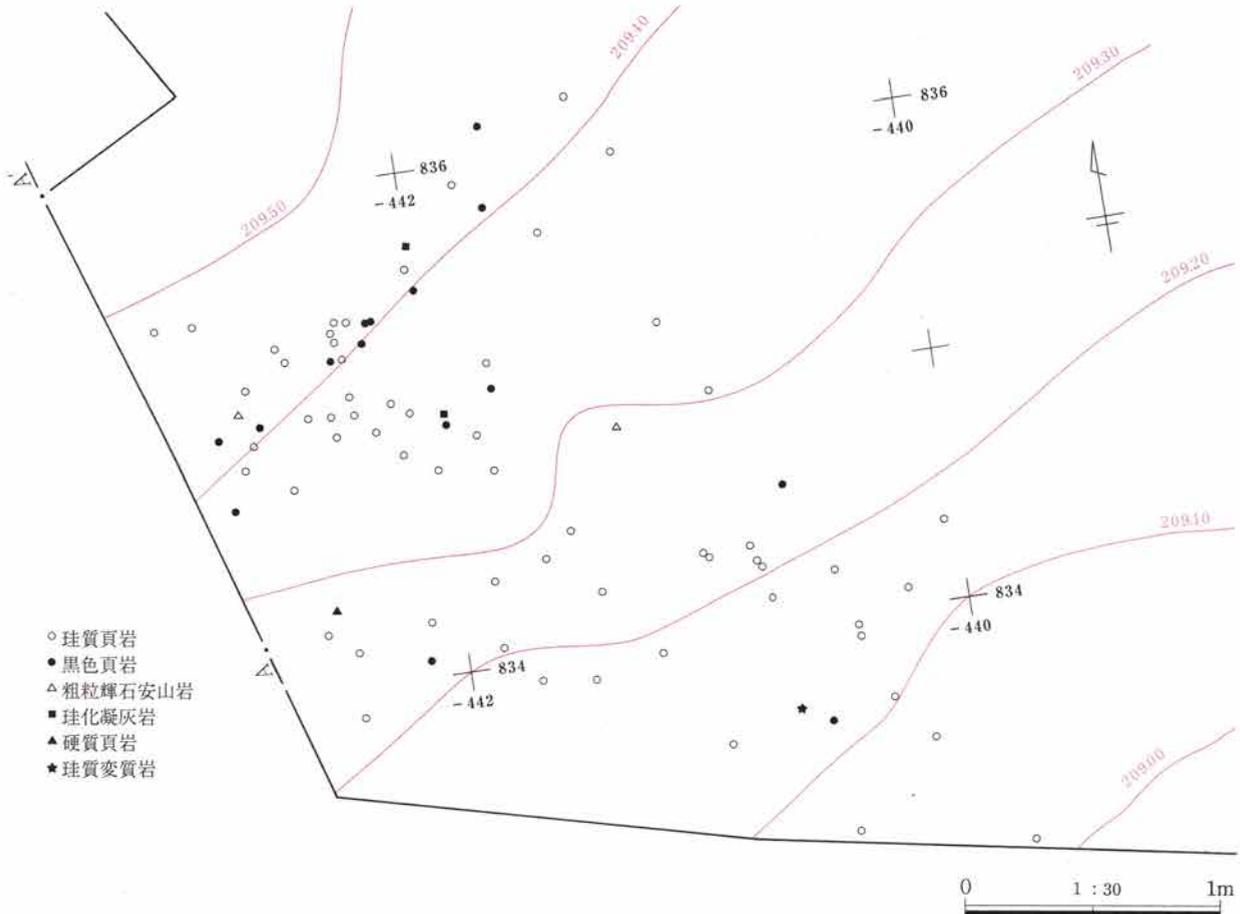
第103・104図は器種別の分布図である。石器の分布は $X=+835 \cdot Y=-442 \sim 443$ グリッド付近には集中した分布(以下、第1グループと記載する)と、 $X=+834 \sim 835 \cdot Y=-441$ グリッド付近には散在した分布(以下、第2グループとする)が認められる。また、この分布は、剥片及び碎片の分布でも同様な傾向を示している。第1グループ剥片の分布は、石器の分布よりやや西側に集中して検出された。尖頭器は第1と第2グループの両グループで出土している。有茎尖頭器も同様である。18の両面加工石器の接合資料も両グループに跨り出土している。第1グループのみ検出されたのは、削器・ノッチドスクレイパー・搔器・半月形石器である。特に、削器は $X=+835 \cdot Y=-442$ グリッドを中心に集中して検出された。

これを、概念図化したのが第104図である。第1

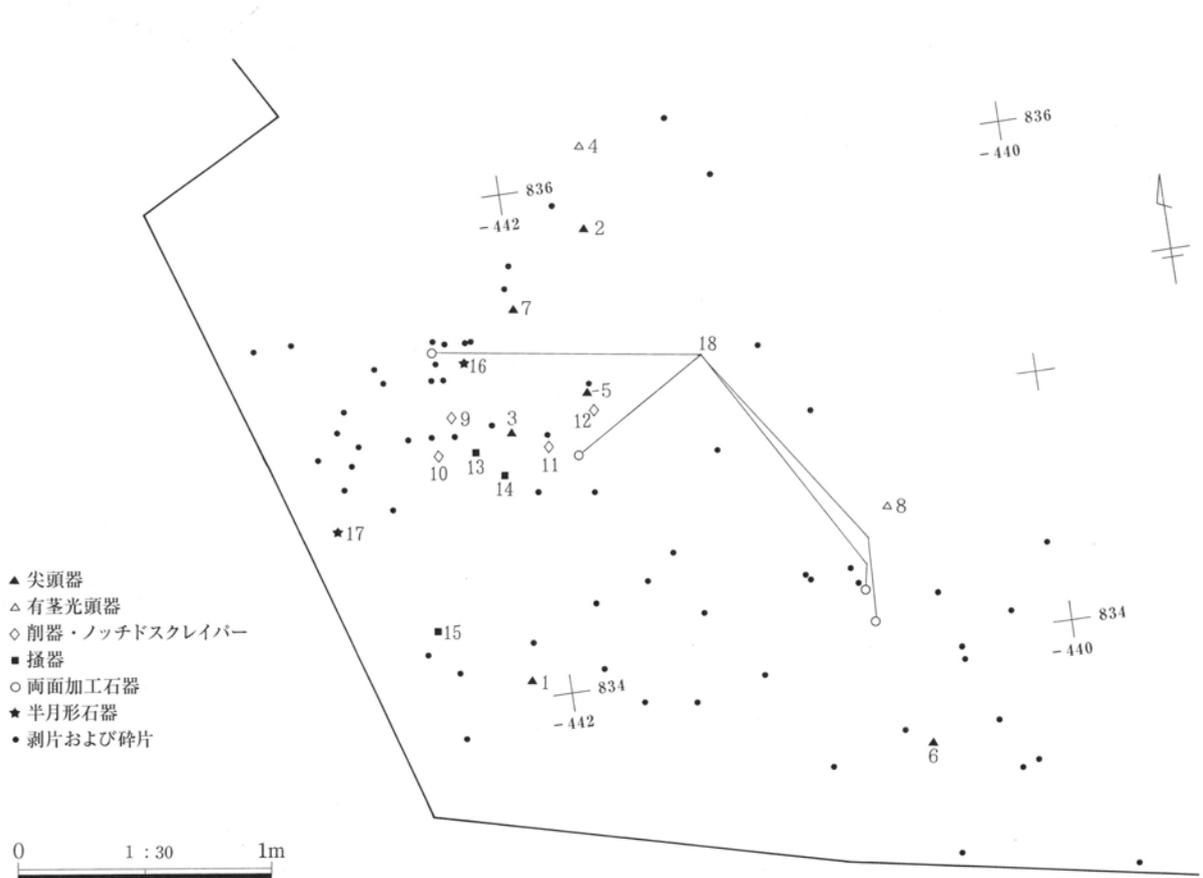
グループ側に器種別分布も集中し、かつ剥片及び碎片も $X=+835 \cdot Y=-442 \sim 443$ グリッド付近に密集している。特に、削器・ノッチドスクレイパーは $X=+835 \cdot Y=-442$ グリッド付近に集中して検出された。さらに、第2グループの石器は、第1グループと連動して分布している。その傾向は、両面加工石器の接合資料が表象している。

第102図は石材別分布図である。本遺跡の石材は珪質頁岩が多く、群馬県内の遺跡では特異な傾向を示している。但し、量的に最も多く検出された尖頭器は、珪質頁岩の1点を除き黒色頁岩であった。削器も珪質頁岩と黒色頁岩の両者が使用されていた。搔器と両面加工石器は珪質頁岩、有茎尖頭器と半月形石器は黒色頁岩が使用されていた。また、その分布は石器及び剥片が集中して検出された第1グループの方が、より多様な石材が検出された。

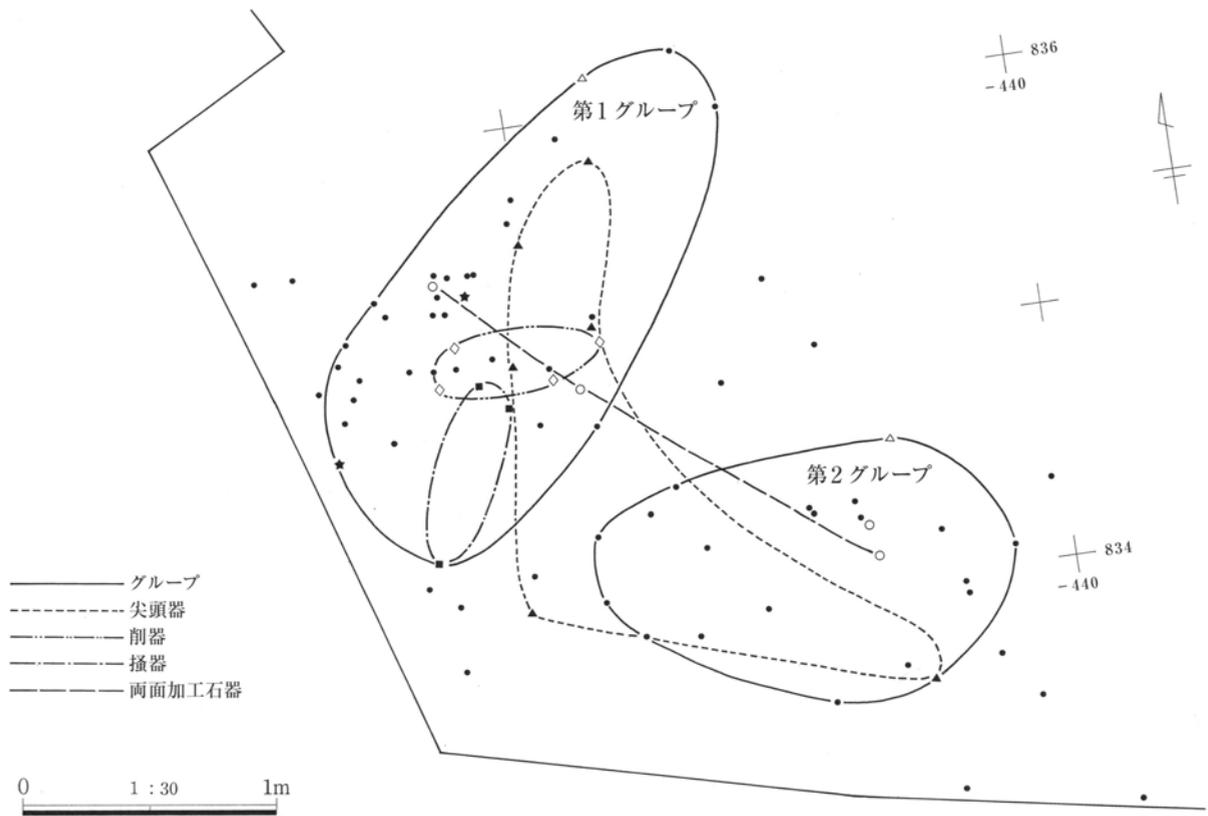
第105図は接合資料別の分布図である。接合資料



第102図 2区遺物包含層石器石材別分布図(縄文時代草創期)



第103図 2区遺物包含層石器器種別分布図(縄文時代草創期)

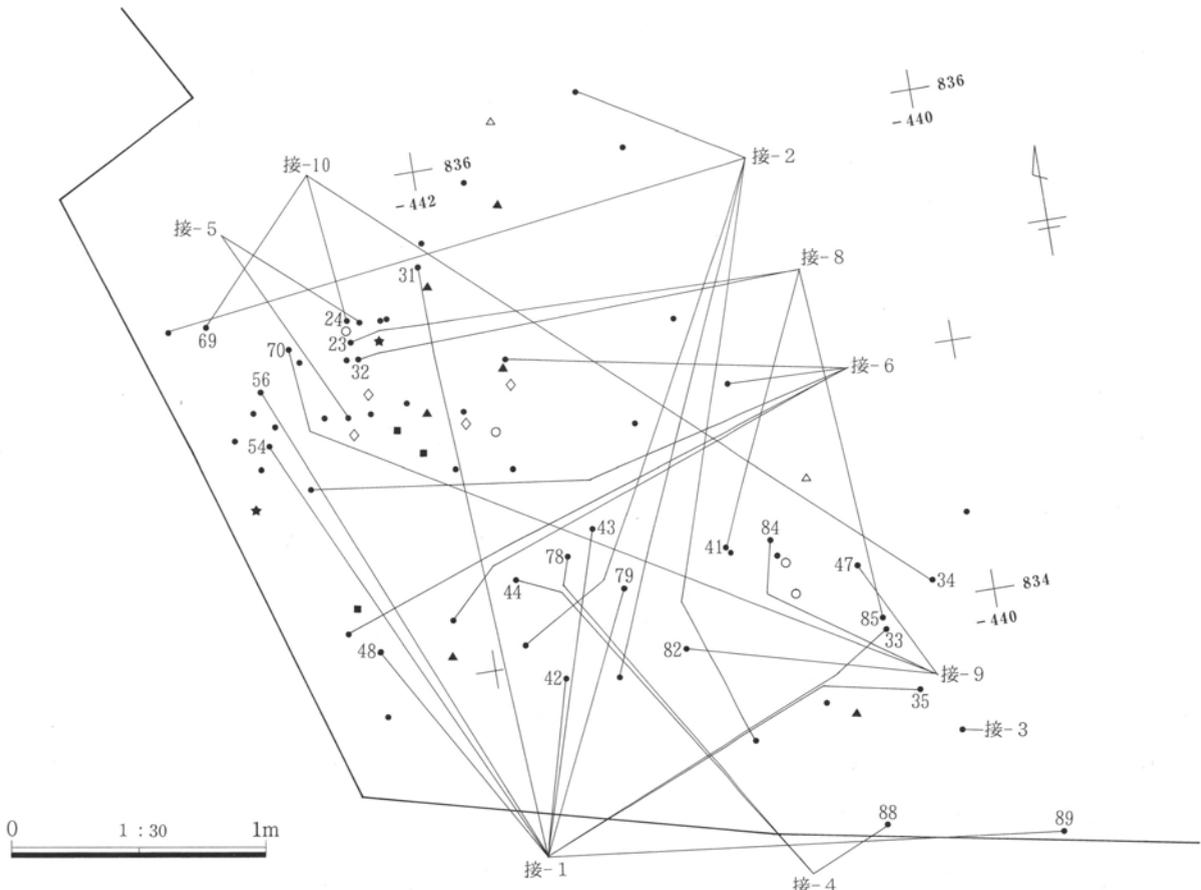


第104図 2区遺物包含層石器器種別分布概念図(縄文時代草創期)

-1と接合資料-2が、最も広い接合分布領域を示している。しかし、両者は分布領域に差異が認められ、接合資料-1は第1グループから第2グループに伸びている。接合資料-2は第1グループ内で完結している。接合資料-5も第1グループに集中している。これに対して、接合資料-6・8・9は第1と第2グループにかけて分布している。ただし、接合資料-9は、第1グループで広がり第2グループに伸びる傾向を示している。接合資料-8はこれとは逆に調査区の南東部に広がり、北西部へのびている。この分布傾向は、前記したように両面加工石器の分布と類似している。さらに、接合資料-7は第1グループと第2グループの間に分布している。このような接合資料の分布領域は、第1グループに集中して第2グループに伸びる分布、第2グループから第1グループに広がる分布、第1グループに集中して分布するもの、さらに第1グループと第2グループ

の間分布する4つの分布傾向が看取されよう。

次に、接合資料の分布領域と器種別分布の関連を検討したい。接合資料-1は、剥離後に削器ないしはノッチドスクレイパーとして使用された11点の接合資料である。接合分布領域の最も広い資料である。さらに、剥離後に石器として使用された可能性のある剥片は、第1グループから出土している。また、尖頭器作製の剥離途中で破損したと推定される大型剥片4点の接合資料である接合資料-8は、第2グループ側に多く接合し、第1グループに伸びて分布している。この分布は、尖頭器が第1グループに集中して検出されたのとは逆の関係になっている。ただし、本資料と同様に尖頭器製作途中の破損と推定される接合資料-5は、2点のみの資料であるが第1グループに集中している。



第105図 2区遺物包含層石器接合資料分布図(縄文時代草創期)

## (2) 3区遺物包含層

(縄文時代早期から弥生時代)

### 概要

包含層の存在は、縄文期遺構の確認作業を進める過程で、押型文土器片が採集されたことにより明らかになった。この時点で、直ちに調査方針を変更、5mグリッドを単位とした手掘りによる包含層調査を行った。出土遺物には連続する番号を与え、遺物の出土状況・集合状態を把握しながら調査の進行を計った。最終的な調査範囲は、720㎡に広がり、土器片約481点、石器類805点を検出した。

土器片は、縄文時代早期を中心とした縄文早期から弥生後期の構成である。型式などで分類すると、早期押型文・三戸式・田戸下層式・早期前半と考えられる縄文施文・捺糸文施文・無文土器・縄文時代前期花積下層式・関山式・黒浜式・諸磯式・中期焼町類型・加曾利E式・縄文時代後期称名寺式・堀之内式・加曾利B式・弥生時代前期・中期・後期樽式等がある。

石器類は、約8割が、剥片生産関連資料であった。組成的には削器、加工痕のある剥片、使用痕のある剥片、磨石、凹石等の加工具類が主体を占めており、石鏃、打製石斧などは少なかった。

### 1. 層位

遺物は、基本土層第V層の黒色土層、VI層の暗褐色土層中から出土した。第V層はHr - FAの下位にあり、白色軽石粒・橙色粒が混入する黒色の土層である。平坦部で20cm程度、沢の底部で約100cm程度堆積する。第VI層は、第V層と第VII層(地山)との漸移層である。沢の縁辺で20cm程度、沢の底部で約30cm堆積する。

V層、VI層中どちらにも縄文早期の土器から弥生中期の土器が混在する出土状況であったために、層位による分類は出来ない。

### 2. 出土状況

3区遺物包含層から出土した遺物の分布については、第106図～第108図に示した。出土状況の概要については、以下の通りである。

#### 土器

土器片の出土状況の特徴として、後出の土器ほど集中域を形成する傾向が指摘できる。①縄文時代早期の土器片は広範囲に分散して、②縄文時代前期から後期の土器片は埋没谷左岸の落ち際にある程度まとまって、③弥生時代前期から中期前半の土器片は台地に集中して検出された。

#### 石器

石器は広範囲に出土した。石材や器種により、特徴的な出土傾向を示すことはなかった。土器群に伴う累積した一群であると思われる。

### 3. 出土土器について

#### 概要

縄文土器435点、弥生土器46点、計481点が出土した。

縄文土器は早期338点、前期72点、中期16点、後期9点に分類できる。出土した縄文土器の内、約70%が早期の土器である。

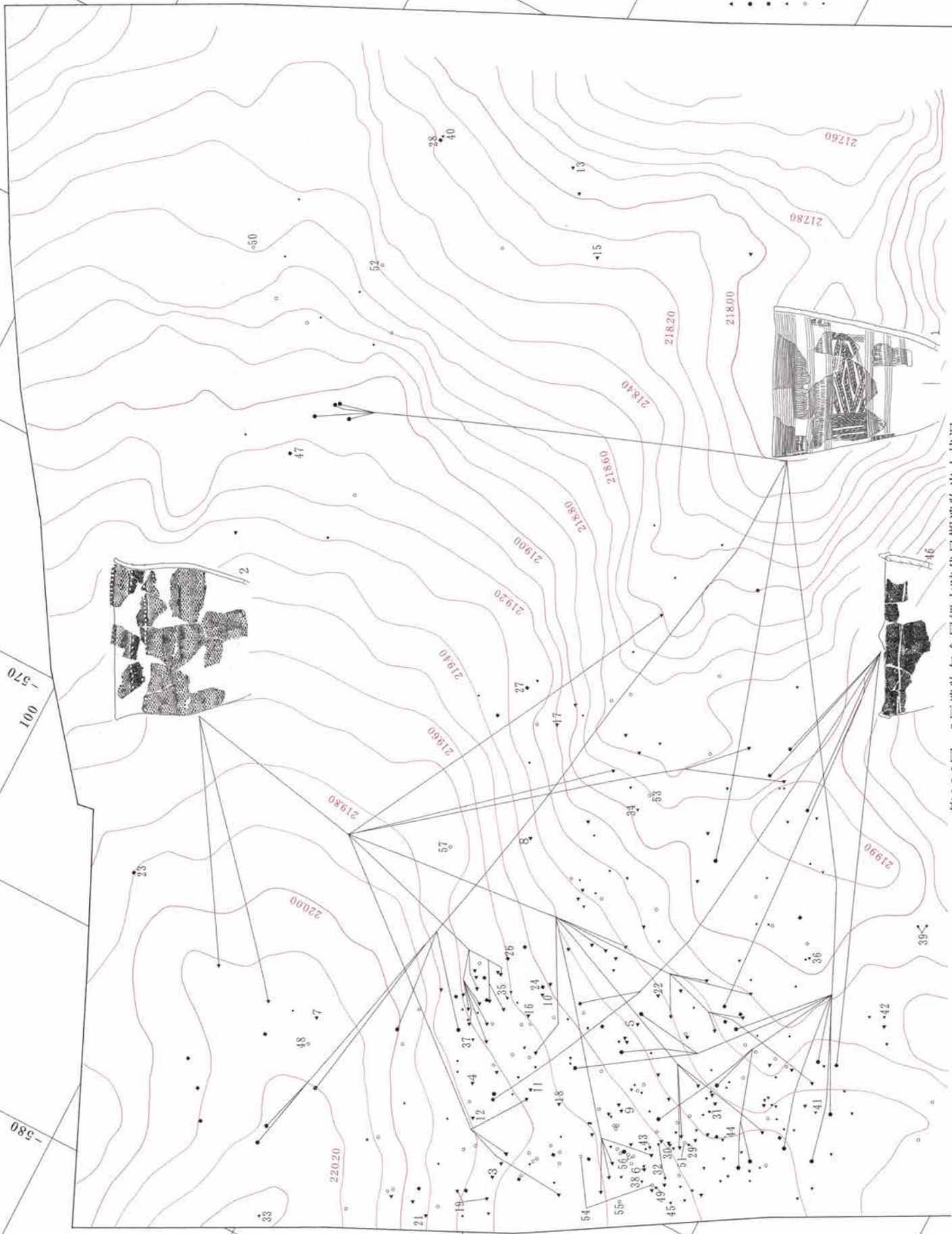
弥生土器は前期13点、中期6点、後期1点、時期不明26点に分類できる。前期が多い。

出土した土器の内、器形が復元できるものと、残りの良い小破片を掲載した。掲載外の出土土器は分類して数量を一覧表に示した(第8表)。

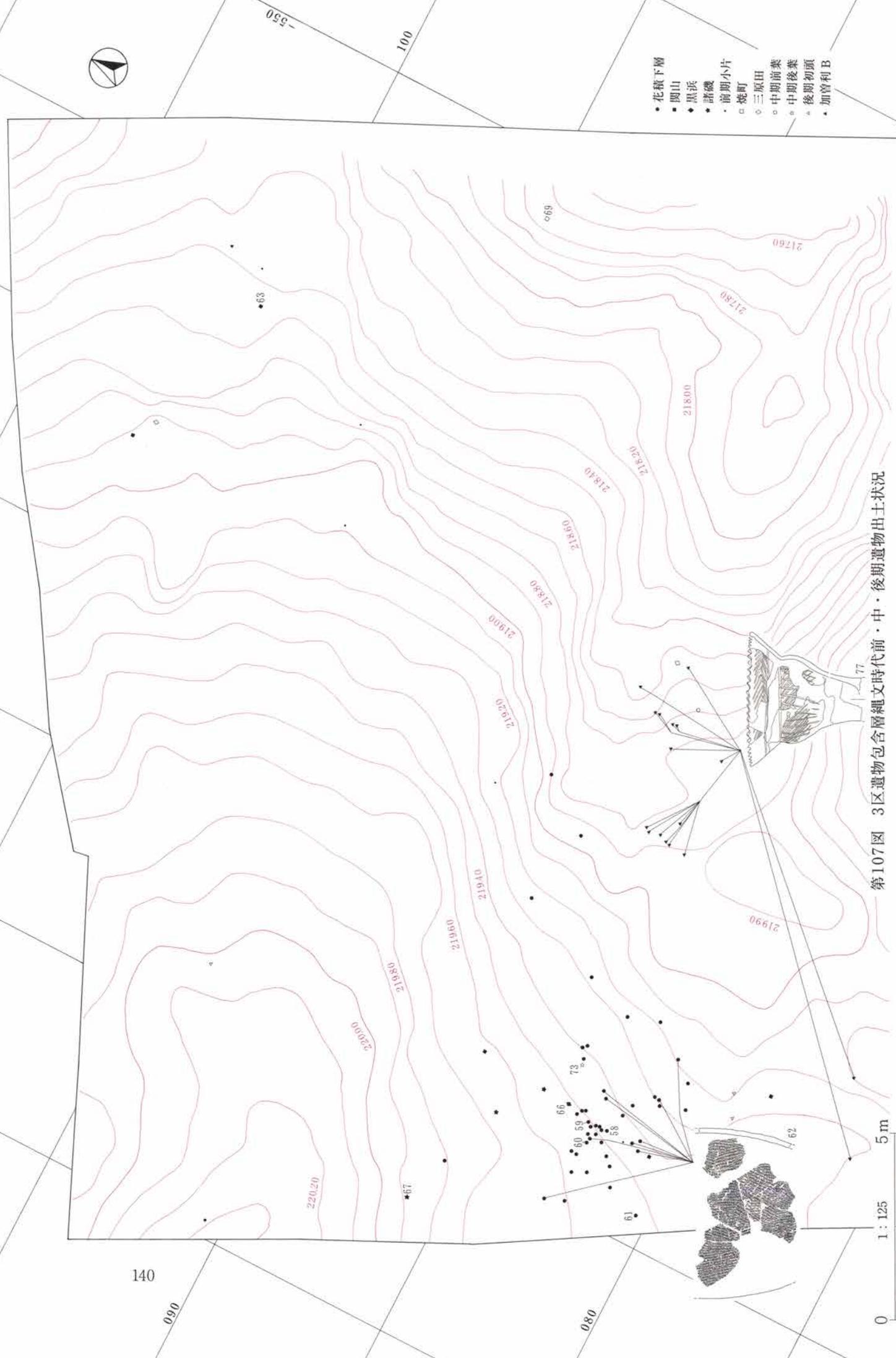
縄文土器の観察は、当事業団の橋本 淳、弥生土器の観察は、当事業団大木紳一郎の協力を得た。



- ▲ 押型文系
- 三戸
- 田戸下層
- 早期前半燃糸縄文
- 早期前半無文
- ・ 小片

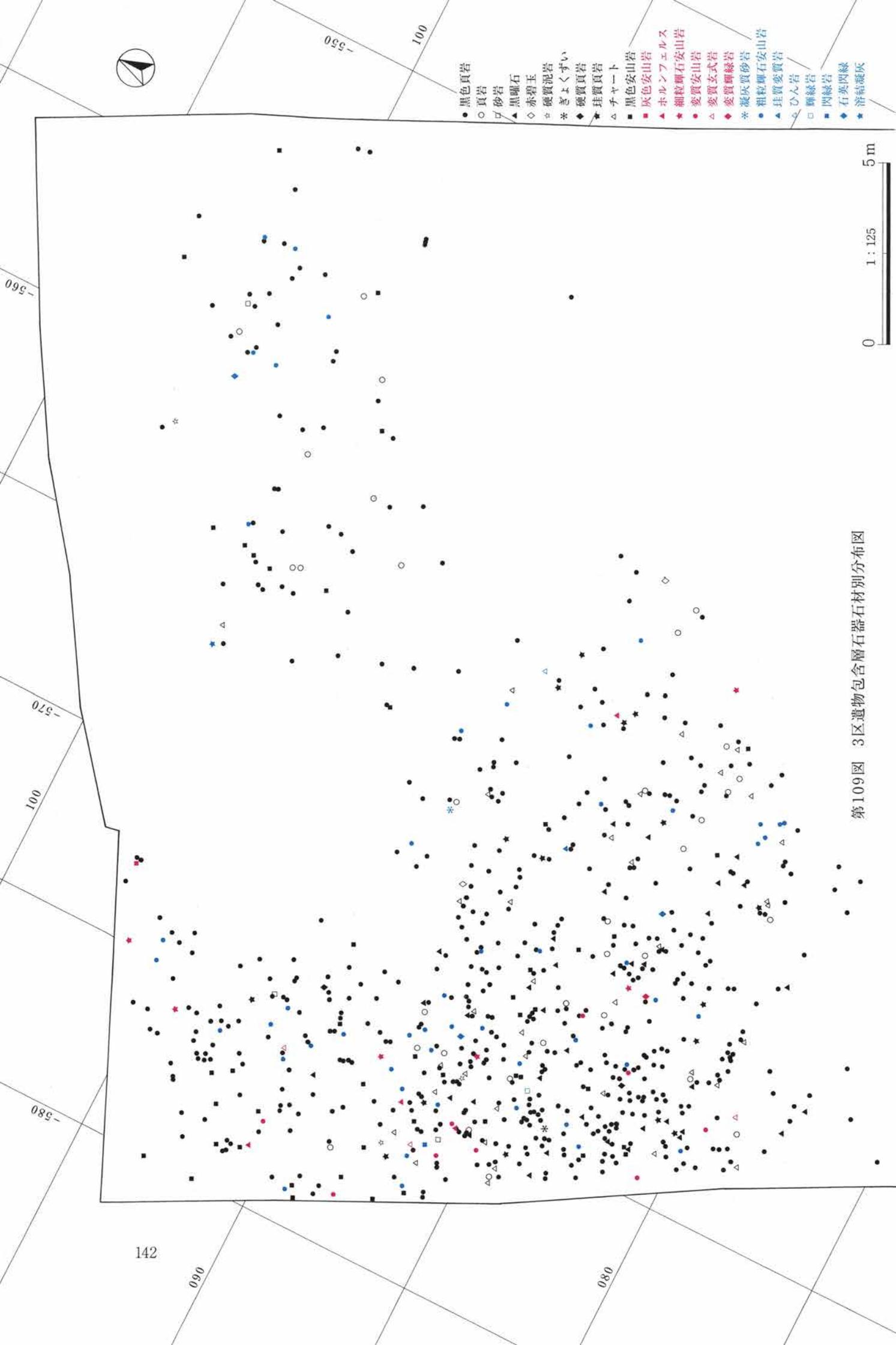


第106図 3区遺物包含層縄文時代早期遺物出土状況



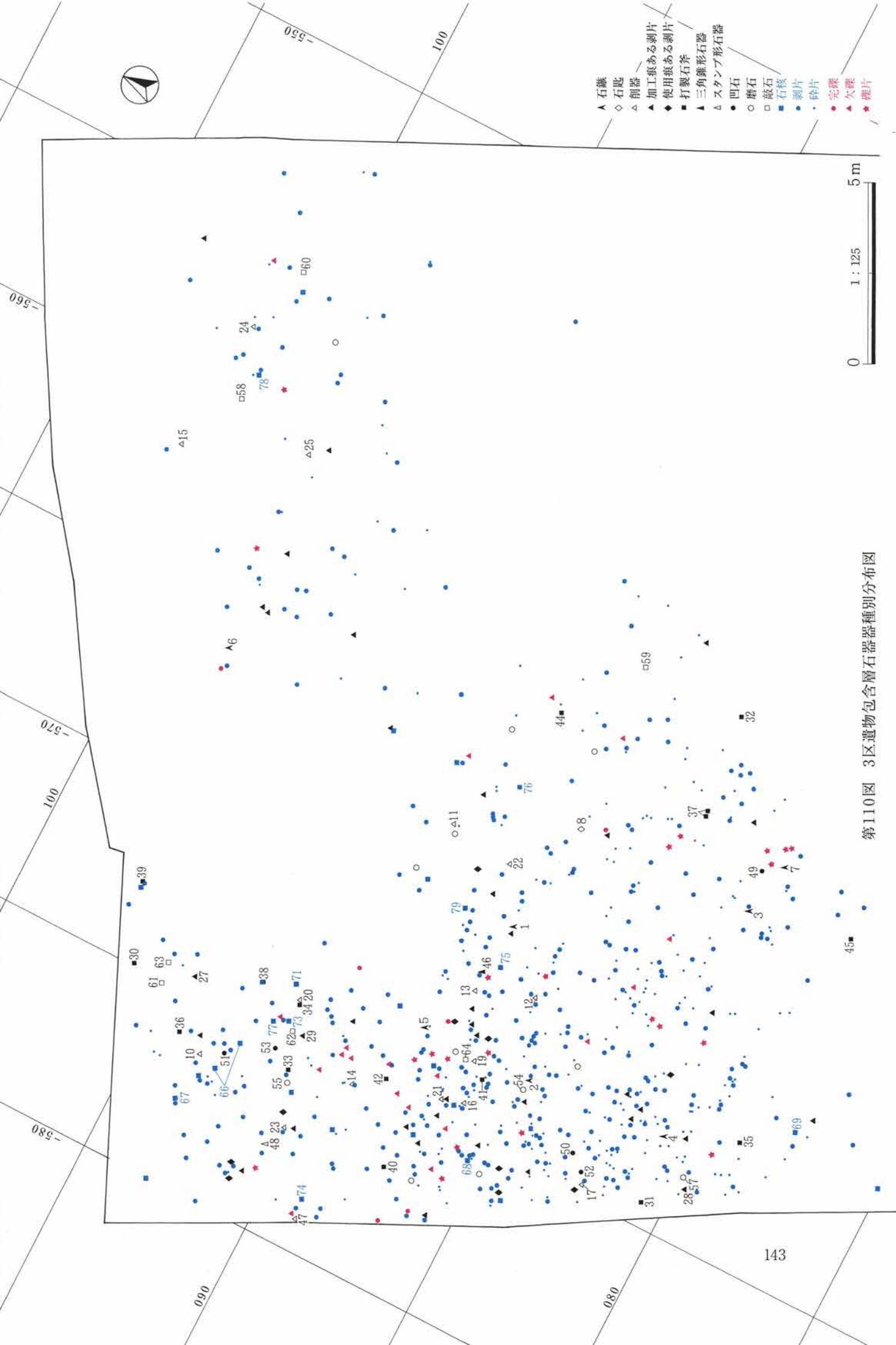
第107図 3区遺物包含層縄文時代前・中・後期遺物出土状況





- 黒色頁岩
- 頁岩
- 砂岩
- ▲ 黒曜石
- ◇ 赤碧玉
- ☆ 硬質泥岩
- \* きよくずい
- ◆ 硬質頁岩
- ★ 珪質頁岩
- △ チャート
- 黒色安山岩
- 灰色安山岩
- ▲ ホルンフェルス
- ★ 細粒輝石安山岩
- 変質安山岩
- △ 変質玄武岩
- ◆ 変質輝緑岩
- \* 凝灰質砂岩
- 粗粒輝石安山岩
- ▲ 珪質変質岩
- △ ひん岩
- 閃緑岩
- 閃緑岩
- ◆ 石英閃緑
- ★ 溶結凝灰

第109図 3区遺物包含層石器石材別分布図



- ▲ 石鏃
- ◇ 石器
- △ 削器
- ▲ 加工痕ある剥片
- ◆ 使用痕ある剥片
- 打製石斧
- ▲ 三角錐形石器
- △ スタンプ形石器
- 凹石
- 磨石
- 敲石
- 石核
- 剥片
- 砕片
- 完礫
- ▲ 欠礫
- 礫片

0 1 : 125 5 m

第110図 3区遺物包含層石器器種別分布図



第111图 3区遺物包含層石器接合資料分布图

## 縄紋土器(第112～114図、PL93～95)

第112図2、第113図3～22は押型紋土器である。3～19は山形紋、2、20、21は楕円紋が施紋される。2は推定口径24.9cm、現存器高20.5cmを測る。器形は、胴部上半で膨らみをもつが頸部でややすぼまり、外反気味に口縁部に立ち上がる。口縁部に1帯、横位施紋したのち頸部に無紋帯を残し、以下、横位密接施紋となる。原体長は2.2cm程である。無紋帯には上下端に刺突列が巡らされ、口唇部にも同様の刺突紋が施紋される。3は口縁部破片で、4と同一個体である。带状施紋の構成で、口縁部に1帯横位施紋している。5～9も同一個体で、口縁部に横位、以下縦位に带状施紋をしている。10・11は横位に带状施紋している胴部破片である。12～16は縦位带状施紋をする胴部破片である。17は小破片のため判然としないが、縦位密接施紋であろうか。18・19は同一個体で、口縁部に横位施紋し、以下縦位密接施紋をしている。20は楕円紋を施すが、縦位施紋しているようである。21は横位密接施紋している。22は底部破片である。無紋であるが、乳房状の形状から本段階とした。3～20は带状施紋、異方向施紋といった特徴から樋沢式に比定できよう。2は樋沢式～細久保式の段階、21は全体の紋様構成が分からないが同様の時期、あるいは横位密接施紋の特徴から細久保式に比定できるであろう。

第112図1は三戸式である。推定口径23.1cm、現存器高24.5cmを測る。器形は直線的に開く砲弾形を呈す。口縁部と胴部下半に5段づつ、平行沈線紋と縦位2段の短沈線列を交互に配して横帯区画とし、紋様帯を形成する。紋様帯内は4条1単位の縦位带状斜格子目紋によって分割され、区画内は带状斜格子目紋による幾何学状の紋様が描かれる。内面は丁寧にミガキがかけられている。

23～28は田戸下層式である。それぞれ、篋状工具による沈線紋を横位、斜位に施す。23は口縁部破片で、横位に沈線を巡らせた区画内に斜位の沈線を施紋する。28はやや膨らみをもつ胴部となり、半截竹管状工具による平行沈線紋を縦位に密に施

し、空間内にC字状爪形紋をV字状に施紋する。

29～46は早期前半沈線紋系土器に伴うと考えられる擦糸紋、縄紋施紋土器を一括した。29、30は同一個体で、器壁5mmと薄手のつくりである。口縁部から縦位に細かい擦糸紋Rを施紋したのち、口縁部に絡条体条痕を横位に施紋する。31～33も同様に細かい擦糸紋Rを縦位、斜位に施紋する。34・35は同一個体で斜位に擦糸紋Lを施す。36・37は浅い擦糸紋を斜位に施紋する。38・39も同一個体。斜位に擦糸紋Lを施すが、間を磨り消すことによって縦位带状施紋を意識した構成としている。40はやや鋭角な内削ぎの口唇部となる口縁部破片で、まばらに縦位施紋する。原体はRと思われ、口唇部にも施紋される。胎土に繊維を含み、内面はナデ整形痕を残す。41～43は同一個体で擦糸紋と縄紋を併用している。RLを横位施紋した下に擦糸紋Rを縦位施紋している。44～46は縄紋施紋のものである。44は口縁部破片で器壁は薄い。RLを施す。45もRLを施紋する。46は緩やかな波状口縁を呈す口縁部破片である。おそらく4単位と見られ、波頂部下に瘤状貼付紋を施す。口唇部は内削ぎで内面に稜を形成する。口縁部にLRを横位施紋して沈線で画し、沈線以下はRL、LRの2種を用いて縦位带状施紋する。

47～57はやはり早期前半沈線紋系土器に伴うと考えられる無紋土器を一括した。48が角頭状、55が内削ぎのほかは、概ね丸頭状の口唇部形態となる。器面調整は大半がナデによるものと思われ、顕著な擦痕は見受けられない。47には浅い沈線状の紋様が看取される。56・57は底部付近の破片で器壁の厚さから田戸下層式併行であろう。

58～62は花積下層式である。0段多条のRL、LRを縦位、斜位に施紋する。58・59は同一個体。

63～65は関山II式である。63は組紐圧痕を上位、0段多条RLを下位に横位施紋する。64は直前段合擦による羽状構成。65はLR、RLの羽状構成である。

66は黒浜式で、RL縄紋を横位施紋する。

67は諸磯c式で、集合沈線を横位に施し、貼付

第5章 諏訪ノ木V遺跡の遺構と遺物

紋を2条縦位に施す。

68はやや内湾する口縁部で、内削ぎの口縁部を呈す。横位平行沈線による区画内にRLを充填し、縦位に平行沈線を施す。中期初頭に位置づけられよう。

69は焼町類型。斜位に隆線を貼付し、隆線に沿って平行沈線、弧状沈線を施す。

70は内湾する口縁部で2条の隆線を施す。期中中葉か。

71～73は三原田タイプ。縦位RL縄紋を地紋とし、沈線を垂下させる。

74～76は堀之内2式である。74は平行沈線を斜位に施し、RL縄紋を充填施紋する。75は横位平行沈線間にRL縄紋を縦位、斜位に充填施紋する。76

は平行沈線により無紋部を画し、紋様帯内は弧状の意匠を描く。

77は加曾利B3式である。推定口径22.0cm、現存器高19.5cmを測る。胴部上半に膨らみをもち、頸部でくの字状に開く器形となる。口縁部は小突起を連ねる波状口縁を呈す。頸部の無紋帯を挟んで口縁部に矢羽根状沈線、胴部上半に斜格子状沈線を施し、胴部下半は無紋となる。内面はミガキがかけられ、光沢をもつ。(橋本)

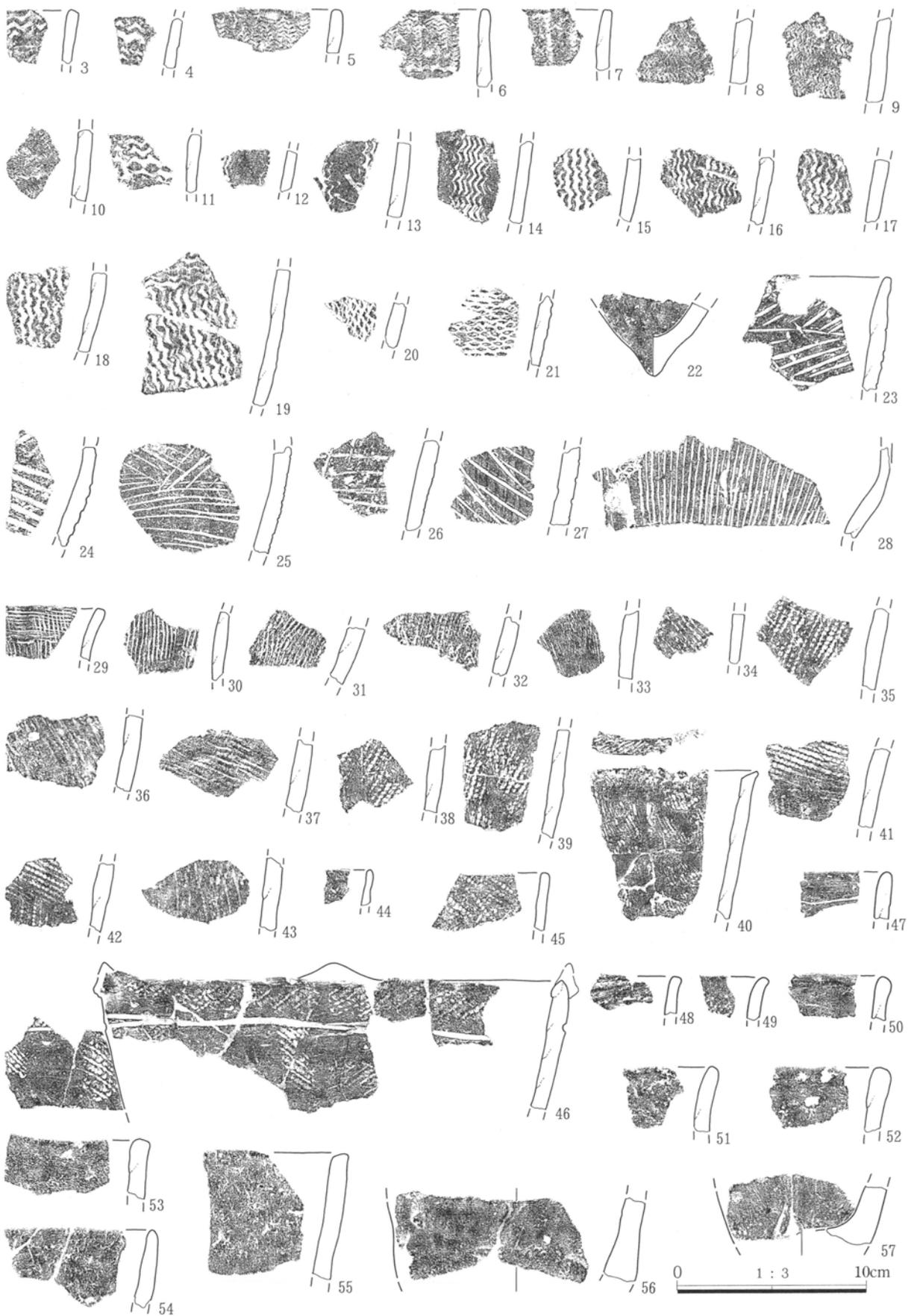
第8表 3区遺物包含層出土土器の型式別一覧(点)

縄紋																	弥生					
早期						前期					中期				後期				中	後		
押型紋系	三戸	田戸下層	沈線紋併行撚糸縄紋	沈線紋併行無紋	小片	花積下層	関山	黒浜	諸磯	小片	焼町	三原田	前葉	中葉	後葉	初頭	堀之内	加曾利B	縄紋晩期から弥生中期初頭	栗林	樽	不明
78	1	44	75	65	75	47	9	1	5	10	1	8	1	1	5	5	3	1	18	1	1	26
338						72					16				9			19		27		
435																			46			
481																						

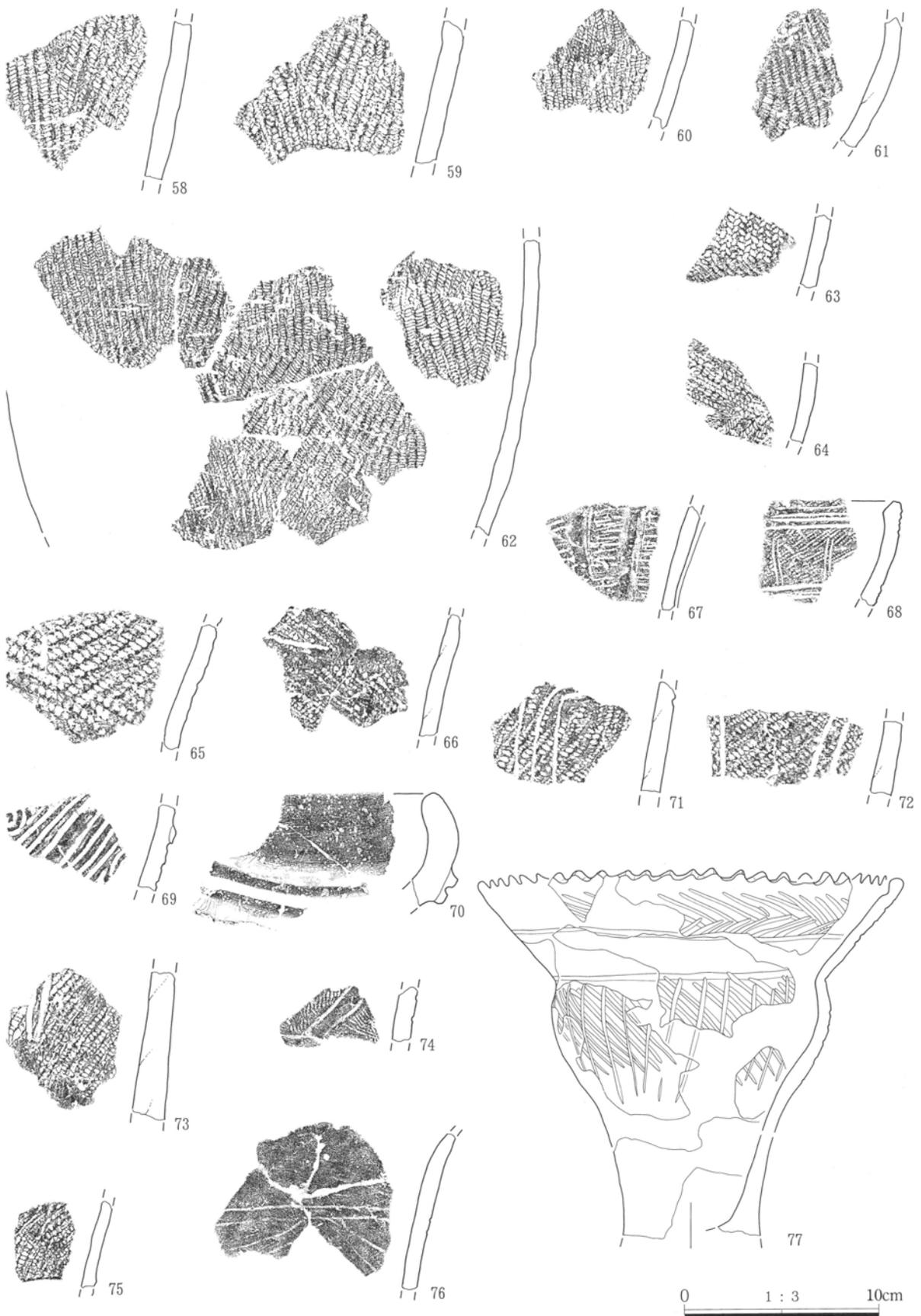
※数量は、掲載遺物と未掲載遺物を合わせた数



第112図 3区遺物包含層出土縄紋土器(1)

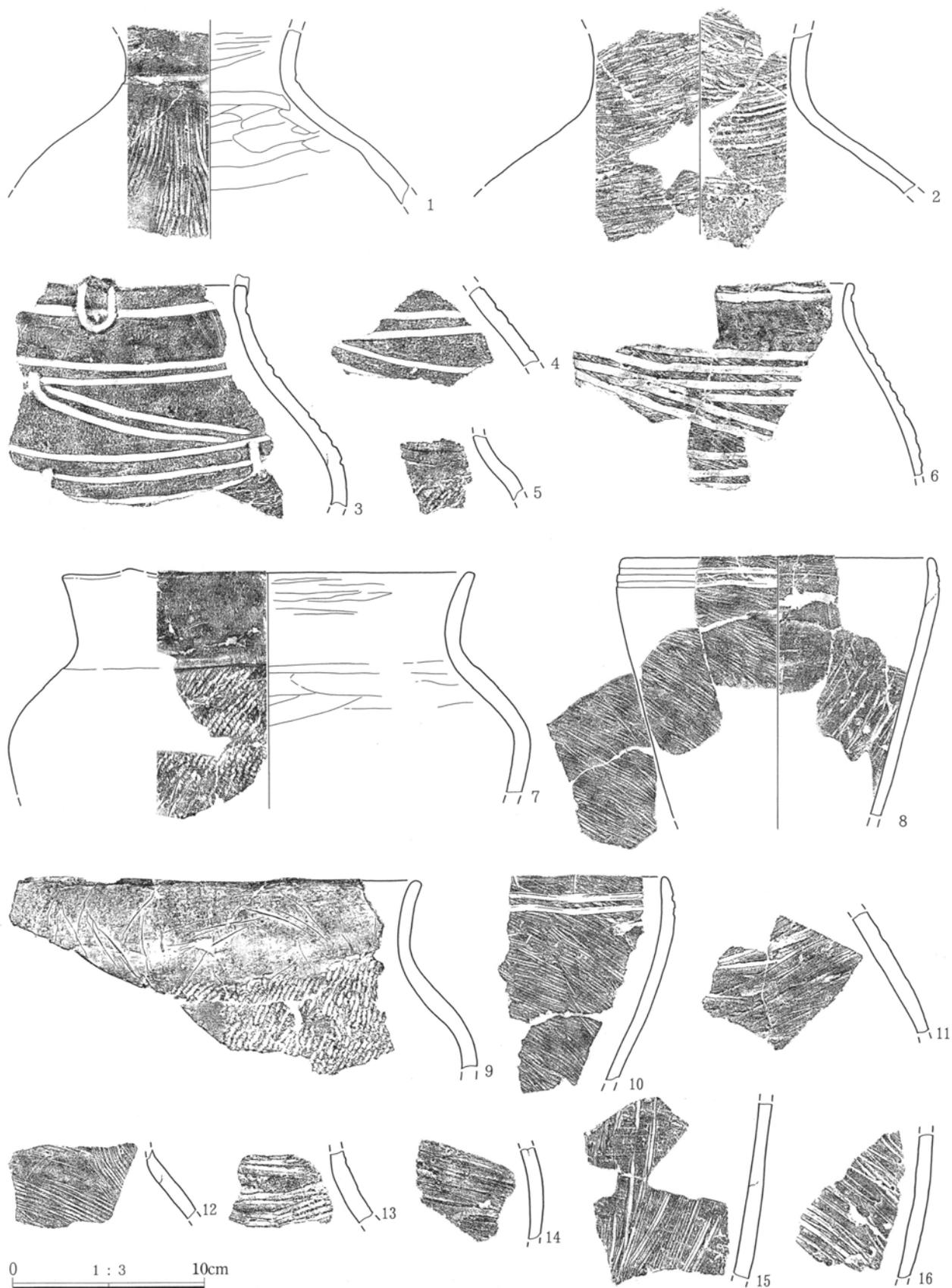


第113図 3区遺物包含層出土縄紋土器(2)

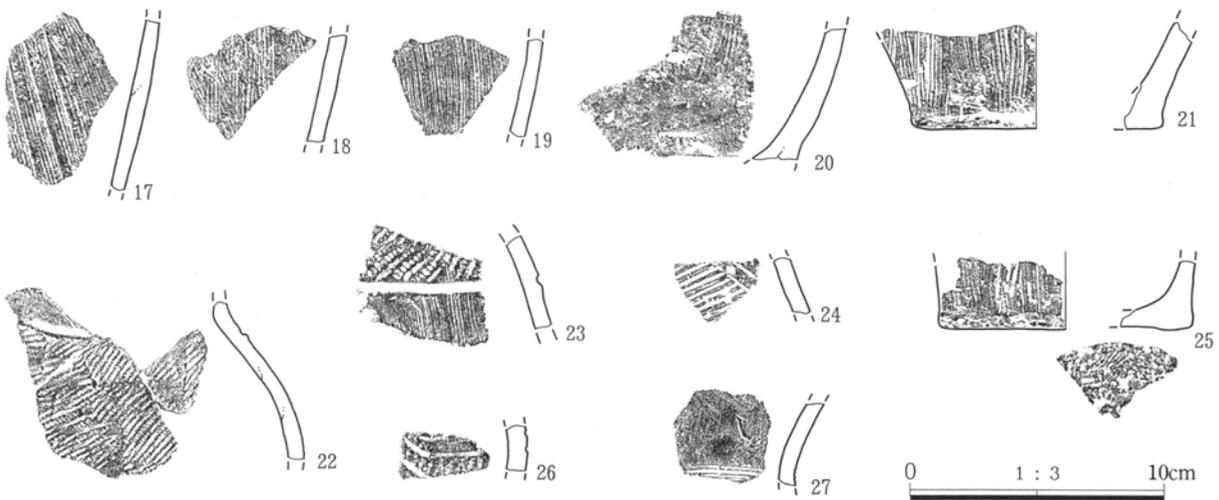


第114図 3区遺物包含層出土縄紋土器(3)

弥生土器



第115图 3区遺物包含層出土弥生土器(1)



第116図 3区遺物包含層出土弥生土器(2)

3区遺物包含層 弥生土器観察表 (第115・116図、PL95・96)

No.	器種	遺存状態	特徴など
1	壺	頸～肩1/4	文様は頸部に一条の太い横沈線。弥生前期の在り系壺。外面はササラ状具による縦ハケメ、頸部は横ヘラナデ。内面は横ケズリ。高 9.1cm残。
2	甕	頸～肩1/4	弥生時代前期。内外面とも粗い斜位～横位条痕。高 8.4cm残。
3	甕	口縁～肩	文様は口縁に山形突起を付け、この部分にU字状の沈線、口縁下に1条横線。肩部は上位2条、下位3条の横沈線で区画し2条の斜行沈線で三角連繫文を描く。交点には1条の短沈線で刻む。沈線は断面が半円形であることから、丸棒状具と考えていだろう。外面は口縁～肩横ミガキ、体は斜条痕。内面は横ケズリ、ナデ。弥生時代前期。
4	甕	胴部片	3と同一個体か。弥生時代前期。
5	甕		3と同一個体か。弥生時代前期。
6	甕	口縁部	弥生時代前期。文様は口縁一条沈線。肩部上位4条、下部3条以上の横線区画の中間を2条の斜行沈線で切って三角連繫文を構成すると思われる。外面は口縁ヨコナデ、体部斜条痕。内面は横位ナデ。高 10.0cm残。
7	甕	口縁～胴1/4	器形は弥生時代前期の条痕甕に近似する。また体部における横位縄文は中期中葉の池上式や中期後半の在り系にもみられるが、前期と捉えておく。外面は口縁ヨコナデ体部横位縄文、内面は横位ミガキ。高 11.5cm残。
8	深鉢	口縁～胴1/5	文様は口縁に植物茎状具による二本平行沈線。ただし一本づつ描く。外面は斜位細密条痕(板状具か)内面はササラ状具による粗い条痕。高 13.4cm残。弥生時代前期。
9	甕	口縁～肩	2と同様。高 9.8cm残。弥生時代前期。
10	深鉢	口縁片	8と同一個体か。高 10.5cm残。弥生時代前期。
11	不明	肩部片	粗い横条痕。弥生時代前期。
12	壺	肩部片	斜条痕。内面は横ケズリ。弥生時代前期。
13	壺か	頸部	粗い横位条痕。弥生時代前期。
14	不明	肩部片	粗い横条痕。内面炭化物付着。弥生時代前期。
15	不明	体部片	外面は横ケズリの後縦条痕。内面は横ケズリ。弥生時代前期。
16	不明	体部片	体部 粗い斜条痕。弥生時代前期。
17	不明	体部片	体部 斜細密条痕。弥生時代前期。
18	不明	体部片	体部 斜細密条痕。弥生時代前期。
19	不明	胴部片	胴部 縦の細密条痕。弥生時代前期。
20	不明	底部付近	底部付近 細密条痕。弥生時代前期。
21	不明	底部	底部 縦条痕。高 4.2cm残。弥生時代前期。
22	壺	肩部片	頸部 沈線区画。胴部 縄文(LR)。時期特定できない。
23	壺か	不明	中位に太沈線で横位区画、上位に縄文(LR)、下位は縦条痕。時期は特定できない。
24	甕	頸部片	斜線充填 鋸歯文か。弥生時代前期～中期前半。
25	不明	底部	底部 縦条痕。高 2.7cm残。
26	壺か	胴部	連弧状沈線区画の磨消縄文。弥生時代中期中葉。
27	壺	頸部片	頸部 簾条文。弥生時代後期樽式。

## 5. 出土石器類について

### 概要

805点の石器・石片類が出土した。剥片生産関連資料が631点(78.4%)と圧倒的多数を占める。組成的には、磨石等の礫石器を29点含む加工具類が96点と主体を占めており、概して石鏃や石斧類の出土は少ない。

既に述べた通り、3区遺物包含層では縄文早期の土器を主体に、早期から中・後期、さらに弥生前期から中・後期の土器が混在して出土した。より後期の型式の土器については集中域を形成する傾向が指摘できそうだが、石器については特に集中分布するような傾向が指摘できないことから、第9表に示した器種組成については、縄文早期から弥生後期に至る間の累積的組成を示している可能性が高い。また、石器石材の選択傾向については、剥片系石器と礫石器に大別して以下に記載した。

### 剥片系石器(第120・121図、PL99)

剥片系石器721点中、517点の石材が黒色頁岩である。黒色頁岩は石鏃等の小形石器から大形の打製石斧まで多種多様な器種に用いられ、極めて選択率の高い石材であった。加工量の多い石鏃から、強い衝撃を受ける土掘り具・伐採具にまで多様な石器の素材として黒色頁岩を用いたのは、黒色頁岩の有する石材性状に起因する可能性が強い。

黒色頁岩の石材採取地を利根川上流域に求めるか、遺物周辺の利根川中流域に求めるかの結論は保留するとしても、最も入手が容易で、石器製作に適した石材であったということができよう。

その他の石材では、頁岩・珪質頁岩・黒色安山岩・黒曜石・チャートの選択が目立つ。同様な視点で石器石材と製作器種の対応関係を見ると、石鏃等の小形石器には黒曜石やチャートなどの鋭利に割れる石材を用いていることが分かる。これらについては剥片類が安定的に存在しており、石鏃や削器類の素材として自己消費した可能性が強い。黒色頁岩を多用する反面、黒色安山岩の使用頻度が相対的に低下す

るという石材選択の傾向は、利根川流域の他の縄文早期遺跡と同様であった。

打製石斧については石材7種類を確認した。器種組成が累積的所産であることは既に述べたとおりであり、打製石斧の石材7種も特定集団の石材選択を示しているわけではない。ただし石材7種が石斧の機能を満たす石材性状を備えていたことだけは断定していいだろう。打製石斧には、頁岩類のほか灰色安山岩・細粒輝石安山岩・変質安山岩といった3種類の安山岩類を用いていた。打製石斧に黒色安山岩を用いるということはないが、灰色安山岩や変質安山岩は、黒色安山岩に比べて結晶化が進んでいないために衝撃に耐える石材となり、打製石斧の素材として採用されたのではないだろうか。

加工痕ある剥片・使用痕ある剥片等については、これらを製作する目的で剥片生産したというよりも、他器種製作に伴い生じた剥片類の中から形状の良好な剥片を選択、石器素材としたものと理解している。

### 礫石器(第119・120図、PL98)

出土した礫石器には凹石や磨石があるが、凹石の表面には磨り面が、磨石の小口部分には打痕を有するものが多く、機能的には複合しているようである。ここでは凹部を有するものを凹石に、磨り面を有するものを磨石に分類した。

礫石器26点中20点は粗粒輝石安山岩等を石材としている。その他の石材では、石英閃緑岩や凝灰質砂岩を使用している。礫石器についてはその使用目的に応じた石材選択が明確で、凹石・磨石には粗粒輝石安山岩等の多孔質石材を用いていた。多孔質であるということが石材選択の際の要件であったということができよう。

素材となった礫は利根川中流域に豊富に見られ、約1.5km離れた利根川から採取した礫と判断できよう。

### 打製石斧(第118図、PL97)

短冊状を呈する典型的な打製石斧(30~32・35など)が多く出土している他、分銅状に近い打製石

斧(37・39)や、棒状の石器基部から幅広の刃部が付いたような石鋏的なもの(34)まで、多様な石斧が出土している。

使用石材の多様化については、既に述べたとおりである。細粒輝石安山岩の多用についても、この種の石材が剥片石器に用いられるということが少ないことから見て、灰色安山岩同様に激しい衝撃にも耐える石材であったという説明が可能ではないかと考えている。細粒安山岩製の石斧については、剥片類が出土していないことから、交易等で入手したのかは不明であるが、搬入石器であることは理解できよう。

#### 石鏃(第117図、PL96)

出土した石鏃は凹基無茎鏃である。両面加工製の石鏃が4点(3～5・7)あるほか、周辺加工した石鏃が3点(1・2・6)ある。3・5は黒曜石製、4が黒色頁岩製、残る4点がチャート製の石鏃である。3の先端部には衝撃剥離痕様の剥離痕が残る。周辺加工した石鏃はチャート製で、3点とも薄身であるという点で共通していた。これでも使用できるのだろうが、先端強度に不安を残す石鏃であるということだけは確かである。4は石器基部を深くU字状に抉り込んでおり、早期後半段階特有の形態的特徴を示している。

#### 石匙(第117図、PL96)

横型石匙・縦型石匙が各1点出土している。2点とも剥片の周辺部を粗く加工している程度で、粗製石匙の典型例である。

#### 削器類(第117・118図、PL96・97)

削器16点、加工痕ある剥片38点、使用痕ある剥片10点の55点が出土している。加工痕ある剥片には削器的機能を有するものもあるが、加工意図の不明な石器も含んでいる。機能不明な石器を含んだままで削器類として同一視するのは問題があるかもしれないので今後の課題としたい。

剥片は、縦長・横長・幅広剥片の3種に大別し、加工部位が側縁なのか、剥片端部なのかを観察した。以下に、剥片形状と加工部位、及び、使用部位の観

察結果を記す。

12・20・27などの縦長剥片は左右の側縁に、13・21などの横長剥片は剥片端部に加工部が集中することが判明した。多様な形状を含む幅広剥片の場合には加工部位は剥片形状によってさまざまだが、台形状剥片などには側縁から端部に連続的剥離を施す場合が多い。

25・29は、大形の横長剥片を用いたものである。刃部は剥片端部の直線的縁辺が有力だが、加工は剥片の打面側に偏っている。この加工はバルブ除去を目的としたものであり、刃部作出の加工とはいえないため、技術形態学的には削器に分類するのは妥当ではない。

47は、裏面側を礫面とした分割礫を石器素材に用いて、両側縁を裁ち切るよう剥離したのち、石器下縁に搔器的刃部を作出したものである。

第5章 諏訪ノ木V遺跡の遺構と遺物

第9表 3区包含層 器種・石材集計表 数量(点)

	狩猟具		加工具				石斧	礫石器類					剥片生産関連			礫類			計
	石鏃	石匙	削器	加工痕 ある剥片	使用痕 ある剥片	打製石 斧	三角錐 形石器	スタンプ 形石器	凹石	磨石	敲石	砥石	石核	剥片	碎片	完礫	欠礫	礫片	
黒色頁岩	1	1	11	31	10	6	1						27	282	179		3		552
頁岩														19	18				37
砂岩			1											1			2	1	5
黒曜石	2																		39
凝灰質砂岩									1										1
赤碧玉												1			1				2
硬質泥岩			2			1													3
ぎよくすい															1				1
硬質頁岩														1	1				2
珪質頁岩		1	1			1								9	4			1	17
チャート	4		1	3	1									11	14				34
黒色安山岩			1	4									2	28	8	2			45
灰色安山岩						1													1
ホルンフェンス				1										1			1	1	4
粗粒輝石安山岩									5	10	5		1	1		3	10	15	50
細粒輝石安山岩						5									1				6
変質安山岩						1	1		1						1		1	4	9
変質玄武岩						2						1		1					4
変質輝緑岩																		1	1
珪質変質岩															1				1
ひん岩									1								1		2
輝緑岩														1					1
閃緑岩																	1		1
石英閃緑岩												2					1		3
溶結凝灰岩																1			1
計	7	2	17	39	11	17	1	1	5	13	7	1	31	355	266	6	20	23	822
	7		69			17			28					652			49		

第10表 3区包含層 器種・石材集計表 重量(g)

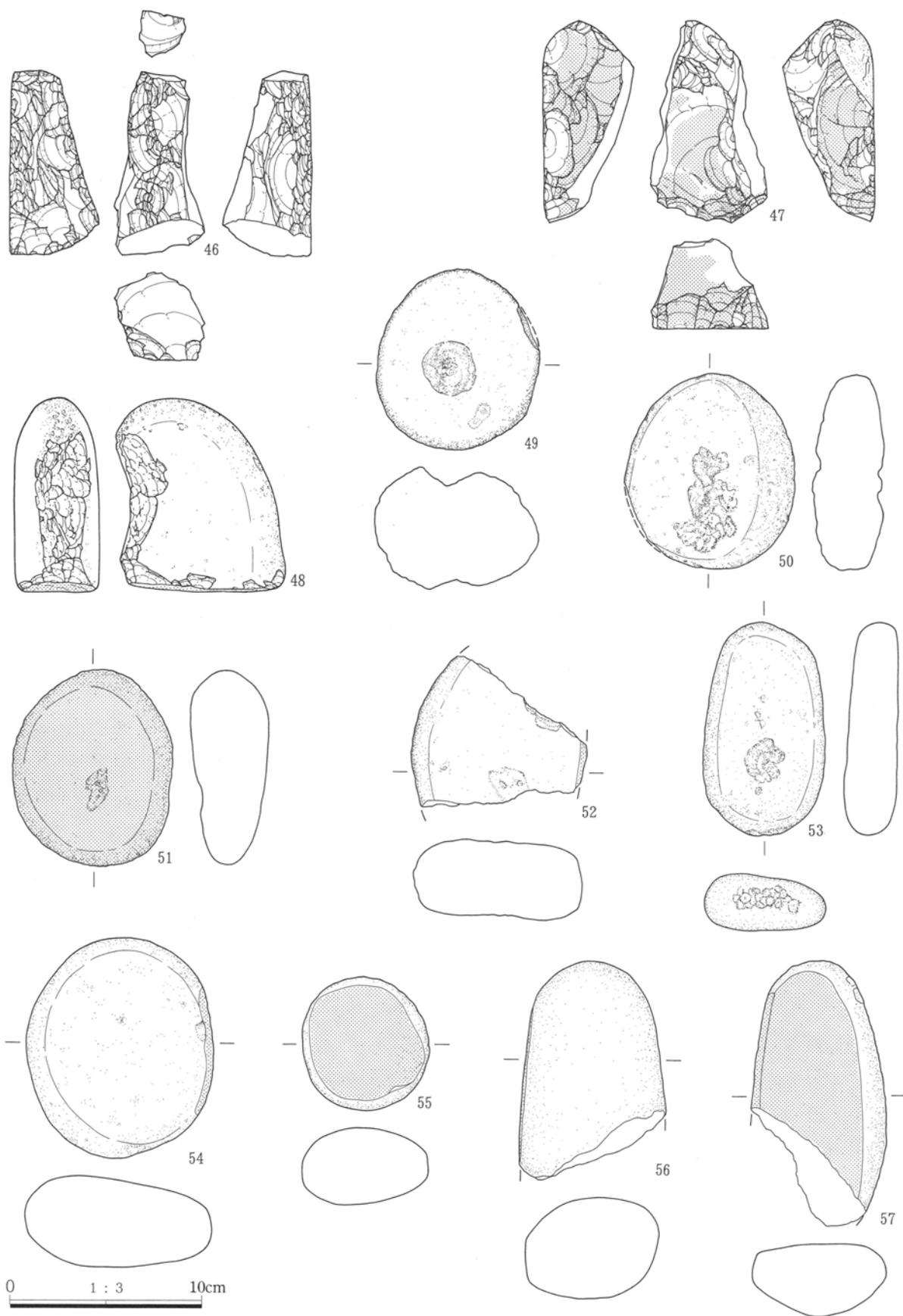
	狩猟具		加工具				石斧	礫石器類					剥片生産関連			礫類			計
	石鏃	石匙	削器	加工痕 ある剥片	使用痕 ある剥片	打製石 斧	三角錐 形石器	スタンプ 形石器	凹石	磨石	敲石	砥石	石核	剥片	碎片	完礫	欠礫	礫片	
黒色頁岩	0.6	24.1	1113.5	1627.2	501.0	1229.3	213.0						5191.0	7906.4	602.3		305.4		18713.7
頁岩														58.6	19.1				77.7
砂岩			19.5											77.6			205.2	31.6	333.9
黒曜石	1.2														24.9				26.0
凝灰質砂岩									738.0										738.0
赤碧玉												126.5		1.3					127.8
硬質泥岩			394.6			181.8													576.4
ぎよくすい															0.1				0.1
硬質頁岩														14.3	1.0				15.3
珪質頁岩		4.4	12.1			36.6								145.0	4.9			6.1	209.0
チャート	1.2			9.3	2.8									61.0	8.2				82.4
黒色安山岩			13.0	107.6									339.7	717.7	16.7	470.0			1664.8
灰色安山岩			295.0			143.8													438.8
ホルンフェンス				185.0										22.0			130.6	25.4	363.1
粗粒輝石安山岩									1920.0	6503.0	3023.0		124.4	65.1		1054.4	3377.9	216.6	16284.4
細粒輝石安山岩						362.6									2.9				365.4
変質安山岩						67.4	624.0		315.0						0.8		338.0	32.0	1377.2
変質玄武岩						470.5						80.0		80.0					630.5
変質輝緑岩																		3.2	3.2
珪質変質岩															1.1				1.1
ひん岩									676.0								140.8		816.8
輝緑岩																			36.7
閃緑岩																	765.0		765.0
石英閃緑岩											1063.0						356.0		1419.0
溶結凝灰岩																			0.0
計	2.9	28.5	1847.7	1929.0	503.8	2491.9	213.0	624.0	1920.0	8232.0	4086.0	80.0	5781.6	9184.5	683.3	1524.4	5619.0	314.9	45066.3
	2.9		4309.0			2491.9			15155.0					15649.3			7458.2		



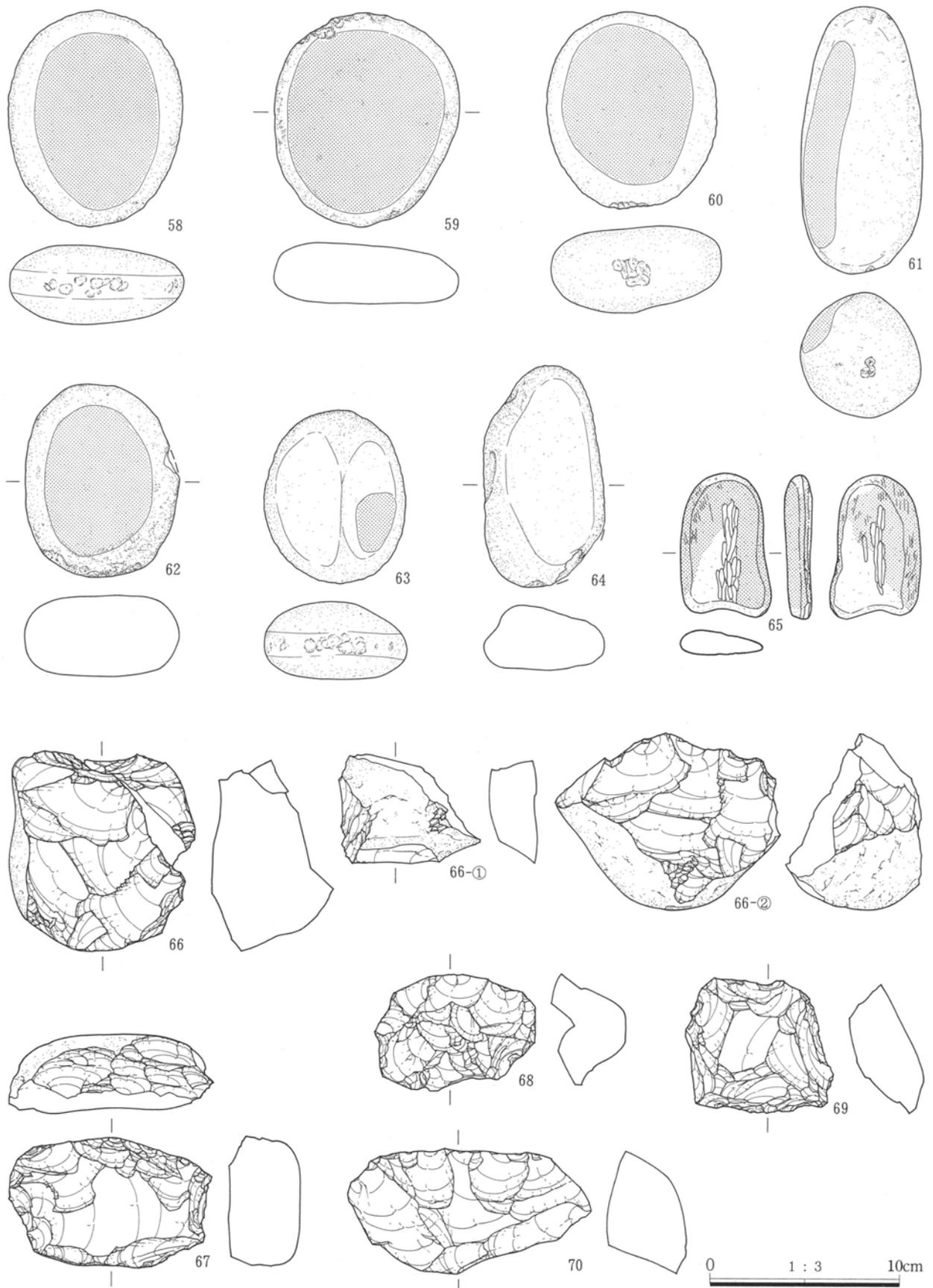
第117圖 3区遺物包含層出土石器(1)



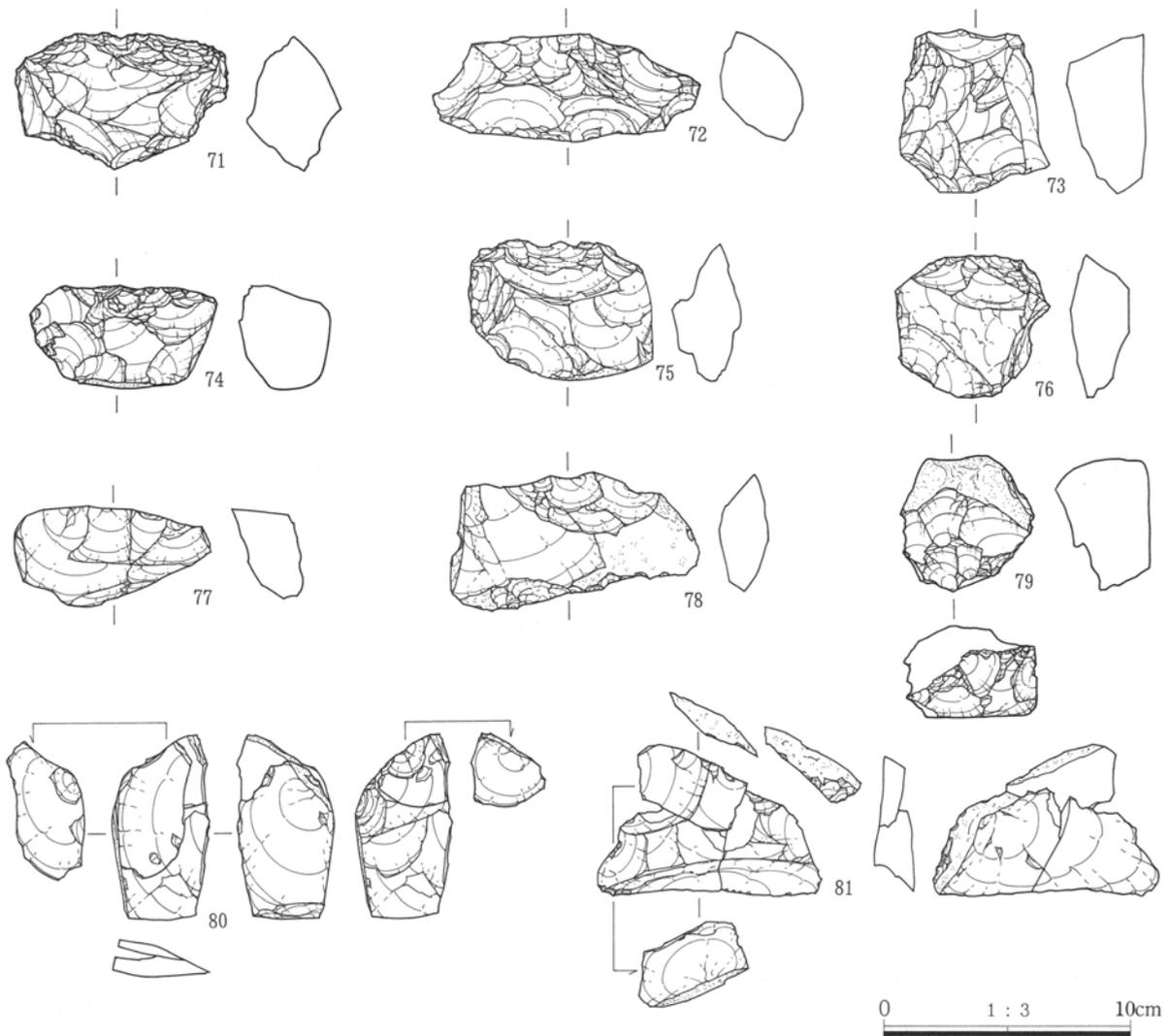
第118図 3区遺物包含層出土石器(2)



第119图 3区遺物包含層出土石器(3)



第120図 3区遺物包含層出土石器(4)



第121図 3区遺物包含層出土石器(5)

3区遺物包含層出土石器類計測表

No.	種類・器種	出土位置	石材	計測値(単位 cm、g)			
1	石鏃	085-565	チャート	長 1.3	幅 1.1	厚 0.15	重 0.15
2	石鏃	080-570	チャート	長 1.2	幅 0.9	厚 0.20	重 0.14
3	石鏃	080-565	黒曜石	長 2.0残	幅 1.7	厚 0.30	重 0.62
4	石鏃	080-570	黒色頁岩	長 1.8残	幅 1.4	厚 0.35	重 0.56
5	石鏃	085-570	黒曜石	長 1.5	幅 1.5	厚 0.30	重 0.55
6	石鏃	095-565	チャート	長 1.4	幅 1.3	厚 0.20	重 0.28
7	石鏃	080-560	チャート	長 2.2	幅 1.2	厚 0.45	重 0.60
8	石匙	085-565	黒色頁岩	長 5.1	幅 6.0	厚 0.9	重 24.1
9	石匙	-	珪質頁岩	長 4.5	幅 2.2	厚 0.5	重 4.3
10	削器	090-575	黒色頁岩	長 7.2	幅 9.9	厚 3.5	重 210.0
11	削器	085-565	黒色頁岩	長 7.0	幅 7.9	厚 1.8	重 116.5
12	削器	085-570	黒色頁岩	長 6.7	幅 9.7	厚 2.8	重 186.0
13	削器	085-570	黒色頁岩	長 5.6	幅 9.7	厚 1.9	重 109.7
14	削器	085-575	黒色頁岩	長 6.2	幅 10.7	厚 2.9	重 172.6
15	削器	-	硬質泥岩	長 6.1	幅 4.5	厚 1.7	重 28.6
16	削器	085-570	硬質泥岩	長 10.2	幅 9.9	厚 3.2	重 366.0
17	削器	080-570	黒色頁岩	長 4.6	幅 6.5	厚 2.3	重 74.7
18	削器	-	チャート	長 3.4	幅 4.4	厚 1.0	重 13.0

No.	種類・器種	出土位置	石材	計測値(単位 cm、g)			
19	削器	085-570	黒色頁岩	長 5.3	幅 5.0	厚 1.9	重 49.4
20	削器	-	黒色頁岩	長 4.5	幅 5.8	厚 1.3	重 33.6
21	削器	085-570	黒色安山岩	長 6.5	幅 6.8	厚 1.5	重 66.6
22	削器	085-565	珪質頁岩	長 4.5	幅 3.1	厚 1.0	重 12.2
23	削器	090-575	黒色頁岩	長 7.6	幅 4.4	厚 1.2	重 34.0
24	削器	100-555	砂岩	長 7.4	幅 3.1	厚 1.1	重 19.5
25	削器	095-560	黒色頁岩	長 4.5	幅 8.2	厚 1.9	重 60.3
26	削器	-	黒色頁岩	長 4.2	幅 5.6	厚 1.5	重 32.2
27	加工痕のある剥片	090-570	黒色頁岩	長 3.4	幅 1.3	厚 0.6	重 2.6
28	加工痕のある剥片	075-570	黒色頁岩	長 7.0	幅 2.7	厚 1.5	重 21.6
29	加工痕のある剥片	090-570	黒色頁岩	長 3.7	幅 6.7	厚 2.2	重 56.2
30	打製石斧	-	細粒輝石安山岩	長12.3	幅 4.9	厚 1.5	重 136.2
31	打製石斧	080-570	変質安山岩	長 8.9	幅 3.9	厚 1.5	重 67.4
32	打製石斧	080-560	細粒輝石安山岩	長 9.4	幅 4.0	厚 1.4	重 65.6
33	打製石斧	090-575	変質玄武岩	長15.6	幅 6.9	厚 2.8	重 340.0
34	打製石斧	-	黒色頁岩	長15.8	幅11.3	厚 3.9	重 33.6
35	打製石斧	075-570	変質玄武岩	長10.6	幅 5.2	厚 2.0	重 130.5
36	打製石斧	090-575	細粒輝石安山岩	長 7.4	幅 5.2	厚 1.2	重 50.5
37	打製石斧	080-560	黒色頁岩	長11.0	幅 7.0	厚 1.9	重 185.9
38	打製石斧	-	黒色頁岩	長13.5	幅 7.0	厚 4.8	重 448.0
39	打製石斧	-	灰色安山岩	長11.3	幅 7.0	厚 1.9	重 143.8
40	打製石斧	085-575	硬質泥岩	長 7.7	幅 7.4	厚 2.5	重 181.8
41	打製石斧	085-570	細粒輝石安山岩	長 9.2	幅 6.1	厚 1.0	重 73.7
42	打製石斧	085-570	細粒輝石安山岩	長 4.2	幅 5.2	厚 1.5	重 36.6
43	打製石斧	-	黒色頁岩	長 5.3残	幅 4.1残	厚 1.0	重 26.2
44	打製石斧	085-560	珪質頁岩	長 4.9残	幅 4.9残		重 36.6
45	打製石斧	075-565	黒色頁岩	長 6.9	幅 4.2	厚 1.2	重 33.2
46	三角錐形石器	085-570	黒色頁岩	長 9.6	幅 4.7	厚 4.6	重 213.0
47	三角錐形石器	085-575	黒色安山岩	長10.5	幅 6.1	厚 4.7	重 295.0
48	スタンプ形	090-575	変質安山岩	長10.2	幅 8.8	厚 4.4	重 624.0
49	凹石	080-560	粗粒輝石安山岩	長 9.3	幅 8.5	厚 6.4	重 410.0
50	凹石	080-570	粗粒輝石安山岩	長10.2	幅 8.9	厚 3.6	重 406.0
51	凹石	090-575	粗粒輝石安山岩	長10.2	幅 8.2	厚 4.1	重 503.0
52	凹石	080-570	粗粒輝石安山岩	長 7.7残	幅 9.2残	厚 4.2	重 298.0
53	凹石	090-575	粗粒輝石安山岩	長11.0	幅 6.2	厚 2.5	重 303.0
54	磨石	080-570	粗粒輝石安山岩	長11.5	幅 9.7	厚 4.5	重 788.0
55	磨石	090-575	粗粒輝石安山岩	長 7.0	幅 6.6	厚 4.0	重 233.0
56	磨石	100-555	ひん岩	長10.5	幅 7.0	厚 5.3	重 676.0
57	磨石	070-570	粗粒輝石安山岩	長13.8残	幅 7.0	厚 3.8	重 475.0
58	敲石	100-555	石英閃緑岩	長11.5	幅 9.3	厚 4.2	重 661.0
59	敲石	085-560	粗粒輝石安山岩	長11.4	幅 9.8	厚 3.2	重 545.0
60	敲石	095-575	粗粒輝石安山岩	長14.3	幅 6.4	厚 5.9	重 843.0
61	敲石	100-555	粗粒輝石安山岩	長10.6	幅 4.4	厚 9.2	重 641.0
62	敲石	090-570	粗粒輝石安山岩	長10.3	幅 8.2	厚 4.2	重 586.0
63	敲石	095-570	粗粒輝石安山岩	長 9.2	幅 7.6	厚 4.2	重 408.0
64	敲石	085-570	石英閃緑岩	長 11.7	幅 6.4	厚 3.4	重 402.0
65	砥石	-	変玄武岩	長 7.2	幅 4.4	厚 1.3	重 80.0
66	石核(接合資料)	090-575	黒色頁岩	長10.6	幅10.0	厚 7.0	重 956.0
67	石核	090-575	黒色頁岩	長 6.9	幅10.8	厚 4.2	重 431.0
68	石核	085-575	黒色頁岩	長 6.7	幅12.9	厚 4.7	重 363.0
69	石核	075-570	黒色頁岩	長 7.1	幅 7.9	厚 3.1	重 217.0
70	石核	090-570	黒色頁岩	長 6.2	幅 8.5	厚 4.0	重 225.0
71	石核	090-570	黒色頁岩	長 5.6	幅 8.6	厚 3.7	重 190.0
72	石核	100-560	黒色頁岩	長 4.4	幅10.9	厚 3.1	重 153.4
73	石核	090-570	黒色頁岩	長 6.7	幅 6.1	厚 3.2	重 146.4
74	石核	085-575	黒色頁岩	長 4.3	幅 7.5	厚 4.5	重 157.0
75	石核	085-570	黒色頁岩	長 5.7	幅 7.5	厚 3.0	重 141.6
76	石核	085-565	黒色頁岩	長 5.8	幅 6.3	厚 2.6	重 111.6
77	石核	090-570	黒色頁岩	長 4.1	幅 8.1	厚 3.8	重 102.1
78	石核	100-555	粗粒輝石安山岩	長 5.7	幅10.2	厚 2.2	重 124.4
79	石核	085-565	赤碧玉	長 5.5	幅 5.4	厚 3.7	重 126.5
80	剥片(接合資料)	085-570	黒色安山岩	長 7.5	幅 4.0	厚 1.5	重 42.7
81	剥片(接合資料)	080-570	黒色頁岩	長 6.1	幅 9.2	厚 1.7	重 74.1

**(3) 遺構外出土遺物** (第122図、PL100)

諏訪ノ木V遺跡では、遺構に伴って出土したもので図化が可能な遺物については、それぞれの遺構ごとに掲載したが、これ以外にも多量の遺物の出土があった。この項であげる遺物は、上で述べた様な、どの遺構にも属さない遺構外出土遺物である。遺構外出土遺物の掲載は、遺構で出土した遺物より残存率のよいものを選択することを基本とした。

**縄紋土器**

1は田戸下層式である。篋状工具による沈線紋を横位、斜位に施紋する。2は早期前半に比定できようか。口縁部に1条の沈線を巡らし、沈線以下にLR縄紋をまばらに施紋する。3、4は関山I式。3は角頭状の口縁部破片で、半截竹管状工具による平行沈線を2条施す。4は集合沈線を斜格子状に施し、円形刺突、瘤状貼付紋を施す。5、6は関山II式。5はループ紋RL、LRによる羽状縄紋。6は直前段合摺による羽状縄紋を施紋する。7は黒浜式でRL縄紋に沈線を横位に巡らす。8～10は諸磯b式。8は口縁部破片で口唇直下から浮線紋を3条横位に施す。9はC字状爪形紋を横位、斜位に施す。10は端部結節RL縄紋を施紋する。11は諸磯c式。集合沈線を横位に施し、ボタン状貼付紋を付す。剥落しているが、縦位の貼付紋の痕跡も観察される。12は中期後半に比定できる縦位撚糸紋施紋土器である。13、14は加曾利E4式。ともに緩やかな波状口縁を呈し、13は沈線、14は稜により無紋部と

画し、RL縄紋を施紋する。13は波頂部下に突起を付す。15は後期初頭に比定しうる口縁部突起である。16、17は同一個体で称名寺I式に比定できよう。緩やかに外反する口縁部を呈し、刻みを付した隆線により口縁部無紋帯を画す。隆線以下は微隆起線による曲線紋様を施し、内外に列点を施す。18、19は堀之内1式。18は浅鉢の口縁部で、内面に隆線を貼付する。19は縦位、斜位の沈線と磨消縄紋で紋様を構成する。20は堀之内2式の口縁部破片。平行沈線間にLR縄紋を施紋する。21は加曾利B式の注口土器で、沈線による紋様意匠となる。

6、13、18、19は1区、1～5、7～11、14～17、20、21は2区、12は3区の遺構外からの出土である。

(橋本)

**弥生土器**

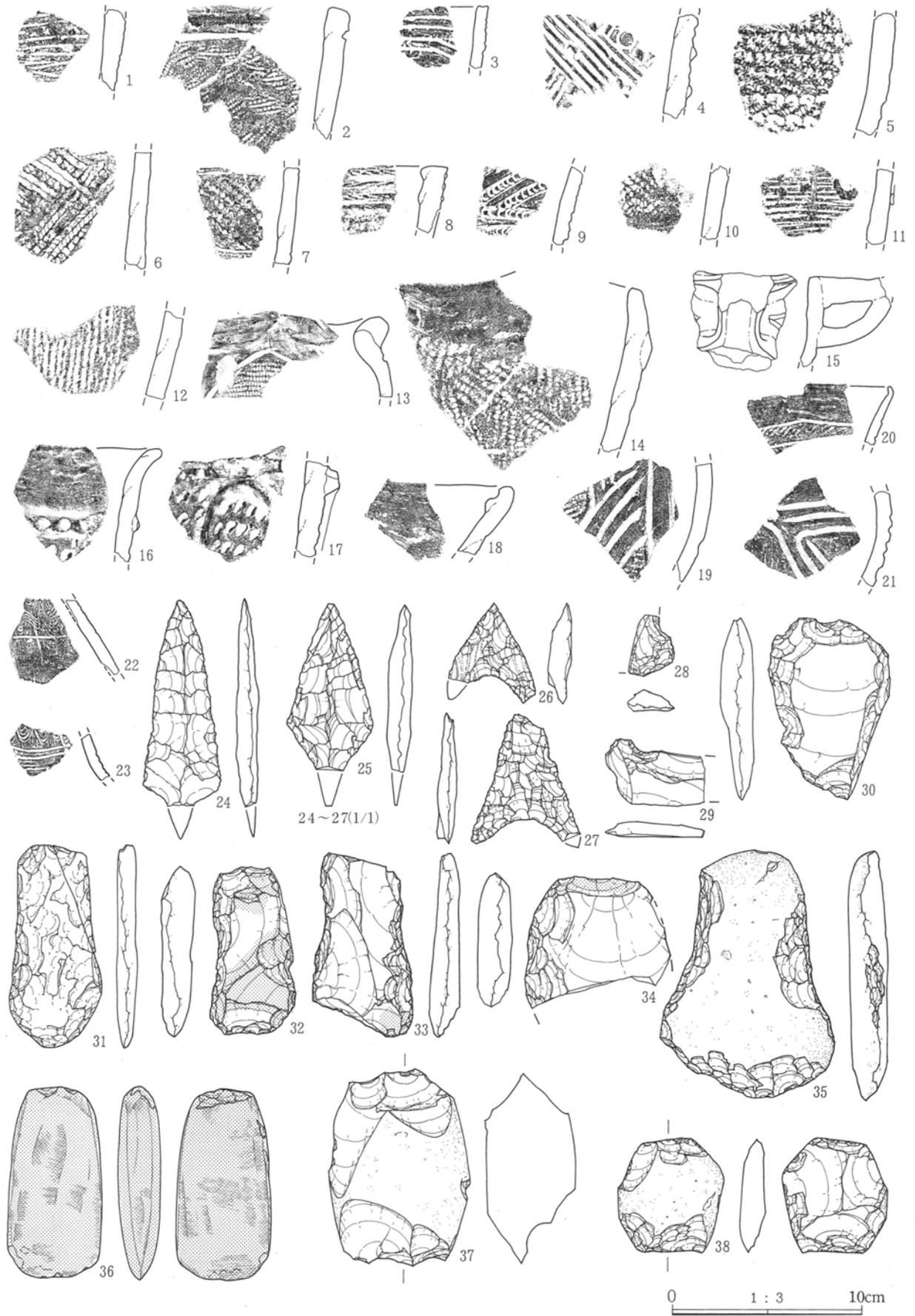
1は弥生土器の壺の頸部片である。細い沈線区画内に二段以上の櫛描波状文を施す。樽式に属するものであろう。2は弥生土器の壺の頸部片である。櫛描波状文の下に簾条文か横線文を施文する。整形は外面ハケメ、内面ミガキである。樽式に属するものであろう。1は1区、2は2区からの出土である。

**石器**

有舌尖頭器1点(1)、石鏃2点(2・3)、石匙2点(4・5)、削器1点(6)、楔形石器1点(7)、打製石斧5点(8～12)、磨製石斧1点(13)、石核1点(14)が出土した。計測値は下表参照。

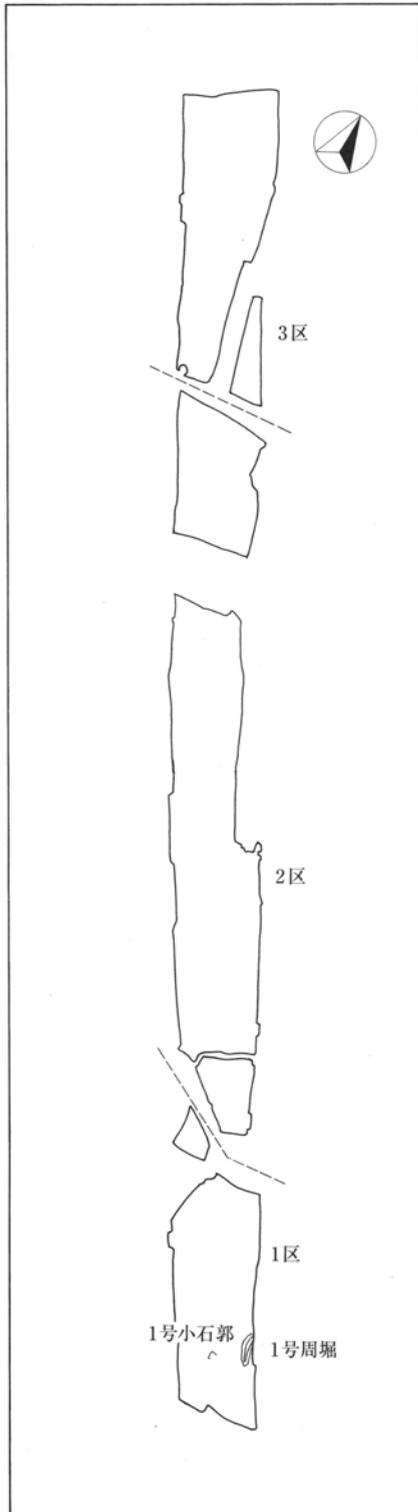
諏訪ノ木V遺跡 弥生時代以前遺構外出土石器類計測表

No.	種類・器種	出土位置	石材	計測値(単位 cm、g)			
				長	幅	厚	重
1	有舌尖頭器	3区遺構外	黒色頁岩	長 3.7残	幅 1.4	厚 0.4	重 1.83
2	石鏃	1区遺構外	黒曜石	長 1.8残	幅 1.5	厚 0.4	重 0.58
3	石鏃	2区遺構外	珪質頁岩	長 2.3残	幅 2.0	厚 0.35	重 0.92
4	石匙	2区遺構外	黒色安山岩	長 3.3	幅 2.4	厚 1.1	重 7.26
5	石匙	2区遺構外	黒曜石	長 3.6	幅 5.4	厚 0.85	重 13.26
6	削器	2区遺構外	黒色頁岩	長 9.7	幅 6.5	厚 1.8	重 112.8
7	楔形石器	2区遺構外	黒色頁岩	長 6.1	幅 5.7	厚 1.4	重 58.8
8	打製石器	1区遺構外	黒色頁岩	長10.9	幅 5.0	厚 1.1	重 72.8
9	打製石器	2区遺構外	黒色頁岩	長 9.0	幅 4.6	厚 1.85	重 84.5
10	打製石器	2区遺構外	黒色安山岩	長13.3	幅 9.3	厚 2.1	重 322.0
11	打製石器	2区遺構外	黒色頁岩	長 9.8	幅 5.4	厚 1.6	重 84.5
12	打製石器	2区遺構外	灰色安山岩	長 7.1残	幅 7.7残	厚 1.8	重 123.9
13	磨製石器	1区遺構外	変質蛇紋岩	長10.3	幅 5.1	厚 2.3	重 221.0
14	石核	1区遺構外	黒色頁岩	長10.5	幅 7.5	厚 4.8	重 493.0



第122図 諏訪ノ木V遺跡 弥生時代以前遺構外出土遺物図

## [2] 古墳時代の遺構と遺物



諏訪ノ木V遺跡 古墳時代の遺構

### 概要

諏訪ノ木V遺跡では、Hr-FA下の旧地表面1面と、Hr-FP降下以降の古墳の周堀1条、小石郭1基の古墳時代の遺構を検出した。

諏訪ノ木V遺跡の古墳時代の調査は、Hr-FP上面、Hr-FP下面、Hr-FA下面で行ったが、Hr-FP下面、Hr-FA下面では、遺構は検出されなかった。

Hr-FPは、谷地のみが残存であり、平坦地にはほとんどない。対してHr-FAは、厚さ30～120cmと遺跡全体に厚く残存している。Hr-FA直下の面はHr-FA降下時の様子をそのまま保存しているのである。



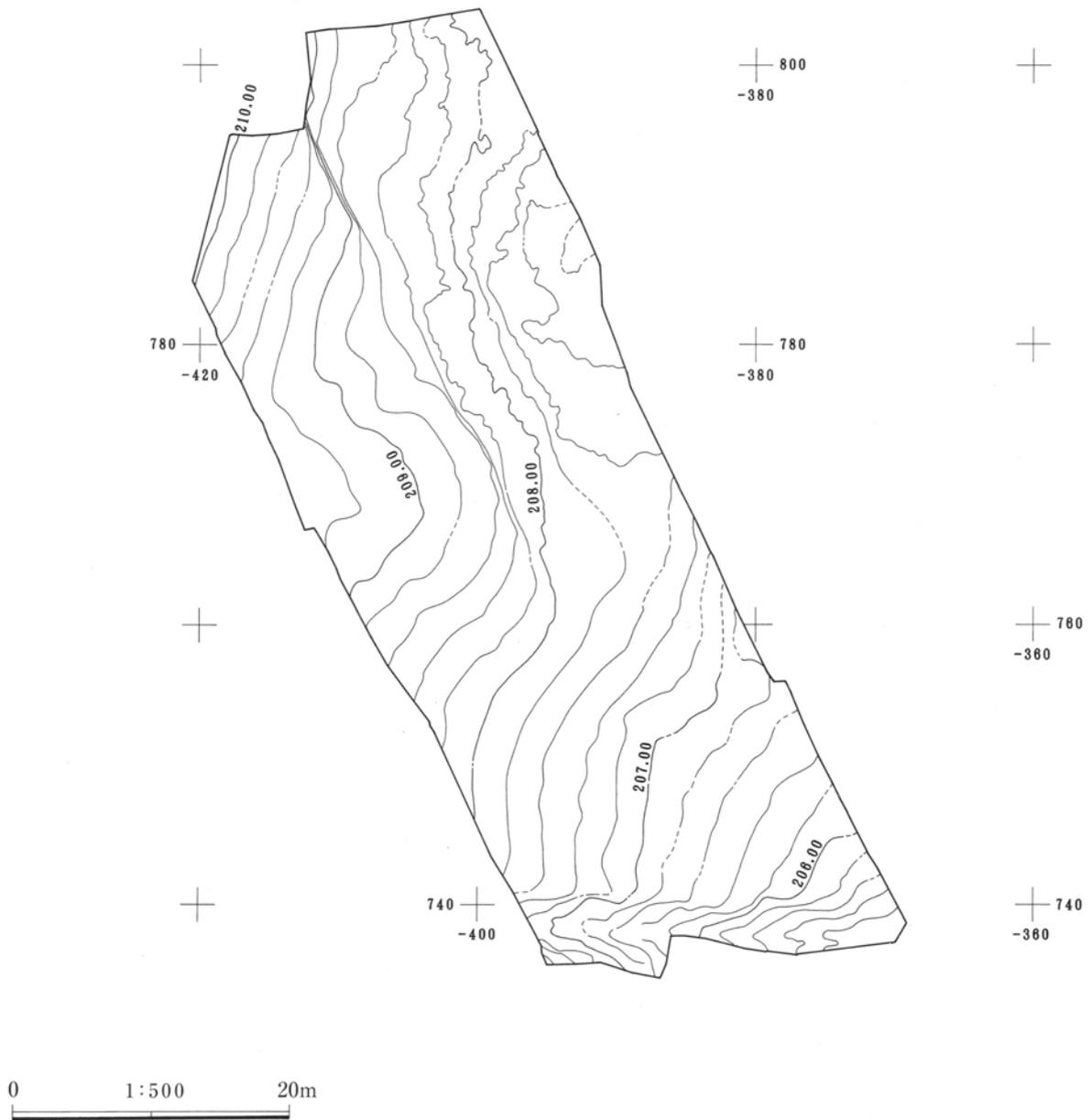
3区 Hr-FA 直下の面  
(壁面に見える最下層の明るい土層が Hr-FA)

(1) Hr - FA 下面 (第123~126図)

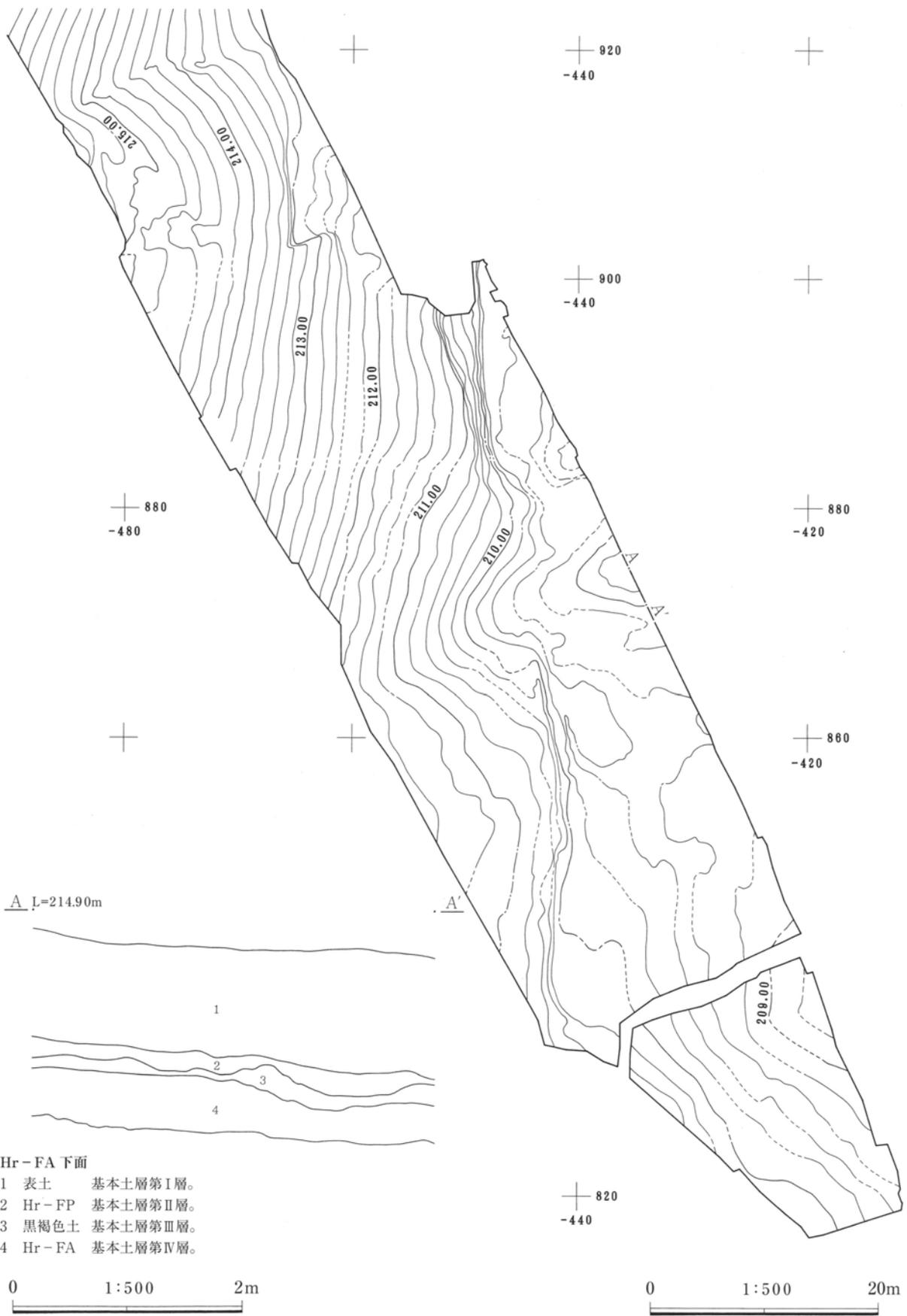
諏訪ノ木V遺跡では、Hr-FAが厚さ30~120cmと厚く残存していた。Hr-FA直下の面は、Hr-FAが厚く堆積したために後の攪拌の影響を受けていない。Hr-FA下は、火山災害当時がそのままパックされた所謂、旧地表面である。

諏訪ノ木V遺跡では、11,977㎡でHr-FA直下の調査を行った。

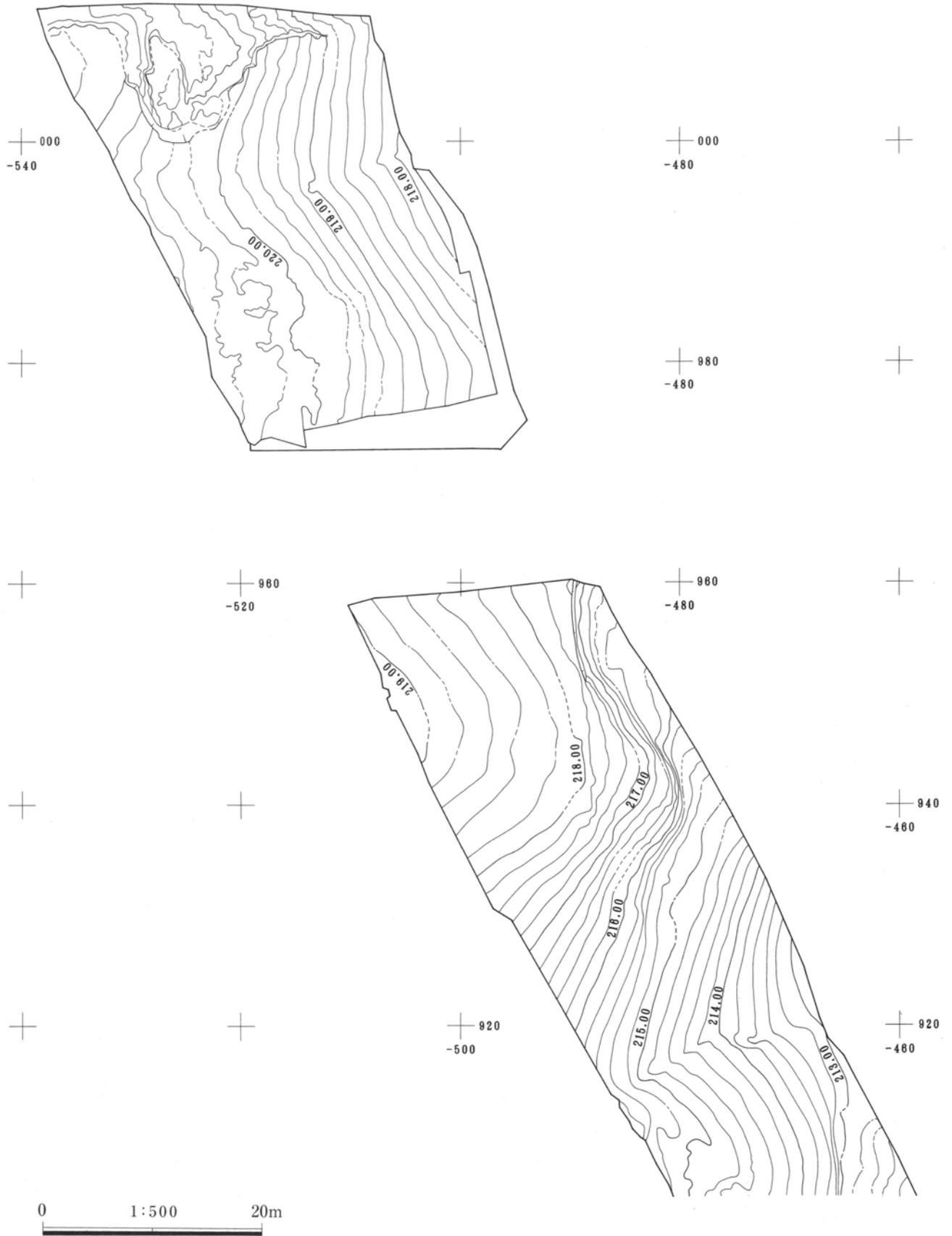
Hr-FA直下の面は、竪穴住居や土坑などの遺構が検出されなかった。現在の遺跡地周辺では、大きな樹木が生える雑木林も見られる。発掘調査では木の根の痕も検出されなかったことから、樹木が取り除かれ、畝作などを行っていた可能性も考えられる。畝などが検出できなかったことから、放置され、草地になっていた可能性も考えられる。



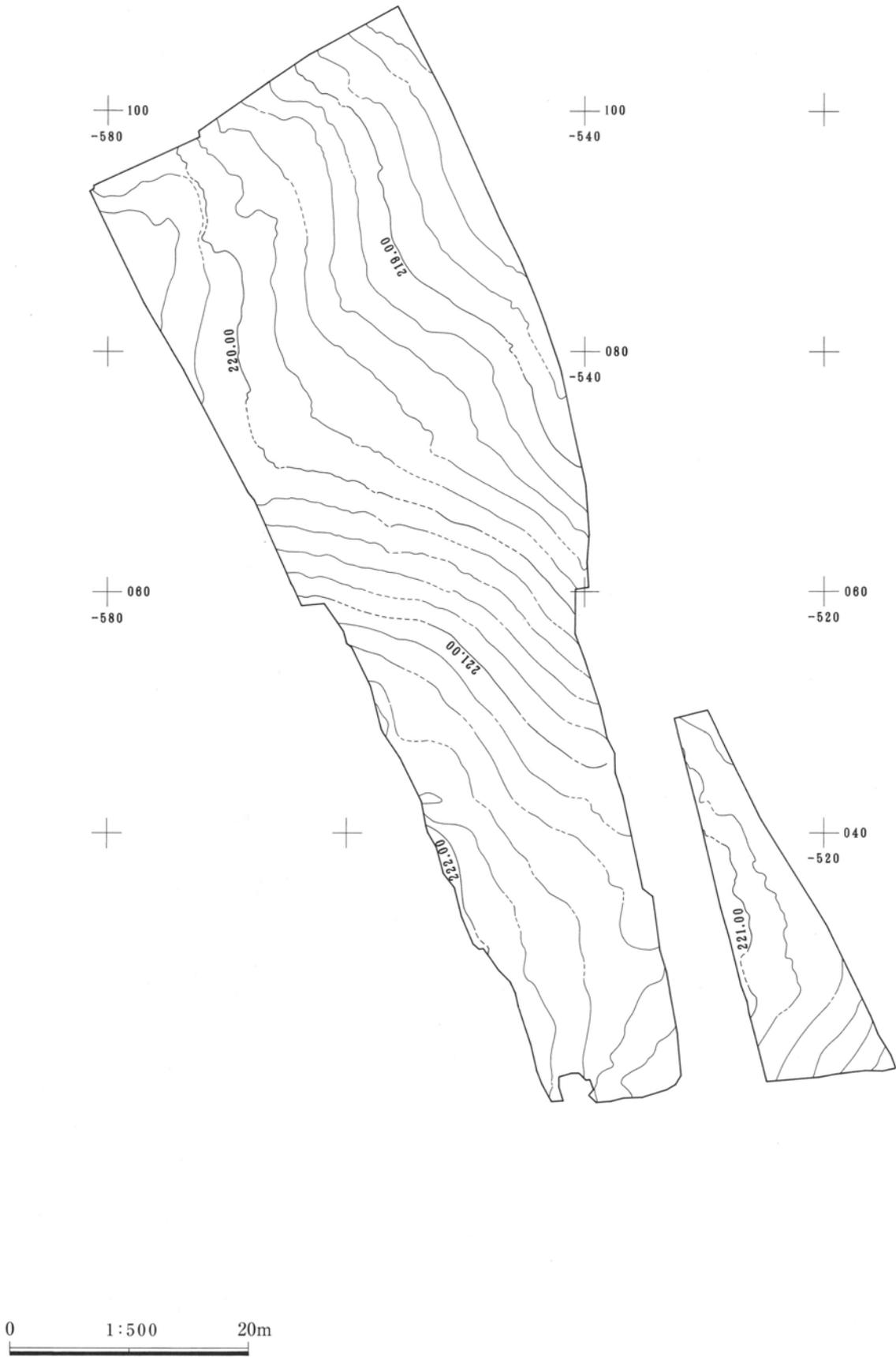
第123図 1区 Hr - FA 下面



第124図 2区(南) Hr-FA 下面



第125図 2区(北) Hr - FA 下面



第126図 3区 Hr-FA 下面

(2) 周堀・小石塚

諏訪ノ木V遺跡1区南端では、古墳の周堀と見られる堀と、小石塚が検出された。

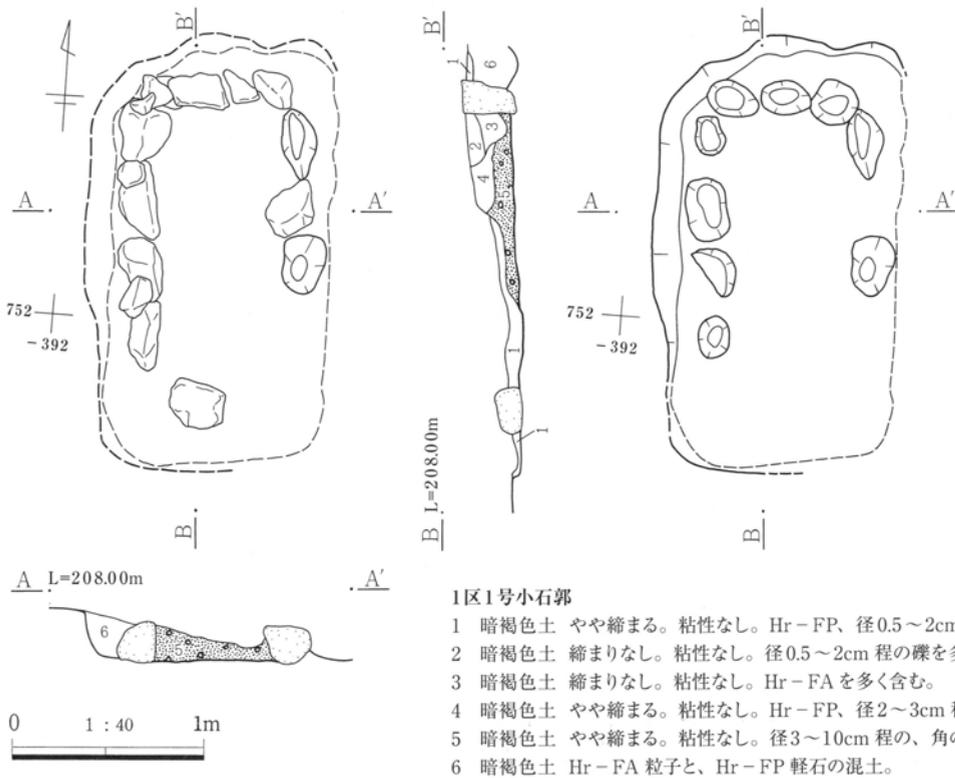
今回の調査で検出された古墳の周堀の主体部は1981年に渋川市教育委員会によって既に調査されており、『諏訪ノ木遺跡』（1981 渋川市教委）で報告されている。渋川市の調査以前、古墳主体部は、桑畑により完全に埋没していた。用石が抜き取られ、天井石、側石をはじめ古墳の上部は完全に破壊されていた。鉄製直刀1振（第129図）と玉類が地元の人によって採集され、諏訪ノ木の集会所に保管されていた。1981年の渋川市教育委員会の調査では、水晶製の切子玉、石製砥石、ガラス玉1点、ガラス小玉6点、鉄製耳環1点、鉄鏃、刀装具1点、クサビ形鉄製品1点、鋌状鉄製品1点など（第130図）が検出された。諏訪ノ木遺跡1号墳は、Hr-FPを掘削しており、6世紀後半以降に構築されたものと考えられている。主体部は、東南方向に開口する横穴式石室と確認されている。

1号周堀（第128図）

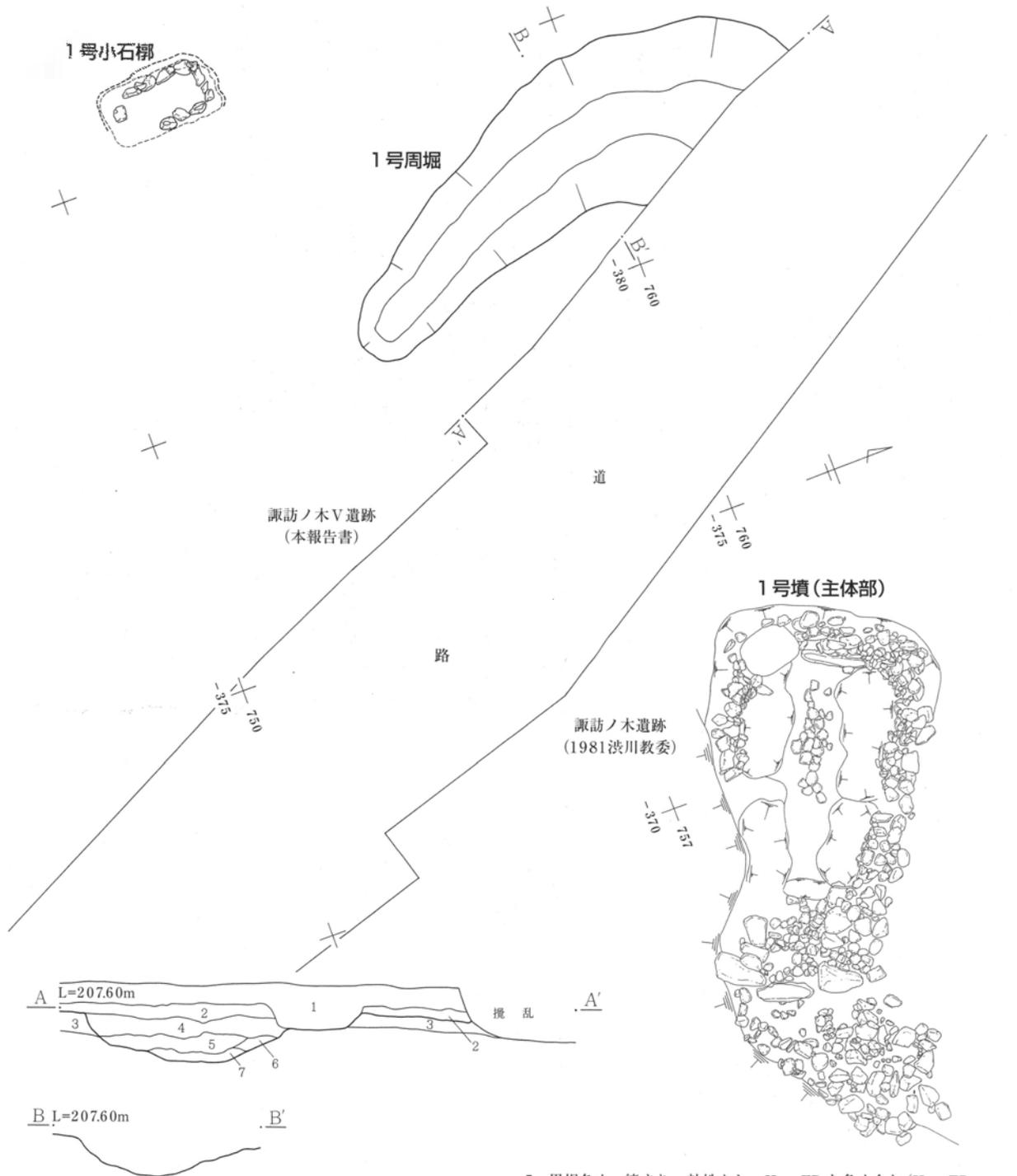
周堀は、諏訪ノ木V遺跡1区南部で検出された。760-380グリッドに位置する。規模は上幅最大3.23m、下幅約1.3m、確認面からの最大深92cmを測る。周堀の断面は皿状を呈し、埋土にはHr-FPや、Hr-FAが含まれていた。出土遺物はないが、Hr-FA混土を掘削しており、6世紀後半以降に構築されたものと考えられる。

1号小石塚（第127図、PL51）

小石塚は、1号周堀の東で検出された。752-392グリッドに位置する。規模は、長軸1.88m、短軸1.04mの南北に長い隅丸方形を呈する。遺構確認面から最大深30.5cmを測る。断面形は皿状を呈し、床面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。掘り方の8cm-24cm入ったところに側壁の石が見られ、側壁内面の規模は1.46m×0.58mの隅丸方形を呈するものである。1層から5層が埋没土である。6層は側壁を設置する際の埋め土である。出土遺物はないが、Hr-FP混土を掘削しており、6世紀後半以降に構築されたものと考えられる。



第127図 1号小石塚平面・断面図



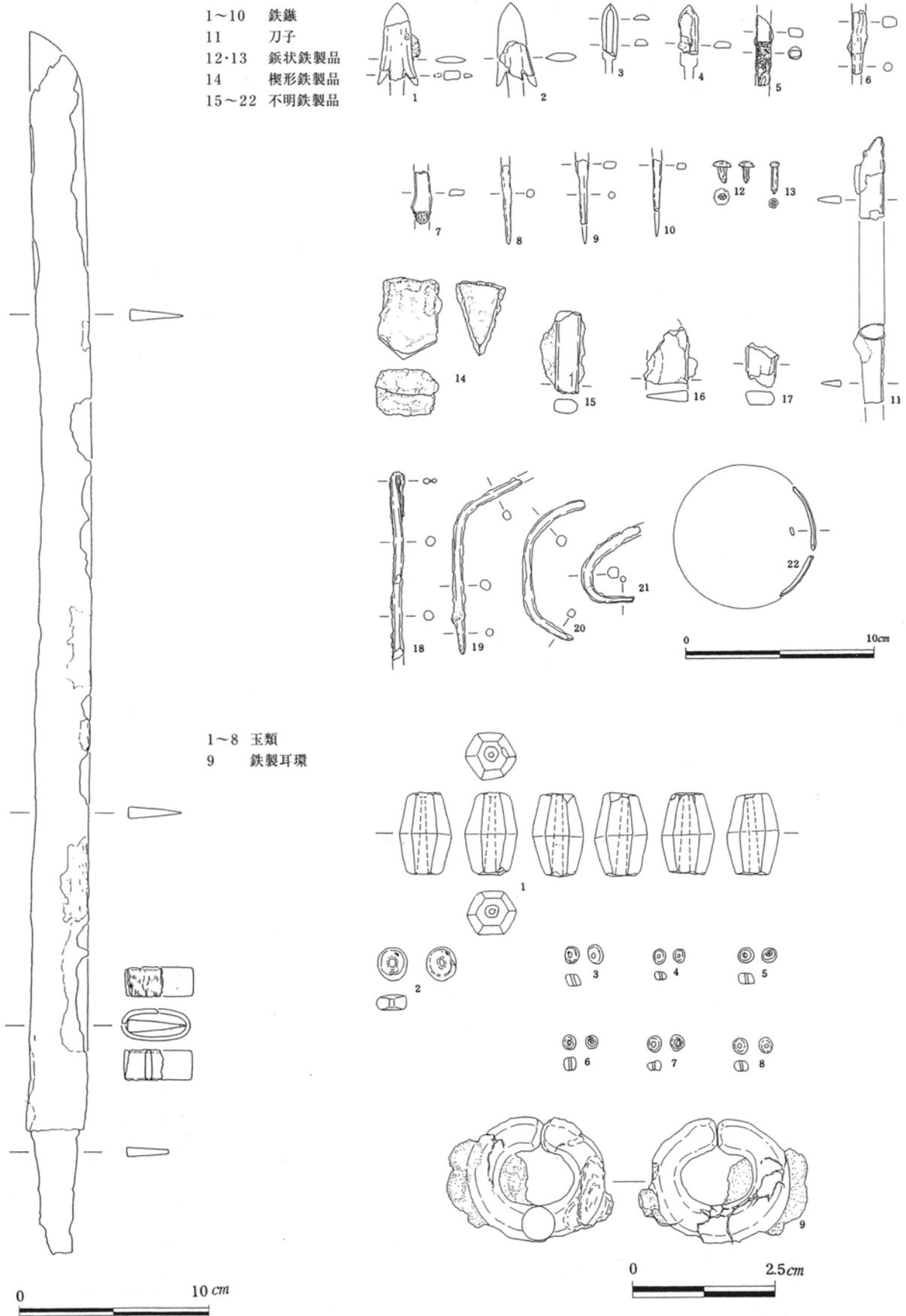
1区1号周堀

- 1 暗褐色土 締まり、粘性なし、表土。
- 2 黒褐色土 やや締まり、粘性なし、Hr-FPを多く含む。(径0.2~1cm程度)
- 3 褐色土 やや締まり、やや粘性あり、Hr-FA、Hr-FPを多く含む。
- 4 褐色土 締まり、粘性なし、Hr-FA、Hr-FPを多く含む。(Hr-FPの径は0.2~1cm程度のものが多いが、10cm程のものも多くある。)

- 5 黒褐色土 締まり、粘性なし、Hr-FPを多く含む(Hr-FPの径は0.2~1cm程度のものが多いが、10cm程のものも多くある。各層に比べて、径の大きいHr-FPが最も多い。)
- 6 暗褐色土 やや締まり、やや粘性あり、径0.2~1cm程のHr-FPが多い。Hr-FA粒が最も多く、周堀埋土中では最も締まりがある。
- 7 暗褐色土 やや締まり、やや粘性あり、Hr-FPはあまり無い。Hr-FA粒が多い。

0 1:120 5m

第128図 1号周堀平面・断面図と周辺の遺構



第129図 諏訪ノ木集会所に保存されていた直刀と刀装具  
 (1981『諏訪ノ木遺跡』渋川市教委)

第130図 諏訪ノ木遺跡1号墳出土の鉄製品と玉類  
 (1981『諏訪ノ木遺跡』渋川市教委)

### [3] 奈良・平安時代の遺構と遺物

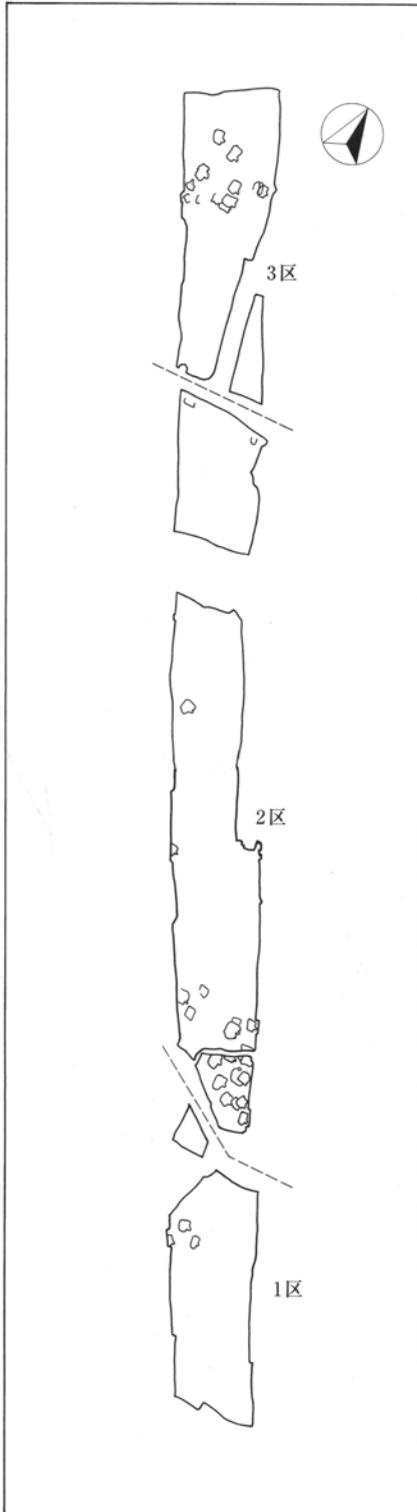
#### 概要

本遺跡の奈良・平安時代の遺構は、住居40軒、  
 竪穴状遺構2基、土坑1基である。住居40軒は、7  
 世紀後半から10世紀後半に帰属する。

諏訪ノ木V遺跡では、鉄関連遺物が数多く出土し  
 た。鉄関連遺物が出土した遺構に1区2、3号住居、  
 2区3、6、7、10、11、13、18、21、23、26号住居、  
 3区1、4、5、7、9、10、12号住居、2区1号土坑が  
 ある。遺構は8世紀前半から10世紀後半と幅広い。  
 特出すべき遺構に、9世紀後半に比定される1区3  
 号住居と10世紀後半に比定される3区7号住居が  
 ある。1区3号住居からは、ほぼ完形の鉄製紡錘車、  
 錐、締め金具、鍵といった鉄製品や、椀形鍛冶滓、  
 鉄塊、鉄床石などが出土し、鍛冶炉の可能性のある  
 遺構が検出された。本遺構の遺物を観察した穴澤  
 義功氏によると、遺構の中で精錬鍛冶の最終段階か  
 ら鍛錬鍛冶を行っていた可能性が考えられるとのこ  
 とである。3区7号住居からは、釘やU字状の鉄製  
 品や、鍛造剥片、椀形鍛冶滓、羽口などが出土し、  
 精錬鍛冶炉の可能性のある遺構が検出された。本遺  
 構の遺物を観察した穴澤氏によると、精錬鍛冶的な  
 要素が強く、10世紀後半代の鍛冶のあり方を読みと  
 ることが出来る一括資料群であるとのことである。

また、竪穴住居には住居の竈を構築する際に、切  
 り出した二ツ岳石を使用する特徴が見られる。二ツ  
 岳石には切り出して加工した際の工具痕が観察でき  
 る。二ツ岳石の竈構築材としての利用は2区25号  
 住居の出土例からわかる様に7世紀後半代には既に  
 見られ、3区4号住居に代表される10世紀後半代の  
 竈にまで残る。1区2号住居は特に二ツ岳石を利用  
 した竈の残存が良好で、焚口部がほぼ完存する。

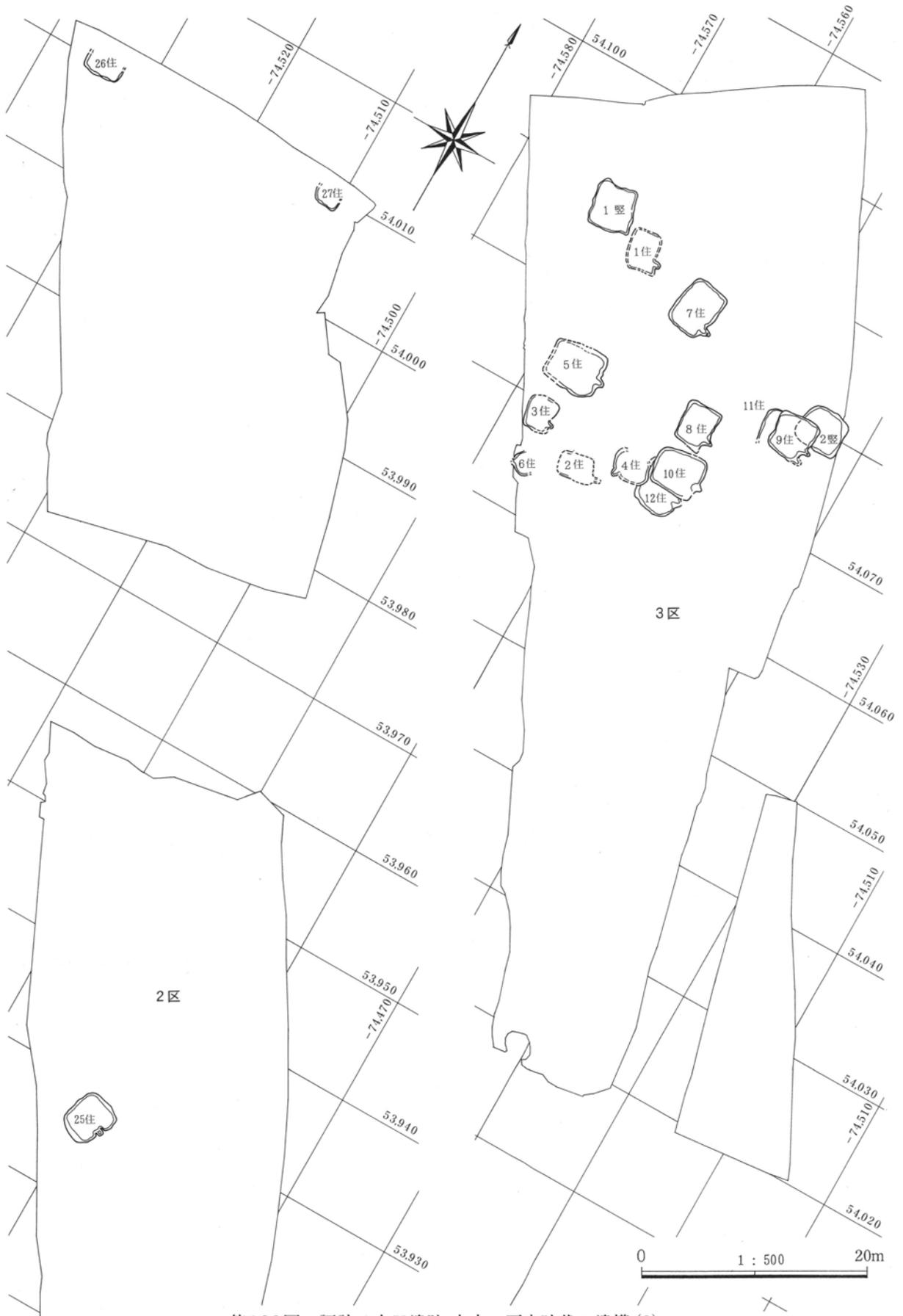
羽釜は10世紀代を代表する上野地域の煮炊具で  
 あるが、その器形・整形などでいくつかの型が設定  
 されている。本遺跡からはその中で吉井型、月夜野  
 型が見られ、2区10号住居の様にそれぞれが共伴し  
 ている例も見られる。



諏訪ノ木V遺跡 奈良・平安時代の遺構



第131図 諏訪ノ木V遺跡 奈良・平安時代の遺構(1)



第132図 諏訪ノ木V遺跡 奈良・平安時代の遺構 (2)

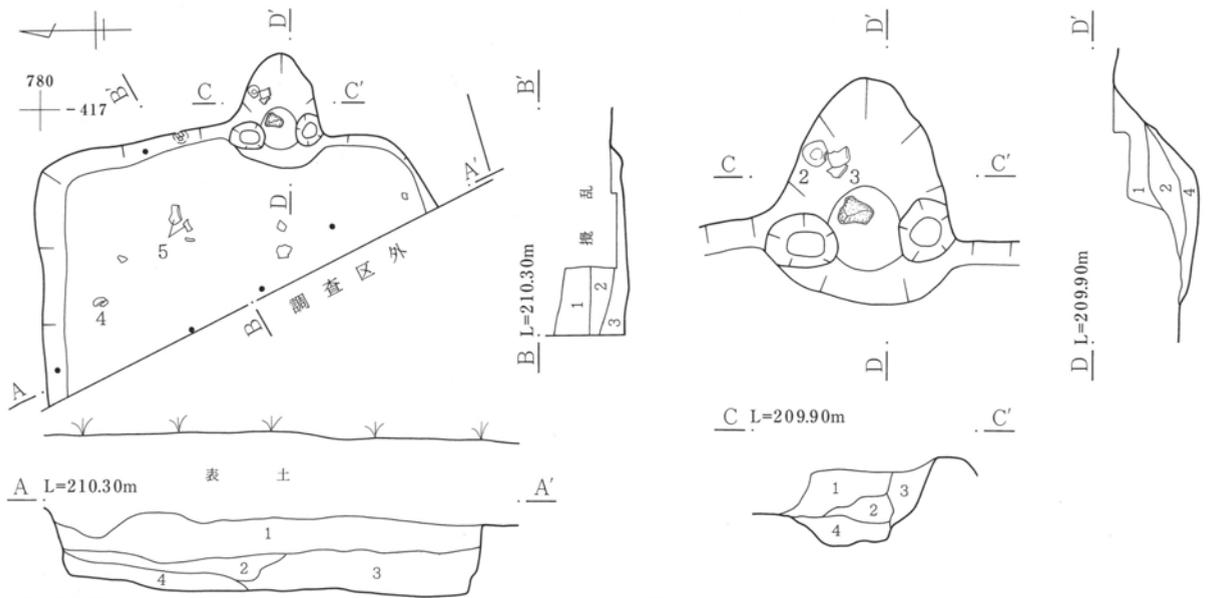
(1) 竪穴住居

1区1号住居(第133図、PL52・101)

位置 780-417 方位 N-90°-E 形状 住居の西部分が調査区域外になるため、全形は確認できなかった。面積 測定不可能。壁高 35cm 重複なし 床面 掘り方面を床面とする。床面は堅く締まっていた。壁溝 確認できなかった。柱穴 確認できなかった。貯蔵穴 確認できなかった。竈 焚口の両脇に袖石が設置されていたと思われる窪みが検

出された。燃烧部は幅58cm、奥行き67cm。遺物 竈から須恵器椀、土師器甕、床直から土師器甕、埋土から須恵器杯、椀、黒色土器椀、土師器甕が出土した。実測可能な遺物が5個体ある。

所見 本住居の時期は、出土遺物より9世紀第4四半期に比定される。



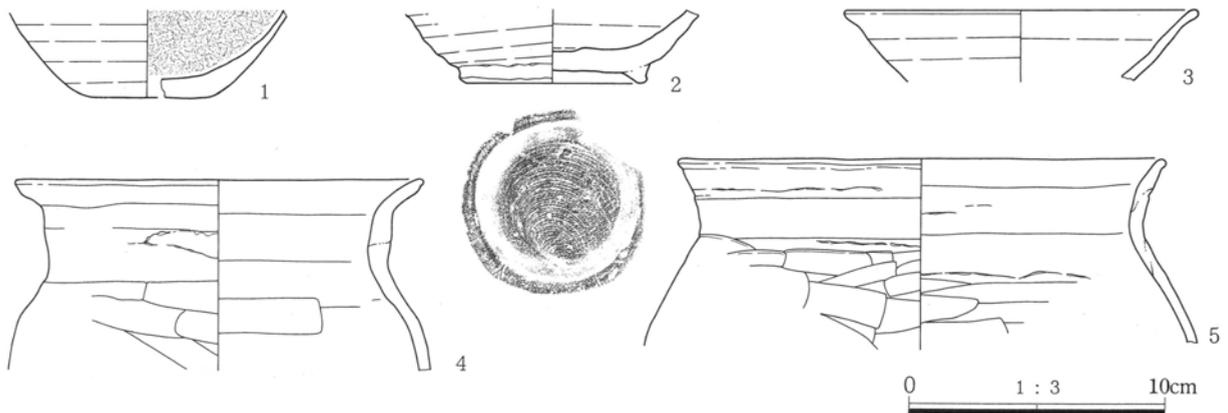
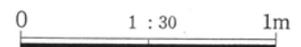
1区1号住居

- 1 暗褐色土 多量のHr-FP、少量のHr-FAブロックを含む。
- 2 黄褐色土 多量のHr-FP、多量のHr-FAを含む。
- 3 暗褐色土 多量のHr-FP、Hr-FA、炭化物粒、焼土粒を含む。
- 4 暗褐色土 多量のHr-FP、黒褐色ブロックを含む。



1区1号住居 竈

- 1 暗褐色土 多量のHr-FP、少量の炭化物粒を含む。
- 2 暗褐色土 多量のHr-FP、多量の炭化物粒・焼土粒を含む。
- 3 暗褐色土 多量のHr-FPを含む。粘性・締まりあり。(壁材の崩落か)
- 4 暗褐色土 Hr-FAブロック、少量のHr-FPを含む。



第133図 1区1号住居・竈 平面・断面図、出土遺物図

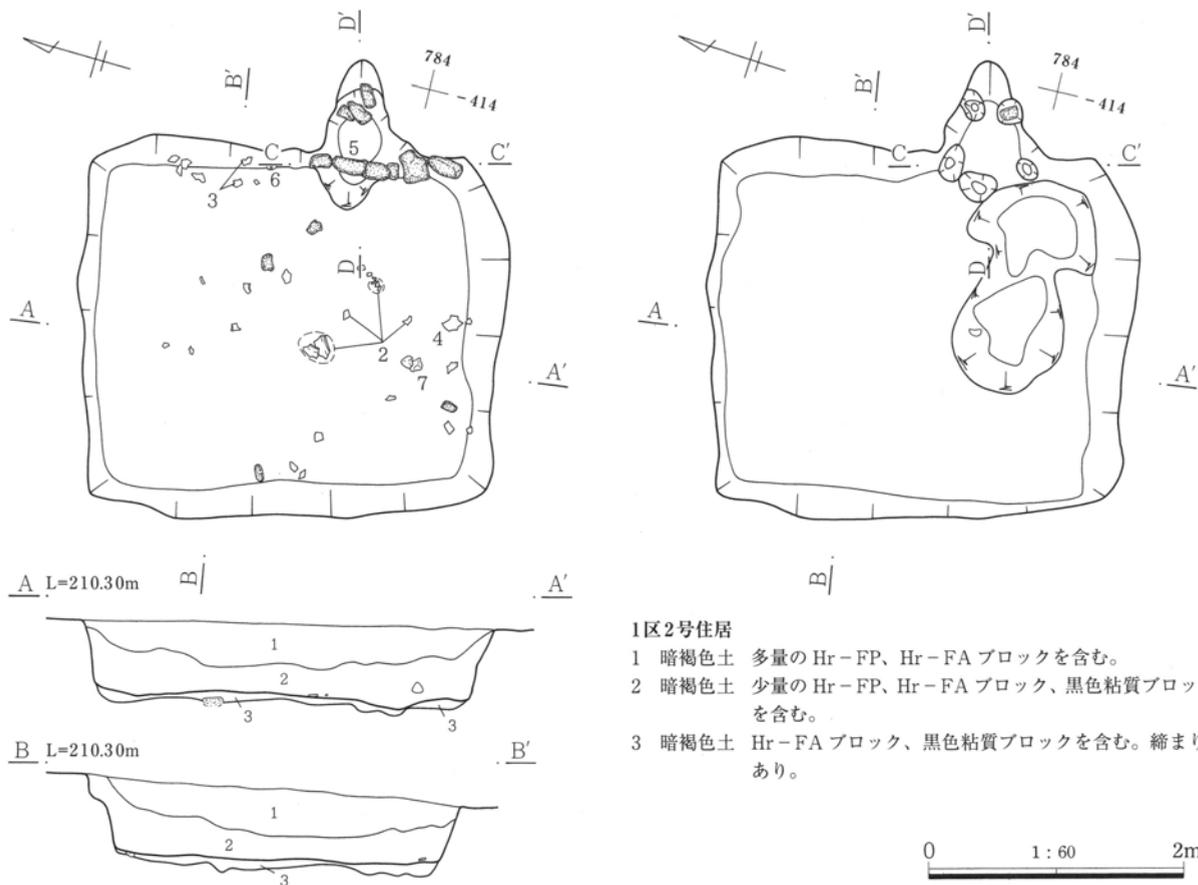
1区1号住居出土遺物観察表

No.	挿図 No. 図版 No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
1	第133図 PL-101	黒色土器 椀	埋土 体～底部1/4	口 - 高 3.5 残 底 (5.0) 高台 -	①砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。内外面黒色処理、外面の黒色は磨滅。
2	第133図 PL-101	須恵器 椀	カマド 体～底部	口 - 高 2.9 残 底 7.5 高台 7.3	①粗砂 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。
3	第133図 PL-101	須恵器 杯・椀	+10 口～体部1/6	口 (14.0) 高 2.8 残 底 - 高台 -	①砂粒 ②還元焰 ③灰色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。
4	第133図 PL-101	土師器 甕	+30 口～肩部片	口 (16.0) 高 7.6 残 底 -	①砂粒 ②良好 ③明褐色	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。
5	第133図 PL-101	土師器 甕	床直 口～肩部1/4	口 (19.2) 高 7.3 残 底 -	①砂粒 ②良好 ③褐色	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。

1区2号住居(第134～136図、PL53・101)

位置 784-414 方位 N-79°-E 形状 長軸 3.40m・短軸2.90mで長軸を南北にもつ長方形である。面積 7.44㎡ 壁高 56cm 重複なし 床面 掘り方面から厚さ7cmの埋め土を施して平坦な面を造る。床面は凹凸なく、平坦で整っている。掘り方面は、住居南東が深く掘り込まれていた。壁溝なし 柱穴 確認できなかった。貯蔵穴 確認できなかった。掘り方面で検出された南東角の掘り込みが

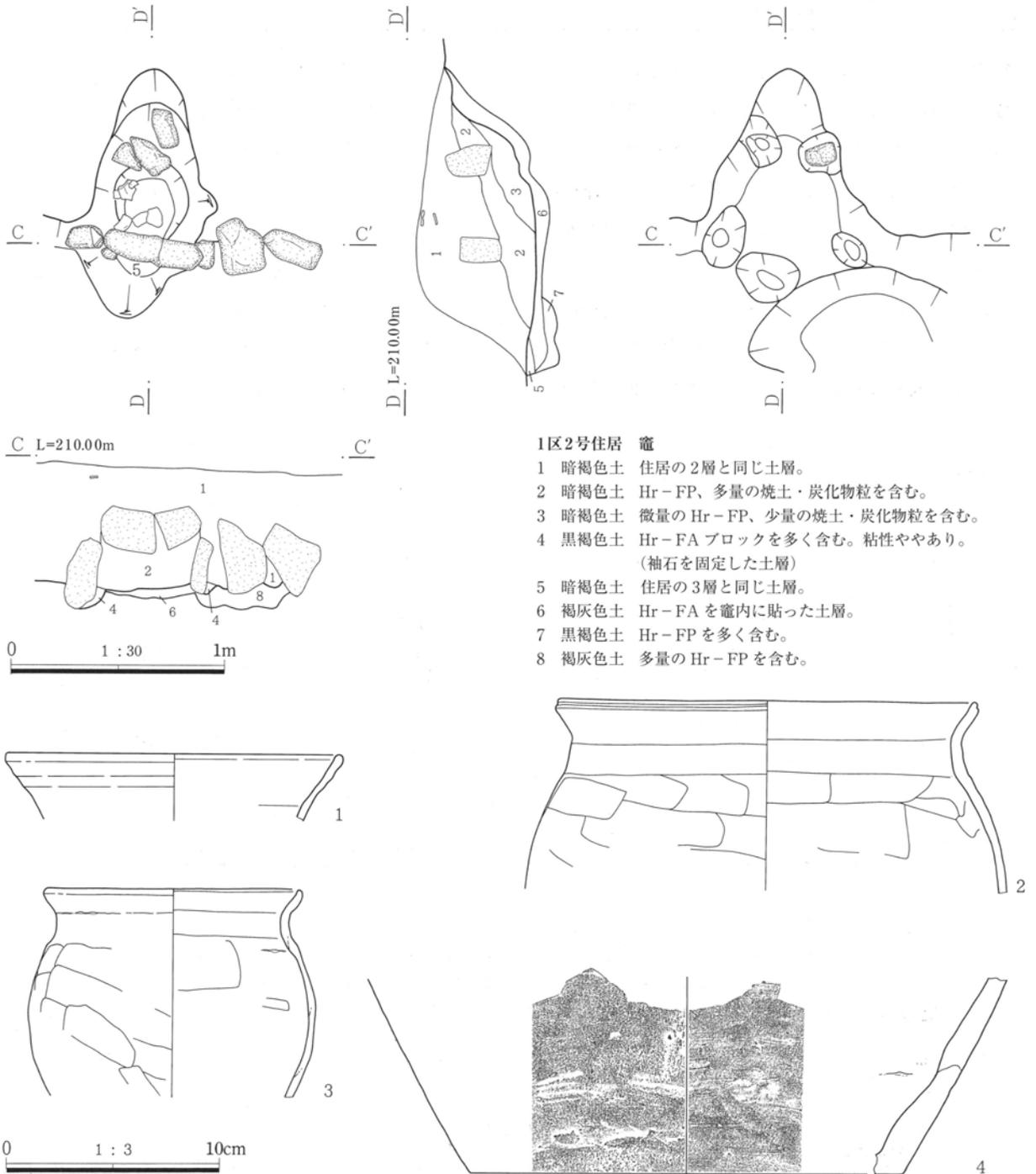
貯蔵穴であった可能性もある。竈 東壁の南側に設置。袖や天井の補強用の礫、支脚が設置した状態で残存。支脚・袖は縦長の加工痕のない安山岩、焚口天井部は加工痕のある二ツ岳石を使用している。燃烧部は幅35cm、奥行き74cm。焚口は幅44cm、高さ22cmである。煙道は幅27cm、奥行き12cmで緩やかに立ち上がる。遺物 床直から土師器小型甕、甕、埋土から須恵器杯、椀、甕、灰釉陶器、鍛造の管状鉄製品、椀形鍛冶滓、竈から所謂「コ」の字口



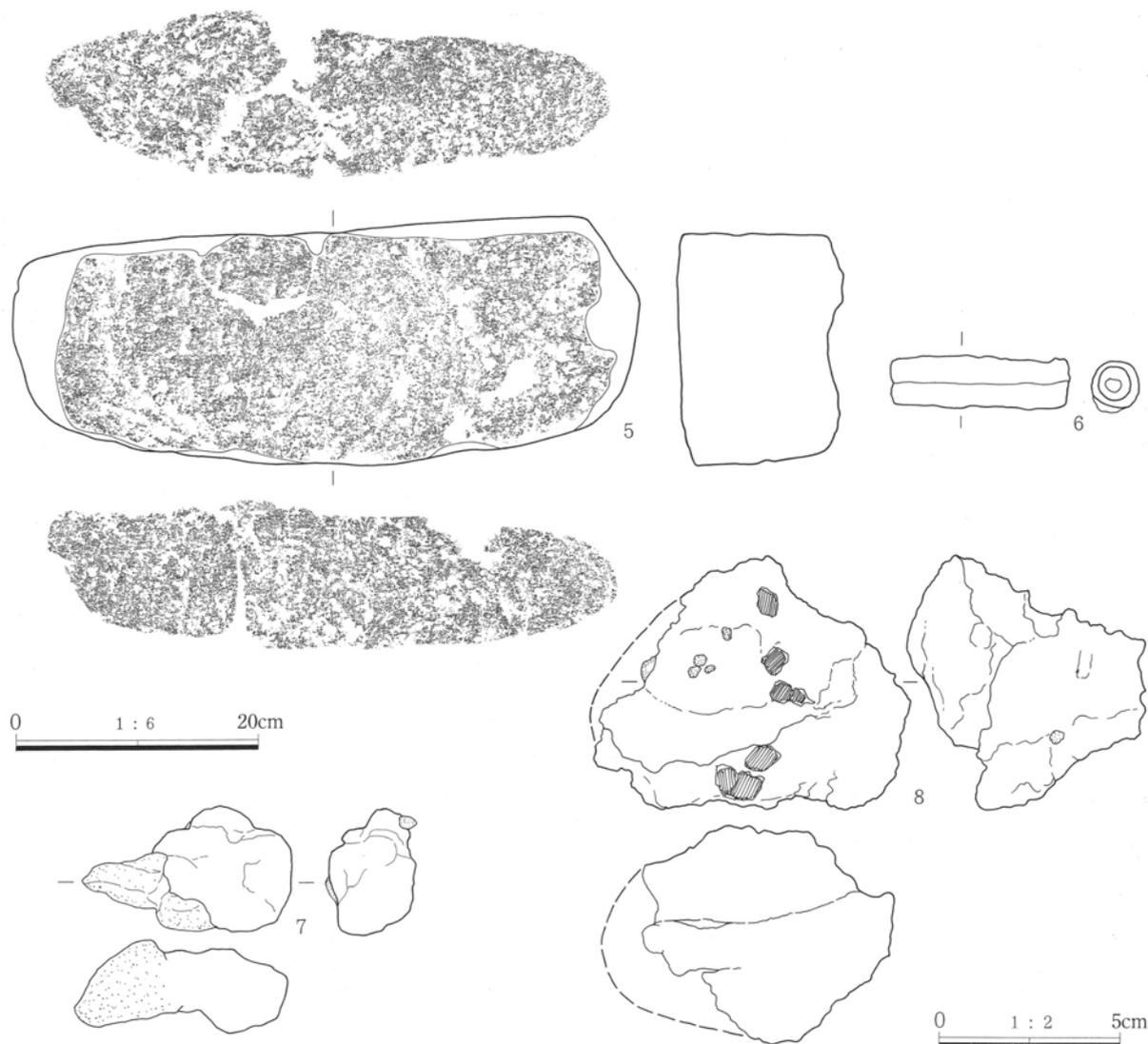
第134図 1区2号住居・掘り方 平面・断面図

縁の甕、鍛冶滓が出土した。実測可能な遺物が8個体ある。所見 竈の焚口部が良好な状態で検出された。焚口幅・高さを推定する好資料である。本遺構から鍛冶工房に関連する施設は検出されなかった。埋土中から鍛造の管状鉄製品、椀形鍛冶滓、鍛冶滓が出土したが、本遺構と直接関わりを持つ遺物ではなく、他遺構から混入した可能性が高い。竈右袖脇

から出土した礫2点は、床直上から出土したが、床面に設置した痕は確認されなかった。住居廃絶時に混入したか、竈上部を構築していた礫が崩落した可能性が高い。本住居の時期は、出土遺物より9世紀第4四半期に比定される。



第135図 1区2号住居竈平面・断面図、出土遺物図(1)



第136図 1区2号住居出土遺物図(2)

1区2号住居出土遺物観察表

No.	挿図No. 図版No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
1	第135図 PL-101	須恵器 杯・椀	埋土 口縁	口(16.0)高3.1 底-	①砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。内外面の色調の違いは焼成時の重ね焼き痕か。
2	第135図 PL-101	土師器 甕	床直 口~肩部2/3	口19.9 高9.0 底-	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。
3	第135図 PL-101	土師器 小型甕	床直 口~肩部1/6	口(12.2)高9.8 底-	①砂粒 ②良好 ③褐色	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。
4	第135図 PL-101	須恵器 甕	+29 胴下~底1/6	口- 高9.3 底(20.2)	①砂粒 ②還元焰 ③灰色	やや硬質。器肉厚い。内面横ナデ、外面ナデ。
5	第136図 PL-101	竈構築材 天井石	カマド	長51.4 幅19.2 厚13.8 重16.1kg	二ツ岳石(石材)	4面加工面、2面自然面の竈構築材。被熱痕のある面1面(下面)。
No.	挿図No. 図版No.	遺物名	①重②磁③メ	出土位置 計測値(cm)	特徴など	
6	第136図 PL-101	鉄製品 鍛造品 管状	①21.6g ②6 ③特L(☆)	+14 長5.0 幅1.4 厚0.2	厚さ1.5mm程の薄板を管状に折り曲げて成形した鉄製品。外面には重ねの部分が直線状に残されている。完形品で、表面の一部が僅かに剥離している程度である。長軸方向に向かい筋状の放射割れが発達し始めている。内径は8mmを測る。孔部は貫通しているが、内部に土砂が残ったまま保存処理がなされているため、見かけ以上に重量がある。用途としては工具等の締め具であろうか。	

①重量②磁着度③メタル度

No.	挿図 No. 図版 No.	種別 器種	①重②磁③メ	出土位置 計測値 (cm)	特徴など
7	第136図 PL-101	鍛冶滓 (極小、含鉄)	①325 g ②4 ③H (○)	カマド 長径5.7 短径3.4 厚2.6	左側の側面に軽石片が固着した含鉄の鍛冶滓片。滓は小振りの椀形で、右側へ90°程倒れた形となっている。従って、本来の上面は現在の右側面となる。左側の下面は浅い皿状である。中核部には含鉄部がやや広がりを持って残されている。極小の含鉄の椀形鍛冶滓の可能性も残る。
8	第136図 PL-101	椀形鍛冶滓 (小、含鉄、 重層)	①359 g ②7 ③H (○)	+10 長径8.8 短径7.1 厚6.3	不定形な形状をした重層ぎみの含鉄の椀形鍛冶滓。上下面や側面が部分的に生きており、上面の滓の左側側部が破面となっている。滓は上中下の三層からなっており、下手側の2面の滓の下面は粉炭痕を残す椀形滓の下面となっている。逆に浅い皿状の上面は上半の2面のみに認められる。この上面にも粉炭痕が全面に残されている。滓は緻密で、気孔はやや少ない。滓質は上中下共に大差ない様に見えるが、磁着は上面に向かって順次強くなる。

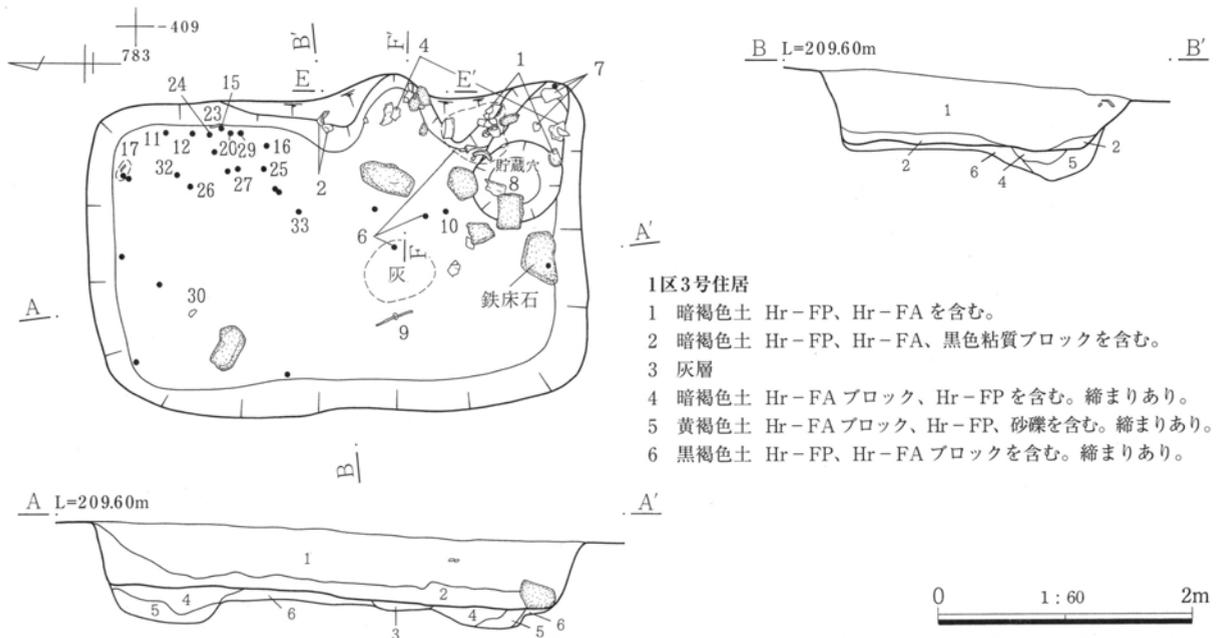
①重量②磁着度③メタル度

1区3号住居 (第137～140図、PL54・55・101・102)

位置 783-409 方位 N-87°-E 形状 長軸3.91m・短軸2.47mで長軸を南北にもつ長方形である。面積 6.87㎡ 壁高 59cm 重複 なし 床面掘り方面から厚さ22cmの埋め土を施して平坦な面を造る。床面は凹凸なく、平坦で整っている。住居中央やや南で灰層が検出された。灰層の下は土坑状に掘り窪められていた。底部は還元状態であったとの調査所見を得た。掘り方面は中央部分が高く、竈周辺から南壁にかけてと、北壁周辺が大きく窪む。壁溝 確認できなかった。柱穴 確認できなかった。貯蔵穴 住居の南東隅に設置。住居南東角の壁を大きくえぐる特殊な構造である。深さ19cm、長軸68cm、短軸64cmの楕円形を呈す。埋土に焼土粒・

炭化物粒・Hr-FAブロックを含む。竈 東壁の中央よりやや南側に設置。燃烧部は幅44cm、奥行き48cmで、壁内に袖部を検出。遺物 床直から鉄製の紡錘車、鉄床用台石、土師器杯、須恵器杯、土師器甕、床直や埋土から多数の鉄製品、椀形鍛冶滓、含鉄鉄滓、鍛冶滓、埋土から須恵器杯、須恵器椀、竈内から土師器甕が出土した。鉄床用の台石は、打痕や被熱痕、鉄の付着が認められ、南壁際に据えてある状態で出土した。鉄製紡錘車は円盤も軸も良好に残存するほぼ完形品である。以下に鉄関連遺物からみた穴澤氏による所見を掲載する。

3号住居の遺物構成は、不定形な含鉄鉄滓と、小形の椀形鍛冶滓の破片、さらに極小形の椀形鍛冶滓、

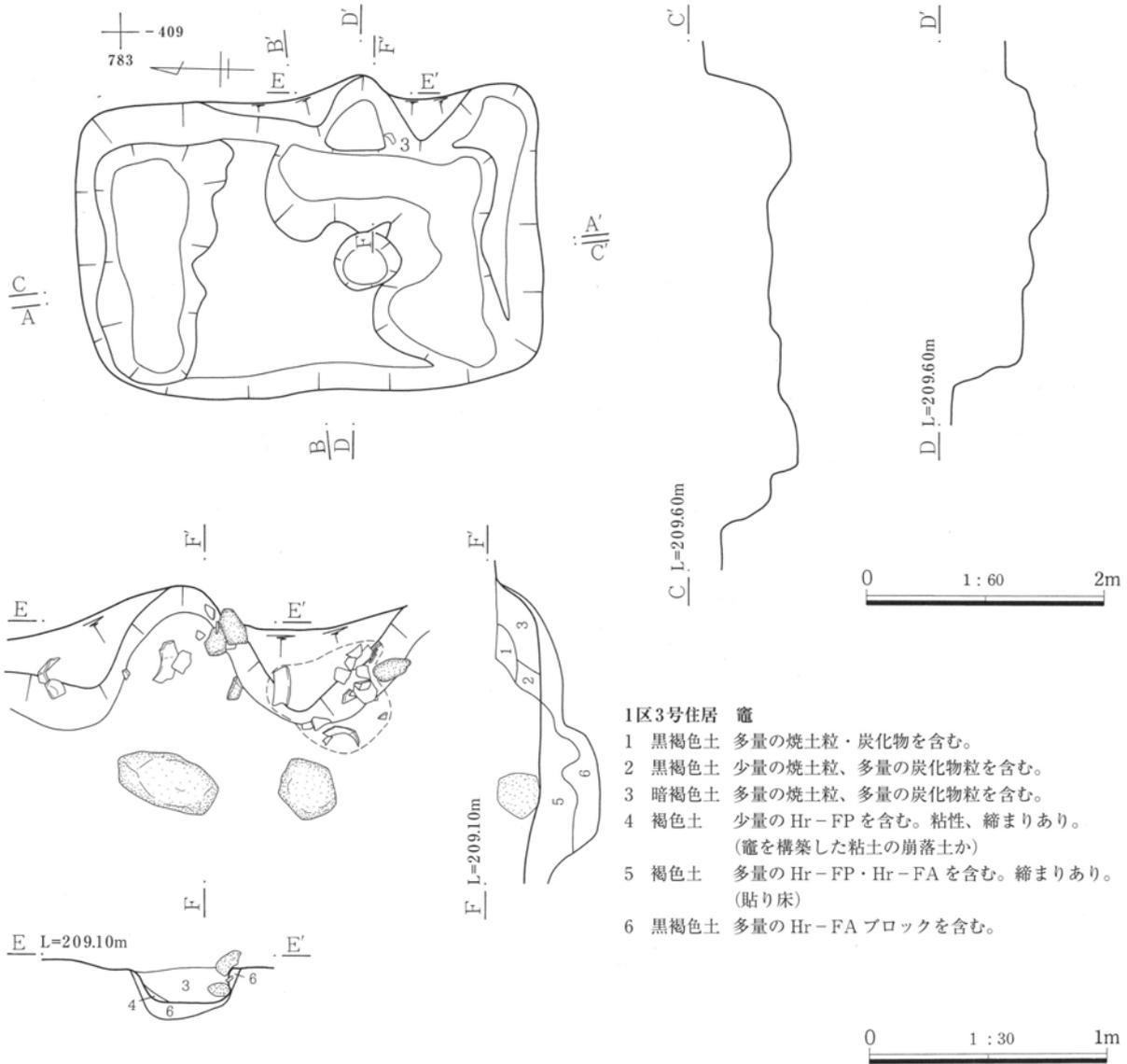


第137図 1区3号住居平面・断面図

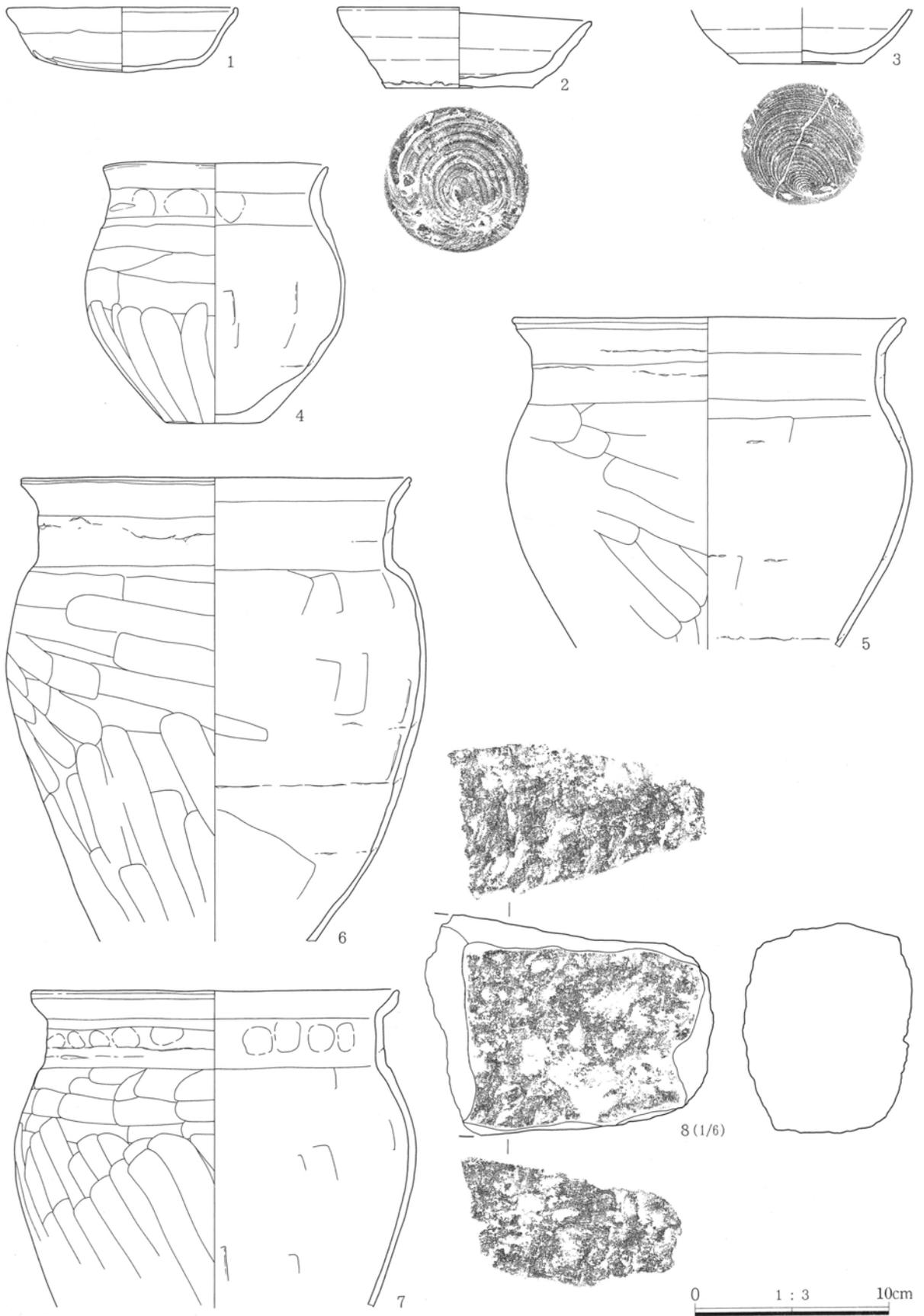
加えて小塊状の鍛冶素材の遊離片と考えられる資料が複数認められる。鉄製品としては、刀子未製品が3点、故鉄としての刀子片が1点、さらにはほぼ完成品である錐、紡錘車、締め金具、鍵の可能性を持つ不明鉄製品が含まれている。また、未確定であるが金槌の頭部の可能性を持つ資料も1点確認され、こうした遺物構成から見ると、滓分を含む鉄塊や、故鉄を素材にした精錬鍛冶の後半段階から鍛錬鍛冶に至る工程を含む鍛冶工場のセットとして矛盾はない。床面中央よりやや南によった位置にある灰層と記録されている部分は、鍛冶炉である可能性が極めて高く、それに接するように鉄床石と土坑が検出さ

れている。

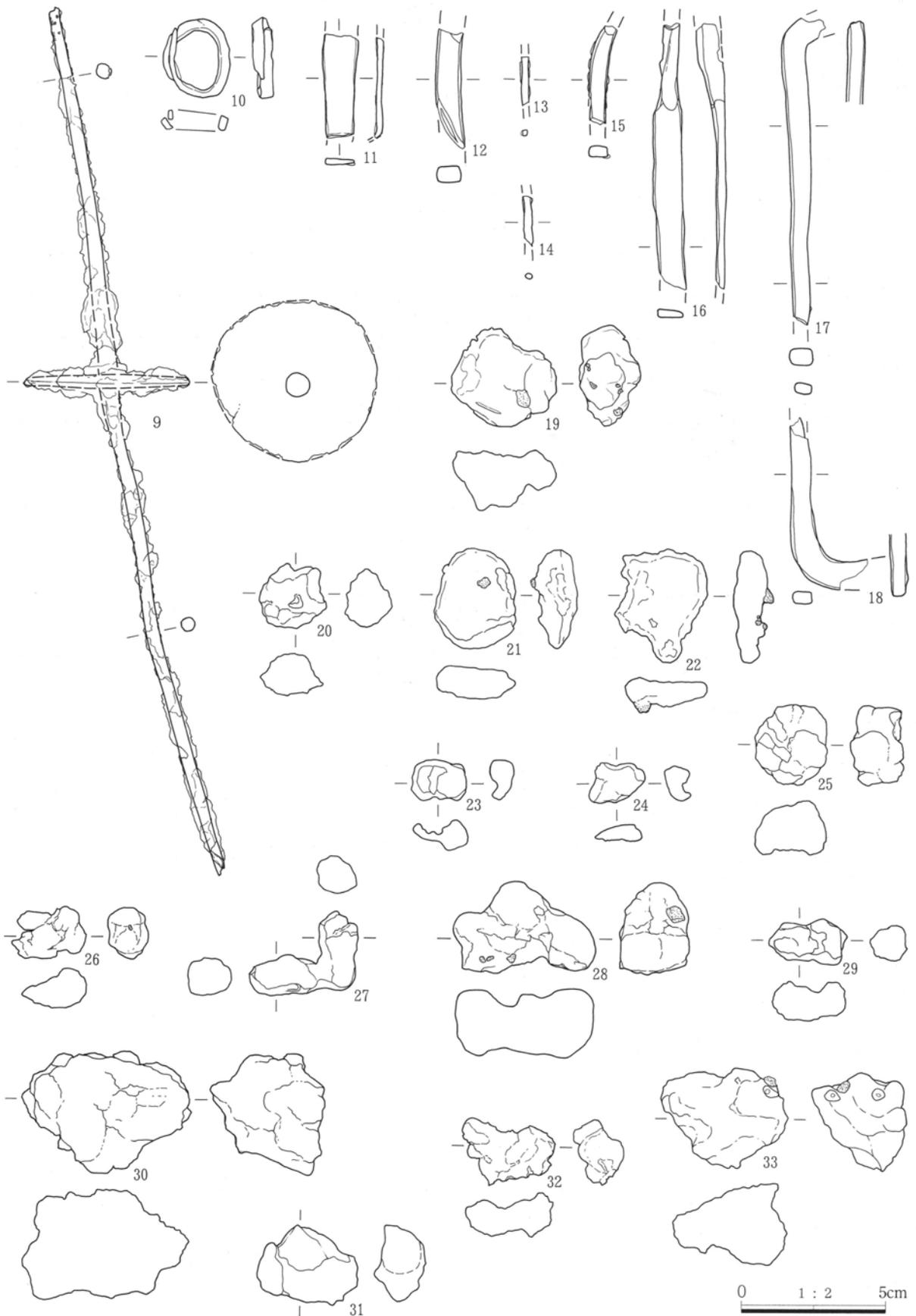
所見 鉄製品、椀形鍛冶滓、含鉄鉄滓、鍛冶滓、鉄床用台石の出土、炉の可能性のある灰層の検出から本遺構は鍛冶工房施設として機能していた可能性が高い。鉄製品はこの工房で作成された製品、未完成の製品、製品作成のための原材料(故鉄)が含まれているようである。また、貯蔵穴とした住居南東の土坑は、壁を大きくえぐる特殊な構造で、単純に貯蔵穴と考えられないかもしれない。本住居の時期は、出土遺物より9世紀第3四半期に比定される。



第138図 1区3号住居掘り方・竈 平面・断面図



第139図 1区3号住居出土遺物図(1)



第140図 1区3号住居出土遺物図(2)

1区3号住居出土遺物観察表

No.	挿図No. 図版No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
1	第139図 PL-101	土師器 杯	床直 1/2	口(12.0)高3.3 底-	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	口縁部上半が横ナデ。下半がナデ。底部はヘラ削り。
2	第139図 PL-101	須恵器 杯	+32 ほぼ完形	口13.2 高4.3 底7.6	①粗砂 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転系切り。
3	第139図 PL-101	須恵器 杯	床直 体~底部1/5	口- 高2.8残 底6.4	①粗砂 ②酸化焰 ③褐色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転系切り。
4	第139図 PL-101	土師器 甕	床直 1/2	口11.6 高13.6 底4.8	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。
5	第139図 PL-101	土師器 甕	カマド 体~胴部1/6	口(20.4)高17.2残 底-	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。
6	第139図 PL-102	土師器 甕	床直 口~胴下部	口20.4 高24.0残 底-	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。
7	第139図 PL-102	土師器 甕	床直 口~胴部1/5	口(19.2)高16.5残 底-	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。
8	第139図 PL-102	竈構築材 天井石か	カマド	長29.7 幅23.0 厚17.4 重9.2kg	二ツ岳石(石材)	4面加工面、1面自然面、1面破面の竈構築材。被熱痕のある面1面(下面)。
No.	挿図No. 図版No.	遺物名	①重②磁③メ	出土位置 計測値(cm)	特徴など	
9	第140図 PL-102	鉄製品 鍛造品 紡錘車	①73.0 g ②9 ③特L(☆)	床直 軸長30.8 円盤径5.6	鉄製の軸部と円盤部を持つ完形に近い紡錘車。軸部は上下で長さが異なり、下部の方がやや弧状となっている。軸部の断面形はほぼ円形で、中程がやや太く成形されている。端部は上端部が丸みを持ち、約1.3cm幅で、繊維が密に巻かれている。もう一方の端部はやや扁平になっており、その一部に基部が残されている。中段よりやや上に残る円盤部は、軸に対して傾いており、平面形も正円とはならず、僅かに長手の円形である。中央部に軸部が通り、外側に向かい僅かに薄くなる作りを示す。円盤部そのものはほぼ平板で、実測図は軸部が傾斜した形でとられている。錆化は軸部の方が進んでおり、円盤部の方が鉄部の残りが良好である。	
10	第140図 PL-102	鉄製品 鍛造品 リング状	①3.7 g ②3 ③H(○)	+21 長2.7 短2.7 幅0.5 厚0.3	粗く成形されたリング状の鉄製品。側面形は楕円形で、細く打ち伸ばした扁平な鉄片を側面に重ね合わせている。工具の締め具であろうか。故鉄か、未製品あるいは製品かを判別しにくい。	
11	第140図 PL-102	鉄製品 鍛造品 刀子か	①2.2 g ②3 ③錆化(△)	+13 長3.5残 幅1.2 厚0.2	小ぶりの刀子の刃部破片。茎側は欠失しており、切先側は折り曲げられたうえで欠落している。端部は短く上方に曲がっている。故鉄として本遺構に鍛冶素材として持ち込まれたものか。	
12	第140図 PL-102	鉄製品 鍛造品 未製品	①4.2 g ②4 ③錆化(△)	+15 長4.2残 幅0.9 厚0.6	横断面形が長方形をした鉄製品破片。長軸の両端部が破面となっているが、図面下側は表面の一部が欠けた程度となる。全体に緩やかな弧状で、裏面から見ると刀子の切先状。刀子等を作成途上の未製品か。	
13	第140図 PL-102	鉄製品 鍛造品 錐又は釘	①0.3 g ②2 ③錆化(△)	床直 長1.7残 径0.25	方形断面をした細い棒状の鉄製品破片。側面片側には木質が層状に残されており、未製品ではない。錐の可能性がより大きそうである。3号住-No.14も太さは似ており、同一個体の可能性もある。	
14	第140図 PL-102	鉄製品 鍛造品 錐又は釘	①0.2 g ②2 ③錆化(△)	床直 長1.7残 径0.3	横断面形が丸棒状の細い鉄製品破片。長軸の両端部が欠けている。太さはNo.13と似ているが、横断面形は本資料の方が丸みを持っている。保存処理がなされており、もともと丸い断面形かどうかはやや不安がある。同一個体とすれば、基部または先端部寄りであろう。錐の可能性大。	
15	第140図 PL-102	鉄製品 鍛造品 方柱状	①3.2 g ②3 ③L(●)	+14 長3.4残 幅0.5 厚0.4	長方形断面をした棒状の鉄製品破片。長軸の両端部が破面となる。全体に緩やかな弧状で、太さや厚みは小ぶりながら、3号住-No.12の未製品と似た特色を持つ。一種の未製品であろう。	
16	第140図 PL-102	鉄製品 鍛造品 未製品	①10.9 g ②5 ③L(●)	+7 長9.3残 幅1.0 厚0.3	粗成形された刀子の未製品の破片。刃部が全く未製で、基部になるべき部分も切り離されていない。基部の断面形も歪んでおり、閔を作りかけた状態である。切先側、基部側とも欠落して破面となっている。	
17	第140図 PL-102	鉄製品 鍛造品	①16.5 g ②6 ③特L(☆)	+11 長10.7残 幅1.6 厚0.6	横断面形が長方形をした棒状の鉄製品破片。片側(頭部側)が徐々に幅広くなり、端部が急激に折り曲げられている。13号住-No.18も接合はしないながらも、成形や端部の折り曲げられ方をみて、同一個体の可能性が高い。長軸方向に向かい、緩やかなS字状にうねっており、13号住-No.17と13号住-No.18を並べてみると、うねり方も共通点をもつ。未製品か完成品かは判別しにくい。本来の形としては、長軸端部が隅丸方形に成形されたU字形、または両端部が環状に巡る鉄製品を想定できる。	
18	第140図 PL-102	鉄製品 鍛造品	①10.3 g ②5 ③L(●)	+11 長6.0残 幅2.6 厚0.4	No.17とよく似た鉄製品破片。横断面形は長方形で、頭部に向かいやや幅が広くなり、隅丸方形に折り曲げられている。両者を並べてみると、基部側に向かう折りかたもほぼ同一である。形状的には櫃の鍵あたりが仮に想定されよう。	
19	第140図 PL-102	腕形鍛冶滓 (極小、含鉄)	①22.6 g ②5 ③錆化(△)	埋土 長径3.7 短径3.5 厚2.1	No.21と比較的類似した腕形鍛冶滓。完形品で肩部から下面にかけての酸化土砂が厚い。含鉄の極小形の腕形鍛冶滓。上面は平坦きみで僅かに木炭痕を残し、下面は腕形に突出する。含鉄部は小範囲で完全に錆化している。	

①重量②磁着度③メタル度

[3] 奈良・平安時代の遺構と遺物

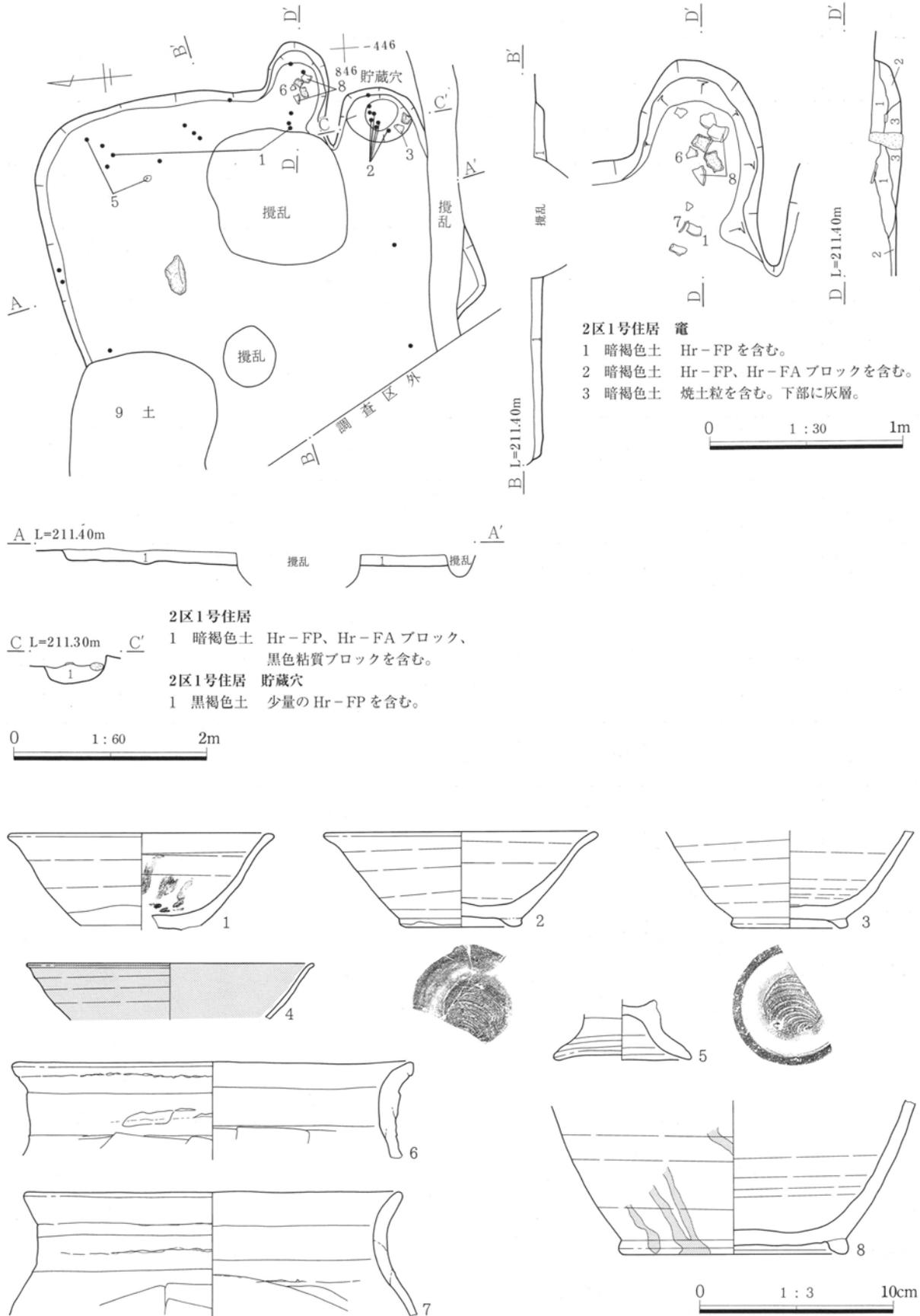
No.	挿図 No. 図版 No.	遺物名	①重②磁③メ	出土位置 計測値 (cm)	特徴など
20	第140図 PL-102	碗形鍛冶滓 (小、含鉄)	①126 g ②4 ③M(○)	+12 長径2.3 短径2.2 厚1.6	小形の碗形鍛冶滓の側部破片。上下面と下手側の側面は生きている。他の側面は連続する小破面となる。上面は平坦で、小さな木炭痕を残す。含鉄部は上手寄り。
21	第140図 PL-102	碗形鍛冶滓 (極小、含鉄)	①188 g ②5 ③M(○)	埋土 長径3.5 短径2.8 厚1.5	平面、不整楕円形をした極小さな含鉄の碗形鍛冶滓。上面は平坦で、僅かに木炭痕を残し、下面は鍛冶炉の炉床に接しているため、面を成す。含鉄部は右側面下手寄り。
22	第140図 PL-102	碗形鍛冶滓 (極小)	①17.1 g ②1 ③なし	埋土 長径4.0 短径3.2 厚1.2	平面、不整五角形をした扁平な碗形鍛冶滓。ほぼ完形品で下面は皿状に突出し、上面は僅かに中央部が窪む。上下面とも5mm大以下の木炭痕を残す。下面の左側には2ヶ所の瘤状の突出部あり。
23	第140図 PL-102	鍛冶滓	①3.9 g ②4 ③なし	+12 長径1.9 短径1.4 厚1.0	やや丸みをもった小塊状の鍛冶滓。上面左側は表皮が脱落して、木炭痕や気孔の残る内部が露出する。下面はやや不規則な皿状。鍛冶素材の遊離片が完全に滓化したものか。
24	第140図 PL-102	鍛冶滓	①3.1 g ②4 ③なし	+20 長径2.0 短径1.4 厚0.9	上面が窪む薄皮状の滓。小塊状で下面が突出する点はNo.23とほぼ同条件。
25	第140図 PL-102	鍛冶滓	①15.5 g ②4 ③なし	床直 長径2.8 短径2.5 厚1.8	平面、不整円形をした小塊状の鍛冶滓。表面には部分的に酸化土砂が固着。酸化土砂を除けば厚さ1.4cm以下の極小の碗形鍛冶滓の可能性が大。本来は右側の突出部が水平位置か。
26	第140図 PL-102	鍛冶滓 (含鉄)	①6.7 g ②5 ③錆化(△)	+8 長径2.5 短径1.8 厚1.4	小塊状の含鉄の滓。上面が窪み下面は突出する。錆化のため放射割れが進む。No.23、24、27、29とほぼ共通する性格で、鍛冶素材の遊離片。No.27、29が本来の重量をとどめ、本資料は滓化と錆化が進み6.7gとやや小ぶりとなる。
27	第140図 PL-102	鍛冶滓 (含鉄)	①16.6 g ②5 ③錆化(△)	+25 長径3.7 短径2.9 厚1.3	指頭大の小塊状の滓が逆L字状に接続する鍛冶滓。表面がやや丸みをもち、錆化の滓表面が露出している。塊状の2方が含鉄の滓で、鍛冶素材の遊離片か。本来の正位置は90°程上手側に立てたものか。
28	第140図 PL-102	鍛冶滓 (含鉄)	①26.8 g ②6 ③錆化(△)	掘り方埋土 長径5.0 短径3.2 厚2.4	酸化土砂に覆われた含鉄の滓。左側部の突出部と右側は別個体と推定される。右側は小形の碗形鍛冶滓が90°立ってしまっており、上面は大きな破面となっている。碗形鍛冶滓としては最大長4cm程度。厚みは約1cmである。右側部が滓の下面で緩やかな碗形となり、中央部の斜め方向に向く面が本来の上面である。平坦で木炭痕を残す。左側の突出部は内部に錆化した鉄部を持つという以外にははっきりしない。従って右側はNo.31、32と類似資料といえる。
29	第140図 PL-102	鍛冶滓 (含鉄)	①8.5 g ②3 ③M(○)	+12 長径2.7 短径1.6 厚1.4	指頭大の小塊状の含鉄の滓。ほぼ完形品で、端部にはやや突出部を残す。鍛冶素材の遊離片でNo.26、27と類似する。
30	第140図 PL-102	鉄塊系遺物	①1788 g ②6 ③特L(☆)	+24 長径5.8 短径4.1 厚3.9	比重の高い黒錆の目立つ鉄塊系遺物。上面を主体に酸化土砂が厚く、下半の主体は径2.3cm程度の円柱状。はっきりした滓部は確認できず、金植の頭部の可能性を持つ。
31	第140図 PL-102	含鉄鉄滓	①27.0 g ②5 ③L(●)	埋土 長径3.5 短径2.7 厚1.8	表面が厚い酸化土砂に覆われている含鉄鉄滓。上面の一部と上手側の側面に地の部分が露出する。内部はやや錆化が進んだ滓部で、その表面には粉炭痕を残す。含鉄部は上面寄り。
32	第140図 PL-102	含鉄鉄滓	①10.4 g ②4 ③L(●)	+11 長径3.2 短径2.4 厚1.5	厚さ8mm前後の、やや波状にうねった含鉄の滓。上面は生きており、側面は全面破面。下面も生きている可能性大。含鉄部は左側で錆化が進みつつある。本来は小形の含鉄の碗形鍛冶滓か。
33	第140図 PL-102	含鉄鉄滓	①46.8 g ②4 ③H(○)	+24 長径4.5 短径3.4 厚2.8	平面、不整五角形をした含鉄の滓。上面と左右の側面は生きており、上手と下手が破面となる。上面は波状で下面は舟底状に突出する。含鉄部は上面の中央寄り。

①重量②磁着度③メタル度

2区1号住居(第141図、PL55・103)

位置 846-446 方位 E-1°-S 形状 西壁が調査区外であるため全形は確認できなかった。面積(13.88)㎡ 壁高 12cm 重複 1号土坑と重複。1号土坑が、2区1号住居を切って構築する調査所見を得た。住居中央が攪乱に切られる。床面 掘り方面を床面とする。床面は堅く締まっていた。壁溝 確認できなかった。柱穴 確認できなかった。貯蔵穴 住居の南東隅に設置。深さ22cm、長軸64cm、短軸50cmの楕円形を呈す。竈 東壁の南側に設置。

燃焼部は幅93cm、奥行き76cm。燃焼部内から支脚石を検出した。遺物 床直から須恵器碗、土師器小型甕、貯蔵穴内から須恵器碗、竈から灰釉陶器壺、土師器甕、埋土から須恵器碗、須恵器大甕、灰釉陶器碗が出土した。実測可能な遺物が8個体ある。所見 本住居の時期は、出土遺物より10世紀第1四半期に比定される。



第141図 2区1号住居・竈 平面・断面図、出土遺物図

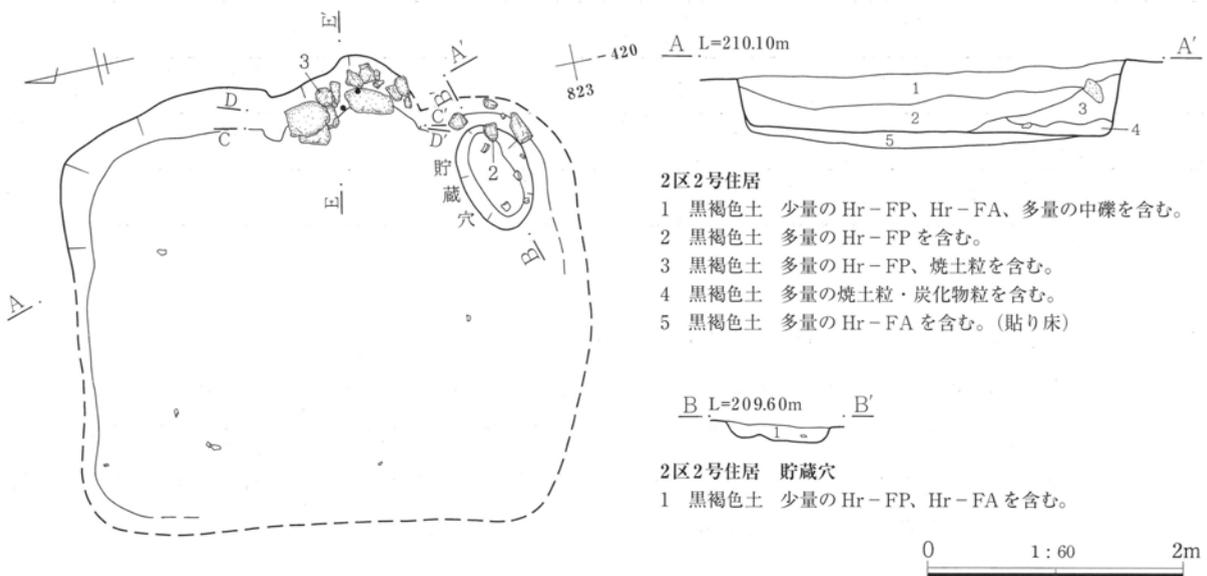
2区1号住居出土遺物観察表

No.	挿図 No. 図版 No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
1	第141図 PL-103	須恵器 椀	床直 1/4	口(13.8) 高 5.0 残 底(6.2) 高台 -	①細砂 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。体部内面に墨痕あり。
2	第141図 PL-103	須恵器 椀	+13 1/2	口 14.2 高 5.0 底(6.4) 高台(6.4)	①砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。
3	第141図 PL-103	須恵器 椀	貯蔵穴 体~底部1/2	口 - 高 5.0 残 底 6.0 高台 6.1	①砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。見込みコテあてか。
4	第141図 PL-103	灰釉陶器 椀	埋土 口~体部1/4	口(14.9) 高 2.9 残 底 - 高台 -	①細砂 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。高台は貼付。施釉方法は刷毛塗り、釉調は緑色をおびた灰色。光ヶ丘1号窯式期。
5	第141図 PL-103	土師器 小型甕	床直 脚	口 - 高 3.1 残 底 4.0 脚径 7.2	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	内外面横ナデ。
6	第141図 PL-103	土師器 甕	+11 口~頸部片	口(20.8) 高 5.0 残 底 -	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	口縁部から頸部は横ナデ。
7	第141図 PL-103	土師器 甕	カマド 口~肩部1/8	口(19.6) 高 6.4 残 底 -	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。
8	第141図 PL-103	灰釉陶器 壺	カマド 胴~底部1/4	高 8.0 残 底(11.6) 高台(12.0)	①細砂 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、高台付。底部ヘラ削り。底部外面釉葉付着。

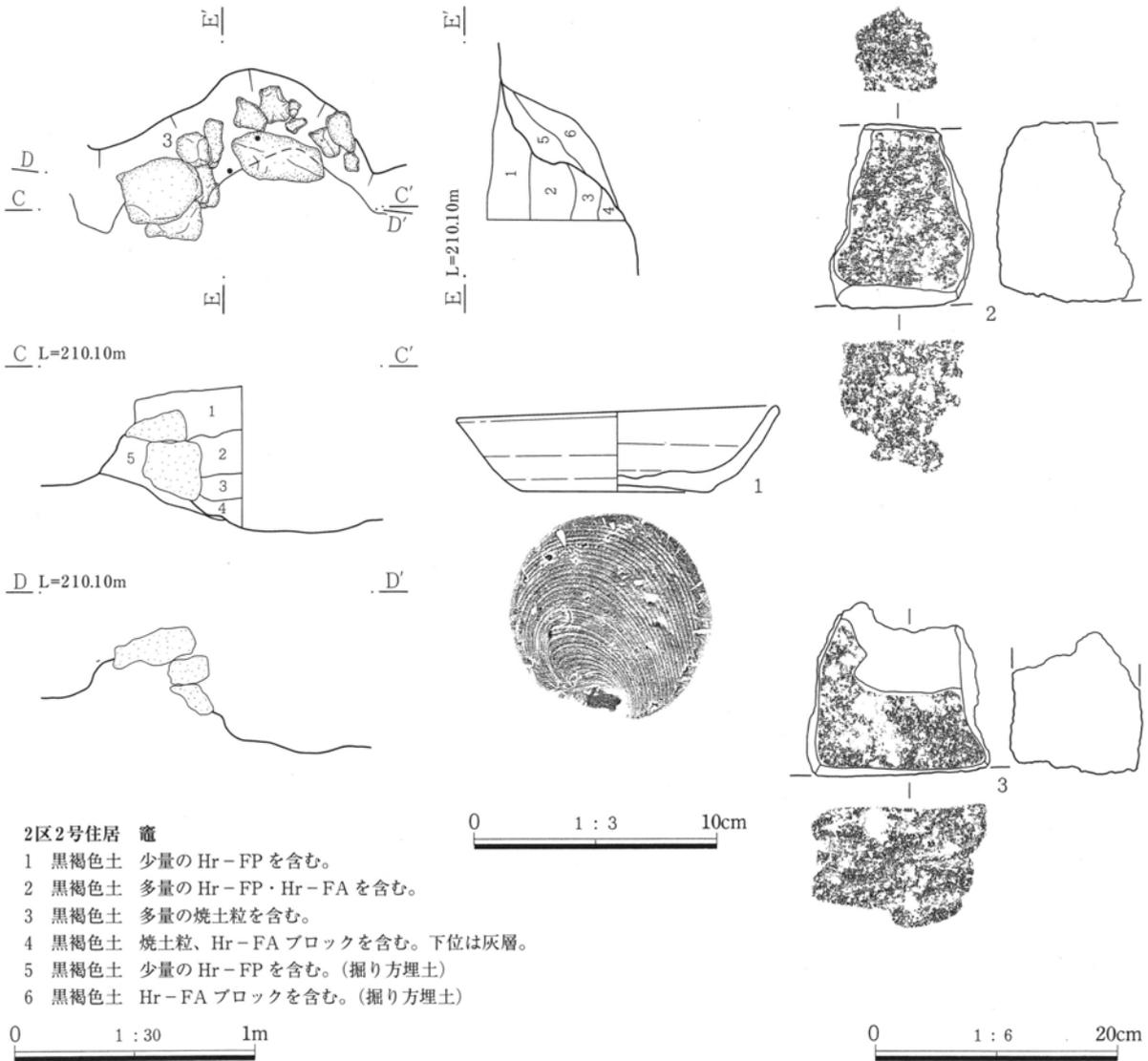
2区2号住居(第142・143図、PL55・103)

位置 823-420 方位 E-14°-S 形状 長軸(4.06)m・短軸(3.47)mで長軸を南北にもつ方形である。面積(10.77)m<sup>2</sup> 壁高 31cm 重複 住居西の大部分が大きく攪乱に切られる。床面 掘り方面から厚さ12cmの埋め土を施して平坦な面を造る。住居西側が攪乱に切られるため、西側の床面は不明瞭。壁溝 確認できなかつた。柱穴 確認できなかつた。貯蔵穴 住居の南東隅に設置。深さ12cm、長軸86cm、短軸54cmの楕円形を呈す。竈 東壁の南側に設置。燃烧部は幅62cm、奥行き(28)cm。煙

道は幅54cm、奥行き37cmで立ち上がる。袖や煙道の補強用の礫が設置した状態で残存している。遺物 貯蔵穴内から須恵器杯、埋土から所謂「コ」の字口縁の甕、須恵器杯、椀、灰釉陶器壺、須恵器大甕が出土したが、ほとんどが小片で、実測可能な土器は1個体である。その他、竈構築材として使用された加工痕のある二ツ岳石2個体を掲載した。所見 本住居の時期は、出土遺物より9世紀第1四半期に比定される。



第142図 2区2号住居平面・断面図



2区2号住居 竈

- 1 黒褐色土 少量のHr-FPを含む。
- 2 黒褐色土 多量のHr-FP・Hr-FAを含む。
- 3 黒褐色土 多量の焼土粒を含む。
- 4 黒褐色土 焼土粒、Hr-FAブロックを含む。下位は灰層。
- 5 黒褐色土 少量のHr-FPを含む。(掘り方埋土)
- 6 黒褐色土 Hr-FAブロックを含む。(掘り方埋土)

第143図 2区2号住居竈平面・断面図、出土遺物図

2区2号住居出土遺物観察表

No.	挿図No. 図版No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
1	第143 PL-103	須恵器 杯	貯蔵穴 3/4	口13.3 高3.6 底7.8	①細砂 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。内外面の色調の違いは焼成時の重ね焼き痕か。
2	第143図 PL-103	竈構築材 天井石か	カマド	長11.9 幅15.2 厚11.2 重1.4kg	二ツ岳石(石材)	3面加工面、3面破面の竈構築材。被熱痕のある面1面(下面)。
3	第143図 PL-103	竈構築材 天井石か	カマド	長15.1 幅14.5 厚10.9 重1.1kg	二ツ岳石(石材)	4面加工面、2面破面の竈構築材。被熱痕のある面1面(下面)。

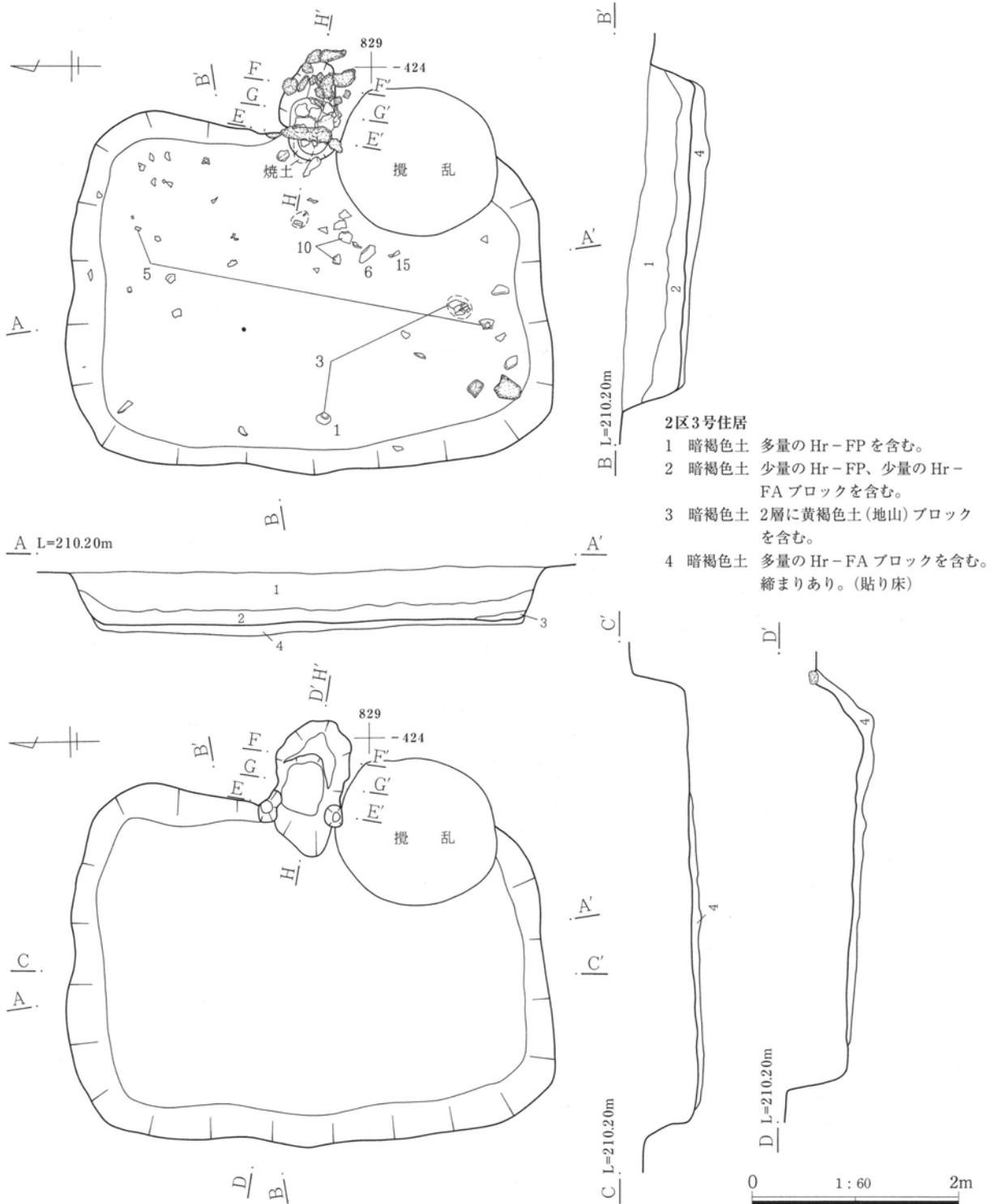
2区3号住居(第144~147図、PL56・103・104)

位置 829-424 方位 E-8°-S 形状 長軸4.55m・短軸3.31mで長軸を南北にもつ長方形である。面積11.26㎡ 壁高54cm 重複なし。床面掘り方面から厚さ12cmの埋め土を施して平坦な面を造る。掘り方面はほぼ平坦である。床面は凹凸

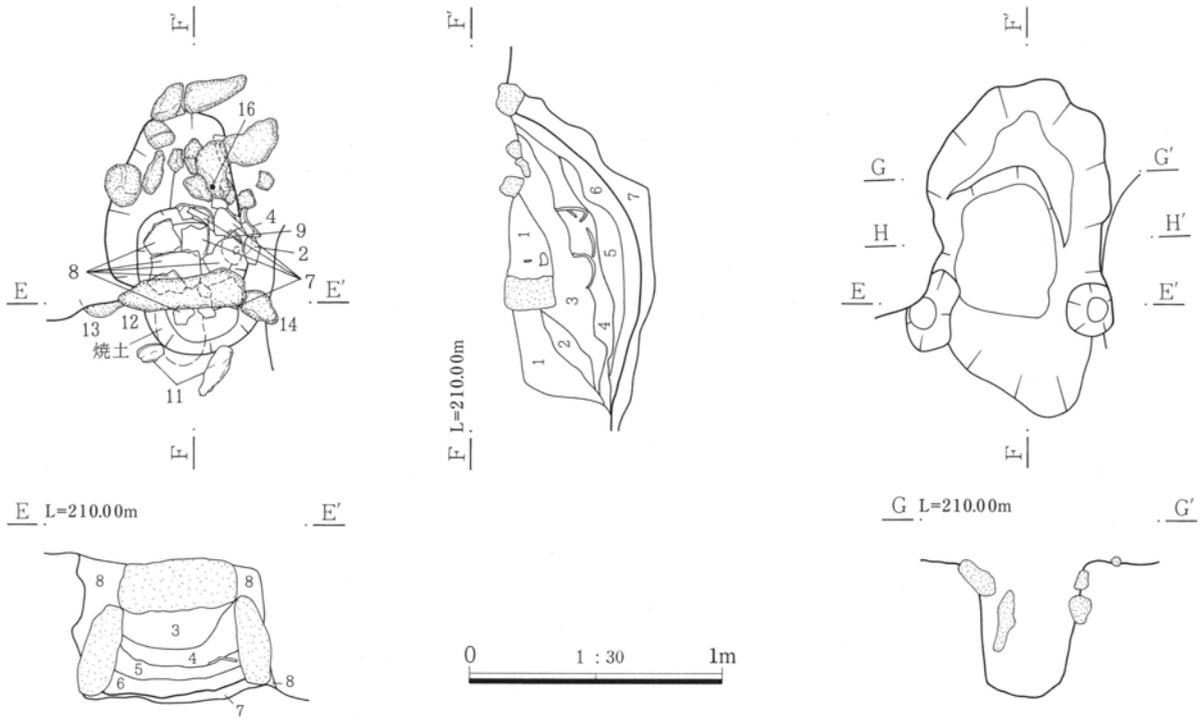
なく、平坦で整っている。壁溝 確認できなかった。柱穴 確認できなかった。貯蔵穴 確認できなかった。竈 東壁の中央に設置。煙道や袖、天井の石製竈構築材が設置した状態で残存している。左右の袖部、焚口天井部には加工痕のある二ツ岳石を使用し

ている。燃烧部は幅39cm、奥行き51cm。焚口幅52cm、高さ34cmである。煙道は幅62cm、奥行き36cmで立ち上がる。支脚は検出されなかった。  
**遺物** 床直から須恵器杯、竈から土師器甕、須恵器長頸壺、埋土から須恵器杯、椀、土師器甕、須恵器甕、

錐または針、鎌の可能性のある板状の鍛造鉄製品が出土した。所見 竈の焚口部が良好な状態で検出された。焚口幅・高さを推定する好資料である。本住居の時期は、出土遺物より9世紀第3四半期に比定される。

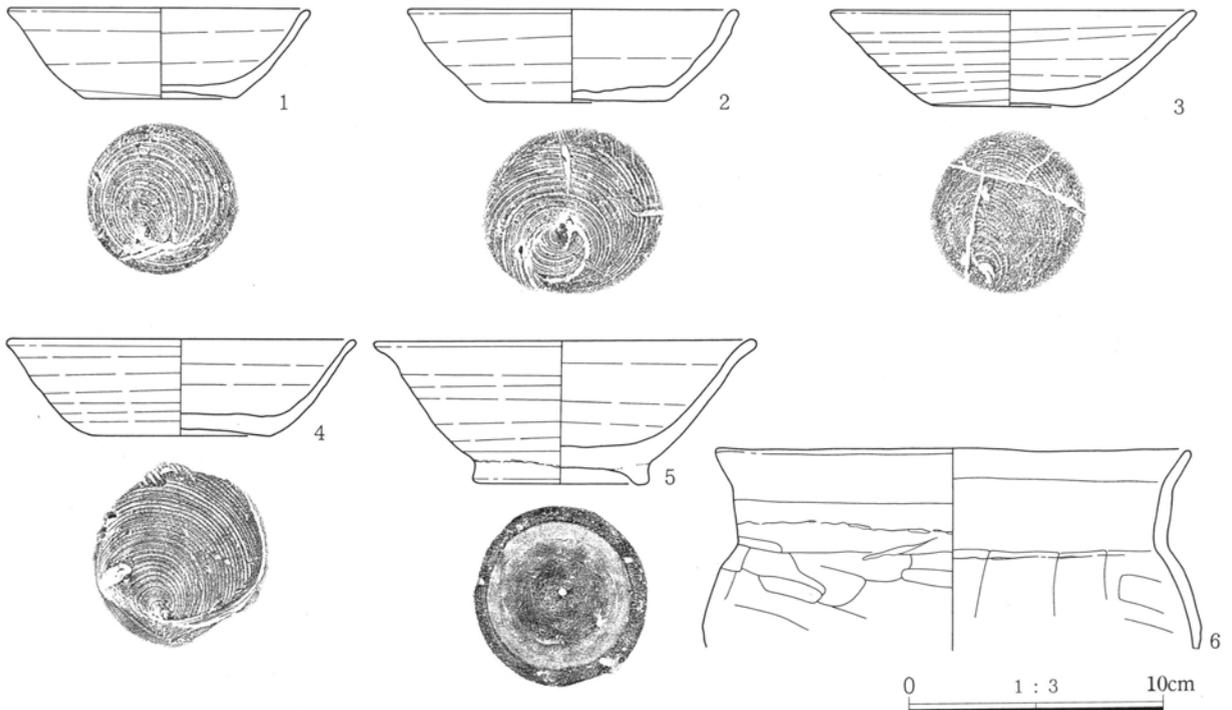


第144図 2区3号住居・掘り方 平面・断面図

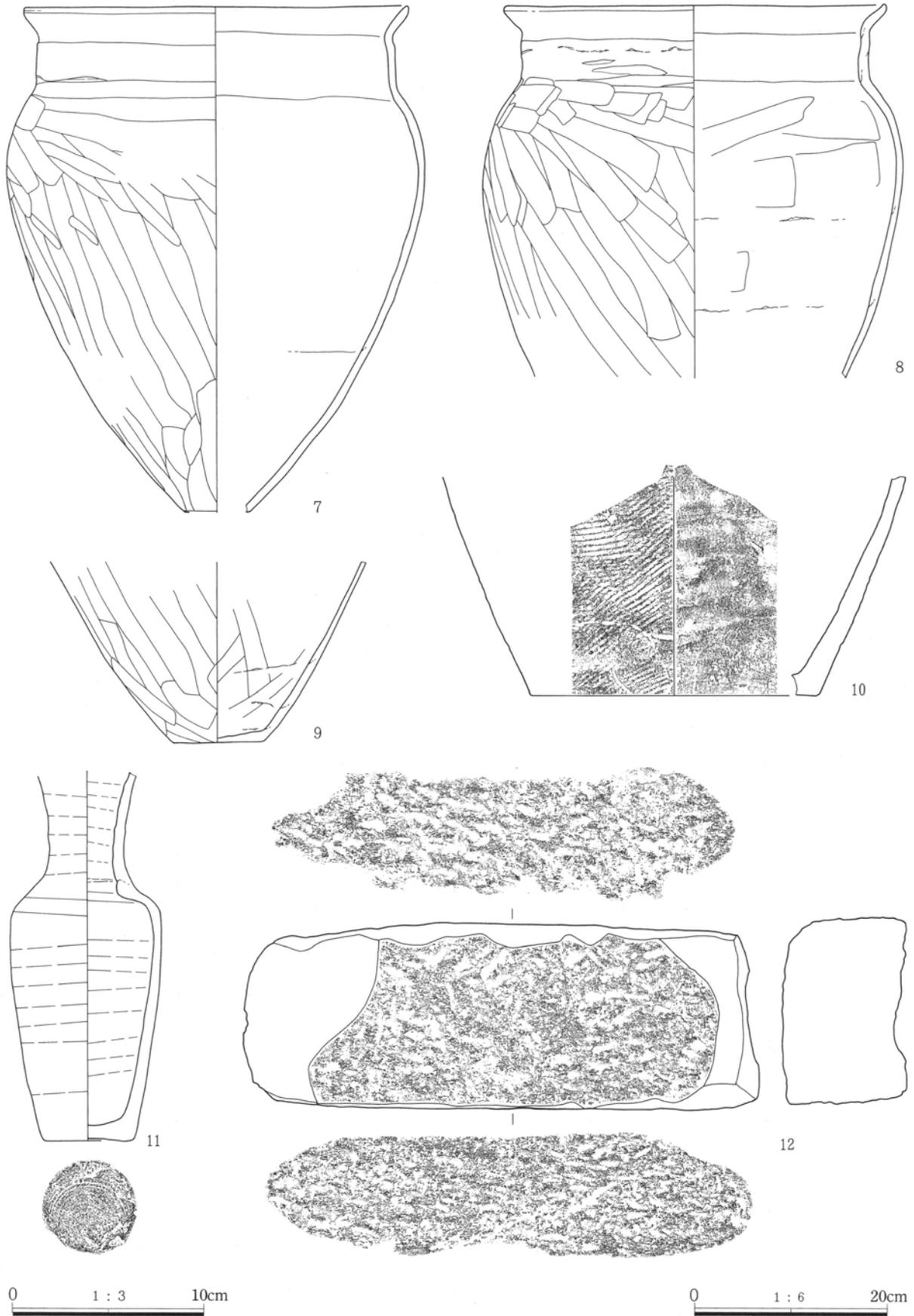


2区3号住居 竈

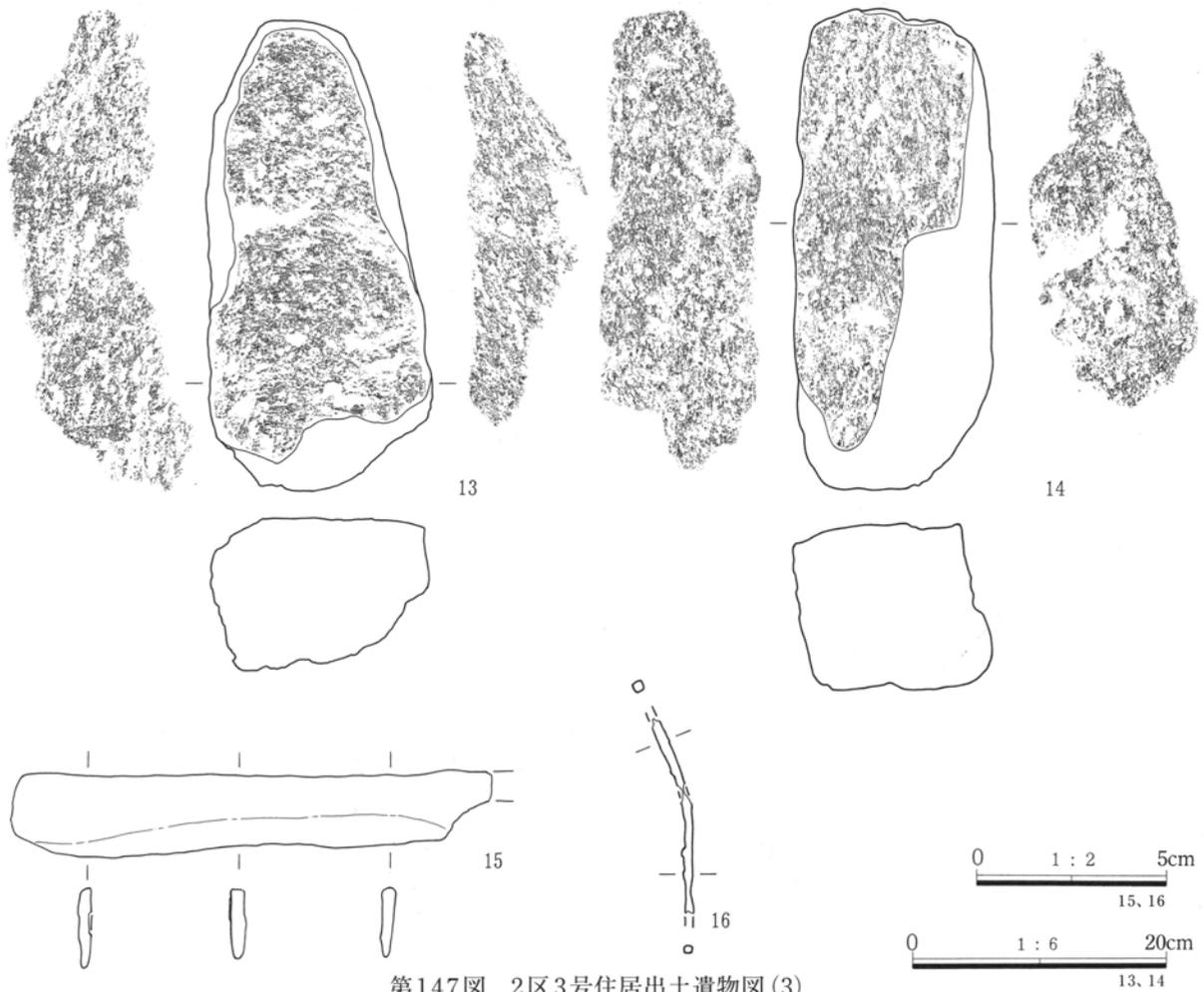
- 1 黒褐色土 少量のHr-FP・Hr-FAを含む。
- 2 黒褐色土 少量のHr-FPを含む。粘性あり。
- 3 黒褐色土 少量のHr-FP・焼土粒を含む。
- 4 黒褐色土 少量の炭化物粒を含む。
- 5 黒褐色土 多量の灰・焼土粒・炭化物粒を含む。下位に多量の灰層。
- 6 黒褐色土 少量の焼土粒を含む。(下面が使用面)
- 7 暗褐色土 多量のHr-FAを含む。縮まりあり。(掘り方埋土)
- 8 暗褐色土 少量のHr-FP・Hr-FAブロックを含む。  
縮まりあり。(竈に貼った土か)



第145図 2区3号住居竈平面・断面図、出土遺物図(1)



第146図 2区3号住居出土遺物図(2)



第147図 2区3号住居出土遺物図(3)

2区3号住居出土遺物観察表

No.	挿図No. 図版No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
1	第145図 PL-103	須恵器 杯	床直 2/5	口12.0 高3.6 底6.0	①粗砂 ②酸化焰 ③黒褐色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。
2	第145図 PL-103	須恵器 杯	+30 2/3	口13.1 高3.7 底7.0	①砂粒 ②酸化焰 ③淡黄色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。
3	第145図 PL-103	須恵器 杯	床直 ほぼ完形	口14.5 高3.8 底6.0	①粗砂 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。
4	第145図 PL-103	須恵器 杯	+34 1/3	口(14.0)高3.8 底6.8	①細砂 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。内外面の色調の違いは焼成時の重ね焼き痕か。
5	第145図 PL-103	須恵器 碗	+19 1/2	口15.6 高5.8 底6.9 高台7.0	①粗砂 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。高台は貼付。
6	第145図 PL-103	土師器 甕	+28 口~肩部1/4	口(18.8)高7.9残 底-	①砂粒 ②良好 ③にぶい褐色	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。
7	第146図 PL-103	土師器 甕	カマド 1/4	口(20.3)高26.4 底(3.6)	①砂粒 ②良好 ③にぶい褐色	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。
8	第146図 PL-104	土師器 甕	カマド 口~胴部2/3	口20.1 高19.5残 底-	①砂粒 ②良好 ③褐色	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。
9	第146図 PL-103	土師器 甕	カマド 胴下~底部	口- 高9.5残 底4.8	①砂粒 ②良好 ③にぶい褐色	胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。
10	第146図 PL-104	須恵器 甕	+29 胴下~底1/4	口- 高11.4残 底(14.0)	①砂粒 ②還元焰 ③灰色	やや硬質。器肉厚い。内面横ナデ、外面叩き目。
11	第146図 PL-103	須恵器 壺	カマド 頸~底部	口- 高19.2残 底4.7	①砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切り。頸部と胴部に接合痕あり。平城宮の土器分類で壺G。

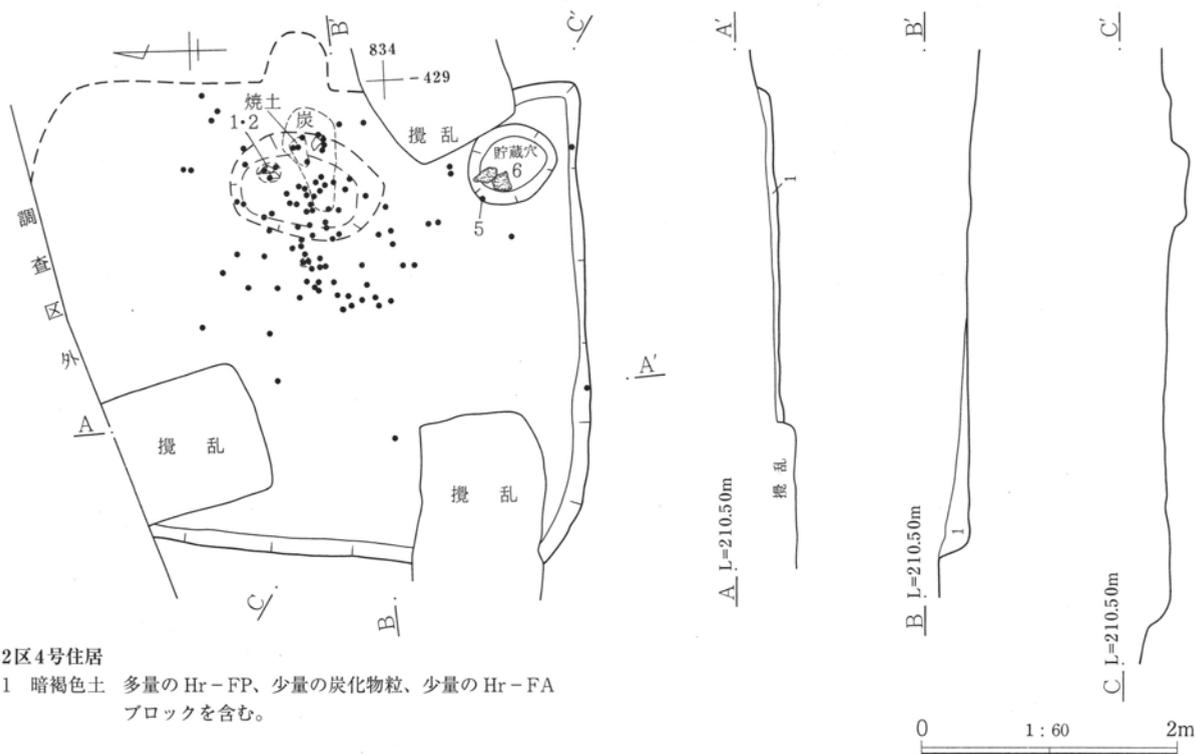
No.	挿図 No. 図版 No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
12	第146図 PL-104	竈構築材 天井石	カマド	長53.7 幅19.9 厚13.1 重18.4kg	二ツ岳石(石材)	5面加工面、1面自然面のほぼ完存の竈構築材。被熱痕のある面1面(下面)。
13	第147図 PL-104	竈構築材 左袖石	カマド	長37.1 幅17.9 厚12.0 重7.5kg	二ツ岳石(石材)	4面加工面、2面自然面のほぼ完存の竈構築材。2辺面取り加工する丁寧な整形。被熱痕なし。
14	第147図 PL-104	竈構築材 右袖石	カマド	長37.5 幅15.8 厚13.2 重8.9kg	二ツ岳石(石材)	一部に破面あるが、6面加工面の残存するほぼ完存の竈構築材。被熱痕なし。
No.	挿図 No. 図版 No.	遺物名	①重②磁③メ	出土位置 計測値 (cm)	特徴など	
15	第147図 PL-104	鉄製品 鍛造品 鎌か	①19.1 g ②5 ③錆化(△)	床直 長12.7残 幅2.2 厚0.4	小形の鎌の刃部から基部にかけての破片。先端部側が欠落し破面となる。背側は直線状で、刃部は使用のためか、僅かに窪んでいる。柄の取り付け部には斜め方向の木質らしき痕跡をもつ。	
16	第147図 PL-104	鉄製品 鍛造品 錐又は針	①0.9 g ②5 ③L(●)	カマド 長5.2残 幅0.3 厚0.2	細い棒状の鉄製品破片。錆化が進んでいるが、芯部には鉄部が残る。最も残りのよいのは上半2/3で、横断面形はほぼ円形。	

①重量②磁着度③メタル度

2区4号住居(第148・149図、PL57・104)

位置 834-429 方位 E-2°-S 形状 南東部が攪乱によって不明瞭。竈位置も炭化物の範囲から推測した。面積(13.91)㎡ 壁高 11cm 重複 住居の東・西・北壁を攪乱が切る。床面 残存状況が悪く、床面不明瞭。竈前の土坑は、床下土坑。土坑の上面には竈前の炭化物が広がる。壁溝 確認できなかった。柱穴 確認できなかった。貯蔵穴 住居の南東隅に設置。深さ21cm 径62cmのほぼ円形を呈す。竈

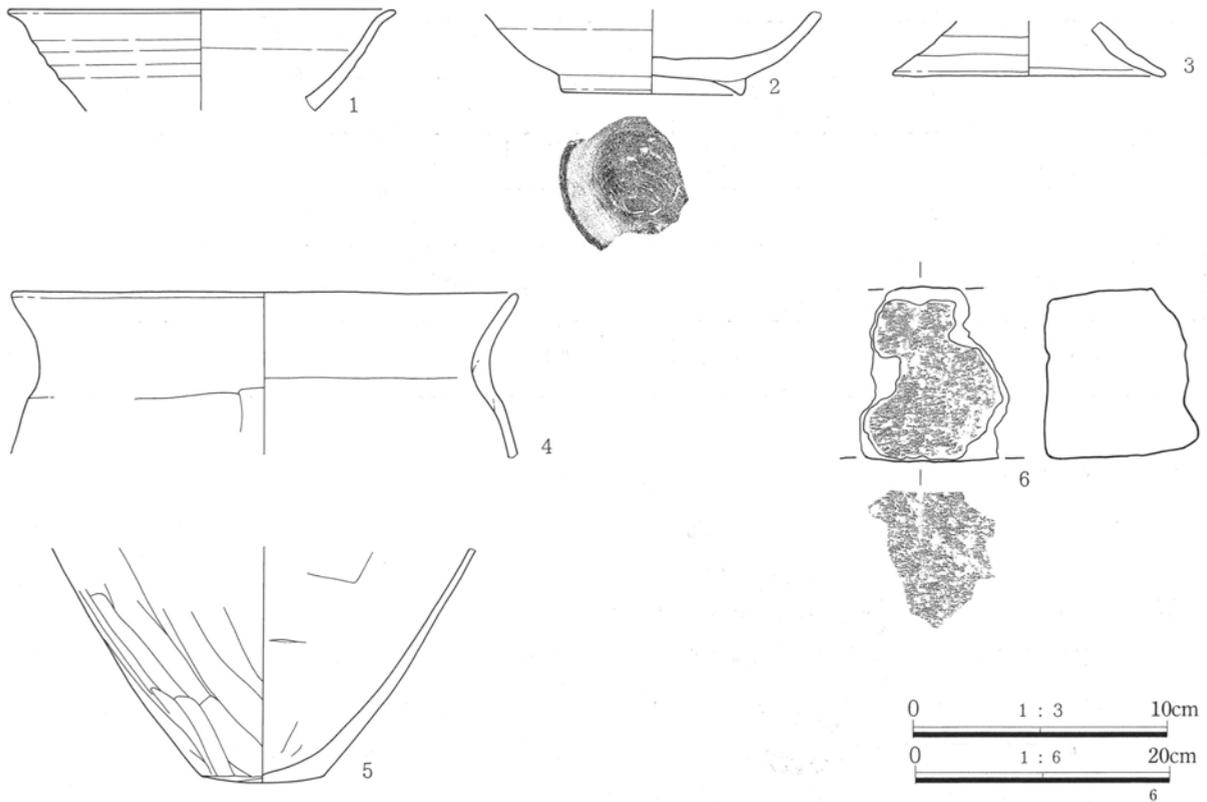
検出されなかった。竈位置は炭化物の範囲から推測したものである。遺物 床直から土師器甕、埋土から須恵器杯・椀、椀、土師器甕、小型甕、竈から竈構築材として使用された加工痕のある二ツ岳石が出土した。実測可能な遺物が6個体ある。所見 本住居の時期は、出土遺物より9世紀中頃に比定される。



2区4号住居

1 暗褐色土 多量の Hr-FP、少量の炭化物粒、少量の Hr-FA ブロックを含む。

第148図 2区4号住居平面・断面図



第149図 2区4号住居出土遺物図

2区4号住居出土遺物観察表

No.	挿図No. 図版No.	種別 器種	出土位置 遺存状態	計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	特徴など
1	第149図 PL-104	須恵器 杯・椀	+10 口～体部1/3	口(15.4) 高4.0残 底 - 高台 -	①砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、回転方向不明。
2	第149図 PL-104	須恵器 椀	+10 底部1/4	口 - 高3.0残 底(7.4) 高台(7.3)	①砂粒 ②還元焰 ③灰白色	ロクロ成形、右回り回転。底部は回転糸切りか。高台は貼付。
3	第149図 PL-104	土師器 小型甕	埋土 脚部片	口 - 高2.1残 底 - 脚径(10.8)	①砂粒 ②良好 ③にぶい橙色	内外面横ナデ。
4	第149図 PL-104	土師器 甕	埋土 口縁片	口(20.3) 高6.5残 底 -	①砂粒 ②良好 ③褐色	口縁部から頸部は横ナデ。胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。
5	第149図 PL-104	土師器 甕	床直 胴下～底1/5	口 - 高9.4残 底4.8	①砂粒 ②良好 ③褐色	胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。
6	第149図 PL-104	竈構築材 天井石か	カマド	長10.5 幅13.7 厚12.0 重1.2kg	二ツ岳石(石材)	3面加工面、3面破面の竈構築材。被熱痕のある面1面(下面)。

2区5号住居(第150図、PL57・104)

位置 842-442 方位 測定不可能。形状 中世の削平のため、西部分のみ残存。東側が確認できなかった。面積 測定不可能。壁高 26cm 重複 なし。床面 床面は凹凸なく、平坦で整っている。掘り方面を床面とする。床面は堅く締まっていた。床下に土坑を2基構築。土坑付近からは礫が出土し、埋土に炭化物を含む。壁溝 確認できなかった。柱穴 確認できなかった。貯蔵穴 確認できなかった。竈 検出

されなかった。

遺物 床直から灰釉陶器椀、埋土から須恵器杯、椀、灰釉陶器椀、土師器甕、小型甕、須恵器大甕が出土した。実測可能な遺物が5個体ある。所見 土坑上面は床面同様に堅く締まり、2基の土坑は床下土坑であるとの調査所見である。本住居の時期は、出土遺物より9世紀後半から10世紀第2四半期に比定される。